大正六年九月十四日第三種郵便物認可・昭和十二年五月二十日印刷納本・昭和十二年六月一日發行（毎月一回一日發行）

建築と社會

6

建築と社會六月號

日本建築協會

第二十輯第六號・昭和十二年六月一日

登録 OHNO SHUTTER PATENTED 商標

日英米特許三一個・實用新案登錄六三個併用

大野式防火捲上ヶ戸

〔特許大野式シヤツター〕

主要製品

大野式シヤッター
大野式ルーブルシヤッター
大野式融金付自動閉鎖戸
大野式工場用軸承
大野式轉子入軸筐・戸車
大野式廻轉軸抵抗測定機
各種防火扉・鋼製建具類
應用特殊機械類設計製作

日英米佛獨特許三七個・實用新案登錄八四個併用

特許不二サッシ

東京市大森區新井宿七丁目
株式會社不二サッシ製作所提携

合資會社 大野製作所

東京市芝區三田四國町二番地・電話三田(45)三七三七・三七三八・三七八七

取付出張員詰所・大阪市此花區上福島中二・電話福島(45)五八八

日本建築、保存、手入、

新築住宅にお手入のいらぬ美素加工は

永年多數の住宅に加工し其の効果は實驗濟となり住宅工事には必ず美素加工は工程の最終に入れられる事になりました。最近落成の高級住宅で美素を加工しない住宅はなくなりました。

美素工業所

大阪市天王寺區東平野町四丁目二二

電話天王寺四〇〇三番

カタログ贈呈

◎ **新築家屋美素加工**

新築落成と、同時に、本所獨特の**ビソ液**にて洗淨し木材變色の原因となる、樹液を取り、其の上を**ビソ**にて仕上の加工をすると完全なる變色防止加工となり優美な艶を有し水拭き掃除の勞を省き頗る經濟的です。

◎ **古家屋新裝美素加工**

百年の古家も一度ビソ液にて洗淨すると新築同樣となる其の上を新築美素加工と同樣の加工をすると前者同樣の結果となる。

（特殊技術を要しますから弊所の請負加工と致して居ります）

建築と社會

第20輯 第6號　昭和12年6月發行

六月號

目　次

建築の國民性と國際性との關係に就て……モトノ・セイゴ（1）
日本折衷主義と我國の建築運動……西山卯三（4）
そろそろ歴史的存在となつた分離派建築會の事など・たまたま同人大内秀一郎君逝く……山田守（16）
日本インターナショナル建築運動……中尾保（17）
その時代について……新名種夫（26）
創宇社建築會の新建築運動……竹村新太郎（30）
青年建築家倶樂部を顧みて……高橋壽男（51）
新日本文化運動と日本工藝……上野伊三郎（59）
日本工作文化聯盟の結成とその後の活動……市浦健（64）
Tanabasi Method による耐震構造計算の或る實例……飯島猛夫（66）
防護室に就て……芦浦義雄（86）
最近の獨逸に於ける防空僞裝……熊井安義（100）

・建築時報・

空港に關する二つのトピックス……（106）
臺灣都市計畫令施行規則（3）……（109）

・新建築欄・

名古屋汎大平洋平和博覽會（名古屋）
前庭に開放せられる小學校教室（イギリス）
Needham の小住宅（アメリカ）
Santo Monia の來客用住宅（アメリカ）
ロスアンゼルスの住宅（アメリカ）
阪急西宮球場（兵庫縣）
3階建住宅（イギリス）
3つのガレージを有する住宅（アメリカ）
クリーブランドの住宅群（アメリカ）
都市の住宅と庭園

會報……（115）

建築の國民性と國際性との關係に就て

モトノ・セイゴ

建築の國民性――一つの民族が一つの時代に持つ所の建築には必ずある一つの共通する素質を發見する。それをその建築の國民性と呼ぶのである。然し乍ら之れが具體的に建築の何の部分の何の形態として表はれて居るかと云ふ事を指摘する事は殆んど不可能の事に屬する。例へば今吾等が持つ建築に就いて考へても何れが日本建築の本質を最も完全に具備したものであり、建築物姿態の何の部分が日本の國民性を表現して居るかと云ふ事を指摘する事は出來ない。唯然し乍ら今各國民の持つ建築物を地球上の色々の部分に就て調べて見ると、アメリカ人の持つ建築とドイツ人其の他フランス人等の持つ建築と吾等日本人の持つ建築との間に各特異の色調を持つ事を發見する。唯此の特異の調子の大體が何であるかを具體的に指適する事が出來ない丈である。人間の面貌が內面の表現であり、藝術が人間內面の表現であると云ふ事が眞實である以上各の民族の面貌に各特異の形相がある如く其各が持つ建築表現に特異の形相が具備する事を否定する譯には行かない。

建築姿態の變轉――一つの民族が持つ建築の姿態は時の經過と共に變轉する。此の變轉を名づけて樣式の史的變遷と呼ぶのである。同一つの民族が持つ建築の姿態もある時の經過の後に全く似ても付かないものに變化する事がある。吾等の過去に於ても世界各國に於ても一樣に此の事を經驗する。此の限りなき姿態の變轉を超えて一貫して流るゝあるものを感ずる。此のある者が民族性の本體と考へられる。このある者は決して單なる物質的存在ではなくして祖先より傳へられて血の中に流るゝ精神的存在である事を否定する譯には行かない。

民族の內容――民族と云ふ言葉で表はされて居る者の內容が何であるかと云ふ事を檢討するのは人類學の範圍であつて吾々建築家には殆んど不可能の事である。然し乍ら民族の內容に就て一旦は考察するのでなければ民族と云ふ言葉を用ゆる事は出來ない譯である。

(一) 一つの民族は一つの根幹から分岐生育したものであると云ふ等――之れは最も合理的に考へられるけれども事實今日一つの民族と呼ばれる中に包含されて居る人間は決して一つの根幹からは出て居ない樣である。

(二) 一つの國家は一つの民族に依て構成されると云ふ考へ――それも一應は尤もな考へ方であるけれども事實全く之れを否定する。

(三) 民族は言語に依つて構成されると云ふ考へ――之れは唯物觀的立場からの結論であつて之れも一應は肯定出來ないでもないけれども、人間の精神生活を否定した處に根本の

錯誤があるものと思へる。

等　々

斯くして私は一つの民族とは一つの精神内容の中に包含された人間の集團であらねばならぬと云ふ結論に屆いたのであつた。例を吾々日本民族に採つて考へて見る時に直に明かになる樣に思へる。日本民族と呼ばれて居る集團は發生の當初より已に一つの根幹から出た枝葉ではなくして二つ或はより多くの根幹が一つに抱擁されたものであつたらしい。其の全體を總括するものは日本精神又は大和魂と呼ばれる一つの精神内容であつたのである。今吾々はこの魂の中に抱擁されて生長しつゝある事を感ずる。又アメリカの例を見るに今日アメリカは一つの民族的集團であるけれども其の當初はフランス人スペイン人、イギリス人等の混成團であつて人種間の闘爭反目は血醒さい多くの事件を發生した事を知つて居る。然し乍ら今一つのアメリカ精神と云ふものに統括されて居る事を感ずる。が然し乍らこのアメリカ精神の内容は甚だ薄弱なるものであつて現時アメリカに於て指導精神の根本が奈邊にあるかと云ふ事が學者間の問題として論議されつゝあり、其の結果として日本の指導的精神内容即ち神ながらの道等の研究に向けられつゝあると云ふのは面白い事である。

ドイツに於てフランスに於て私は皆同樣の事を發見する。即ちドイツ魂フランス魂と云ふものを各の國に發見する。

國際性の種々相——各の民族が各の精神内容の中に抱擁されて生長する時夫れに伴つて起る問題は民族間の國際性の問題であらねばならぬ。次にこの問題を考へて見樣と思ふ。

(一)　各の民族が高く城壁を繞らして互に相敵視し闘爭し、假に暫く平和の中にある樣に見へる場合には心にもなき辭を算し乍ら面には手を握り裏には爪を磨くと云ふ。之れも一つの國際性の姿には違ひない。現下の國際關係には稍之れと似通つたものがないでもない樣に思ふ。

(二)　無國性主義と稱へられるもの。それは世界無產運動の一つの流れの一つであつて、無產者には眞正の意味に於ける國性無しと云ふ建前から國性を超へ民族性を超へて世界の無產者が一つの團結を形造らうとするものである。この一團の見地からは民族性と云ふものは全く度外視されて居るのである。

以上の二つは人間生存の根底は闘爭であると見る點に於て共通な點を持つてゐる所の國際性の兩極である。が然し乍ら生存の根底が闘爭であると見る事には根本的錯誤がある樣である。

(三)　各の民族は各の精神内容に抱擁され乍ら人間性の相共通するもの丶上に國際的文化を建設して行かうとするもの。之れは人間性の根底は和協にありとする所から出發する國際性の一つの姿であつて、歐洲大戰の直後から次第に世界に擴がりつゝあつた國際性には斯る素質を多分に包んで居た樣に思ふ。現時國際聯盟の破綻各民族性の發揚等の現象から推して此の第三に揭ぐる國際性は姿を隱したる如き觀ではあるが其の根底には各民族は各

精神文化を堀り下げて和協の根底の上に共同文化を建設し様とする企は益々其濃厚の度を增しつゝある様に見える。和を根底に持つ所の日本の精神文化が今世界注視の目標となりつゝあるかに見えるのは此の事を如實に示す事實ではあるまいか。

以上述べ來つた見地から建築に於ける民族性と國際性との關係を考へる時に問題は自ら明瞭になる様に思ふ。近時電波により或は航空路により或は文書により其他一切の發明は事實の上に世界の距離を短縮しつゝあり、其の結果として生活の狀態は益々接近し、建築に用ゆる材料等も日に日に共通の度を增しつゝある事は事實であるが、然し乍ら藝術が精神內容の表現である以上異なれる精神文化は異なれる建築を生む譯である。之等生活狀況の接近や建築材料の近似等の事實は單に其の皮相的近接を結果するに過ぎないと思へる。やがて來るべき日に和を根底に持つ所の日本精神內容が全世界を蔽ひ民族性を超え國際性を超えて全世界が輝かしき和協の光に包まれる時が來るのではあるまいか。私の建築に於ける民族性を、國際性との關係に就ての考察は今斯る境地に迄進展してしまつて居るのである。

日本折衷主義と我國の建築運動

西　山　卯　三

1

建築運動とは狹義に解して一般に建築文化の領域に於ける運動を指してゐるやうである。だが夫は只漫然とした個人的な活動や局外者からの指示によつて行はれるものではなくて各個人が自主的に參加する建築家層の集團的な動きである。一般にそうした動きは夫れが集團的なものである以上常に歷史的必然性を持つて生れて來るものであるが、そうした自主的な樣々な意志が社會の發展に對して意義ある一つの方向に一致し凝集して行く時、其運動の力と意義とは全く拔くべからざる存在となつてしまふ。過去に於て古くは建築學會、或は分離派建築會其他樣々の建築家集團が步んで來た路は斯の如きものであつた。夫れが成功的であつたにせよ不成功的であつたにせよ、夫等が築いて來た多くの足跡は、いづれも全く今日の我建築界を裏づけ、その進步を光輝あらしめて來た輝かしい一つ一つの礎石であつたのである。

だが併し今こゝに明治以來の我建築の發達過程をふりかへつてみる時、私達は果して之等の一步一步の踏石に對して正しい批判を與へ、その貴重な遺產をあますところなく自家藥籠中のものとしてゐるであらうか？

遺憾ながら私は此答が滿足なものでないことを知つてゐる。

人々は或は分離派を語り時に工作文化聯盟に及ぶことがあるかも知れない。だが夫は屢々ジヤーナリステイツクなサロンの話題となる事があつても、之を我現代建築が生長して來た貴重な踏石の一々としては多くの人は考へてゐない。否かへつて我建築界の着實な發展の表面に表はれ且消えて行つた泡沫とさへ考へる人が多いのではなからうか。

なる程夫は泡沫であつたかも知れぬ。だが泡沫が出來るためには流れがあり、夫が激すべき岩礁があつたのである。私達は漫然と築地ホテル館、日本銀行、朝日ビルと云ふ如きものの內に我建築家層の成長とその內的激變の過程を知り得るであらうか。決してそうではない。私達の現在にいたる過程は、その樣々な泡沫が示す如くあまりにも複雜であり且特殊的なものであつたのである。

今や私達は準戰時體制の下に樣々な困難を背負はされた建築界のたゞ中に立つてゐる。夫は我建築文化の領域に於いても幾多の問題を未解決のまゝに放置せしめてゐる。だが私達はこうした事情の下にも、常にその正しき發展を導いて行くものでなければならない。そして夫は、日本折衷主義と我建築家層の發展過程、そして更に諸々の建築運動を通じて

發展して來た建築文化の領域に於ける理論的成果―の正しき把握を通じてのみ行はれ得るのである。

以下は之等一つ一つの泡沫の分子を檢出する事によつて此過程を極く簡單にスケッチし此問題の正しき把握の捨石としたいと考へる。

2

周知の如く多分に舊封建的要素の殘存の上に確立された我明治維新に於ける變革の特殊性は我國に於ける自由民權運動の徹底的展開をさまたげ、加へるに日清日露歐洲の三大戰爭を通じて急速に獨占の段階に發達した基礎條件の上にデモクラシーは遂に我國では支配的原則となり得ず、市民的文化傳統の確立される僅かの時期さへもなくて、文化は西歐諸國に比して極めて低い質と地位しかかち得る事が出來なかつた。

一般に歷史の發展に於いて、後進國が先進國の政治經濟諸制度に模すべき新らしき段階に發展する際、夫等先進國の文化的遺產をも直接に輸入して自己の文化の形成に役立たせる過程が見出されるのであるが、上述のやうな事情の下では、かうして輸入された先進國の文化的遺產も全く畸形的なものに變質するか、或はその形骸を止める底のものにしかなり得ないのは當然であつた。建築の領域に於ても此事情は全く同一であつた。

維新當初、外人技師による洋風建築は我明治政府の新らしい組織と制度文物を完成して行くためのかぐべからざる建築的容器であるかの如く考へられ建設された。商店街でさへ銀座通煉瓦街の如き改造が熱烈に要求されたのであつた。夫れは新しい構造法、新しい材料の故に新しい樣式を求めたのではなく況して我建築に對する文化的要求の一般的高まりが導いた結果ではなく、全く新しい時代の形態をとゝのへるべき明治政府の政治的要求からみちびかれた結果であつた。勿論かうした西洋建築術（新しい生產方法）の輸入と同時に、技術＝建築學の輸入も明治政府によつていち早くこゝろみられた。工部大學校の造家學は株仲間廢止の三年後明治八年開講されかくして新政府の必要とする新らしき職人、工人、工業士官を生むべき機構が整備されたのである。夫れは當初から工人教育、技師の技術的教育を前提してゐた。だが先進諸國に於ける建築家は決して單なる工人ではなかつたし、建築學又土工・木工學ではなかつた。かくして我建築教育は、工人教育でありながらも不斷に夫等先進國の折衷主義的建築文化の影響下に、圖案家育成より始まる多分に藝術家養成的訓練の形態を模した畸形的なものとなつたのであるが、夫は又同時に「建築文化」の問題を形式的技巧の問題にすりかへる事を日常茶飯事とする藝術的不感症を植えつける原因となつたのでもあつた。

此事は一に西歐的な意味に於ける「文化」が我國では確立されなかつた事、之を建築の領域にしては建築文化、從つて藝術としての建築を把握すべき基礎の全く未成熟である事―建築文化の領域に於ける新時代への脫皮が全く行はれなかつた事（夫にもまして我國には此の藝術の「觀客層」が今に到るも確實に植えつけられてゐない！）――と云ふ事に、そ

して更に我建築生産が當初から建築家を技術者として・形を設計する「圖案家」として(即完成された折衷主義的生産體制の下に)收容した事、施主や生産企業家の自由ならざる使用人が支配的であつたと云ふ事によるのであつた。

此の底流の上にまづ我國のあらゆる建築文化運動の特殊性が意義づけられる。從つて等しく建築運動と云はれても、諸先進國でみられるものとは全く異つた基礎の上に展開されたものである事が、注目されねばならぬ。西歐諸國ではセセッションにせよ夫以後の新興建築諸運動にせよ、夫等は多くの場合藝術=文化運動であつた。即ちすべての問題が建築家てふ藝術家の意識の內に藝術文化的イデオロギーとして昇華され、そこで問題が發展するのである。ところが我國では時にかなり純粹な「藝術」運動たり得ても、夫はその故に注目されるべきものであつたり、或は其故に泡沫的(紙上藝術的)なものでしかあり得なかつたりする。夫は藝術の問題たるよりも、むしろ生産・技術に對する藝術のより露骨な相關關係を起點とする主義主張をまとつて登場するものであつたと云ひ得る。或は夫は、既にして整備せる・即藝術上の諸潮流に對しては殆ど無節操と云はれる柔軟性をもつた我建築生産の折衷主義的體制の外側に於ける、建築家てふ藝術家乃至技術家よりする(屢西歐諸國の藝術運動の刺戟によつて起された)様々な思索と問題提起——の過程として表象されるであらう。以下稍具體的にその發展の過程を跡づけてみやう。

3

我國資本主義の第一階梯確立にともなふ明治20年代の建設期は、又工部大學校出身の我國建築技師の最初の活躍期であつた。此の時期に入るとやうやく歐米直寫の風に對し國粹尊重國粹再檢の要求が高まりつゝあのがみられる。之れが我が國に於ける獨自の「建築學」の發展の第一步であつた。

かくて此の期間に工部大學校には日本建築の講座が設けられ、その專門の研究家も輩出するにいたるのである。

私達はこゝに「圖案家」としての建築家の把握がつよくにじみ出てゐるのをまづ感ずる事が出來る。即ち我國の建築學は當時すでに折衷主義的體制の中に指向されてゐた事が明瞭に推察されるのである。

しかるに、日清日露兩役を經てもたされた隆々たる國運の發展は更に夫れに伴ふ公共建築、銀行、會社、病院等の新らしき建築家達の參加すべき建築の次々の出現をもたらし、かくて我國の「建築樣式」に對する具體的なる反省の要求が提起されるに到るのである。明治41年伊東博士は「建築進化の法則より見たる我邦建築の前途」てふ論述によつて此の問題に第一石を投じたのである。博士は當時を叙して、「所謂過渡の時代即ち暗黑時代の常態とは云ひながら其統一のない樣は隨分甚だしいのでありまして、恐らく世界歷史始まつてから今日のやうな場合はまづ澤山あるまいと思はれます。實に建築家にとつては千載の一遇とも云ふべき珍らしい趣味の多い重大な時であります」と云つてゐるが、夫はまさに金

融資本確立にともなふ我資本主義の洋々たる前途に對する希望にみちた祝福であつた。建築家達はまさに多幸な前途を眼前に控えてゐた。だが彼等の懐中には之をかざるべき遺産にまことに乏しかつた。かくして43年「我國將來の建築樣式は如何にすべきや」てふ討論會に於ける我建築界大先輩の結論は甚だ特徴的なものとなつたのであつた。或は和洋折衷を主張し、或は建築進化說をとなへ、或は新樣式創造を說き、或は純洋式直寫を主張するが如き、議論百出の狀態であつたが、歸する處夫等は結果に於て一の事を表現してゐた。即ち建築文化の貧困と露骨な樣式撰擇主義の二元論であつた。

もしも20年代の日本建築の反省が、いまだ「圖案家」的段階に於ける要請であつたとすれば、こゝでは我建築生産の發達と制度の整備に裏づけられて一層鮮かな折衷主義へと進出してゐる事がみとめられる。即ち、明瞭に如何なる樣式が「撰擇」せらるべきかと云ふ事が眞面目に論じられるのである。夫はコンドル先生の指導によつて基礎をおかれた我建築生産の折衷主義的體制とその觀念的上層建築がきはめてスクスクと生長した事を示してゐるのである。

明治末期議院建築調査委員會に對して建築學會が、主張した建築樣式を制限せざる事てふ決議はいまだこの問題に關して決定的な論斷が與へられなかつたことを示すのであつて夫は我建築樣式の折衷主義への定着を否むものではなく、却つて夫れを證明する事實であつた。

但し私は再三我建築樣式を折衷主義として述べたが、夫は之を藝術樣式としてみれば折衷主義として意義づけられる事を示したのであり、我建築が果してかゝる意味でも建築藝術であつたかどうかは別問題である。只建築は我國では技術、圖案、技巧の問題として時に或は藝術と考へられる事があつても、之を作るべき建築家が、西歐的な意味に於ける藝術家でない事だけは(其の後の藝術至上主義運動其他に於ける「泡沫」現象をのぞいては)恐らく明示出來るであらう。

20年代以降鐵骨構造或は30年代末の鐵筋コンクリート構造等の新しい構法の移植は構造研究家の一群を作り出しつゝあつたが、此過程も西歐に於けるが如く建築家と技師が峻別されてゐたが故にその發展が建築技術の中に新しい流派を生み出すにいたつたと云ふが如き過程を作り出したものではなく、新構造の輸入は「建築家」の質に何等內訌することなく、その中に構造、意匠てふ二つの領域を明瞭につくり出したと云ふに止まつた。夫は今日に於ける建築學の精致な專門分化を極めて端初的に展開したものであつて、日本折衷主義を擔つてゐた「建築家」たるものが如何なるものであつたかを示す好個の事實である。

大正3年大正博覽會に於けるセセッションの輸入と夫の一時的全國的「流行」などの如き現象は、當時我國に於ける「建築樣式」に對する取扱ひ方が折衷主義的と云ふよりも、圖案技術者的形態にまで發展してゐた事を示すものである。こうした現實のうちにも建築が藝術であるてふ、又建築教育が藝術教育であるてふ傾向は西歐先進國の影響下に常に强力に

植えつけられてゐた——(或はむしろ當初文化的背景の缺除の上に「藝術家」であらうとしたことが、彼等を圖案家たらしめたとも云ひ得るであらう)。此現實(圖案撰擇)と意識(藝術家たらんとする)との衝突は、「圖案」が疑問を呼ぶにいたるとも早や表面化せざるを得ない。夫は西歐に於けるセセツションは始まる過去の形式モメントの否定の運動(所謂構造派として日本につたへられてゐる)の刺戟の下に齎らされる。だが全く特異な事には夫は、我國では古き藝術の否定ではなくして、藝術そのものゝ否定と云ふ方法によつ表はれる。有名な野田俊彦氏の建築非藝術論は之の最も集中的な表現であつた。

あらゆる其藝術的粉飾にもかゝはらず生長して行つた我建築產業の折衷主義技術體制=形成はその生產と「藝術的」設計に於ける調和し難き二元論を益々深め遂に建築藝術そのものに對する疑問をよび起さずにはおかなかつた。かくて建築は藝術に非ずてふ理論が我工業的現實の成長と產業ブルジョアジーの要求に答へて、そして何よりも我建築文化の特殊性を反映して、戰塵が歐洲の天地を掩ふてゐた年華々しく日程に上されたのであつた。

勿論「建築は藝術なり」てふ思想がほんの「偶然」から起つた「迷信」であるとするが如きは必然と偶然をとりちがへ「迷信」の何たるかを解しない素朴な見解であるが、「天才ならざる建築家は當分たゞ善ならんことのみを目的として家をたてればよい。其結果が美くしいか美しくないかを考へないでいゝ」と云ふ時、私達は非藝術論者によつて藝術的主張にまで高められた功利主義的理論を見出すのである。夫は我藝術・「圖案」に假裝された折衷主義が云はんとして云ひ得なかつた「現實」の一面を表現してゐる。だが此「現實」をかざつてゐる裝飾的重荷を單なる虛飾・偶然の產物と見た點夫は全く歷史的認識に缺けてゐた。

夫は我折衷主義の最左翼をなしたものであつて、殆んど一步で戰後の「合理主義」に通ずるものであつた。然も後者が我小市民的イデオロギーを反映して西歐の構成主義的形式主義の影響下に屢々此の功利主義的原理に加ふるに「形式」を附加したと云ふ事實は、非藝術論をして却つて我國に於ける正統セセツション運動の役割を擔はしめる結果となつた事は全く見逃し得ない。

4

明治期に於ける「我邦建築樣式」の問題に對する關心の高まり、或はより對社會的な活動として意義づけられる議院建築の問題、等の建築文化の領域に於ける大きな動きは、創出期にあつた我建築文化の飛躍と生長を物語る一つ一つの段階であつた。即之等の運動の指導理論は夫自身建築家層の個人的乃至代表的意見であつて、夫を通じて建築家自身が成熟すべき過程にあつたのである。だが大正期に入ると我資本主義の確立に伴ふ之に參加すべき建築技術家層の廣汎な要求と形成・就中若き人々の間に於ける陳腐化せるものに對する對立的機運の醸成・及之をとりまく社會狀勢は、建築家層自身の內部分化と內部對立を表示する建築運動を發展せしめる前提をつくつた。

大正3年から5年にわたつた世界大戰は西歐諸國の世界市場に於ける競爭能力の一時的

喪失にて伴つ我國資本主義の異常な發達をもたらした。日露役後重工業にその重心を移動した我國の資本主義發展は此間に一擧に高度金融資本主義の段階に達した。だが、大戰は資本主義世界の矛盾を調和するかはりに總ゆる矢の激化をもたらした。矢はまづ平和の翌年大正9年我國をトップとした第一回の世界的恐慌に見まはれる。

後年我國の群小建築運動の魁をなした分離派建築會は此の年、戰後の澎湃たる好況と人道主義の氾濫の中に恐慌の前夜その誕生の第一歩を印したのであつた。大正9年2月東京帝大構內でさゝやかな建築習作展が開かれた。同年7月、その作品集が出版された。矢が我國に於ける建築運動の——エポックをつくつた分離派建築會の第一聲であつた。分離派は三段よりなる希望にみちた宣言を華々しく世界に向つて發したのであつた。かくて新らしき時代への進軍喇叭は高々と吹き鳴らされたのである。

「過去建築圈よりの分離」そしてその中に眠つてゐるものを覺し救ふ事——矢は半封建的基礎の上に急速に獨占資本主義の段階に發展した下部構造に應じて封建的イデオロギーの殘滓が殆ど清算される事なく我市民文化の本樞的部分に繼承された事實が、建築に於て早くも既に我折衷主義を封建的イデオロギーに裏づけられた陳腐な紋切型に墮せしめるに到つた事に對して、かゝる折衷主義をより柔軟な藝術の前にもち來さんとする一部は產業ブルジョアジーの要求に答へたものであつた。だが既にして切迫した社會狀勢は分離派をして前世紀90年代のセセッションが示し得たやうな透徹したリアリズムを實現せしめる事が出來なかつた。矢は建築を自己の主觀の中に愉悅を以て捧げると云ふ方法によつて遂に產業ブルジョアーの要求に直接應へ得ずして完全にその小市民性を裏書きしたのであつた。矢はかくしてオーストリヤ●セセッションに對置さるべきものではなくて、より多く大戰前後の表現主義藝術——部分的にはタウトやメンデルゾーンの建築に通ずるものであつた。

矢は過去の樣式の中に眠れる折衷主義を否定した。だがリアリズムによつてゞなく自己の主觀の中に高められた藝術の精神によつて。矢は建築を過去の陳腐な樣式折衷から救つたと同時に、矢を永遠の藝術觀念の中に拜脆せしめたのであつた。だが之等すべての事は、その故に分離派がはじめて我國に於ける純粹な藝術運動であつたことを裏書するものであつた。

分離派の投じた一石の波紋は相當に大きなものであつた。かくて4年後大正12年には創宇社が、矢につゞいて13年にはメテオール●ラトー●マヴオ等の樣々な建築團體が次々と結成された。矢等はいづれも多少の色合の差こそあれ、その客觀的意義に於いてはいづれも分離派と同樣の表現派的な藝術至上主義運動であつた（但し例へば三科の如きものには未來派乃至ダヾ的な傾向への傾斜がみられる）。之等多數の小會派の分立は、分離派がその會員個人々々の間に主張態度に於て必ずしも全的に一致したものでなかつたやうな個人主義的自由の精神が偶々多くの人々の集りに樣々な名稱をあたへたと云ふ結果にすぎないものであつた。矢等は全く大正12年の大震災と復興による建築需要の增大てふ刺戟に應じて

「藝術味ゆたかな美しい東京を建設すべき」建築家のつとめのために「因習と隋順」とに災された我建築界に育まれたものがその殻を破つて「自由な創作の天地」におどり出るために——華々しく一時にさきみだれた花の如きものであつた。だが多くの之等小會派は何れも殆どまたゝく間に線香花火のやうに咲き且つ衰へて行つた。たゞその中に創宇社のみが後にみる如く比較的長く自己を忠實に發展させて行つた過程が見られたのみであつた。

5

だがこうしてゐる間にも大戰によつて破滅にまで打ちのめされた歐洲諸國の建築界はどうであつたのだらうか。

表現派、未來派、ダダにいたる藝術の爛熟と腐敗の建築領域に於ける横行をかもし出した大戰直後の荒廢期は、1923年以來資本主義が相對的安定期に入るにつれやうやく恢復の徴を示す。就中ドイツに於ては1927年頃より大戰以來の住宅難に始めて現實的に答へるべき廣汎な社會民主主義住宅政策の實施が多數の新建築家の參加の下に開始されるにいたるこうした事情は、大戰直後の恐慌以來合理化を進めつゝあつた一般情勢の下に（我國では所謂「合理主義」の名のもとによばれる）建築的構成主義の様々な型を形成する新らしい建築運動を廣汎に呼びおこす結果となつたのである。

すでに1925年グロピウスによつて發せられた國際建築の宣言に答へるべき新しき國際的建築は此の波にのつて漸く自己を具體化しつゝあつた。其の一つの現れである國際新建築會議は住宅の問題を取上げて1927年第二回の會議をフランクフルトに開くにいたつた。ホウハイたる「國際建築」の聲は世界經濟の部分的回復と世界文化の交流の内に建築的構成主義の統一的スローガンとして日々建築家の耳をうちつゝあつた。

此西歐に於ける情勢は我建築界へも反響を呼びおこさずにはおかなかつた。1927年「日本インターナショナル建築會」は關西の地に「人類の生存」「人類の進展」に基礎をおいた各三項目よりなる宣言と綱領をかゝげて創設され、同年11月には第一回の展覽會を開催した「合理主義」の風潮にのつた新らしい進軍喇叭はこゝに吹鳴らされたのである。「今ヤインターナショナル建築思想並ニ之ニ基ク技術ハ世界的トナリツヽア」つたのである。私達はこゝに明かに藝術至上主義から技術への關心の高まりを觀取することが出來る。西歐の構成主義原理が我新興建築家達の頭腦へ反映された最大の結論——其れは建築はも早や永遠に藝術の殿堂に結びつけられるべきものではなくて、技術へのより明白なむすびつきを意識しなければならないと云ふ事であつた。

だが振かへつてみるにかゝる强調は果して我折衷主義建築にどれ程必要であつたのだらうか。成程其は數年來の我建築藝術運動に對しては或種の警告であつたにちがひない。だが我現實の建築生產、或はその機構内に働くべく位置づけられてゐる建築家＝技術者は果して技術を忘れてゐたであらうか。否彼等は決して其を怠つてゐたとは云へない。我建築界は常に營々として新らしい構造を、新しい設備を、そして新しい施工法をその諸條件の

許すかぎりアメリカ的精神に於いて取り入れてゐた。彼等は建築の藝術的形成をさへも其折衷主義的原理にしたがつて「技術的」に構成してゐたのではなかつたか！もし夫古き建築に於ける裝飾的附加物を附加物なるが故に否定するのであれば、夫は全くその歷史的意義を認識しない素朴な單純化主義であり非藝術論の新しき發展段階を示すものにすぎないのではなかつたか。

彼等インタ建築會は過去の小會派を正しく批判した。「之等小會派は多く表現派時代に發足點をおき、又その製作物を見るに表現派に屬するもの多く、此等は運動として効果すでにおさめ、現時の建築への飛躍を助成したるは多とすべきなり」。然らば彼等は表現派に替るべく何を對置したか！曰く「しかしながら今日世界の大勢のそれはインターナショナルなるそれへの高揚にして、叙上の如きものとは全然種を別にするものなり」

彼等はたしかに過去の純情を我藝術運動にさゝげた小會派の人達に足下を見よと警告を發し得たかも知れない。だが現實の建築には此側面から殆ど何物をもつけ加へる事が出來なかつた。かへつて夫の附加へ得たものはインターナショナル、スタイルてふより工學技術的な外形でしかなかつた。そこにはやはり過去の藝術運動から足の洗へない形態に關する觀念的ドグマと思ひ上つた結論がたゞよつてゐた。云ふまでもなく夫は我國の資本主義合理化に答へたものであつた。だが夫が單なる勞働强化に終つた如く、こゝでも合理主義は殆ど新しい奇抜な材料の讃美と形態の單純化主義てふ矛盾にみちた方法によつてよりよく我產業ブルジョアジーの要求に答へたのみであつた。

夫は分離派以來の「藝術運動」がその小市民的良心の痙攣から大膽に承認し得なかつた露骨な功利主義を西歐の構成主義的形式主義の外被の下に提出したのであつた。夫が關西の地に起つた事は必ずしも偶然でなかつたのである。

構成主義はたしかに西歐では建築藝術の領域に於けるオーストリア・セセツションの流れをくむ一の正統的發展の結果であつた。だが我國ではかゝる藝術に於ける改革を必要とすべき土壤・建築文化が存在しなかつた。工學的な要求・新しい時代の要求・構造法の激變・夫等は我「圖案家」の頭を通つて藝術的形成にまで高められる必要もなく、夫を素通りにして「建築物」の中に自由に自己を實現する事が出來たのであつた。從つて、我國に於ては西歐に於けるが如き近代工學技術が建築藝術の領域に與へた深刻な內訌と變革及その構成主義てふ成果をみちびき出すべき苦悶が何等必要されなかつた。

かくて小會派に始まる我國の新興建築運動は、單なる形態(フオルム)と華々しき西歐建築家の理論によつて賑に飾られたサロン・エピソードにしかすぎず、紙上展覽會の華々しさに自己の「悲壯」、且「健全」な立場を確信し、好事家性と宣傳性の廣告的テーマに歪められた實在建築をわづかに實現し得たと云ふ底のものでしかなかつた。此事實は又、夫自身新しき發展の段階を體現しながらインタ建築會が過去の小會派の建築藝術至上主義運動と何等ことなるところのなかつた點である。

「國際建築」の叫び聲は様々の反響を呼び起した。夫は又同時に日本建築への反省をも呼びおこした。かくて、民族性の故に國際性を斷乎排撃するものから、つゝましく古典日本への回想をこころみるもの、或は夫をローカクティーのみに於て注目せんとするもの、等々の様々な傾向が夫々論者の立場を示しつゝ呈出された。

自己の藝術に對する觀念から機能主義への近づきをも自ら戒しめてゐた分離派は、「國際建築」等に對しても肯定的な解答をあたへる事は出來なかつた。それはも早や老ひ且疲れてゐた。理論に於てばかりではなかつた。（夫は以後のすべての藝術運動についても云ひ得る事であるが）彼等の主張もその會員が現實の建築生産機構内に建築家として設計し得る人としての地位につくと同時にその現實的作品は鋭さを失はねばならなかつた。施主を前提とする建築藝術の現在に於ける特質は、も早やこゝに何等の藝術運動の存在をゆるすものではない。展覽會もこうした事情の下では高々商業宣傳的機能しかもち得ないものとなつてゐたのである。最後の第7回分離派展は此の事情を說明してゐるであらう。かくて、夫は「分離派を見ず——或はうつくしき家具をみる——」ものとなつてしまつてゐた。

6

もしも分離派がアカデミーの中から生れた幸福なる純粹藝術運動であつたとすれば、創宇社も同じく「古代人の純情なる創造の心を熱愛し、模倣てふ不純なる風潮に泣き、永遠の母への憧れをもて頽廢と陳腐とにたゞれたる現建築界の覺醒を期する（宣言）」藝術至上主義運動であつた事は全く同じであつたが、より下層建築家層を中心としてもつた此團體は彼等の地位と生活環境との内にいつまでもそうした藝術家的興奮にひたつてゐる事が出來なかつた。

大正12年「全宇宙に美しき「マツス」を見出すべく專心努力」する新らしき建築形態の熱情的探求から出發した創宇社は、最初の數年間殆ど全くフオルムとコムポジションに彼等の眞摯な情熱を打ちこんだのであつた。其展覽會は、彼等會員の社會的地位が自ら現實の建築を創作すべき位置を許さなかつたが故に、殆ど終始粘土細工と紙上藝術の展覽であり、又その故にこそ長く彼等を純粹な藝術運動に止めたのであつた。だが戰後の相對的安定期に於ける際にも一方に增大する矛盾と不均衡、失業群の增大と生活不安の激化は彼等を藝術的陶醉に止めしめる事が出來なかつた。かくて夫は、藝術至上主義から次の時代への多難なる過渡を身を以て歩んだのであつた。かくしてその第6回展には、西歐構成主義及び國内の合理主義者、ファンクショナリスト等の刺戟をうけて、そのテーマと作品に於いても過去のコムポジション共者からより建築的なものへとの視角の轉換が明に看取せられるに致つたのである。だがこうした過渡は同時に創宇社自身にとつて此の轉換に處すべき新建築理論の獲得とその實踐的研磨とが痛切に要求される時であつたのである。日本インターナショナル建築會がその雜誌創刊號を出した年昭和4年の10月、丸内保險協會で數人の建築評論家、新進建築家等を講師とする第一回建築思潮講演會が創宇社の主催の下に開かれ

たのは、全く此の狀勢に應へたものであつた。夫は確に「建築を建築自體的建築論から脫出させ……社會科學的考察根據にたつて建築しなければならない」とし、且建築家の解決すべき問題及びその實踐的方法を探求すべき創宇社のよき意圖から出發したものであつた。勿論、講演の內容と方向は未だ分離し、その水準も概して此理論的要請からおくれ勝なものであつた事は否めないが、數年間の藝術的狂騰がこゝに一應の沈靜と理論的問題への反省をより深く提起するに至つた事は明に看取し得る一步前進であつた。

岡村蚊象氏による「合理主義反省の要望」は此中で特殊な注意を引く。夫は（講師の企圖如何にかゝはらず）當時の若き建築家達が自らの創意を具體化すべき方法を展覽會と紙上藝術の上にしか求め得られなかつたと云ふ事情の上に、その作品のテーマ、存在性、現實性、可能性等の問題への反省を提起したものとして、まさに展覽會運動の良心的煩悶を明にしたものとして指摘されるであらう。だが此問題に對して彼等の與へ得た實踐は決して此煩悶を解決し得るものではなかつた。現實的テーマに近づけば妥協が必要であつたし、夫に潔癖たらんとすれば內容の甚だしい空想化、或は作品テーマの口舌主義におち入らざるを得なかつた。夫は展覽會運動否定或は少くともその不信への一步直前を示すものであつた。もしも分離派の傾向がその作品名「涙凝れり（ある一族の納骨堂）」てふ如きもので代表されるとすれば、此の時期の創宇社は全く「無料圖書館」「協同組合アパートメントハウス」等で表徵されるとも云ひ得るものであつた。

此建築展實踐への煩悶が建築の實現への煩悶に轉化する時、創宇社の進步的分子は更に一步前進する。かくて、夫は日本に於ける此藝術の特殊性の上に、西歐の構成主義、即所謂「合理主義」への懷疑と批判、その辨證法的克服が提起されるにいたる。西歐に於ける進步的建築家オウト・グロピウス、其他様々の人々の建築理論が今や彼等に取つては甚だ低調なものとなつて來るのである。

此の創宇社に於ける新らしき段階への發展は當時の進步的建築家の間に一様に感じられた一つの傾向であつた、かくて日本に於ける特殊事情の上に西歐の藝術理論の單なる直寫でない眞の新しき建築を把握すべき集團的運動を起すべき氣運が着々と準備されつゝあつたのである。2 回を重ねた建築思潮講演會は分離派以來の小會派其他の若き建築家團體の活動的メムバーの參加によつて其道を掃き清めた。此新しき情勢の下に於ける建築運動の飛躍的發展と綜合の要望をみたすもの——夫が新興建築家聯盟の結成であつた。

聯盟は新進建築家のすべての參加を要請しつゝ昭和 4 年10月20日、ひどい吹降の夜神田に第一回の會合をもち、其の活動を開始した。

「新興建築の理論的並に技術的獲得」を目的とした夫は、研究部、宣傳部、抗議部、互助部、連絡部の諸部を事業遂行の爲にもうけ、直に活發な行動を開始せんとした。だが全く意外な事には、此會合はたまたま、故意か偶然か惡宣傳によつて、特に舊アカデミー陣營からの强い反對をうけるにいたり、遂に解散のうき目をみるに至つたのであつた。

かくて純粋(或は素朴な)藝術運動の止揚につゞいて新なる飛躍を生み出すべき建築運動の發展の線は、こゝに突如斷層を經驗した。夫は建築運動が建築家層の內部分化に對應するものとして生じてから最初の明白な舊勢力の反擊であつた。夫はすべての新進建築家を糾合した此聯盟がもたらすべき均衡の破壞が夫を必要とする程恐るべきものとして豫想された事、且その必要を確信せしめた社會情勢の激變を物語るものであつた。勿論、聯盟の解散はすべての若き建築家團體の解消をもたらしたものではなかつた。例へば日本インタ建築會は、1933年まで、斷續的な雜誌發行によつて奮々たる氣息を保つてゐた。だが夫がすべての運動に於ける退却——ことに中堅建築家達の退却への一劃期であつた事は否まれない。

かくて、古き藝術は否定された。だが夫にかはるべき何等の新らしき前提もなく——同時に我新建築理論と夫の實踐に於ける輝しい正常の發展の線も亦中斷されたのであつた。學者は研究室にかへり、建築家は事務所へ、役人は青き羅紗机へ、——かくて我新興建築家達はいとも靜肅に自己の持場にかへつて行つたのである。此時以後、我「建築運動」の質的變化が始まる。そして我「建築學」の發展も亦全く新な段階に入るのである。これより以後、建築學に於ける物理、化學的研究は運動の中堅エキスパート達を加へて峨然活況を呈する。かくて構造學の進步に遲れないやうな「意匠」の樣々な「科學的」研究も亦火蓋を切られた。機能へ、否技術へ、否物理化學へ、彼等のいとも精密な頭腦が指向されたのである。そして、之が現在の我建築學界未曾有の繁榮をもたらした事は誰も知るところである。

運動の新進・中堅メムバーの通つた道がかくの如きものでありとすれば、多く下級使用人であつた下層建築技術者達はどうであつたらうか。第一彼等には歸るべき安定した、職場をもたなかつた。だが失業增大と職業不安は、技術不安を呼び起し、異つた側面から彼等をも同じく「建築科學の獲得」へ引きつけた。最も若き人達によつて昭和7年初頭結成されたＪＡＦ(日本青年建築家聯盟—後に建築科學研究會)は此道をとほつたのである。だが夫は結果に於て成功的であり得なかつた。學問と技術の結合はしかく簡單ではなかつたし、總ゆる點で餘裕を持たなかつた彼等がその研究を成功的に行ふ事の出來なかつた事は當然である。「建科」は昭和8年10月解散され、單に親睦と文化の向上を目的とする青年建築家クラブが之につゞいて結成されたのであつたが、益々せまつて來る社會的重壓は1934年、此の若き人々のさゝやかな最後の運動の望みをもたち切つてしまつたのであつた。

7

事變後急速な社會情勢の變化——即戰爭準備の段階への急速な突入は、其後2·26事件を經て益々現實の問題となり、廣義國防の掛聲と統制强化の趨勢は一般文化の領域にも全く新な情勢を現出した。昨年12月結成を見た日本工作文化聯盟はかゝる情勢の下にその意義を持つ。注目すべき事はこゝでは過去の建築運動に於けを中堅花形建築家達の復歸が多數に見出される事である。

だが、此「統制」と日本主義の波にのつた聯盟はその綱領に表はれたところでは、殘念な事ながら過去數年來の我建築運動の結論的な成果を繼承するものでもなければ夫等からの幾分の前進がみとめられる態のものでない事は、何人も知る處である。まことに、夫は停滯と沈默・休息と退嬰が現實よりの退歩をもたらす事のこよなき實例であつた。結果として夫は日本主義興隆の貧しい「建築版」をかつて出たにすぎないやうな現狀にあると云ひ得るであらう。(だが私達は此新しき建築文化運動——中堅・新進建築家達の活動に對しては、なほ多くを今后に期待しなければならない事は云ふまでもない。)

過去の華しい建築運動は一歩一歩我建築生產體制の眞の上部構造を構成すべき建築文化の探求に自己の道を切開き進んで行つたのであつた。だが新興建築家聯盟の解散によつて表象される發展の中斷は、夫以後此問題を全く、新な解決方向に求めるべき事を要請してゐる。

現在我切迫した情勢——インフレーションと戰爭準備、物價高騰と生活不安の切迫した時代に於ては、文化、殊に建築文化の如きは第二義的否第三、第四義的意義しか持ち得ない事を私達はよく知つてゐる。だが夫なればこそ私達建築に志す若き人々の此方面に於ける努力が二倍も三倍も意識的に要求されねばならないのである。そして夫は過去の諸先輩が身を以て實踐して來た樣々の成果と、その遺產の正しき繼承によつてのみ、可能な事なのである。

我建築運動、特に日本折衷主義の現實的發展と夫との相互關係についての、貧しい走書的分析を以上にて止める。 (1937. 5. 10)

そろそろ歴史的存在となつた分離派建築會の事など・たまたま同人大内秀一郎君逝く

山田守

分離派建築會もそろそろ歴史的存在となつて來た。

現代への日本建築歴史を扱ふた文献の中にあの頃建築の理想に燃え、相つどひ、相もがく、幼き建築姿が出て來る。

伊東忠太先生や田邊泰氏等の建築史家によつてあの幼き建築家群が寫され解剖されてあるのを讀ると我々は恐縮しかつ其の頃の事をなつかしく思ふ。

大正9年に分離派建築會をつくつた。數人の同人は學校をいでんとした時にこの事を起し卒業したとたんに第一會の展覽會を以て世に發展した。

當時獨逸の建築雜誌を通じて紹介されてゐた新鮮なる建築作品と其主張とは幼き建築家達を刺撃した。所謂セセッション運動に就ての伊東忠太先生の行き届いた講義は幼き建築家達を興奮させた。

その頃の我國の建築界は歐風歴史的様式の摸放時代であつたと云つてよい。歴史的様式よりの分離、合目的な建築の制作などはたとへ習作的な圖面上の計畫にしても自覺を以て敢行し得なかつた。之れを實際的建築へ實現せしめる事は、相當困難なる一般的事情にあつた。

ここに幼き建築家達が日本に於ても歴史的様式を離れ、新建築の目的に叶ひ新材料構造に適した建築を實現すべきであると云ふ運動を必要としたのである。

もとより其當時の建築運動の爲の同人の作品は新建築の純粋なる理想と合致すべきものばかりを以てし得なかつた。しかし正當なる新建築への念願は各自抱いてゐたのであつた。何れの作品に於ても正當なる新建築への第一歩たる舊様式打破の事丈は現はれてゐた。新興日本の建築を實際に一日も早く其の赴くべき方向に向はしめんとしてた努力に終つたとしても思出深き事である。

大内秀一郎君の今度の逝去は分離派建築會の當時を回顧し、同君が其後展覽會毎に溫厚な態度で同人として參加してゐた事を思ひ浮べる。同人堀口君と一所に若くして外遊し歸朝後大内君はフランスのよき現代建築風なおだやかな無理のない作品を發表してゐた。

とかく下手な達磨の繪の様に筆力雄健なるものはとかく其内容をそこなひ易い。様式打破に力を入れ過ぎて我々はその内容を歪めた事は多かつた。

大内君の作品は其の點の間違はなく山氣もなく無理もなく上品な紳士風の作品であつた君は靜かに革新の道に加はり無理なき作品に努めた。大内君の如き人は當時から現代へ建築家的製作をつづけてゐても大した修正を必要としなかつた。その方向にどんどん進んで來ればよかつた。世の人は君の如き隱れたる純情の建築家を要路に据へるにはあまりに多忙であつた。遂に大阪市電氣局の建築が君の指導の下に生るる事となり靜かに控へてゐた君の作品が續々と世に出でんとし君は當然の軌道の上に据られた。大阪の新名所電氣科學館が現れた。我々は君に期待する所多かつのに。同君は夭折する。純な心構をつづけて行く同君が過去の分離派建築界に必要であつた様に今日以後の我國新建築界にも必要としたのであつたのに。（12、5ノ8）

日本のインターナショナル建築運動

中　尾　保

斷り ——私は自から第一戰にたつて高唱を續けて來た一人であるといふことを抜きにして全くの第三者(?)の立場で記すことにする。

1927年7月2日、日本インターナショナル建築會が創立されて建築運動を始めてから丁度今年で滿10ヶ年になる。その間運動の最も激しかつたのは29年30年31年の三ヶ年で會員達は火花を散らして論爭したのもその頃で、1933年には「會の目的の大半が達せられた以上積局的運動を續ける時は却つて反感嫉視を招き最初から邪道に陷らんとするものが現れてくる」といふ見解の下に運動を一時停止して靜觀することになりその狀態のまま今日に及んでゐる。

1927年までの建築運動の大略

一體日本で所謂西洋建築と稱するものが舊態を脫し始めたのは十數年前で、東京の平和博覽會に於ける分離派の活躍からであるとせなければならぬ。勿論此大博時代のセセツシヨン式とかアールヌーボ式などがあつたが、それが本當のセセツシヨンの精神を汲んだものでもなく何んでもなかつた。何れも誤まられて傳つたもので社會は無論建築界にも大した影響がなかつた。アールヌーボーに至つては家具や器具に多少の影響があつたかも知れぬ。それよりも日本の建築家はただボンヤリと夢のやうな考方から抜け出て多少なりとも論理的に物を考へ自分の意見を發表しやうとし出したのは20年前頃からで、當時の建築界に忘れてはならぬのは後藤慶二氏の指導的態度である。氏は偉大なる未成品として中道にして倒れたが氏の藝術的な態度が漸次科學的な方向へと轉換しつつあつたことは氏の作品を通じても容易にうかがふことが出來る。氏は當時の少壯建築家達の憧憬の的となつたが運動といふ程のものが起らなかつた。

運動らしい運動としては14,5年前の分離派の活躍を以つて嚆矢とせなければならぬ。

分離派は數名の青年建築家即ち石本喜久治、森田慶二、堀口捨巳、瀧澤眞弓、山田守、矢田茂、濱岡周忠(後の藏田氏)等の諸氏によつて組織された小さな會ではあつたが、これはわが建築界に卷き起したセンセイションは實に大なるものがあつた。分離派の主張は旣成建築の圈內から分離して藝術的新形態を飽くまで追究するにあつた。舊樣式摸倣より一



新興建築講演會講師
向つて左から・中尾、伊藤、本野、新名、中西、佐藤(武夫)の諸氏記事參照

歩も出なかつた當時の一般建築界に亂打された警鐘となつた。分離派同人外の者でも分離派式と云はれた作風に浸みて行つた。

一方米國建築家フランク・ロイド・ライト氏の作になる帝國ホテルの建築がまた日本の建築界に謎として現れた。今日でこそやや批評眼の出來た日本の建築界で論議されこそすれ當時は確かに一つ驚異であつた。しかし立體派と稱するこのライト氏の作物の神髄に觸れ得ずしてそのまま數年を混亂狀態のまま經過した。

日本インターナショナル建築會の創立

その頃歐洲ではすでに材料、構造の合理的處理と建築機能の純粹構成、機械的美觀の意識化等の動的要素が注目されつつあつた時に表現派から脫したウオルターグロピウス氏がデツソウのバウハウスの機能的校舍を完成してゐた。ル・コルビユジエ氏は新しい提案として著書や圖案を示して世界に呼びかけてゐた。

建築の世界的動向が定まりかけたことに氣づいた6名の建築家（本野精吾、上野伊三郎伊藤正文、石本喜久治、新名種夫、中尾保）は1927年7月2日京都に會し日本インターナショナル建築會設立の宣言と綱領とを日本及び外國に發表し、インターナショナル建築の日本に於ける解決へと志した。

宣　言　（1927年7月）（エスペラント及び外國文は略す）

1　人類の生存に基礎を置いて建築の進路を根本的に解決せんとす
2　人類の進展に伴ひ必然的に生るべき樣式を建設せんとす
3　日本に於ける問題の解決に基本を置いて世界各國の同志と提携して共同の目的に向つて進む

綱　領　（1927年7月）（エスペラント及び外國文は略す）

1　樣式の建設には傳統的形式に據る事を排し狹義の國民性に固執せず眞正なる「ローカリテイ」に根底を置く
2　研究及創作の範圍は建築を中心として人間の生活に關する總てを含む
3　宣言の主義主張を實現せんが爲めに隨時展覽會講演會等を開催し常時研究及教養の機關を設く

寫眞・（ABC順）







寫眞・左上から伊藤正文氏、石本喜久治氏、本野精吾氏、中西六郎氏、中尾保（筆者）、新名種夫氏、上野伊三郎氏



當時中西六郎氏は巴里に在つたが發起人の一人として歐洲各國の建築家と意見の交換を試みて多大の贊同を得た。宣言と綱領の發表が日本では認識不足から隨分誤解もされ抗議もされ相當敵もつくりまた數々のナンセンスもあつたがまたこの會に好意をよせその運動に贊意を表した建築家も相當に出來た。外國建築家から多大の應援を得た。

最初の會員

伊藤正文、石本喜久治、本野精吾、中西六郎、中尾保、新名種夫、上野伊三郎

外國會員

タウト（獨）Bruno Taut——メンデルゾーン（獨）Erich Mendelsohn——リートヴエルト（和蘭）G. Rietverd——ホフマン（墺）JosefHoffmann——ウヰルス（和蘭）Jan Wils——ウート（和蘭）J. J. P.Out——ペーレンス（獨）Peter Behrens——グロピウス（獨）Walter Gropius——リユルサ（佛）AndreLurcat——ノイトラ（米）Richard Neutra



尙この會の趣旨に贊同して入會した人は

本多正道（大阪）　竹內芳太郎（東京）　南　信（神戸）　桐本楠雄（大阪）　眞柄藤三（大阪）　白鳥義三郎（東京）　田町喜多見（東京）　安田勇吉（臺灣）

の八氏（以上1930年）でその後山家泰、眞永眞義、宮田秀穗、平松太郎の四氏入會しその他客員として會の仕事を援助された人々に、安井武雄、今和治郎、藏田周忠、西村辰次郎、小川安一郎、川口一二、佐藤武夫、富士岡重一、角尾篤彦氏等があつた。



會の事業

會が創立されるや會員は先づ新聞や雜誌に意見の發表を連續的に行ふは勿論1929年から雜誌「インターナショナル建築」を發刊して新興建築の動向を示しその精神を敎示し一方數回の展覽會數回の講演會を催すのほか1930年の國際住居協會の大會には中西六郎氏が本會を代表して參加し日本の建築の長所を世界に紹介し殊にバウハウスを始め各地での講演は各國の新聞記事を賑はした。またこの會員の作品はモデルネバウフオルメン、カサビラその外國雜誌に掲載されてしばしば好評



を博した。その間ノイトラ氏、タウト氏の來朝あり各地での講演は廣く世の注目を引き大いに啓蒙に役立つたことは事實である。

日本インターナショナル建築會の設立以來世界的な建築技術への躍進の方向が明示され一時は主義の上で敵をもつくつたが思索と技術的研究の動向が次第に明瞭となるにつれて更に多くの共感を呼びつつその歩をつづけた結果、各地に出來て行く建築の形態が明らかに實證されて來た。遂に會の組織を變更して役員を置き全國に會員を募集したるところ實に 152 名の參加を見るにいたつた。(1930年2月)

客員17名　舊會員19名で外國會員10名を合せると實に 198 名の多數に上つた。この勢力と世の流れは最早何人も疎止することの出來ないといふ見通しがついたので前記の理由により33年遂に運動を停止して靜觀することとなるに至つたのである。

雜誌インターナショナル建築1930年5月號から

日本インターナショナル建築會の創設は1927年7月であつた。回顧するとすでに足かけ4年になる。會の活動を中心として渦巻いた新興建築の流れは1929年に於て殊に高潮し、文化の國際化の必然性に對する認識は確實になつて來た。我等の生活の實踐的動向が國際化するに伴ふ建築の國際化は當然であり過ぎる眼前の事實である。

1929年度までは我等の活動の初年期であつたが茲に1930年を迎へて、日本に於ける新興建築と新工藝の眞の進路を指示して、研究と創作の上に更に確實な成果を得なければならぬ責務を感ずると同時に、社會の生活樣式の展開の方向を常に鋭い注意を持つて見守ることの必要を痛感する。ウート氏から會宛に送られた言葉の樣にあらゆる意味で modern mannerism を排する爲には戰を辭せぬ覺悟を固めよう°

入會した125名

井戸田重太郎	稻垣秀夫	石井改吉	伊勢谷忠夫
伊勢四村郎	石谷伊三郎	井上雄一	今井重季
飯田繁二郎	飯田光明	伊藤幸一	今井健治
井口大示郎	板谷清春	生駒忠彦	早筆五郎
伴田榮吉	濱岡荒吉	西田芳一	西田朝男
西田隆	西島勇	西本重吉	星廣文
堀正一	堀光知	戸田和夫	棚木一郎
戸明春太郎	荻田眞之助	大久保小輔	岡田重一
大佐和彦太郎	奥村敦	奥山濱之助	大郷松三
小川米一	荻沼政男	大島男治	大津直彦
大賀實	荻田幸次郎	若村亘夫	和田壽夫
勝山純二	川口喜代枝	角野考	龜淵弘
加村富太郎	川端與喜藏	神足繁雄	刈谷助太郎

川北三九郎	片山末男	上田清藏	上田勇介
海上靜一	川田靜雄	梅林道雄	植村友雄
吉田武雄	吉岡雜三	九鬼駒雄	久保才一
吉岡慶次	吉本一夫	山下彌三郎	八尋丹三
高橋秀雄	高橋太郎	山本茂	矢野豐
田中由幸	田原三千男	山本義一	牧田榮次郎
田中久雄	多田正昭	分玉武男	藤本武貴
田中繁一	田中庄太郎	福山貞三	古下貞藏
竹内千代松	竹房彌太郎	小林政一郎	近藤兵四郎
田中芳郎	辻直司	安藤隆正	青木周市
塚安治	中島喜平	酒井清一	崎谷廣介
並川桂	中川松雄	湯川策太郎	湯淺十三二
長野五郎	中西貞夫	三戸谷和久	道明榮次
中西佐吉	中林考次	篠原實	新正穗
中村勇	長田富一	清水健二	下野秀夫
中村貞藏	向井健一	廣瀨源三郎	平島末吉
村木正秀	宇賀一郎	森晃	角田忠
梅田秀雄	上野秀太郎		
能口彌太郎	野村安太郎		
山崎達夫	山内初雄		
山口正城	山本利雄		
矢代幸三郎	柳澤瞭		
松永恒五郎	增田邦二郎		
藤田研吾	福本敏夫		
小林茂	神戸七藏		
寺内達治	手賀徹		
赤岩四郎	齋藤佐太郎		
菊井伊三郎	北川菊次		
宮川菊造	三好鶴男		
宮崎正夫	宮田秀穗		
島吉角三	神門謹一郎		
椎原克巳	東田政治		
森本治一	森本文章		



インターナショナル建築の提唱者グロピウス氏

宣言と綱領の解說　（同會の解釋）

宣　言

1. 人類の生存に基礎を置いて建築の進路を根本的に解決せんとす。

問題は「人類の生存」といふところから出發する。人類生存の本體が何であるか。物質の集合であるか觀念の動きであるか。又は神の意志であるか。之等を探究する事は吾等の目的ではない。吾等の前に人類の生存といふ嚴然たる事實がある。本體が何であるかを究める前に事實は一つであることを認めねばならぬ。吾等は信念の基礎を玆に置くのであつて本體を究める事も亦吾等の探究の一つの領域であるかも知れぬが之等は決して終局の目的ではない。生存の本體を物質と考へても觀念と考へても、何れの考へよりするも求め得る解答は一つに歸すべきである。此の信念の前には一切のイズムは消滅する。鳥は巢を造る。彼等には科學もなければ哲學もなくまた宗教もない。けれども生に即した住居を持つ。吾人人類の巢が何であるかを求めるために吾等は全き努力を拂はんとする。科學も哲學も宗教も一切は此の目的のために何等かの役目を果すでならう。この意味において建築の進路を根本的に解決せんとするものである。

2. 人類の進展に伴ひ必然的に生るべき樣式を建設せんとす。

人類は進展する。——一切の現象は一刻も一處に止らない。必然的に生るべき樣式は刻々に變轉する。嚴密なる解釋に於ては樣式は不斷に變轉する。然しながらある期間を通じて大體に於て同じ狀態が持續すると見る事が出來る。これは歷史に徵しても明らかな事實であらう。吾等は此の一つの同じ樣な狀態を持續する間を目標として解答を求めんとするといふのである。

3. 日本に於ける問題の解決に基本を置いて世界各國の同志と提携して共同の目的に向つて進む

吾等日本人は日本の問題を除外しては一步も踏み出せない。吾等は日本に生れ日本に生長し日本に親しむ。日本に於ける問題の解決の鍵を握るものは、吾等日本人でなければならぬ。

世界各國に於ける建築思想の尖端は各の民族に向つての解決と人類としての共通性に對する解答を求むる事とこの二つの目的に向つて集中されてゐる。吾等は民族の一員として而も人類の一員として此の問題の解決に向つて全的の努力を拂はらねばならぬ。今世界の隅々に隣人の如く語り合ひ隣人の如く往來しつつある。戰爭も通商も友交もこの意味に含まる。吾等は今民族の差別が消滅する事を想像することが出來ない。然しながら日々に各民族の間が接近しつつある事は爭ふ餘地なき事實である。世界を流れる人類の共通性は次第に濃厚の度を增して行くと見る事は正しいと思はれる。吾等は此の流れに乘り此の源を尋ね、此の行先を求めて進まんとするものである。吾等の用ゆるインターナショナル建築といふ言葉はこの意味に於てのみ成り立つ。

綱　領

1. 樣式の建設には傳統的形式に據る事を排し狹義の國民性に固執せず眞正なる「ローカリティ」に根底を置く。

様式の建設——様式は自然に生るべくして建設すべきものではないといふ考へは正しい然しながら吾等は解答を求むるために努力せねばなぬ。建設といふ言葉はこの努力を意味する。傳統的形式に據る事を排し19世紀に於て最も盛んに行はれた過去の様式複製應用を否定する事を意味する。嚴正なる意味に於て人類の進展は傳統の線外に出づる事は出來ぬと云ひ得る。將來の進展は眞正なる意味に傳統共者の進展である。けれども形式の複製では決してない。フランスに於ける藝術様式の變遷の如きは最も端的にこの事實を示す好個の例である。

狹義の國民性に固執せず眞正なる「ローカリテイ」に根底を置く——國民性といふものにふり返る時吾人は狹義の國民性の解釋に誤らせられる事がある。吾等は遍狹なる見解を捨てて眞正なる民族的地色、特異性の上に立脚せねばならぬことはいふまでもない。

2. 研究及創作の範圍は建築を中心として人間の生活に關する總てを含む。

人間生活を圍む一切の範圍を包含する事を意味する。建築は吾等の研究の中心であるけれどもソレに附隨する一切の家具、工藝品等の總てをも亦研究の範圍に包含する事を得る。此の範圍を限りなく擴げる時此の生活様式の中に成立する繪畫や彫刻は何であるか服裝は何であるか食物は何であるか……およそ生活に關する一切は吾等の直接の研究領域を圍んで限りなく展開する。

3. は說明を要せず。

人々の言葉

* 建築は常に國民的であり、尙常に個人的であるが、然し個人、民族、人類の集成する圓の中では、最後の最大のものが、他の二つを取まいてしまふ。

かくして「インターナショナル」建築の標語が出來て來る、

1928年8月、ウオルター、グロピウス、 (Walter. Gropivs)

* 1923年には既に此大地は、全く新しい精神から生れた數多くの建築によつて覆はれた。オランダ人フランス人、ドイツ人、ベルギー人スウイス人、イタリー人、アメリカ人、も亦頑强に努力してゐる

1928年2月、アンドレ、リュルサ (Andre. Lurcat)

* インターナショナル建築とは、合理主義といふ言葉の上に世界の新建築型を作り上げることでは斷じてない。日本のローカリテイに立脚するといふ考へ方が基礎である、

1929年8月 伊藤正文

* 吾々は國際的計量の上に、我々の希望を實現する處に、精神的及物質的に、相互に提携し、支持しあふ事を聲明する。

1928年6月 スヰスザラーツ莊にて 第1回國際建築會議

* 吾々は日本建築の特殊性を、「國際的建築」に向つて取上げることをそれは日本建築を、現代建築の立場から見ることである、要求するものである。

1930年 香野雄吉

* 建築及建築部分は、その與へられたる課題がより科學的に設立され、それを事物的に解決するに從

つて、より國際的となるのである、　　── 同　上 ──

＊ 世界を流れる人類の共通性は次第に濃厚の度を増して行くと見る事は正しいと思はれる。吾等は此の流れに乗り、此の源を尋ね、此の行先を求めて進まうとする。吾等の用ふるインターナショナルと云ふ言葉は此意味に於てのみ成り立つ、

1929年8月　本　野　精　吾

＊ 文化のインターナショナライズしつつある現時に於て建築もまたインターナショナライズするは當然のことで論議するまでもない。

1930年　中　尾　　保　（早大建築講義錄）

＊ インターナショナル建築は單なる技巧や形體統一ではない從つて國々他方地方のローカリテイーによつてその形の上にも多少の差異を生ずるのは當然のことである。

1930年　中　尾　　保　（同年7月18日大阪毎日新聞）

＊ 現代の主要建築材料は鐵（Steel）とコンクリートとガラスであるがなほ將來は科學の進歩により如何なる材料が生れて來るか知れぬ、ジユラルミン等アルミニユームの合金を始め Steel や Bronz 等の合金其他、ゴム、フアイバー等が近時建築材料の中へ浸入して來たことは大に注目せなければならぬ。石や煉瓦の時代にはその構造は石、煉瓦のもつ機能の最大限度で考案されたもので、その形態もまたこれ等の材料から生れた眞實なものであつた。材料の變化否進歩發達によつてそこに生れる構造も自ら變化してくる。構造が變る、從つて、建築の形も變つて來るのが當然であり、そこに現代建築の眞實が存するわけである、過去の建築は過去においてのみ合理的であつたが、今日新材料をもつて過去樣式を模倣することは誤れる甚だしきものである。現代の材料の機能を發達せしめてこそ現代美を感受するものである。

しかして建築は徒らに材料の機能を弄んだのみでは意義をなさぬ。そこには勿論次の條件を考慮したものでなくてはならぬ。

1. 時代の思潮と社會の變化、
2. 科學の進歩に伴ふ廣義の生活樣式の變化
3. 社會經濟の狀況
4. 建築自體の機能即ち目的性
5. 材料の機能と構造
6. 土地のローカリテイ
7. 色調、

1932年　中　尾　　保　（毎日年鑑掲載の一部）

附　記

★「インターナショナル」建築の標語

日本では1927年7月2日、日本インターナショナル建築會の設立宣言が最初である。

ドイツでは1923年8月デツサウのバウハウスで、グロピウス氏主催の國際新建築展覽會といふ言葉を皮切りして、「インターナショナルと建築」といふ同氏の講演があつた。更に1925年バウハウスから「インターナショナル建築」といふ書帖を發行した。

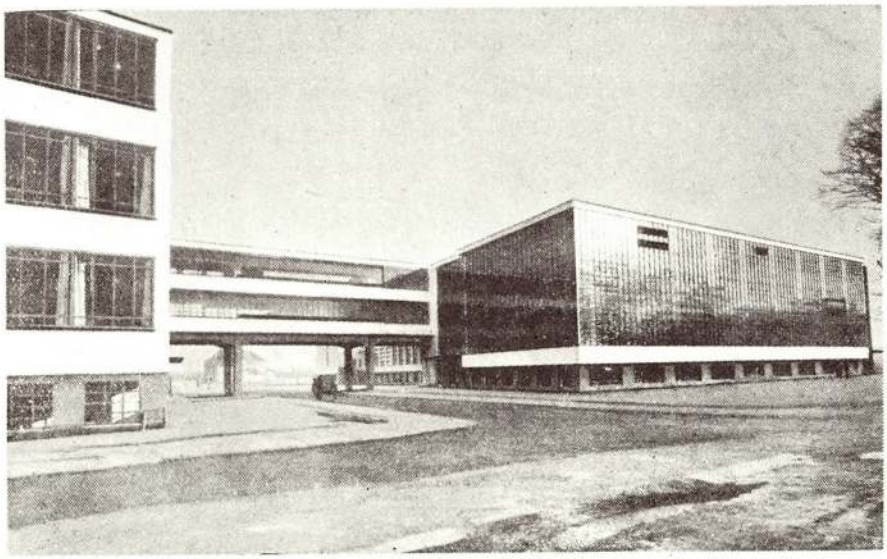
1927年「國際的新建築」と題する寫眞帖をヒルベルスアイメル氏が出した。

1928年6月スイスのザラーツ荘で「國際新建築會議」の第一回會合が催され宣言が出た。このイターナショナルには、普通の國際的といふ意味と世界化といふ意味と二つの意義を同一に使用したものである。

★　ムツソリーニとヒツトラー

建築の場合に於けるインターナショナルといふ言葉を、政治的特殊な意味を持つインターナショナルと間違へて日本でも馬鹿馬鹿しいナンセンスもあつたが、ドイツでもイタリーにでもそれがあつた。ドイツでは多少共産主義的分子がまぎれ込んだので一部の人から誤られ、バウハウスもそれがために終りをつげたが、これも認識不足の然らしめた結果である。その反對にイタリーでは、インターナショナル建築會の若き人々が展覽會を催したが、例によつてファツショの國にインターナショナルとはケシカランと抗議が出たので、若き建築家達はムツソリーニ首相を展覽會に招いて建築のインターナショナライズについてよく說明すると、ムツソ君手を打つて「よしわかつた、伊太利の建築はすべてこれに統一しやう」と出た。結局ヒツトラは馬鹿でムツソリーニはえらいといふ結論になつた。

★　日本ではインターナショナル建築のことを國際建築、日本國際式、或はただ近代式等ととなへてゐるがその中適當な名稱が生れてくるであらう。それまでは何とでもいふがよからう。インターナショル建築の日本に於ける解決がつけばそれでよい。その神髓に觸れぬ先に邪道へ外れて行かぬやうにしてほしいものだ。



バ ウ ハ ウ ス (1926)

その時代に就いて

日本インターナショナル建築會の時代的背景

新名種夫

日本インターナショナル建築會の發會より解散に至るまでの經過は、中尾保氏が詳しく書かれる筈であるから、茲には主として同會の活動した當時の、時代的背景に就いていさゝか述べて見度いと思ふ。

結成當時の日本インターナショナル建築會の指導精神の根幹が、明かに機能主義であつたことは、その宣言及綱領の示す通である。

同會の結成せられた1927年は、恰もシユツツトガルトの住宅博覽會の開催せられた年であり、建築に於ける機能主義の最高潮に達した時代であつた。ル・コルビジエ、ワ・グロピウス、ハ・ベルツイツヒ、ピ・オウト、ヴイ・ブールジヨア、ブ・タウト、ペ・ペーレンス等、非常に個性的な技巧の持主であり、嘗て夫々特徴のある作品の故に有名であつた、大陸建築界の巨頭連が、同住宅博覽會に於ては、完全にその個性的技巧を棄てて、一樣に機能主義の立場に於てその設計を行つたことが見られるのである。

その結果として、同博出品住宅の上に現はれた顯著な現象は、その何れも設計者の個性、國籍等を超えて、全く一樣に統一せられた風貌を備へてゐたといふ點であつた。

但、こうした外形上の統一は、過去の建築の諸樣式とは異り、固定した或形態の、建築に於ける外面的、方式的適用ではなくて、一方人類の生理生活の普遍性と、他方材料・構造の共通性とから、經濟と地方的諸條件との制限を受けながらも、生產方法進步の過程に從つて流動進展する、一定の統一せられた「形式的方向」と言つた方がいゝのかも知れない。

日本インターナショナル建築會の結成は、明かにこうした時代の背景に推されたものには相異ないが、シユツツトガルトの住宅博覽會その他國外に於ける新建築運動の、直接の刺戟に依つたものでは決してなかつた。

關東の大震火災後滿4年、その間分離派建築運動の後を承けて、建築構造の合理化が叫ばれながら、形の上では尙表現主義、構成主義等の傾向を脫し得なかつた建築界が、構造の合理化より更に一步進めて、建築の內容にまで合理主義を進展せしめる機運に向いて來た際であつた。言ひ換へれば、構造に無理を與へない爲に、却つて建築本來の機能の一部を犧牲にすることを以て、構造の合理化と呼んでゐた幼稚な構造學が、關東の大震火災の刺戟に依つて、建築の機能に從つて、自由に驅使され得る程度に漸く發達して來た時であつたとも言へる。

日本インターナショナル建築會は、寧ろこうした國內的機運の下に生れたものだと考へた方が至當であらう。

ワルター・グロピウスの有名な言葉——

「建築は常に國民的であり常に又個人的であるが、3個の同心圓——個人、民族、人類の中で、最後のそして最大なる圓が、他の2つを包括する。」

この言葉の掲げられた、バウハウス叢書中の「インターナショナル建築」の發刊が1925年であり、日本インターナショナル建築會の發會が1927年であるところから、凡ての思想的原因を外國に求めたがる日本人の常として、會の誕生はこの言葉の踏襲であり、その實際運動化であつたと考へられ勝であるが、それは誤であつて、前述の如く全く國內的機運から生れ出たものに外ならない。

但、當時建築の機能主義的傾向は世界的——少くとも大陸を蔽ふた傾向であつたことは會の趣旨に贊同した國外會員の中に、ホフマン、メンデルゾーン、タウト、ベーレンス、オウト、グロピウス、リユルサ、ノイトラ等の名前を擧げて見せるまでもなく、各國建築の實際が雄辯にこれを語つてゐた。

扨、かかる機運に推され、かゝる背景の下に生れ出たこの會であつたから、宣言、綱領（中尾氏の文章參照）に依つて明かなる如く、發會當時の態度が全く機能主義の上に立つて居たことは蓋し當然であらう。

國籍を異にし、人種の相異する各民族が凡て「人類」なる言葉で要約せられる限、人類の生存に基礎を置く建築も亦醫學と同樣、國際的に相通ずる結論に到達するものであり、唯各地の地方的特色（ローカリテイー）が、それに幾分の變化を與へるに過ぎないものであるとなした。

從つて、この場合、建築の問題を解決する基本條件は人間の生理的諸條件であり、健全な生活を營む爲に、外部の惡條件から生理的に人體を保護することを以て、建築の最初の、そして最大の目的であるとなした。

この外部の諸條件と人體との相關の狀態を比較的純粹に摘出し得るものは、「住む爲の機械である」所の住宅であるから、複雜多岐なる近代都市の建築の諸問題解決の鍵として、先づ住宅より出直すべしとなしたのである。

こうした傾向は建築に於ける機能主義の必然に向ふべき方向であり、日本インターナショナル建築會の進む方向であつたと同時に亦世界の同じ機能主義建築觀の進路でもあつた

1928年スイスで發會せられた國際新建築會議が、リユルサ、ベルラーヘ、マイヤア、ブルジョア、ジヤンヌレ、コルビジエ等の國際的顏振を以て、主として住居問題の檢討解決に最初のスタートを切つたことは、この意味で最も注目さるべき事柄であり、インターナショナル建築會のメムバーの主だつた人々がこれに參加したことも當然のこととして首肯されるのである。

だが玆に注意しなければならないことは、國際新建築會議が、住居の問題を解決するに當つて、人間とその生理的生活に影響を及ぼす外的諸條件との關係を取りあげたばかりではなく、人類の生活を社會と經濟とのファンクションとして把握することを强調した點であつた。

「――彼等は社會に行はれる機構の變化が、建築に於ても亦行はれるものであること、そして彼等の全精神生活を構成する組織概念の變化は、建築の構成概念にも關係を有つものであることを意識してゐる。故に、彼等は特に新材料、新構造及新生產方法に注意し、己が職務の範圍内に於て彼等の仕事を促進させる望みのあるあらゆる問題に留意するのは當然のこととなる。そこで、彼等は將來各自の國境を越えて、相互にその制作の上で支持し合ふ決心をしたのである」(今井兼次譯、國際新建築會議發會の際の宣言)

從つて、國際新建築會議が、住宅の問題を檢討するに當つて、重大なる1つの要素として取りあげたものは、建築實施の根本を左右する經濟問題であり、更に經濟を支配する社會的諸條件であつた。

インターナショナル建築會の宣言及綱領の中には、經濟に關しては何の具體的表現もない。唯宣言中の「人類の生存」、「人類の進展」等の言葉の中に、人間の經濟的社會的活動をも包括して考へれば考へられないこともないが、宣言に加へられた說明は、寧ろそうした經濟的活動の包括をも考へられない程度に、それ等のものに無關心である樣に見られ、發會當時の同會が、全く人間の個人的生理生活の、建築に於ける解決にのみ主要な目標を置いたものであることを示すものであるが、國際新建築會議との接觸と、それ以上に日本に於ける經濟問題、社會問題に對する一般の關心とが、同會の活動の上に大きな轉機を與へたことは否めない事實である。

宣言及綱領はそれに依つて變更せられなかつたが、その解釋は漸くより廣く人類の社會生活、經濟生活まで包括する樣になつた。

實際、住宅の問題を取扱ふに當つて、目的を人間の個人的生理生活を完全ならしめる爲だけに限定しても、そこに經濟的ファクターを取入れない限り建築的解決の決定案を求めることは出來ない。

人間の生活充足の程度を表すのに、「缺乏、不足、滿足、贅澤」の4つの段階に分ち得るとすればその何れを標準として案が立てらるべきであるか。經濟生活、社會生活を度外視して、單に個人的生理生活の完全を目標として設計がなされるとすれば「贅澤」なる住宅こそ、最高度のものとなるではないか。

「必要」と「充分」との關係も社會的經濟的條件を考慮しないでは答が出ないのである。

ビルディング、デパート、銀行、劇場等複雜な機能を有する建築は姑措き、簡單の爲に問題を住宅に限つて考ふるに、人間生活の幸福を目標として、住宅の問題を解決するのに2つの道が考へられる。

その１つは經濟組織の現狀に於て、限定せられた工費の範圍内で、如何なる設計に依れば、多數の人々によき住宅が與へられ得るかを純粋に技術的に研究することであり、今１つは、技術的可能性の現狀に於て、大多數の人々に快適なる住居を營ましめ得る經濟的條件を獲得するには如何なる方法があるかを考究することである。

1929年にフランクフルト・アム・マインに開かれた第二回の國際新建築會議が、「生活最小限度住宅」を議題として取扱ひ、翌年これが報告書として、歐洲の各都市に於ける最小限度住宅のプランを滿載したパンフレットを發行したこと、更に獨逸に於て、工費の節減、工期の短縮、住宅の工業的大量生産等を目標として「乾式構造」の提唱が行はれた事などは、第一の方法の具體的表はれであつたと考へられるが、當時我國に於ける社會運動に連座した人々の中に、建築志望者が可成含まれてゐたといふことは、それ等の人々が第一の技術的立場よりも、第二の社會的經濟的方面により多く關心を持ち過ぎた結果と見るべきであらう。

青年建築家聯盟がその一部に社會運動の色彩があるといふかどで彈壓を喰つたのもその頃であつた。

日本インターナショナル建築會もこうした時代の潮流の中にあつて、醫學的解剖學的な立場から、次第に建築に於ける經濟的社會的諸要素を認識しはじめたことは、會として大きな進歩ではあつたが、それは同時に、純粋に技術的な立場に於て、建築進展の完全な指導者となることの不可能を認識する所以でもあつた。

同會の解散はずつと後のことであつたが、解散の機運はこうした認識を持ちはじめた時既に醸成されてゐたと見るべきであらう。

否、會の形式的解散は、結局實際に行はれたわけではなかつたが、この新建築運動の最後の段階の左に口を開いた赤い深淵の前に、純粋技術者の立場に於てはたと行詰つたと言つた方が適當であるかも知れない。おつかなびつくりして退散したと、惡口するものがあつたとしても、これも或程度まで認めねばならないかも知れない。

だが、會の最後の會合の際に會員達の間で話されたことであつた。

——建築の問題の解決を、人類の生活の檢討の中に求めんとして、社會經濟の現狀の範圍に於て、科學的技術的可能の最高限度に建築を處理することが、建築の技術的進展の本筋であるといふことを、一般の常識となるまで認識せしめ得たことで、あの宣言と綱領との示す會の目的は充分達せられたものであると。

所で、まだ何か重要なものを置忘れた様な氣持が會員各自に殘つて居ながら、誰もそれを語らふとはしなかつた。

創宇社建築會の新建築運動

竹村新太郎

この小論は創宇社建築會の同人達の仕事に對する概觀であるが、それは當然日本の新建築運動の一環として現はれる可き性質をもつてゐる故に會に關聯する他の事情にも觸れてゐる。その點讀者の御了解を得たい。

またこの小論は在東京同人諸氏の閲は經てゐるが會同人としての私個人の觀察と記錄である事を申し添えて置く。

（一）

日本に於ける建築文化の爲めの啓蒙運動として創宇社建築會の活動を考へる時、それを日本に於ける或過渡時代に表はれた、即ちその時代の要求によつて誕生し、存在理由を失つて後退した運動として見る事は正しく無いであらう。またその様な觀點に立つて、創宇社建築會を回想し、歷史を語り度いとは思はない。

關東大震災の燒け跡から生れた創宇社建築會が展覽會及講演會の如き形式の團體活動を昭和五年十月以來行はなかつたといふ事情のみから創宇社建築會の提唱、活動が停止したと考へる事は早計である。

日本に於ける良心的なそして進歩的な青年建築家による建築文化の爲めの集團活動は同じく昭和五年十月に結成され、新興建築家聯盟の解散を以て建築ヂャーナリズムの表面から姿を消してゐる。そして日本建築文化の上にデカダン時代が到來したと見る事が出來るであらう。

その昭和五年以來今日既に七年を經過してゐる。今日の青年建築家のうちには創宇社建築會を知らない人も多いに違ひ無い。また多分にそれを正しく理解されて無いかも知れない。その點からでも創宇社同人はその過去に於ける足跡を自から精細に反省し、その主張を再檢せねばならないのであるけれ共、我々のひまの無い生活や文献の散逸は充分にそれ等の仕事に没入出來ないのである。從つてそれは後日に俟つより仕方無いであらう。

（二）

日本に於ける正當なる建築觀を把握する爲めに費やされた努力、それは分離派建築會の成立する僅か數年前に始まると思ふ。

明治維新以後日本に於ける建築は日本の從來の生産技術に機械的に西歐のそれを輸入したもの、特にその形式はクラシックの機械的模倣による藝術至上主義的なものであつた。

この事は日本に於ける、社會的な經濟的な事情から考へて、必然的な傾向であつたに違ひ無い。

日本の建築樣式が西歐古典式またはそれと日本從來の形式との機械的な結合等の原始的な素朴な藝術主義から脫却しやうとする建築家の第一の反抗は大正八年に行はれた帝國議事堂建築懸賞應募圖案に對する批判にその萠芽を見る事が出來る。それ等の萠芽は二十世紀初頭以來獨逸を中心に勃興したセセッション建築運動及ベルリン派の影響として行はれた。後藤慶二氏が此時代の進步的な指導的な足跡を殘されてゐる。若くして死んだ當時としては全く革命的意匠を殘されてゐる建築家岩本祿氏は分離派建築會の生みの親とも謂はれてゐる。野田俊彥氏がヂャーナリスト的活動をされて居る。これ等の人々の努力は封建的な建築樣式に對するよりリベラルな、そして自意識に立つ建築觀を持たうとする過渡時代に於ける先覺者の業績として讀えられる可きであらう。

大正九年秋東京帝國大國建築科學生の一群によつて分離派建築會が起された。分離派建築會は日本に於ける最初の建築文化の啓蒙團體であつた。封建的なアカデミズムの絆を斷つて、日本の若い建築界に最初に集團的な力を指示したその熱意と努力は、日本に於ける建築文化史上特記される可きものであらう。その主張はあく迄藝術至上主義的であつたけれ共集團の力をもつて混沌とした日本の建築界に新らしい血と勇氣を溢れしめる爲めにされた活動は、今日の日本の建築にどれ程の大きな役割をもつてゐるか測り知れないものである。

分離派建築會はオーストリアに於ける一九〇〇年來のオツトー、ワグナー一派のセセッション運動の革命的な建築活動を日本に於て繼承するものとして成立された樣に聞いてゐるが、然し當時世界大戰後に於ける日本の經濟的活動の活潑化、リベラリズム的產業資本の壓力によつて出現し、封建的追隨主義に對する反抗、歐洲に於ける世界大戰後澎湃として起つた表現主義を先導とする新藝術運動の影響として理解する事が正しいと思はれる。その宣言書は全く人道主義的なまた藝術至上主義的なものであつた。

（三）

分離派建築會の運動が日本に於ける建築的樣式の鐵鎖から近代社會のための自由な建築にまで解放するために叫ばれたと見る事が出來るならば創宇社建築會こそは日本の青年建築家が、建築家層としての社會層の認識を確信する迄にその多大の努力が費された、と觀られる可きであらう。

創宇社建築會は大正十二年十一月、關東大震災後のバラック建築も未だ完全に立並ばない東京銀座の十字堂樂器店二階で第一回展覽會を開いた。この木造二階建バラックは山中篤治氏の意匠に成るもので表現派風の垢抜けしたバラックで銀座に異彩を放つ建築であつた。この展覽會の作品目錄には次の樣な宣言文が揭載されてあつた。

我等は古代人の純情なる
創造の心を熱愛し、模倣てふ
不純なる風潮になき
永遠の母への憧れをもて
頽廢と陳腐とにたゞれたる
現建築界の覺醒を期す

×

我等は生の交響樂——全宇宙に
我等の生命、美しき「マッス」を
現出すべく專心努力する。

創宇社同人

展覽會場にはインキングされた圖面と共に石膏や油土或は粘土によつて作られた模型が陳列されてあつた。此時の同人は專徒榮記、廣木龜吉、小川光三、梅田穫、岡村蚊象の五人で、全部の人達が遞信省營繕課の製圖工若くは技手といつた二十歳から二十二歳位までの生氣潑溂たる青年建築家であつた。

此展覽會の作品では廣木龜吉君の劇場案が相當力作であつた。瀧澤眞弓氏が建築雜誌に好意的な批評を書かれ、廣木君の作品の模型や寫眞が揭載された。此展覽會に表はされたものは建築技術といふよりもむしろ造型藝術的な、眞摯な生一本な熱情、青年らしい反抗感と憧憬的な感覺の發散であつた。後年の飛躍的發展はこの愛すべき宣言文に讀へられた原始民族の素朴とデモクラチツクな精神のうちに、幼稚な技術的水準をもつて牢固たるアカデミズム、封建的な日本の建築樣式の現實に打ち當つて行かうとする勇氣と氣魄のうちに感じられたのであつた。

大正13年4月には上野公園美術館に於て國民美術協會主催の帝都復興創案展覽會が開かれた。この展覽會は造型藝術の綜合展覽會であつたが建築としては分離派建築會、創宇社建築會、ラトー建築會、メテオール建築會等の諸團體が參加した。丁度歐洲から歸朝して間も無い村山知義氏が造型團體マヴオの一員としての洗練された構成派作品を出品してあつたのが記憶にある。

大正14年7月銀座資生堂美術部（當時假建築）で第3回創宇社展覽會が開かれた。此展覽會には其頃東京美術學校の學生であつた山口榮一君が加はつた。出品された作品には表現派風の影響の未だ抜け切れないデザイン、構成派や立體派の造型物の影響が濃厚に表はれ初めてゐる。氏の展覽會に集中された努力はフオルムに對する追求の專念と見る事が出來る。雜誌「建築新潮」第6年9月號には岡村蚊象氏（山口蚊象氏舊姓——以下山口と記す）の「第三回創宇社展と吾々の態度」中にも未だ明確な建築觀は顔を出して居ない。この展覽會は陳腐なる、アカデミツクな建築——それに對する建築家のイージーな態度、そうい

ポスター（I） 山口蚊象氏作



創宇社 第3回
建築制作展覽會目錄
1925年7月17日より7月21日まで
銀座 資生堂美術部にて
夜10時まで

1. 無題（模型） 山口榮一

• • •

2. 劇場試作 （圖と模型）
3. 住 宅 （圖）
4. 山の中に建つ「アトリエ」 （〃）
5. 公設浴場 （〃）
6. 公園に於ける賣店 （〃） 廣木龜吉

• • •

7. 會 館 （圖と模型）
8. 十坪の住宅 （〃）
9. M氏の住宅案 （〃）
10. 住宅としての「コンポジション」 （模型）
11. 時 計 臺 （油繪）
12. 「レリーフ」の下繪 （〃）
13. 同 （單彩）
14. 住宅のスケッチ 小川光三

• • •

15. 國境に建つ記念塔 （模型と寫眞）
16. 鑄物工場試作（圖と模型）
17. コンポジション （模型）
18. 薄肉彫塑
「コンポジション」其の 1
〃 其の 2
〃 其の 3
〃 其の 4
〃 其の 5
19. 「カフエーエイラク」に於ける壁の草案 （寫眞） 梅田 穫

• • •

20. 商店の設計 （圖と模型）
21. 音 樂 堂 （模型）
22. 住 宅其の1 （〃）
23. 同 其の2 （〃）
24. 橋の柱燈 （〃）
25. 「コンクリート」橋の設計 （〃）
26. 建 築 エルンスト・トルレル作 （〃）
27. 戲曲獨逸男「ヒンケマン」 （〃） 舞臺裝置 岡村蚊象

•• 創宇社
淺草・田町一ノ十一・（岡村宅）

ふものに對するデモンストレーションとしての展覽會と見らるる可きであらう。此展覽會には小川光三君が「住宅のコンポジション」としてプランの無い立體である造型物を出品し、梅田穫君は石膏を以て純然たる立體派風のレリーフを並べた。山口氏の出品した當時問題に成つたトルレルの戲曲「ヒンケマン」の舞臺裝置模型は此時代の新舞臺裝置運動に相當のショックを與へた此展覽會に於ける造型的な進歩は、當時の分離派建築會の作品等に見られない様な動力學的な形成の取扱ひが出陳されたモデルのうちに表はれて來た事である。山口氏の抽象的な立體構成物「建築」に於てそれは顯著であつた。尚此展覽會には後年よく言はれる創宇社らしい作品のテーマの萌芽が表はれてゐる。公衆浴場とか鑄物工場とかに。これらの事情のうちにも此會の同人達の生活的立場が反影してゐるのを見る事が出來る。

大正15年10月には日本橋白木屋の假建築二階で第四回展が開かれた。此時は新しい同人として野口巖君、渡苅雄君、古川末雄君、竹村の4人が作品を出品した。全出品作品29のうち13はプランの示されて無い抽象的な立體造型物であつた。此展覽會に於て多少とも社會的關心が作品に示されたものとして渡苅雄及小川光三君の「高層建築」に對する提案及私の「監獄草案」がある。これ等は建築形態に對する新提唱から更

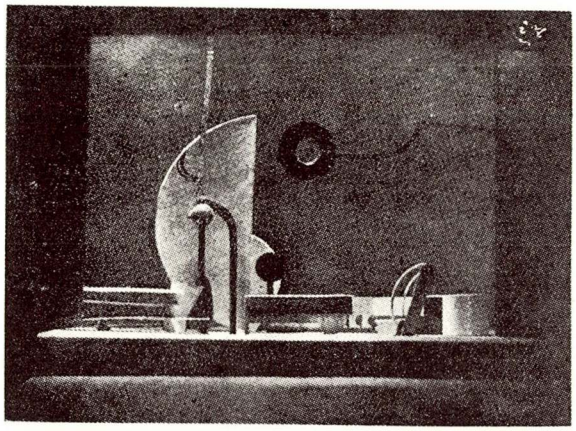


圖 1・第二幕第四場

（勞働者の小料理店內部・酒場）

エルンスト・トルラー作

「獨逸男ヒンケマン」舞臺裝置

岡村蛟象氏作

（創宇第3回展覽會出品）

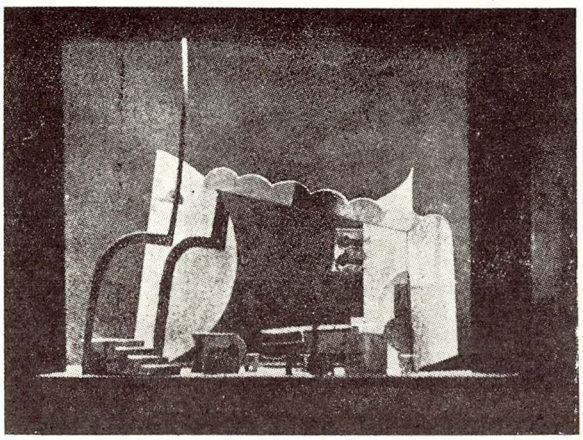


圖 1

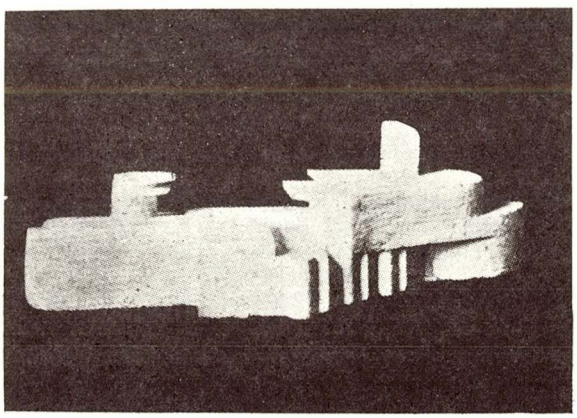


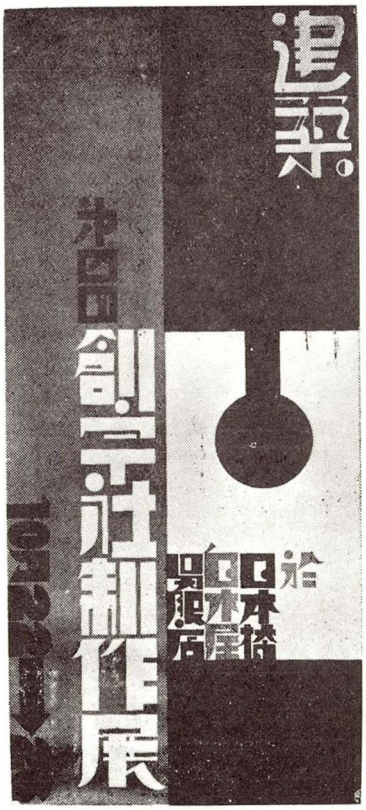
圖 2

圖3・鑄物工場

梅田穰氏作

（創宇社第3回展覽會出品）





ポスター (2)　山口榮一氏作

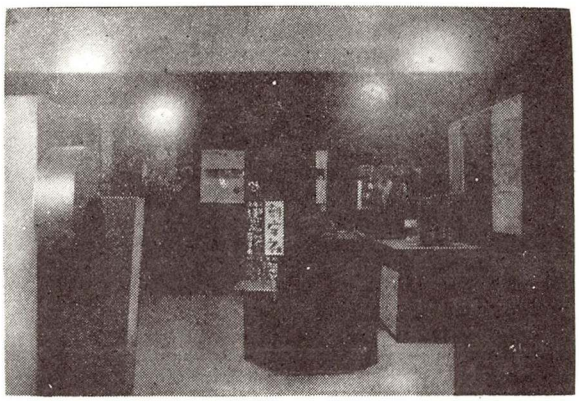


圖　4

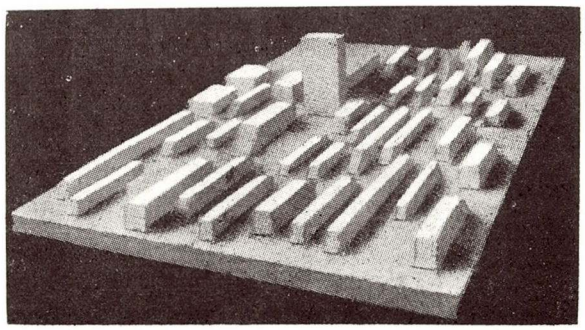


圖 5・**監　獄**　竹村新太郎

圖 6・**高層建築成構**
渡　邦雄氏
(創宇社第 4 回展覽會)

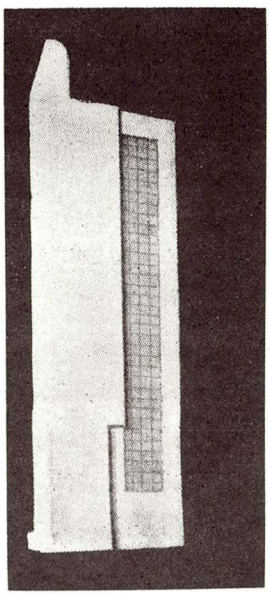
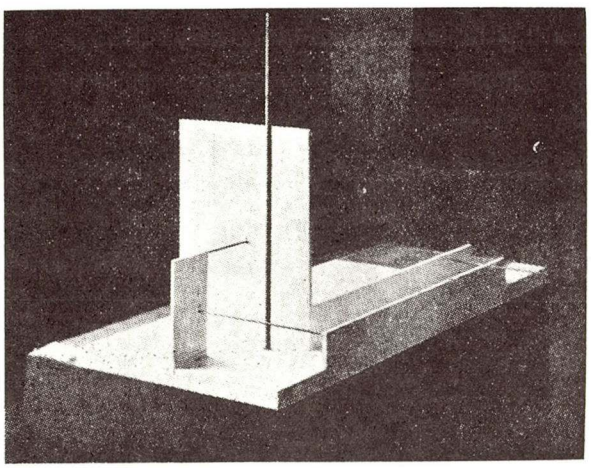


圖 7・**線と面**　岡村蛟象氏
(創宇社第 4 回展覽會)



に建築計劃自體をもつとゾチアリシユな觀點からしようといふ考へ方に近附いて來たものと見る事が出來る。それは極く素朴なものであり、ロマンチツクな、寧ろ唯心的でさえあつたけれども。山口氏は「面と線」或ひは「建築形態の究極」等のテーマのもとに極めて哲學的な立體を出陳した。これらの作品は日本に於ける構成主義的造型の歷史的な作品と見做され得るであらうし、同時に建築形態學の抽象的研究の高度のものとして記念さる可きである。

此展覽會後雜誌「建築世界」に揭載された小瀧文七氏等の創宇社評は當時の或種建築家若くは多分に今日でも多數存在しそうな層の見方として紹介の價値があるやうだ。

その批評は次の様な會話體に成つてゐる。

「創宇社とは如何だい自棄に大きな名前を附けたぢやないか、宇宙を創る社と謂ふ意味なのかい」

「宇宙を創る建築家の團體と謂ふ神様の向ふを張つたような建築家の展覽會だとすると馬鹿に貧弱ぢやないか」

「可笑しいぢやないか實際氣の利いた幽靈なら引込む時分だぜ、それを白晝公然とさ茶椀を建築として扱ふなんて古くさい事を言ふからさ、そもそも茶椀を建築として取扱ふなんて事は建築學の第一章ぢやないか」

「そうさ、だが建築とは何ぞやの問題を擔ぎ廻つて結局（建築とは譯のわからぬムヅカシイ學問である）と納まる連中より茶椀は建築であると自覺した創宇社の方が遙かに偉い」

「あの造型的な面白味を拔いたら何の價値もないコンポジションの研究は建築の研究としてどれだけの價値があるのだらう」

「僕は建築の存在の第一義は實用だと思ふねだから實用を無視した形態なんてものは建築の研究として可成無意味なもんだと思ふ」

「非實用的な形態、所謂造型その組合せによるコンポジションの研究に非常な期待を以て接してゐる建築家があるけれどその結果から言つたら可成り無駄な努力を費した事に氣が附く時が來るだらうと思ふ」

「いくら人間がシヤッチヨコ立つたつて自然にはかなわないよ、人間のやる造型的意義なんて赤ん坊の積木遊びさ」

「幼稚園の自由講さ、あゝした造型的習作をやつてゐるより偉大な建築家蜘蛛先生のお弟子入りでもした方が氣が利いてゐる」

「砥石のお化け見たいなのがあつたぢやないか」

「あゝ竹村氏の監獄草案か」

「それに就て作者はかう言つたぜ（今までの監獄は犯罪人を單なる罪人として扱つてゐたけれど自分は犯罪者を社會的に一つの病人として考へる、だからこれから出來る監獄は一種の病院として建てなきやならないと思ふ此んな考へでやつた）と言ふんだ、如何いふ

風に考へやうと自由だけれど建築家であるといふ理由で態んな事まで考へなくてはならぬといふ說は成り立たない」

「寧ろ刑法學者が精神病學者の領分ぢやないのか」

「要は依賴者の意志にあるのだ」

「極くおほざつぱに言ふと同人の態度がまとまつてゐない事、あるものは實用を無視して形態にばかり走りある者は形態を第二義に置いて實用方面のみを考慮に置いたのがある。前者の例は數多くあるコンポジションの研究であり、後者の例では監獄の作者を擧げられると思ふ」

所々カットしたが以上の様なものであつた。

この批評自身の擔當した歷史的意義のために引用する意義を讀者は了解されると思ふ。

建築家の造型的研究の意義に就て如何なる評價が與へられる可きかは簡單に斷定出來無いにしても、その意義を抹殺する事は不可能であらう。

創宇社建築會の同人達が專念した此當時の造型的究明に就ては1925年(大正15年)デッソウの新校舍にうつりその第二期の活動を開始したバウハウスの建築、造型の運動を考へない譯に行かない。

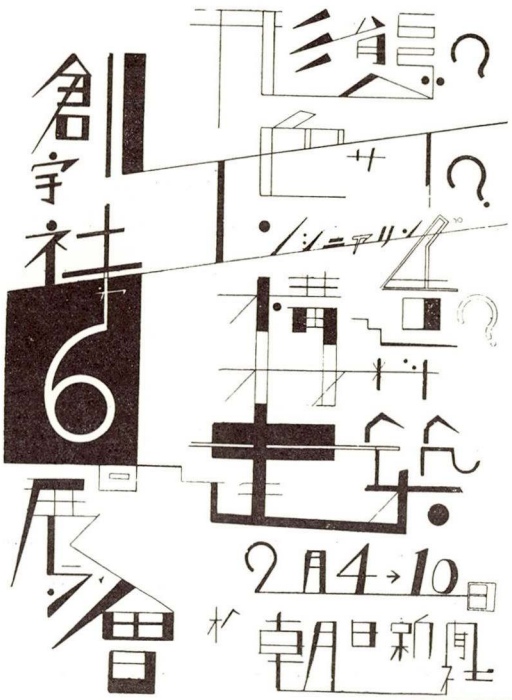
この頃分離派建築會の堀口氏が創宇社は形態の勉强に過ぎはしないかと評されたと聞いたとの事も聞いた事があつた(分離派の諸氏に同人達は個人によく教へられた)

ワルター・グロピウスの「國際建築」の提唱は未だ我國に紹介されたばかりであつたし彼の組立住居も、未だ一般的理解にまで到らなかつたし、今日の新建築を定義付けたル・コルブジエの建築觀も日本では未だよく理解されてゐなかつた。建築に對する科學的考察法は未だ建築家層に浸潤してゐなかつた當時新時代の精神が形態を通じて發展して行くといふ事自體必然的傾向と見る事が出來やう。此年の1月には分離派建築會は第五回展覽會を白木屋に於て開催、創宇社から三人後に創宇社同人に成つた平松義彦君を入れて四人が入選作品として陳列された。分離派會員の作品はその約半數が實施された建築寫眞であつて、創宇社展に於ける如き小市民的な元氣な反抗精神や主張は表はれなかつた。これは一面に於て會そのものゝアカデミズムへの接近を語るものの様でもあつた。

(四)

昭和2年の12月創宇社第五回展は東京朝日新聞社五階で「無選共同建築展覽會」と銘うつて行はれた。

河裾逸美君が同人として出品した。此展覽會に於ける出品作品のうち17點は會員外の作品であつた、そしてそのうちの四分の一はマヴォ流の造型物であつた。これ等の出品者たる長髮族達は展覽會場まで來る處の路上に於て拾ひ集めた木片や物片を持つて會場に來りそれを組立てゝは物々しい題名を附けたりする。凡そ非建築なアナーキズム的なものであ



ポスター (3)　竹村新太郎作

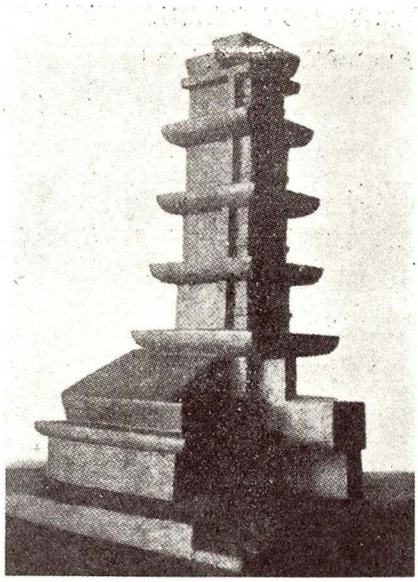


圖 11・**供養塔**（共同墓地計畫の一部）
小川光三氏

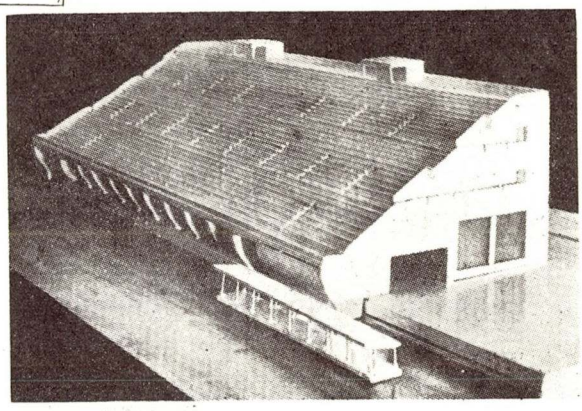
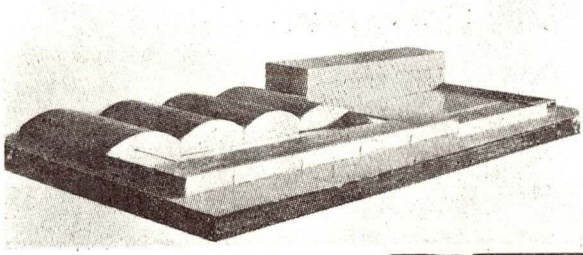


圖 8・**ボートレーススタンド**
廣木龜吉氏

圖 9・**撮影所**　河裾逸美氏



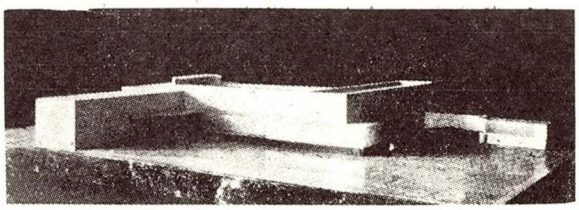


圖 12・**醫學研究所**　古川末雄氏

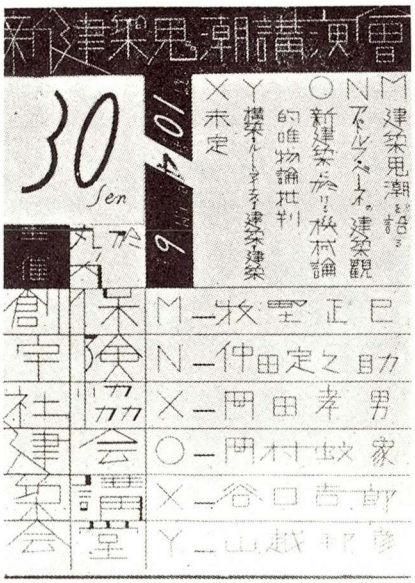


圖 13・創宇社建築會主催・新建築思潮講演會ポスター竹村新太郎作

つた。同人の作品は38點にも及び純然たるコンポジションと題されるものは僅か3點に減少した。(プランの示されないもの二三點あつたが。醫學研究所(古川君)とか共同倉庫(野口君)とかいつたテーマが現はれた、一方には齋場試案(小川君)の如き所謂今日の「日本趣味」の片鱗を見る作品も現はれて來た。勞働會館案(梅田君)が出品されて當時漸く左翼的傾向を帶びた建築批評家の關心を高めたりした。

此展覽會より僅か2月程の間を置いて昭和3年2月に再び第六回創宇社展が東京朝日新聞社の五階で開かれた。此展覽會では所謂コンポジションは益々その數を減じて二つになつてしまつた。作品はより計畫的な準備が充分にされる様に成り空想的な傾向から具體的なテーマへと移行したことに同人達の努力と進歩が覗はれるであらう。展覽會の觀者に明確な理解を與へるためにプログラムには說明的な解說が刷込まれた。建築の作品展覽會が他の造型藝術展覽會のやうに、感覺的にのみ觀察される可きで無いとの觀點からされた此の試みは建築作品展覽會の形式の特色をより一層明確にしたものと見る事が出來る。

この解說には廣木君のボートレーススタンド案に對する建築地の具體的な位置の豫想、小川君、野口君の各作品に對するそのイデーの表明、私の作品に對する建築の色彩觀、渡苅君の集合住宅案に對する簡略に述べられたアパート建築論、その計劃に對する數的な說明、山口榮一君、梅田君の作品のテーマに對する考察法等々が揭載された。それ等は今日、極く幼稚なものと見られるであらうけれ共、それ等からは此頃青年建築家が如何に考へ、何を求めてゐるかを覗ふ事が充分に出來ると思ふ。美術學校建築科の學生であつた海老原君、廣瀨君が「勞働者アパートメント」の大作を出品した。

此年の7月創宇社は第1回新建築思潮講演會を、東京丸ノ內保險協會講堂に開催した。會場は狹かつたけれども約500人程の聽衆に充されて立錐の豫地も無い有樣であつた。造型藝術や建築に對して永くその啓蒙に盡して居られた仲田定之助氏が「アドルフ・ベーネの建築觀」に就て質朴な調子でその薀蓄を話されて、仲田氏の講演は近頃建築デヤナリーズムの上を、一見建築地理の樣相を以てその輕薄な觀察たるを忘れ横行濶步する學校教授美術批評家の類ひとその建築批評家としての堅實な態度を比較されるものがある。岡田孝男氏が「建築標準化の問題」谷口吉郎氏が「建築は口ではない」山口蚊象氏が「合理主義反省の要望」等の講演をされた。此講演會にはこの外牧野正巳氏と山越邦彥氏が講演され

る豫定であつたが各自の都合の爲め缺席されたのであつた。

此當時日本は第三次經濟恐慌の後を受けて勞働運動が漸く旺んとなり勞働組合の運動は活潑と成り一方三・一五事件を初めとするそれ等に對する彈壓等の事情で騷然たるものがあつた。それらの社會事情は青年建築家層にも多くの影響を與へ無いでは置か無かつた。各大學其他のデプロマには勞働會館案とか勞働者アパートメントの數が多く提出されるやうに成り、この事は更に抽象的なる計畫、空想的計畫案の提案といふ結果を齎す事に成り、それ等は現實との游離から現實的理解や行動を却つて疎實するといふ如き結果を伴ふ傾向にあり、「合理主義反省の要望」なる講演はそれ等に對する警告の様なものでは無かつたのかと記憶する。

同じ年の十二月には再び東京朝日新聞社でポスター第7回展が開催された。出品作品は數的には減少して20點と成り、充分準備的な研究の後に計劃された平面圖が陳列され、以前の様なコンポジションは唯一點も會場に見出され無くなつた。消費組合食堂（海老原君）とか女子職業學校(廣瀨君)、またギャング事件で有名に成つた今泉善一君が印刷工場を、福中駒吉君が貸工場の案を出品した。これ等の人々には同人に加はつてゐなかつたが同人以上に立派な作品を出品した。

河裾君の連續住宅には自然換氣に對する特殊なる考案が說明され、野口君は勞働保健館、渡苅君は公衆食堂を持てる宿泊所を、出陣した。此展覽會にはエミール・ファーレンカムプの圖面が陳列された。

（五）

昭和5年、この年は日本に於ける進步的な最も優秀な建築家達によつて「新興建築家聯盟」が成立しそして忽ち解散した年である。

分離派建築會は昭和3年9月日本橋三越に於ける第7回展開催を最後にその展覽會活動を停止した。

創宇社建築會の同人は13人に成り、この年の10月にはウクライナ國立劇場の懸賞應募圖案を共同勞作によつて作製した。これは落選したがこの制作を完成する爲めに同人達は協力して銀座裏の貸事務所を借り、勤務の歸路には其處に集つて夜遲く迄仕事した。仕事の餘暇にはエスペラントを學んだりした。此頃の進步的な建築家層にエスペラント研究熱の盛んであつた事は一部讀者の記憶されるところであろう。

10月に再び東京朝日新聞の5階で第8回展覽會が開催された。その會期中に第2回新建築思潮講演會が行はれた。

展覽會にはヌルブジエの事務所から歸朝されて間も無い前川國男氏、ウクライナ劇場懸賞に當選された川喜田煉七郎氏、谷口吉郎氏等が出品された。また山本勝巳君、平松義彥君、今泉善一君、道明榮次君等も出品してゐる。



ポスター (4) 野口氏作

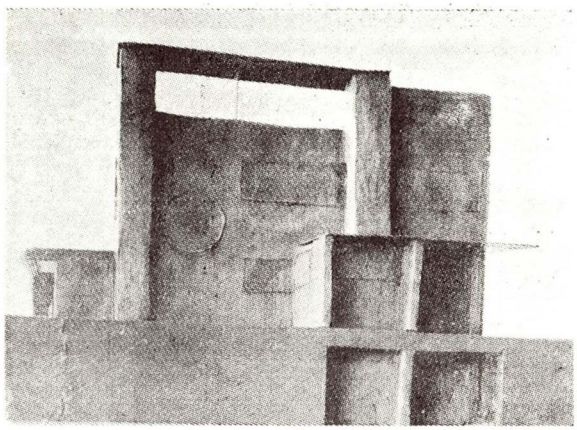


圖 16・住宅 野口巖氏

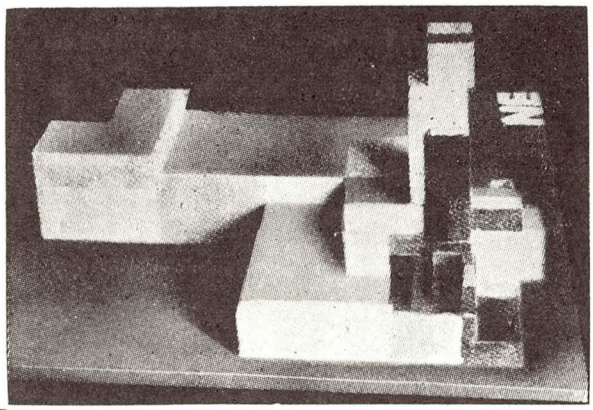


圖 17・山口榮一氏

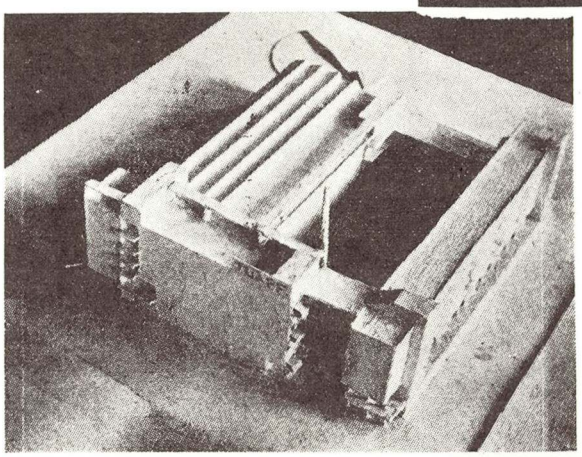


圖 18・貸工場 福中氏

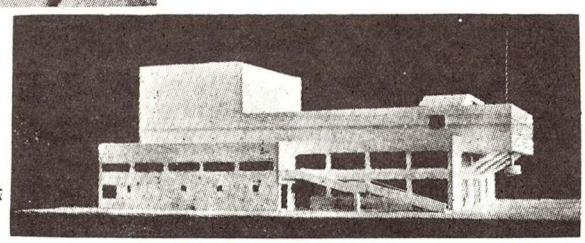
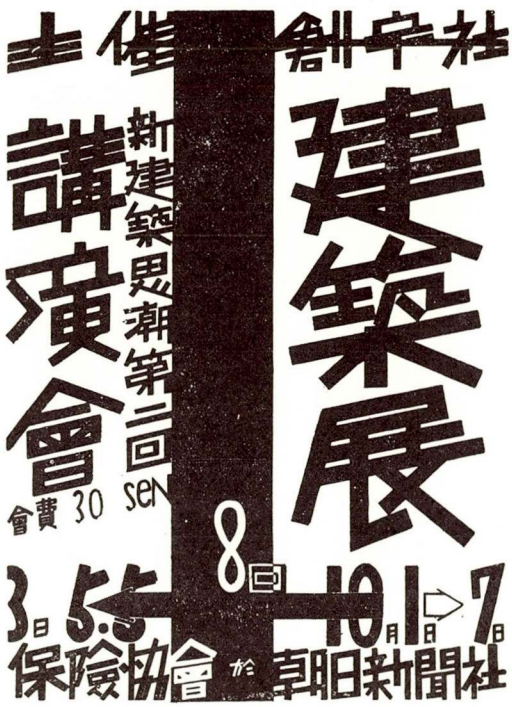


圖 19・劇場 海老原氏

此展覽會の作品には各同人の飛躍的進歩各自に一定の建築觀の把握等が明確に示されてゐる。且つて無かつた嚴密な科學的な態度をもつて、そのテーマに對する精密な分析と組立による計劃を行はうとする態度が感じられた。作品に表はれたその科學性に對しては今日尙ほ素朴且つロマンチツクな殘滓の多くを持つてゐたとしても、建築に於ける、斯様な科學的な態度とは特記さる可きものであらう。

此展覽會に對して多數の進歩的な建築家が冷靜な、そして單に創宇社展評に止らず當時の建築運動の動向を暗示すべき幾多の考察を含むと思はれる批判をされてゐる故にこゝに引用する事徒勞ではあるまい。



ポスター（5） 河　　潤 氏作

間も無く廢刊に成つたが此當時最も進歩的でまた建築學的にも高い水準をもつてゐた「建築時潮」に多分山越邦彦氏であらうと思はれる創宇社展評が掲載された。

それは次の様なものであつた。

「建築の展覽會は繪畫彫刻と違つて個々の作品を樂しむ以外にその展覽會によつて何か宣傳し、啓蒙しやうとする。で創宇社の展覽會の如きは今では非常に損な立場にある。何となれば宣傳しやうとし又啓蒙しやうとする對象を一體何處に求めるか。分離派の展覽會の非常に展覽會を有效に使用したのは氏の宣傳し啓蒙しやうとした對象が專門家の建築家であつた爲めだつた、所が今では創宇社展の大多數の發表して居る所は殆んど專門家達に興味のないものとなつて若し此の展覽會を存續する意志があるとすれば其の對象を專門家以外の大衆に向けなければならないと思ふ」

「次に從來は此展覽會では造型と平面計劃が主として研究されたのに今年は非常にザツハリツヒカイトに觸れてゐることが目に見えて來たことだ」

「未だ造型に興味を持つ方が見受けられる。中にはその造型の爲めに却つて逆と思はれる形式を發表して居た人がある。此の作品などはもつとザツハリツヒに考へること、經濟性を考へることによつて客觀性ある建築の設計が出來るやうになると思ふ」等

石原憲治氏は「國際建築」創宇社展覽會號に次の様な批判を寄せられた。

「本來建築はその發生の當初に於て已に一個の社會的技術であり社會生活の形態組織の

役割を果して來たのであつた」

「新興建築は氏の社會學的任務を分擔する新らしき社會技術でなくてはならないのだ」

「創宇社展は此の意味に於て最も明確に建築の社會的任務を、その階級的意識に迄把握せんとしつゝある事によつて在來のアカデミツクなボーサール的な展覽會を清算した氏の功德は記錄的である。そして展覽會自體が一團となつて社會に主張と問題とを投げかけたのだ」

創宇社8回展評は雜誌「建築世界」「建築畫報」「建築時潮」「アトリエ」「國際建築」等に掲載されたがそのうち決定的な意義を認められるのは「國際建築」に掲載された早大講師白鳥養三郎氏による批判及創宇社同人某君が執筆した「創宇社の躍進」であらう。

白鳥氏は其頃日本の建築界での進歩的な都市研究家であり、第2回講演會にもその透徹した研究をもつて講演されたのであつた。

次の引用は山越氏の評と重複する様な感もあるが前後說明の必要上掲げ度いと思ふ。

「で一體かういふ建築の制作展覽會といふものが、何時頃から初まつたのかは知らない。が今から一昔も前に分離派の方々に開かれたのが一番大きな反響を呼び起してはゐなかつたかしら？建築が藝術であるとの明確な旗幟の下に樣式打破を目標にまつしぐらに突進して行かれた時の展覽會は誠に華々しくそして又啓蒙的な効果も充分にもつてゐたものだ。若いインテリ層がそれを通して無條件に其の主張に引きつけられて我勝ちにとその下風に立つたものだ。もつとその華々しい展覽會を中心として呼び起された建築界のストルムウンドランクの內にあり乍らも冷然として唯物的な見解を固持してゐた故野田俊彥氏の如きもあつたし……」

「歐洲大戰に依つて急激な發展をみた我國の資本家的社會にそうした小市民的な藝術主義的建築理論の發生する事そして又其の藝術主義が資本家社會に於ては個人主義的な樣式打破に進むべき事は明かな事であり從つてそうした運動が外國の運動によつて刺戟され激發されたものであつたところで何等無意味なものではなかつたのだ、と同時其の藝術主義主張の下に立つ新建築家にとつてはその實踐の第一步を制作展覽會より步み出すべき事ももとより當然なことであり……」

「一體が建築に於ける藝術主義なるものは建築に於ける小市民的觀念形態その物の發露であつて、從つて資本家的社會の沒落期に當つては到底永くその存續を續ける事の出來ないものであるが其れより早く制作展覽會は沒落せざるを得ないのである。」

「言ふ迄もなく藝術主義的理論の一般的に普及せる今日に於ては形態上の面白さは最早展覽會をまつ迄もなく看取し得る事であり展覽會は到底其の初期に於ける如き吸引力を絶えずもち續け得ないからである。從つて建築の展覽會が相變らず形態上の興味を主眼として開かれるといふのであれば寧ろニュースバリューに富んだ懸賞競技の應募計畫を並べたり或は現實的な計畫を並べる建築學會あたりの展覽會の方が現在遙かに興味をもたれてゐ

るのも無理ならぬ事柄である。」

「それなら何故上記の三つの（白鳥氏は創宇社、ＡＳ會、日本インターナショナルを擧げて居られる）建築會が藝術主義のストルムウントドランクをすぎ去つてしまつた現在尙存續してゐるのかといふとそれは建築に對する根本的見解が藝術主義と思想上全く別個のものと成長してしまつてゐるから或ひは成長せんと努力してゐるからである。同人の團結がその違つた目的の要求にかゝつてゐるからである。」

「がとにかく新らしい方向に進まんとしてゐる事だけは確かである。今問題にしてゐる創宇社についてみてもその事は明瞭である。今回の展覽會の目錄をみると同人の創作には夫々の根據を簡略に記してゐるが、その內には藝術の片鱗すらも發見出來ないであらう。」

「問題の提起、解決の方法の是非についてはしばらくおくも、これに依つても明かに同人達が意識的に努力せんとしてゐるものが少くも建築に於けるリアリズムである事は窺ひ知る事が出來るであらう。」

「が、果して然りとすれば創宇社展覽會の形式は第一にその建築に對する同人の努力と適合せるものであらうか、否一二の例外とも見なすべきものを除いては其處には在來の製作展覽會の殘滓を十二分に有してゐる。」

等々、作品として正しく言へばそれはテーマの提出法、取扱方に就て山口氏の「紡績工場の女工寄宿舍の提案」及海老原君の住宅作品に贊意が表されてあつた。

同誌に揭載された同人某君の小論「創宇社の躍進」は創宇社同人としての初めて表明された自己反省でもあり、生硬なものではあるが、當時の進步的な靑年建築家のイデオロギーを反映するものとも見られる故に一部轉載して見たいと思ふ。

「過去に於て7回の展覽會を持ち內面的にも外面的にも著しい進展振りを示した創宇社が今回の第8回展を楔機として果して何れの方向に今後其の舵を採らんとするのか？この問題は凡そ新興建築に關心を持つ總ての人々が深く考察して見なければならない建築實踐の軌道でもあらう。」

「一體創宇社がその運動の中心として來た所の主張とは何であつたらうか？創宇社に之が創宇社の主張であると確信を持つて斷言し得る主張があつたか？自分は端的に言ふならばむしろ無かつたと言ひたい。」

「或は曰ふかも知れない。——合理主義と——然し乍ら機械的に奉じられた合理主義とは結局のところ無意味である。」

「自分は正直に且つ明確に創宇社にハツキリした主張の無かつた事を認める。」

「初期の表現派的な作品から所謂構成派的な作品に到る迄と、それから遁れ出んとする最近二、三年の必死の努力。その間自から主張すべき新建築理論とは何の關係もない。否むしろ反對である作品を製作してゐたのである。」

「今回の展覽會を見た人々は其處に一見して諸の作品だか判らない同じ様な作品が陳んでゐるのを見たであらう。これは建築から個人の趣味、特殊技術、洗練性等を除去して建築をして純粋の科學的なものに迄高揚したものと感得しなければならない。」

「然し乍ら若しも創宇社の運動が新建築の理論と技術の獲得と宣傳にあるならば今回の展覽會を以てその運動は内面的に一應終りを告げたものと言はねばならない。」

「質的な變化のない限り我々は現在以上に大した進展を期待し得ないではないか、だが最早や今日の時代はいつ迄も新建築の啓蒙時代であることを許さない。現代に於て單なる新建築紹介運動は既にその存在理由を完全に失つてゐる。創宇社が一歩前進しなければならない理由は此處にあるのだ。」

これ等の觀點に立つての新興建築家の實踐行動とは如何なる事か？それに對して

「一は創宇社の岡村蚊象氏の今回提唱せる階級闘爭に於ける無產者側の要求に應じてその要求の建築の範圍に於ける技術者としての暴露とその改善要求への裏書き。」

「二は新興建築家なるもの自身の生活の改善の問題である。即ち勞働者化する現狀とそうならざるを得ない現狀の生產組織を明確に把むならば、我々は之に抗する爲の强固な組織を持たなければならない事を認めるであらう。新興建築家の組織並に强化への活動が之である。」

と答へてゐる。

第2回講演會はそれから間もなく渡歐する山口蚊象氏の送別會の意味で催されたのであるが、この講演會こそこの年以來日本に於て悉く後退した日本の建築文化運動の華かな終幕となつたのであつた。

この講演會には「新興建築家の實踐とは」山口蚊象氏、「3+3+3=3×3」前川國男氏、「ア、クライン氏の住宅平面の考察」川喜田煉七郎氏、「ギリシャの建築家」瀧澤眞弓氏、「都市形態と都市計畫」白鳥養三郎氏等の演題のもとにその獨自の建築觀を披瀝されたのであつた。私はこの時の瀧澤氏の深い學識と熱情的な講演を今日でも忘れる事が出來ない。

山口氏の「新興建築家の實踐とは」に盛られたテーマによつて此時代の新建築團體創宇社が如何なる道を辿りどんな點にまで到達したかを知る事が出來る。建築家とは青寫眞とスケールを持つた泥人形でもなし、製圖するロボットでも無い。それは生命を持つた人間である。社會的一單位であり、石原氏も言はれた様に新社會を建設すべき技術家である。も早や建築家は註文主から仕事を與へられて作圖するのみの存在といふ說明では不足に成て來た。

自然科學的研究が現實から游離して成立たぬ様に建築の仕事も現實を無視して考へる事は出來なく成つた。それは「ブルノー、タウトのアルペンアーキテクト」の夢として崩壞する。創宇社の初期の作品がそうであつた様に。凡ての問題、特に技術はも早その社會的制約、社會的關聯性無しに考察する事は不可能に成つた、この事は今日では一般的常識で

あらう。

創宇社八回展に際して同人達の表明したその劃期的なイデーは以上の問題であらう。即ち建築家が建築家としての自己の立場に自覺し初めたる事の表明、その自覺を促すべき捨身提唱であらう。封建的遺産のうちに、それと近代的技術社會との間に育てられた技術家たる建築家が、社會的個性としての自己の立場、若くは建築企業に從屬する一單位としての自己の立場を明確にしやうとした態度、これは日本に於けるその日迄の建築家の爲し得なかつた事であつた。

然しまたそれは一創宇社建築會の同人達の發見した問題では無いかも知れない、凡て率先して表明されたイデーとは個人や小集團の思索からでなく、其時代の社會的壓力の表明されたるものとも考へられるからである。

またこれらの到達點こそは且つて大正十四年同人山口蚊象氏がその「創宇社第3回展と吾々の態度」なる小論に於て「建築家として眞に生きんがために、私達は思索し、體驗しそして沈潛する」の決意、そして同人の十年間の休みなき努力によつて到達し得たのだといふ觀方も許されるであらう。

（六）

創宇社建築會は其後どうしたか？

昭和5年10月には新興建築家聯盟が我國に於ける進步的な建築家百五十人を集めて成立した。（創宇社同人も勿論それに參加した）この華々しい立派な聯盟はその勇ましい宣言にも拘らず一新聞の簡單なデマゴーグを契機に忽ち解消し去つたのであつた。

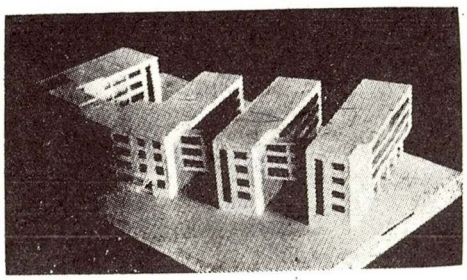
世界恐慌の深刻化、企業の停頓後退、（それは勿論建築產業をも極度に逼迫させた。）全國的に階級運動の波が高揚した。

これ等の事情は當然建築技術家層にも何等かの反響を與へ自己の立場の再認識する機會を得た、と見る事が出來る。

創宇社建築會同人のうちの有志は他の進步的青年建築家と共に建築を更に客觀的な態度をもつて研究する事、青年建築家層の知識と相互扶助的機關を得る爲めに「建築科學研究會」を發表した。そしてそれは昭和8年2月まで繼續され、會員は創宇社の十三人から百六十名にも及んだのであるが、建築科學研究會に就ては何時かそのうちで盛んに活動された人々によつて記錄される日を期待して玆には詳しく書かない。

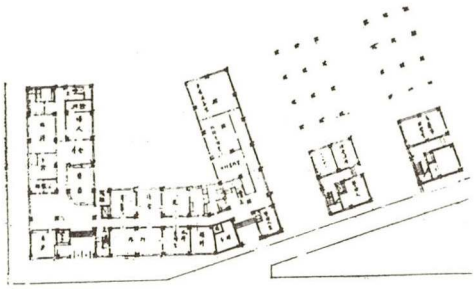
（七）

今や建築技術は創宇社發會當時の素朴さが一つの昔話に成る如き目覺しい發展と飛躍を遂げてゐる。當時の同人達のファンタジーは現實の問題となり、洗練された新建築の美しい姿態は今日の科學文明に適合するかの樣に建てられてゐる。その機能は强調されてオー

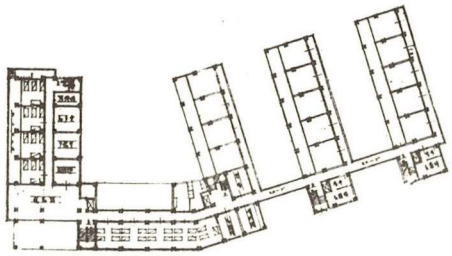


模　型

圖 20・**病院**　平松義彦氏案



1 階 平 面 圖



3 階 平 面 圖

三階平面

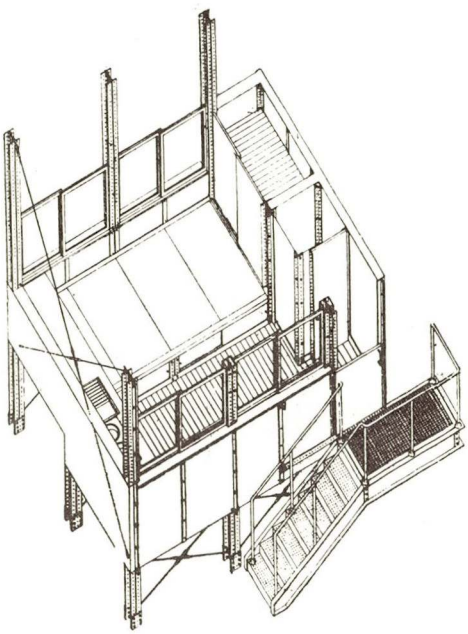
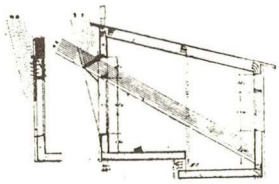
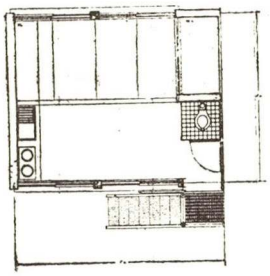


圖 21・**鐵骨組立家屋**　同人　廣瀨初夫氏案

床 面 積	20.0m²
室内面積	55.0m³
窓 面 積	14.0m²
人　　員	2.0人





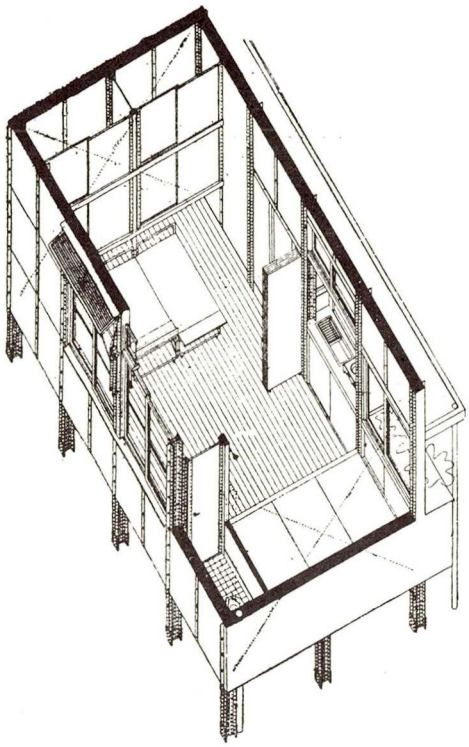


圖 21・**鐵骨組立家屋**

同人　廣瀨初夫氏案

床面積　35.0m²　　室内容積　102.0m³

窓面積　17.0m²　　人　員　3.0人

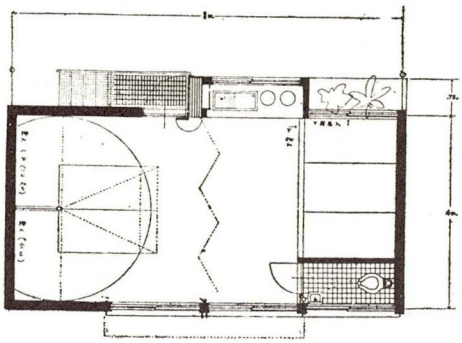
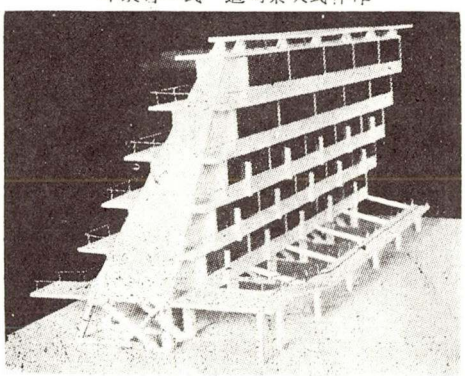


圖 22・**協同組合アパートメントハウス**

今泉善一氏　道明榮次氏合作



1 階 平 面 圖

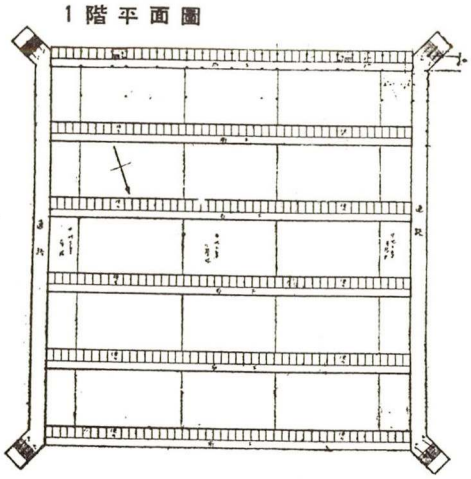


圖 23　**獨身者アパートメントハウス**

同人　河裾逸美氏案

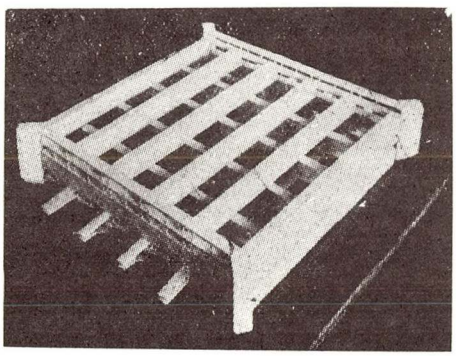
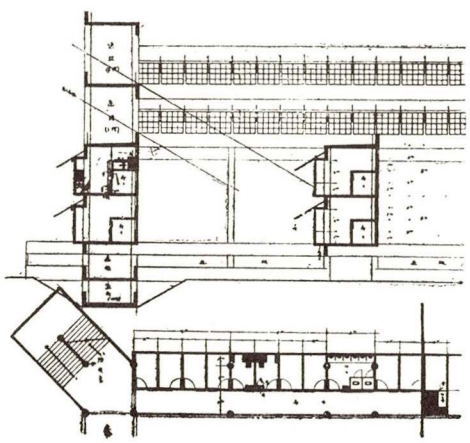


圖 23



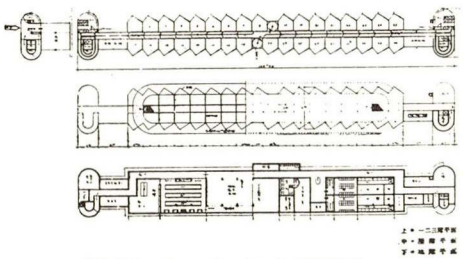


圖 24　上・1、2、3 階平面
中・屋階平面
下・地階平面

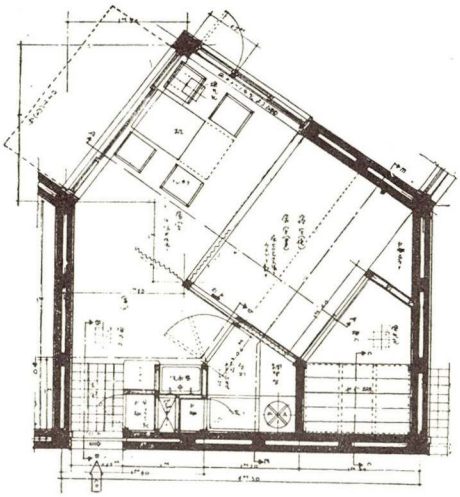


圖 24・**二人家族集合住宅**
同人　野口　巖氏案
敷地（一棟）　坪數　966
家族（一棟）　102家族　204人
敷地一人當り坪數　4.7坪强

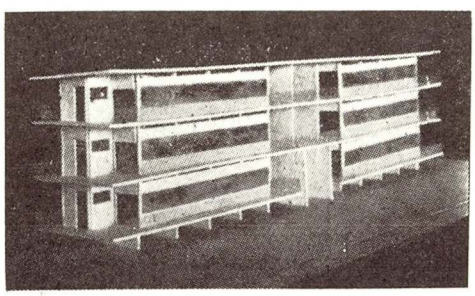




圖 25・**紡績工場の女工寄宿舍提案**
同人　岡村蚊象氏案

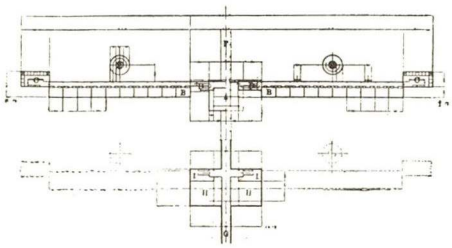


圖 26・同

A・談話室
B・寢　室
C・洗面、結髮、便所
D・階段室
E・非常用スパイラルシュート
F・渡廊下
G・同(地下道)
H・洗濯場
I・同(道具室)

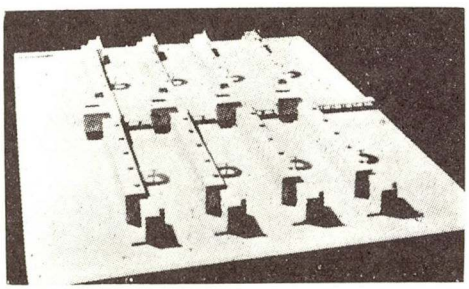


圖　26

圖 27・**小家族のアパートメントハウス**
同人　渡　邦雄氏案

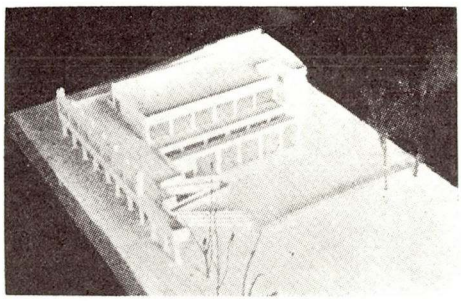
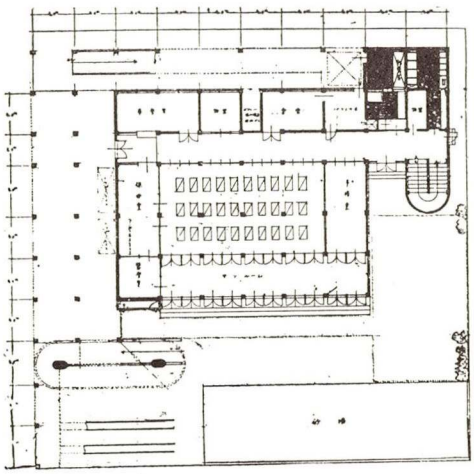


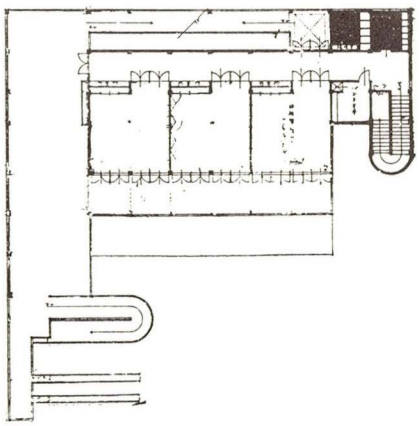
圖 28・**托 兒 所** 山本勝已氏案

模　型

1 階 平 面 圖



2 階 平 面 圖



ダーとキャピタルは日々その位置を脅やかされる感がある。世界の建築の動向も當時のそれとは全く反對に、新興建築の源泉地たる獨逸は瓦屋根と、ハーゲンクロイツ、そして巨驚のレリーフと嚴めしいグリル金物によつて牢獄の様に陰慘な建築風景を展開し、其處で育てられた新建築の精神は今やフランス、イギリス、アメリカ或ひはヨーロツパの諸小國に移向したかの様である。ソヴエートでは新世界の夢が事業と成り個人生活の新解決のための共同的な住居や諸施設が新都市の出現と共に行はれてゐるとの事である。

且つて日本に於て新時代の建築の實現のため、眞の正しき建築觀を見出すための最も果敢な若い戰士たち創宇社同人達は今はそれらの爲重要な各單位と成つて、各方面に分散してその終始一貫變らない建築把握のための戰ひを闘つてゐる。

建築の明日が立派に生長し得る様に今日の土臺を礎く可き努力が續けられてゐる事を御報せし得る事を嬉しく思ふ。　(1937・5・30)

青年建築家クラブを顧みて

高　橋　壽　男

まえがき

昭和8年秋青年建築家クラブは東京で孤々の聲を擧げ、それから僅か半歲にして立消えて了つた。誠にアツケない存在であつたが、その持つてゐた建築文化運動史上の意義は輕々に論ず可きものではないと思ふ。更に、それ程の意義を持つてゐたものが、何故に短日月の生命しか持ち得なかつたのかといふことの批判は、今後新しく出發する建築文化運動に示唆を與へるであらう。こんなことを考へて私は筆をとるのであるが、クラブの眞實の紹介者は私よりも他に適任者があり、私などが口にすることは、全くおこがましい位である。又私のもとには何一つクラブの參考文獻もなく、過日二三日京都に滯在したとき友人の厚意によつて、この文が出來上つたのである點を御承知あり度い。さてクラブのことを語らうとするのであるが、クラブ誕生以前の我國の建築文化運動なるものの狀況を簡單に記せば、比較的多くを語らずしてクラブのことが理解されると考へて、先づそれから始めよう。題して文化運動小史。

（尙青年建築家クラブのことを略してクラブと書いてある故御判讀を願ひます）

1. 我國の建築文化運動小史

歐洲大戰以後今日に至る近々十數年間に、我國の建築產業は目覺ましい發展をとげた。殊にかの東京大震火災は鐵とコンクリートに依る大建築の建設を促進せしめた。この建築產業の活況につれて、建築文化のために運動を主唱するグループが續々と產れたことは敢て不思議とするにたらぬ。今これらグループの特徵を大別して見ると大體三つの時期を劃することが出來る。

第一期　は戰後の混亂が未だおさまらず小市民は極度の動搖の中に立つてゐた時代、海を越えては革命の餘燼が傳はり、國內に於ては戰後の經濟恐慌が襲來し、文化方面に於ては表現主義的文化が直輸入された時期、年代にして1920年から1925・6年に至る間。この期間にはとりわけ多くの建築文化グループが、夫々の勇ましい旗印を立てゝたち現れた。そのうちでも特にそのトツプを切り最後まで永らへ、第一期の代表的な主張を作り上げたものに、かの日本分離派建築會（1920年成立）があある。後には分離派に後れること4年、大震火災の翌年創宇社が產れてゐる。この兩者は共にそれ以前の建築樣式（撰擇主義、沒個性的樣式）に對して、新しい彼等の唱ふる「新建築圍」を創造するために闘つたものであり、從つて彼等の建築に對する關心は主として「藝術的なるもの」に向けられてゐた。その藝術は程度の差こそあれ多分に表現主義の影響を受けてゐた。たゞ分離派は同じ建築技術者であつても、技術家上層部を代表してゐるとするならば、創宇社は下層部に近いと

言ひ得よう。前者がギリシヤの精神を語るとき、後者は往々無條件的な工場禮贊の言葉を好んで用ひたといふ差違はある。

第二期 却つて大震火災が槓杆となつて中小資本の沒落と大資本の制覇が促進され、日本資本主義が相對的に安定せんとして、殊に金融資本は金解禁の機會を狙ひつゞけ、それにつれて産業の合理化が提唱された時期、年代にして1926年から1931·2年に至る時期である。此頃の代表的建築運動のグループとして日本インターナショナル建築會を擧げることが出來る。このグループは昭和2年に雜誌第1號を刊行してゐる。この時期に特徴的なことは、第一期の藝術が一應否定されてそれに代ふるに技術が前面に出て來たことである。「今やインターナショナル建築思想並に之に基く技術は世界的となりつゝあり」とは同會の宣言文の一句であるが、この一句こそ世界的に安定せんとする金融資本のインターナショナリズム（ロカノルの會議、ドイツの國際聯盟加入、五ケ國海軍々縮會議　國際經濟會議等々と對照されよ）と資本的合理化の前に置かれた技術の役割について語つてゐる。最早や様式には葬送曲を、技術こそ素晴しい産業に答へるものだとされた。第一期の分離派は漸次的に安定して行く工業と産業の現實におづおづと眼をやり、機能主義精神に關心を寄せつゝ自らは死の床につくといふ有様であつた。（ミューズ達は老いた。彼等と語ることは徒勞である）反對に創宇社は活潑にも合理主義を振りかざしたのはよかつたが、借物のような唯物主義にわざわひされて徒らに吠えてゐる有様で、勿論建築文化を正しい發展の規道上に置く程の客觀性は持ち得なかつた。

第三期 戰後の資本主義第三期と完く歩調を合せて本小史第三期が始る。前の相對的安定が崩れ新しい所謂準戰時狀態へと除々に移行してくる。1930年以後今日に至る迄の段階、金輸出再禁止後のインフレーション政策の强行、それにつぐく軍事費と赤字公債、それ丈け國民の生活は不安となつて行く期間。此に於てはさきの技術も亦否定されてそれに代るに生々しい技術インテリゲンチヤの生活自體が擡頭してくる。

この生活は、建築をその單一なる領域に於て觀る方法を止めて、より全面的に、客觀的に、科學的に觀る方法を教へる。前者の生活的なものと結びつき、加ふるに當時の思想界の動きを背景として出現したものは新興建築家聯盟（1930年7·18）であり、こゝには急進的な思想が色濃く這入りこんだゝめに、却つて聯盟自體を泡末の如く解體させて了ふに至る。後者の科學的に觀る建築を持つて、換言すれば建築技術者の日常的要求に沿ふて建築の各種の面を研究して行かうとして生れたのは日本青年建築家聯盟（通稱 JAF. Juna archtecta Federatio）であつた。之は藝術團體MAVO、創宇社同人、新興建築家聯盟中の人々等に依つて組成され、雜誌「建築科學」を發刊し、翌年そのまゝ建築科學研究會と改稱された。

此頃京都に於てはこれらの動きとは直接には無關係に學生によつて Dezam といふグループが出來上つて、劃期的な研究「建築生産」を發表し、その後の建築文化運動に强力な理論的武器を與へたことは特筆に價する。その後、Dezam の解散（1933年）と前後し

て建築科學研究會、Dezam 兩者の聯絡は緊密となり現狀の建築科學研究會の批判の機檬が生じ、その精神は良いが、會組織を更に大衆的に、技術者の誰でもが氣輕に參加出來るようにせねばならぬと批判され、こゝに青年建築家クラブが成立したのである。クラブ誕生以前の建築科學研究會はマルで學校のように盛澤山な研究課目を發表し、その實內容は非常に空虛なものとなつてゐたのである。かくの如くクラブは決して獨りでに無から飛び出したものではなく、少くともこの様な10年の歷史的背景と、幾多の建築を愛する技術家の努力に依つて產れ出たものである。

藝術、技術の夫々の時期に於ける否定は單なる否定ではなくして、それらのものが新しく肯定されて、この様な姿——青年建築クラブとして結實したのである。

2. 青年建築家クラブの特質

上述の小史は自らクラブの特質に就て語つてゐるであらうが、こゝではもう少し立入つて觀察することにしよう。クラブは直接的には建築科學研究會の承繼者としてその精神を同じくし、その任務をより廣汎な技術者層へと向けてゐるのであるが、上の歷史的記述に見るが如く、それら技術者層は主として下層建築技術家とも云ふ可きものであり、これはクラブ自體の輝かしい意義を作つてはゐるが、半面、却つてクラブの終末に於ける悲劇的な要因ともなるものであつた。

昭和8年（1933年）10月27日東京神田の一角で開かれた都下青年建築家の懇談會の席上に於て、滿場一致を以つて青年建築家クラブが設立されるに至つた。集つた青年建築家は、請負、組、設計事務所への勤め人、官公吏、學生といふ始どあらゆる種類の建築產業部面の人に依つて構成されて居つた。席上二つの綱領とも云ふ可き言葉が採招された。即ち 1）建築技術者の智識と文化の向上のために！ 2）相互の親睦と共同の利益のために！と云ふのが夫である。この言葉を中心としてクラブの特質を畫くのが最も手近な方法であると考ふるので、これについて筆を進めよう。

此の言葉は、嘗ての小グループが揭げた、いかめしい宣言書に必敵する、だがそれらの宣言に較べて何んと平凡で單純であることか！乍然その意義は表面の單純平明さとは反對に重大である。其處に語られてあることは、最早や藝術や技術に對する抗議でもなく、思ひ上つた獨りよがり（主觀的色彩の濃い）のカラ元氣でもなく、一生活者としての建築技術者のもつ當然の、日常的な欲求なのである。社會的不安と從つて技術上の不安が增大し、それにつれて自己の生活を切りつめ、而も孤立化するといふ狀態に置れた技術インテリゲンチヤが、依然、愈々獲得に困難となりつゝある智識（技術）と文化を相互の共同の力に依つて求め、それによつて相互の親睦を計り孤立化を防がうとする欲求なのである。それ故にこの二つの言葉の裡には、世智辛くなつて來た世相と、その中で益々貧窮化して行く下層技術家層の經濟が反映してゐる。正にこの點が、前節の一期二期のグループの揭げて

ゐた宣言と質的に相違する處であり、クラブの特質を明瞭に語るものである。之は一方から云へば、今日に於ける建築文化運動が最後の處迄追ひつめられたことにもなるが、他方より云へば、それは同時に從來の舊き小會派的態度を改めて、より廣汎な技術者の運動として新しい發足點に立つたものと云ひ得る。さきに述べた「重大なる意義」もこの様な點に存するのであつた。

だが斷つて置かねばならぬことは上述の如くクラブの提出した問題は、技術家の生活と結びついたものであつたからと云つて、それが直ぐと實際の生活問題自體を携げたものではないことである。クラブは飽く迄も一つの文化運動として、技術インテリゲンチヤの相互的な研究機關として終始するものであつた。たゞ、それならば彼等技術家達は何が故に、生活水準の低下に遭遇しつつ尙知識と文化に對して執心するかと云へば、それは客觀的には、A氏の言葉を借りれば「技術家としての職業的な特權の確保」であり、主觀的には當時のインテリゲンチヤ一般の、歪められざる文化に對する欲求の念の然らしめるものであつたのであらう。

それで以上の結論として、少々前記と重複するが、次の如き2つのクラブの基本的方向が理解されるのであらう。

1. 建築上の各種の面に發生する問題を——即この問題こそ日常的であるが、それらを科學的に研究して行くこと。
2. そのような研究を欲する立場に置かれてゐる廣汎な主として下層建築技術家を、技術を中心にとりあげることに依つて結集し、組織して行くこと。

この場合、組織を離れては研究なく研究を離れては組織はないのである以上、1) と 2) は相互的なものである。かくして、一方には研究が進み、一方には集團の偉力が産れることになる。この方向をとつてこそ『クラブは吾らの家とならう、仕事場の片隅とならう、喫茶室とならう。そこでは誰れもが自由に語らう、多様になつて來た建築の仕事には共同の研究を以つて答へやう、それは吾らの親しみを愈々深めるであらう。かくしてクラブを中心に吾々は生活の孤立化から逃れやう。建築家に要求される問題を果さう。吾々の智識と文化を推し進めよう』(クラブ提案書) といふことが眞に果せるわけであつた。

3. クラブの成果と若干の批判

以上に於てクラブの主張と進む可き方向の基本を見て來たが、こゝでは、これらの下に實際にクラブが如何なる實踐を爲して來たかを、愈々回顧的な文章になるが、一應調べて見やう。時々に若干の部分的な批判を下しつつ。

先づクラブは創立後何を爲したか？今創立後11日目に發刊されたクラブ・ニュースNo.1に依れば、10月31日には「建築界の最近の情勢についての座談會」が催されてゐる。そこでは、社會及び建築界の一般の動き、學生間に於て問題となつてゐる建築上の問題、

研究や展覽會が現實には何を齎すか？請負、事務所等に於いて最も苦痛なものは何か？水交社の懸賞設計とそこに云はれてゐる日本趣味とは？等が取り上げられてゐる、それから5日後の11月5日には都下開催中の建築展の共同見學と批判會が行はれてゐる。その他11月2日の申合せとして研究の二三のテーマが決定してゐる。即ち「クラインの平面計畫研究會」「構造理論の研究會」「建築生産の研究會」であつて、これらの研究會はその後夫々實行に移され、實踐報告はその後のクラブ・ニュースに表はれるようになつた。ニュースNo.2には「クライン氏の歷史的意義」なる研究報告を早くもクライン研究會が發表してゐる。これらの報告は後には不完全なものとなつたが、最初は素晴らしく活潑に爲された。

その後に出來上つた研究グループをニュースに依つて更に拾ひ上げて見るならば「新技術研究會」はトロツケンバウを、「住宅研究會」は住宅の科學的研究を、「歷史研究會」は香川三郎の「建築小史」（國際建築所載）の批判を、「技術美研究會」は新しい構造物航空機、橋梁等の美をとりあげてゐる。研究會ではないが、クラブの存在を光彩離陸たらしめたものに、11月17日銀座新建築工藝學院とクラブとの共同主催になる川喜多氏の「構成教育を理解する座談會」であつた。この會に於てはクラブ員は擧つて當時主唱されてゐた川喜多氏の構成教育に對して鋭い論鋒をむけた。即ちそれが社會的には建築を手工業的段階におさへつけ、美學上からは美のドグマチチツクな絶對化であるとして批判した。だが惜いかな、それらの經過と成果は今日、出席者に依る個人的なメモはあつても何ら發表されてゐない。ニュースはこれらのことは詳細に傳へる可きであるに拘らず、單なる形式的な報告に止めるようになつて來た。敢てこの問題でなくとも、何れもお座なり式な報告記事が多くなり、何が、如何なる形に於て、問題となり、研究されたかと云ふことは、たゞグループに參加した人のみが知つて、全體のクラブ員には全く關係のないようなものと成つて了つた。總てのクラブ員が何れかの研究グループに必ずしも屬してゐるものではないことを考へると、かゝるニュース部の獨善主義が、他日クラブの消滅を促した重大な主體的要因となつたことは疑ふ餘地もない。

ニュースの發行、これは財政上機關雜誌の持てなかつたクラブとしては、二重の即ち組織、統制と報告、發表の役割りと意義とを持つて殆どその心臟部に位する程重用なものであつたにも拘らず、一般クラブ員とニュースとの關係は餘り上手に圓滑には行つてゐなかつたようである。これは原因の如何にかゝはらず致命的であつた。折角出來上りまとまりかけた研究も、全クラブ員に批判されることなく、ましてや他の廣汎な技術家層の眼に觸れることなく、その進渉狀況も何ら責任的なものと成り得ず、極言すれば、その結果は、研究自體が完結する前に、グループ自體の崩壞を齎らしたとも言ひ得るのである。かくの如き研究グループの崩壞が何を惹起するかは明白である。

研究方法のアウトラインは大體以上の通りであるが、第二の組織の方面はどうであつた

か？勿論研究のグループの出來ることが同時にクラブ組織の要諦ではあるが、これら以外に地域的なグループ、學校別グループが出來上つてゐる。これは建築文化運動に於ける新しい興味ある組織形態であつたと思へる。例へば銀座グループは銀座を中心とする界隈に在る設計事務所、組等への勤め人を以つて構成されてゐた。その他麹町グループ、丸の内グループ、富士見町グループ等が同様に出來た。このうち銀座グループは最も成功的であつた。このグループの定期例會には常に新人が參加し、他のグループ員が合流するやうなことが出來た。富士町グループはニュース No. 3 に依れば11月26日を期して横須賀へ軍艦見學を主催してゐる。

これらグループは、グループ自體から云つても比較的簡單に集會が出來、聯絡も充分とれることよりして、殊にクラブ全體の組織上から見て重要なものであつた。若しも夫らのグループが確固たる獨自の組織を持ち、責任ある統制者を持つた存在であつたならば、クラブ最惡の場合解散に際しても、其處から立直り第二のクラブが產れ得たわけであるが、事實クラブの消滅と共にこれらのグループも亦消滅して了つたのである。このことは、前の研究グループと同じく運用上の責任ある且つ事務的才能が缺けてゐたのではあるまいか？而してこのことは更に追究するならばクラブがかゝるグループの統制を計る謂はゞクラブ幹部養成といふことに餘りにも無定見ではなかつたかと想像せられるのである。着眼と創意をもち乍ら、恒常的運用の點に於て餘りにも自然生的なものに期待し過ぎたのではなかつたかと惜しまれる。

その他のクラブは定例的な會員の會合も持つてゐた。時には一杯の汁粉を食ひ乍ら、談笑し、研究し、發表を聞き一夕を過し、誠に愉しい會もあつた。尙その他、例へば12月3日には吉祥寺の山越氏のドモ・ダイナミカ住宅の見學、或は自由學園工藝研究所の見學、又はレコード・コンサート等々、限りなく樂しい日を過しつゝ成長して行つたのである。だが、この様な成長の日を持ち乍ら不思議にもその消滅の時が意外に早くやつて來た！而もそれは解散といふよりも文字通り消滅して行つたと云へる。今は恐らく終刊號になつて了つたニュース No. 7（1934年2月2日發行）を見ると、何ら解散の雰圍氣は見えないのである。それが解體否消滅して行つた。何事が起きたのであらうか？　何がシリ切れトンボのやうな不名譽な消え方を敎へたのであつたか？

强いてその直接的な動因を言ふならば、クラブの上述の如き組織形態が、何らかの他に意圖する處ある思想的團體ではないかといふ色眼鏡を持つて見られたこと、及びクラブ員中の個人が偶々そのやうな嫌疑をうけたこと（事實は單なる嫌疑に過ぎなかつたのであるが）等であり、それらが動機となつてクラブ員中には嘗ての建築科學研究會や新興建築家聯盟の蒙つたと同じ建築界上層部の干涉（この干涉は原理的には新らしい科學的研究方法とアカデミズムとの對立の中から產れる）の幽靈に惱み始めたことにある。然し乍らこれらは依然として直接的な動機に過ぎない。クラブがかくも備つた社會、建築界の客觀狀勢

を分析し、その中に產れて居り乍ら、かくも敢えなく創立後半歲にして解體するとは、その客觀狀勢の評價に誤りがあつたのであらうか、それとも單に運用の技術が拙劣であつたのであらうか？

4. クラブ解體の原因と結語

確に運用の技術の拙劣さは3節にても二三指摘した如く、それが文化活動である丈け、より活動力の不活潑となつて表はれたのである。その他事務的手腕の素朴さ——これは主として會計事務の放漫、會費徵集の不徹底となつて出て來てゐる。だが依然これらは枝葉的な原因となるもので、更に根本的にクラブの提案に誤りがあつたのではなかつた吟味せねばならないであらう。

成程クラブは當時の客觀的狀勢に對しては一應の分析をしてゐる。併しそれは一應の大雜把な分析に過ぎず、單に生活の不安を正しくつきとめる範圍だけで、更に深く我國に於ける建築產業の諸機構（この中には民間と官僚、官僚と學會に至るまでの各要素がある）を忠實に分析したのであらうか？　例へば建築產業の資本主義化の面がとりあげられた場合、直に大經營下に於ける注文主と請負業と設計者の關係が公式のように認識されて、それらが現實では、より封建的な要素、人的關係と組合つて複雜な形態をとつてゐることへの關心が忘れられた。事實、今日建築產業中のギルド的要素は深く、表面のシステムのみならず、人と人との生活上のつながりをも規定してゐる。前節に述べた劃期的な建築文化運動の擔ひ手である可きクラブが、かゝる四圍の具體的條件に對して餘りにも性急に自己の役割りを規定したのではなかつたか？　謂はゞ青年建築家クラブは、這入る可き家の入口だけを見て既に家の中での生活を生活しようとしたものではなかつたか、入口は時とすると內部とはひどく相違してゐるものだと云ふことを見なかつた。「クラブは決して目標を定めて何々をするといふのではない、只我々の全生活に最も切實な凡ゆる問題を取上げて行くためのものである」（ニュースより）「最も切實な」！だがこれは言葉の上での正しさはあつても何ら具體的方向を與へるものではない。これではクラブを理解するわけには行かぬ。クラブの指導者はこんな言葉を用ひて自らが混亂してゐることを表明したに過ぎない。即ちクラブは充分な現實の分析なしで、組織にかゝつた、從つて成長の過程は混亂と障害の連續の過程であり、それを如何に處置するかの方法は明かにされずに無理に押しやられてゐたのである。只在つたものは血氣の情熱、之は何物も無かつたといふことである。

充分な分析が出來なかつたこと——えは敢てクラブ自身丈けの罪ではないかも知れぬが、——の故にクラブ自身の中に存在してゐた矛盾は、愈々決定的な方向へと動き出したのである。

矛盾とは2節に於て、それが悲劇の要因として觸れたが、クラブの提唱する文化と、クラブの組成員間のそれである。下層技術者を擁する文化活動は一見時代に妥當してゐる樣

ではあるが、單にそれが「下層」であることを以つて甘じるときには、文化活動の意義を知らぬものと謂はるべきである。文化は歷史的な所產であり、しかも今日築かれつゝある文化—殊に技術の領野に於ては、如何なる層の手にあるかを見るとき、單なる「下層」の集團は何を爲し得るかも默頭出來る。それは素材的な端初をつけ得ても權威と實力をつけることは出來ぬ。ましてや一般技術者層を魅了する力を作り出すことは不可能ではあるまいか。事實クラブが技術家に魅力ある智識を與へ得たであらうか？　遺憾乍ら何もない。そして之は主として下層技術家の今日の技術的實力であつた。又彼等の社會的位置の現れであつた。一方には堂々たる學會その他の、兎に角一流の執筆者團を擁する幾多の雜誌社を控え、餘りにもクラブは赤手空拳ではなかつたか、クラブが誇り得て、而も現在社會が誇り得るやうな技術者をクラブは一人でも持つてゐたか。

構成員の社會的位置の低いこと、現存智識の貧しさは、その活動に當つては當然、上記の優秀な人々又は他の文化團體、出版團體等の援助を懇請し、同盟を作り以つて共存共榮的な立場を作り上げねばならなかつたときに、却つて實際に於ては徒らに自己を卑下せしめ、主觀的には獨善主義の殼を着て了つたのであつた。結果は明白である。研究の自慰か、然らずんば死滅である。こゝで又斷つておくことは、構成員が下層技術者よりなる團體の存在が間違ひなのではなく、寧ろそれは歷史的に規定されてくるもので特徵的ではあるが、それでこそクラブの輝やかしい意義が尙如何なる批判にも耐えて殘つてゐるのであるが—智識の研究をもそれらの人々のみによつて爲さうとした意圖に間違ひがあつたことを言つてゐるのである。研究への活潑性、眞劍性、積極性はクラブのような組織の中で始めて眞のものとなるとすれば、研究自體の、殊に先進の團體の力を俟たねばならぬ研究を獨力で解決せんとした處が誤りなのである。問題はむしろ、各種の文化團體との緊密な提携を提唱し彼らと共に進むべきであつたのだ。蓋しクラブについて云へば、極力クラブへの理解を高め以つて技術的權威者の技術上の指導を乞ひ、そこで初めて語り合ひ、批判し合ひ、智識も又糧として成長すべきであつた。排他的考へを捨てゝ更に民主的なものとなすべきであつた。

今や一般狀勢はクラブの生れたときと變る處か益々切迫してゐる。愈々逼迫して來る技術インテリゲンチヤの生活よりの諸種の要求を充すべく、新しいクラブが出來上らねばならない。その新しいクラブは青年建築家クラブの解體した路の上で、新らしく陣容を備へ、依然として不安の中にゐる技術インテリゲンチヤの前に提案されねばならぬ。今日の住宅問題の解決へ、建築生產の一層の解明に、又建築と土地、都市計畫と地代等々の問題が前途に橫つてゐる。この研究への第一歩は犧牲的精神と情熱に富む青年の力に待つ他はない。青年建築家クラブの生命は短かゝつた。しかしそれは建築科學の路を開かうとした第一歩の捨石として決して無益なものではなかつたし、又無益なものとせしめてはならぬことを强調して擱筆する。

1937. 5. 7.

新日本文化運動と日本工藝

上野伊三郎

1918年世界大戰終結を告げ、戰爭の慘禍を痛感した全世界の人々は聲を揃へて平和主義を高唱したのであつたが、大戰の跡始末に於て領土の分割併合適正を缺いだ爲、有利な解決を得た國は既得權益を保持するが爲めに平和主義を益々高唱して、國際聯盟の力により不平國を抑制しようとしたのであつたが、割の惡い立場に置かれた國は國民の經濟生活の壓迫によつて國際的不均衡の水平運動を起さざるを得ざるに立至り、伊太利のエチオピア征服起り、之に對する國際聯盟の無力はドイツをして媾和條約の單獨破棄を爲さしむるに到り擧世滔々として國家對立、軍備競爭の渦中に突入するに到つた。

軍需工業は隆々として起り、全世界は全力を擧げて重工業と之に關する基礎科學の研究に沒頭し、文化事業、殊に藝術方面は其蔭に隱されて光り滅せむとし、鐵骨建築は之を中止して軍機製造に向ける處迄進んで來た。

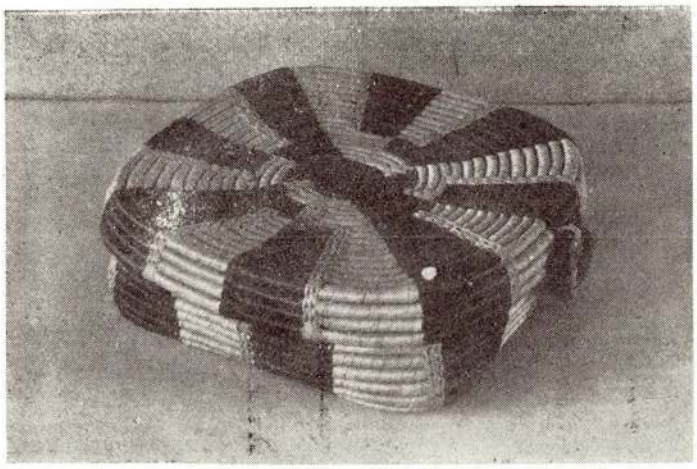
戰爭には國論統一を要するのであるから、思想問題も整理され、各國は各自其國民、其文化が世界最高のものである事を强調し、互に他民族の劣等なる事を國民に教ふるの手段に出でてゐる。

閑却されてゐる文化問題が、このお蔭で國內的に命脈をつなぎ得ることになつたのは豫期せざる幸と云はうか、天の攝理の妙と云はうか、兎に角結構なことであるには相違無いのである。

世界的新建築運動に參加して日本で日本インターナショナル建築會が生れたのは十年前のことであつた。

この會では、地球物理學的ローヤリティを認めて、日本は日本として、その土地に適した建築を研究し、土地に適した生活に關する一切を研究する事を明言して之を實行しつつあつたのであるが、外國摸倣者によつて新建築樣式が流行化するにつれて、我國の建築は「日本」の特殊條件を忘れた內容の無いモダーンボーイ風の外形ばかりの物眞似的なものとなつてしまつたのであるが、恰も前述の國家對立主義の必要がもたらす處の國內文化再認識運動によつて、日本インターナショナル建築會の主張を觀る可き傾向となつた事は自然の調節作用であるとも考へられ、純文化的な立場から見て、動機の如何に係らず結果から見てよろこぶ可き現象であると考へる。

言語は思想を表現する爲の方法の一つであつて、言語によつて思想の全部を表現する事は至難であり、不可能な場合すらあつて、維摩居士の「默」等有名な話しである。



ブルーノ タウト 教授案　　竹皮細工　婦人用筥

日本インターナショナル建築會の主張をば或人は世界中の古建築様式を繼ぎはぎすることであると思ひ、或人は新らしい西洋建築を無雜作に眞似するごとであると思ひ、或人は社會主義を宣傳する建築である等と突飛な解釋を下したりしたものであつた。これ等は同會の宣言細領を讀みもしなかつたか、讀んでも言葉の意味を解する丈けの素養が無かつたのであらうと思はれるが、同様に日本文化の再檢討の聲が高まると茶席でなくては日本建築ではない様に思つたり、鐵筋コンクリートの大建築の上にチョツピリ塔を立てて九輪を置いたりする事が流行したり、椅子の側面へ紙障子を嵌め込んでみたりする人が現はれる。

巴里博への出品物の內にもお寺か、舊劇の御殿へでも置かねば釣合はない様な漆の高蒔繪の蓄音機があつたが、之等は純機能的な機械すら工藝的美を有する、即ち機能より來る美を讃美し、工藝美は機械に及ぶと云ふ說を誤解して現れた現象である。一體に日本人は氣が早くて、早呑込をする癖がある様である。之は昔から大風や火事に度々見舞はれて神經の反射作用が極度に發達した故かもしれないが、もう少し落付いて物を考へないと、さらでだに不完全な言語を誤解して飛んでもない間違ひを仕出かすのである。

日本文化の再檢討は前述の如く甚時宜に適したことであるが、其方向を間違へない様にしないと、頑迷固陋、時代逆轉學想有になつてしまふ虞れがある。

再檢討の後——古日本文化をよく見直して攻究の結果を現代に應用する場合には例の芭蕉翁柴門の辭にある南山大師の名高の心を體するの要がある。

古人の跡をもとめず、古人のもとめたる所をもとめよ。

言葉をかへて云へば、形態を摸倣すべからず、精神を體せよと云ふのである。

然るに日本の現狀は正にこの逆をゆくのが大勢である。

西洋文化の攝取にしてもその通りであつて、西洋思想の根底を極むる事なくして、その根底より咲き出でたる花を摘むことにのみ急であつたが爲に、奇妙極まる西洋建築が建てられて、極端なものはファツサードをブリキで西洋風（但し日本人丈けがそう考へてゐるのであるが）にし、ブリキ一枚後方はつぶれかかつた木造安請普であつたりする様な極端なもの迄で出現し、大都會の場末や地方小都會の商店街は、ブリキの看板の行列と云つた

様な市街風景を展開する。

かと思ふと100尺のモダーンビルの和食堂は建物の内部を野外に見えて、檜皮葺の屋根迄つけた舊日本家屋を更に建ててゐる。正に洋服の下に褌を占めて結び玉を突出させてゐるの觀がある。

褌を猿股に代へ、腰巻きをヅロースに代へる事の如何に難きかを物語つてゐる。

然らば向ふ可き中心思想は何處にあるか、と云ふとこれ亦甚曖昧漠糊たるもので、明治時代に力說された勤勉力行主義で一生懸命勉强して優等で學校を卒業しても就職は出來ず、怠け者で辛ふじて卒業した重役緣故の者は直ちに要職に就くことが出來る、といふ世の中になつてみれば、學生も大ていは勉强する氣が無くなつて卒業證書さへ手に入れれば父兄に申譯は立つと云ふ事になる。

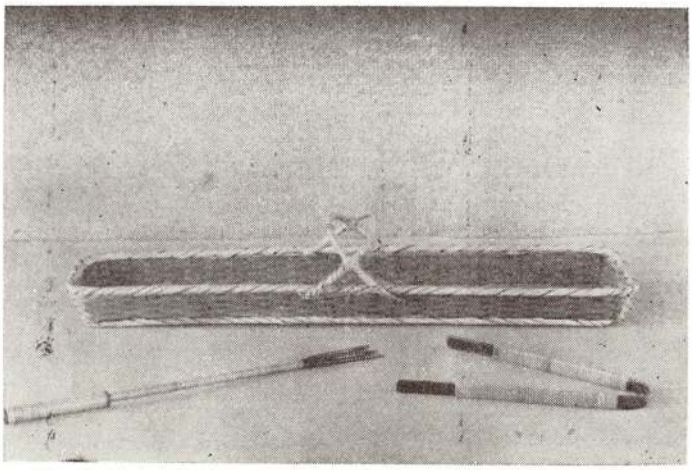
正義は何處、人道はいづこと云ふ世の中で一方からは非常時だ非常時だと云はれてドチラを向いてゐればよいか解らないと云ふのが今の日本國民の姿ではないのだらうか。

古日本の有してゐた精神文化を見失ひ、求めむとした西洋文化は其核心を得る能はず、得るに到らず、捨てむとした日本文化を再び拾ひ上げようとして見れば、その容器は古色蒼然としてゐるのですぐ中味を味はふに躊躇してゐるの現狀で、その虛に乘じて大本、人の道等の所謂似面非宗教が勢を得るのである。確固たる信念の無い處に立派な文化のあり様はないのである。

工藝界に於ても帝展第四部的な技術押賣主義がある。

日光式とスペインバロクを混合した様なもので困難な技術を克服した事を誇示してゐる丈けのもので、一見烏の腐爛屍體を見る様な感じのするものである。此式のものはハイカラを志す氣分をやや含んでゐるのであるが、他の種類のものには泰然として古日本の傳統そのままを踏襲してゐる一派がある。

此人々は時代の推移に全然無關心で封建時代の職人道を守りつづけてゐるので、業態は日を追ふて衰するのを心かずに居るので、其極少數の名匠と稱せられてゐる人丈けは骨董値を矢張り舊時代の空氣の內に住んで居る富裕階級の人達から支持されてゐるのである。この一派も蓋をした螺鈿で



上野リチ案　竹製サンドウヰツチセツトフオーク及ピンセツト漆塗

最近交通機關の發達による經濟界の著しい情勢は國內に閉ぢ込めた經濟では國家として生存不可能となつた事である。

從つて輸出の可能性あるものは出來る丈輸出して輸入の帳尻を埋め合はせる樣にしなければならないのであつて、輸出向き工藝奬勵聲の聲が高いのもこれに基因するのであつて、現代として日本の執る可き當然な國策の一つである。

他方外國工藝品の輸入されるものや、外國工藝品の影響を受けるものが續出し、輸出商館は最も手つ取り早い商賣の方法として外國のサムプルを取り寄せてこれを低賃銀、意匠料不用の條件下に外國品を僞造する、これによつてその一部も國內に販賣される事によつて我國の工藝界は混然雜たる狀景を點出するに到つてゐる。

現下の輸出工藝品なるものはこれ等僞造品か、低級低調なる金儲け主義の輸出商人の御意に召す安物のみであつて、日本品の聲價を失墜する底のもののみである。

ここに日本文化再認識の「話」を入れるの必要が起るのである。

工藝品と機能の問題、と

工藝品と材料の問題、は今更ら云ふも愚かである、日本古來の工藝品には皆その調和が充分に行はれてゐるのである、尠くも良き工藝家、良き職人の手になつたものは、すべて之等の條件を具備してゐるのである。

機能を最もよく滿たしてゐるものに旅行やピクニツクの用具がある。

寫眞の持ち合せの無いのが殘念であるが、京都高臺寺の寶物に大名の旅行用具があるがよく纏つた立派なものである。

昔のリユツクサツクたる笈の如きも立な機能を有して然も藝術的であり、鏡臺、オハグロ用具、行燈、煙草盆、矢立、等々、その機能を精細に觀察すれば感心させられるものが多い。

玩具の達摩の轆轤細工のもので、中から中から小さいのが出てくるもの等も今の輸出商品に應用すれば、運賃の節約の點に於て立派なヒントを與へるものであらう。

茶の湯に用ゐらるる用具の如きも、その寸法形狀悉く、現代工藝に暗示を與へるものである。

吸物椀も糸底を少し廣くすればフインガーボールに使へる事になるといふ樣な例はいくらもあつて、現代內外の用途を知り、之に適應する工夫をすれば、昔の技術はそのまま現代の役に立つ。

日本人がみよいとする處のコツプの形狀は西洋人にも飮みよいのであり、注ぎ易い形の湯沸しは日本人にも西洋人にも工合がよいのであるから、機能を充に滿足する工藝品は矢張り「インターナショナル」である。

生活樣式が、大都會の生活に於て、インターナショナルとなるに從ひ、器具の機能も共通となる。

ある。

建築に於けるローカリテイに相當する事柄は工藝に於ては產出材料に關係する事柄が大部分を占める事となる。

輸出漆器等の場合には、その素地の木材の乾燥等が大問題となるのであつて、日本に於ける氣候に適した漆器も、歐米へ持ち出せば破損する場合が多い等と云ふ事が起つて來てこういふ點ではローカリテイの問題は建築の場合と大分異つて來るのである。

日本文化の再檢討、日本文化運動、と言葉は新らしいが意味は古人の所謂溫古知新に過ぎない。

西洋に學ぶものはその「精神」を學ぶべく、古日本に學ぶものは、亦その精神を學ぶべきで、その外形を學んではならないのである。

日本工作文化聯盟の結成とその後の活動

市浦健

數年前から東京の若い建築家の間で思想的傾向の近い人達の會合が、種々の形式で行れて居た。それは或は團體の形を採つた事もある。又月例懇親會を開いたり見學會を催したりするクラブの様なものにもなつた事もある。又共同で書籍や雜誌の編輯をやつた事もあつた。それが昨年6月頃ある積極的な刺激によつて聯盟の形となつて結成されたのであるが、その準備に半歲を要した事は聯盟が單なる建築家だけのクラブ的團體ではなく、生活文化の中の造形的な部門を建築を中心として考へた時に必然的に得られる結論として現代日本の工作文化の實狀に對して建築家を中心とし造形文化に關係する各方面の專門家を糾合したものとするためと、その活動の中心となる建築家の相互の充分な意識の統一のためとであつた。そしてその活動はあくまで對社會的でなければならないと云ふ見地の下に多くの計畫が建てられ當面の計畫のために實行委員が定められたのが本年1月初旬であつた。

吾々の仕事の內容はすべて住生活がその基礎である事は綱領に明記してある通りであるそしてこの住生活を中心とした凡ゆる工作文化の問題に團體としての活動を及さうと云ふのがその課題である。（工作文化と云ふ語は、造形文化と殆ど同意語であるが造形が直ちに所謂造形美術を聯想する事と、より生產的意味を要求したゝめに、新らしく吾々が採用した文學である。）現在會員として發表されて居るものは大部分が建築家又は夫に直接關係のある專門家であるが他の關係部門の專門家は當分事業の實行に當つて協力を求めて居る。これは各部門に渡り同じ意識を持つ人を求める事が早急には困難であつたが爲である。現在そのために醫學・機械工學・工業生產家及一般の藝術の各方面に吾々の趣旨を徹底すべくあらゆる機會を利用しつゝある。

會の組織は現在は非常に簡單ではあるが今回新らたに會友の制度を設けて吾々の趣旨に贊成する工作文化の若き技術家達の後援を求める事となつた。

次に現在までの事業の概略について紹介しやう、最初の事業として計畫されたものは、大衆に對する工作文化の啓蒙を目的とする生活文化展覽會の開催である。之は生活の上に「低格製品より價値製品へ」「有閑工藝より目的工藝」への二つの指標を實現するための手段でこの見地から優秀と認められる現在の市販製品と聯盟の手になる試作品を陳列する他モデル・ルームによる器具及材料の有機的說明も企てゝ居る。この種の催しに最も效果ある會場としての百貨店中有名な某店の積極的援助により今秋その第一回が催される事となつた。次に社會的に工作文化の開發を指導する有力な手段としての出版による事業として、住生活の主宰者たる家庭の婦人に對する啓蒙として婦人雜誌との提携が旣に行れた。その一は「婦人畫報」の新年號別冊附錄として「生活の新樣式」なる住宅に關する小冊子の協調執筆であつた。又次に「婦人公論」の各目に聯盟の會員が各々その專門より住生活の指導をグラフ

を交へて擔當する事になり既に本年1月より實行されて居る。勿論之は在來の婦人雜誌に見られる住宅記事とは全くその立場も內容も異るものである。又住宅に關する科學的、實際的であり又最も文化的に優れた知識を蒐めこの方面の定本となるべきものを編纂する事となり既に出版書店も決定し今年中發行の豫定である。又會員中の史的文化財の研究によつて優秀なる曲集も逐次出版の豫定である。

以上の事業の他に結成以來最も特筆すべきものとして來年5月より開催されるパリ萬國博に於て公開される日本文化紹介の映畫の一として「日本の建築」なるトーキー2卷の製作について國際文化振興會の委囑によりプロットの立案及撮影に協働し、その編輯については聯盟の名に於て充分その意圖を徹底した。（これは名古屋に於ける建築學會大會の通俗講演會にも公開される事となつた。）

その他商工省工藝指導所の强化擴張の問題に關し現所長國井氏を中心とした座談會を開き、會員谷口氏が設計に關與した慶應義塾幼稚舍の見學會等も催された。その他聯盟の結成が刺激となり關係各方面のジヤーナリズムが會員に對し個人的に働きかける事も活發となつたゝめ最近執筆や座談會への出席が少くない。又工藝方面の團體に及した影響も間接的には大きかつた様に思れる。豫想外に大きかつたジヤーナリズムへの反響は餘り吾々の望む所ではなかつた。

吾々の目的を實現するために最も理想的な方法は有力な工作文化の研究、指導機關の設置である。而かも夫は生產と結付いたものでなければならない。この目的に對し輿論の指導と、知識の啓蒙をなすと同時に又聯盟の實力を以つてその建設を期してゐるのである。

以上簡單乍ら大體の輪廓を示したつもりであるが結成に際して發表した趣意書を再錄して置く。

日本工作文化聯盟趣意書

生活文化の中で生活の容器たる建築を始め、それに關する造形文化を總括して此處に吾々は工作文化と呼ぶ。この工作文化の健全なる發達は常に建築を中心としてなされた事は過去の歷史がよく示すところである。

現代日本の生活文化を展望するとき、吾々工作文化に携る者としてなすべき多くの課題を見出すのである。吾々は如上の見地に立ち、現代精神に基いて生活の全的立場からその發展に寄與しなければならぬ責任を自覺する。

この目的に對し、此處に建築家を始め工藝・工學・工業及一般の科學、藝術其の他工作文化に關與する諸分野の專門家を糾合して、別に揭ぐる指標の下に各種の課題を遂行せんとするものである。即ち住を基本とする各種工作文化財の共同研究を行ひ、工作文化研究機關の設置を計畫し、建築工藝及それに關する諸生產の共同指導等をなすと共に、更に進んで大衆に對する工作文化の啓蒙を目的とする生活文化展覽會、講演會等の開催、各種刊行物の出版又は共同活動、工作文化に關する國際文獻情報機關の設置等を實行せんとするものである。又工作文化に關する社會的問題の發生に際しては、關係諸分野の同志と共に速かに適正なる態度を表明し、又は諮問に應ずる等の準備を有するものである。以上の御趣旨に御賛同の上、本聯盟に對し大方の厚き御後援を乞ふ次第である。

Tanabasi method による耐震構造計算の或る實例

飯島猛夫

緒言　建築雜誌昭和十年八月號に於て京都帝國大學棚橋助教授が剛壁を含むラーメン群の實用的近似計算法を發表せられてゐる。

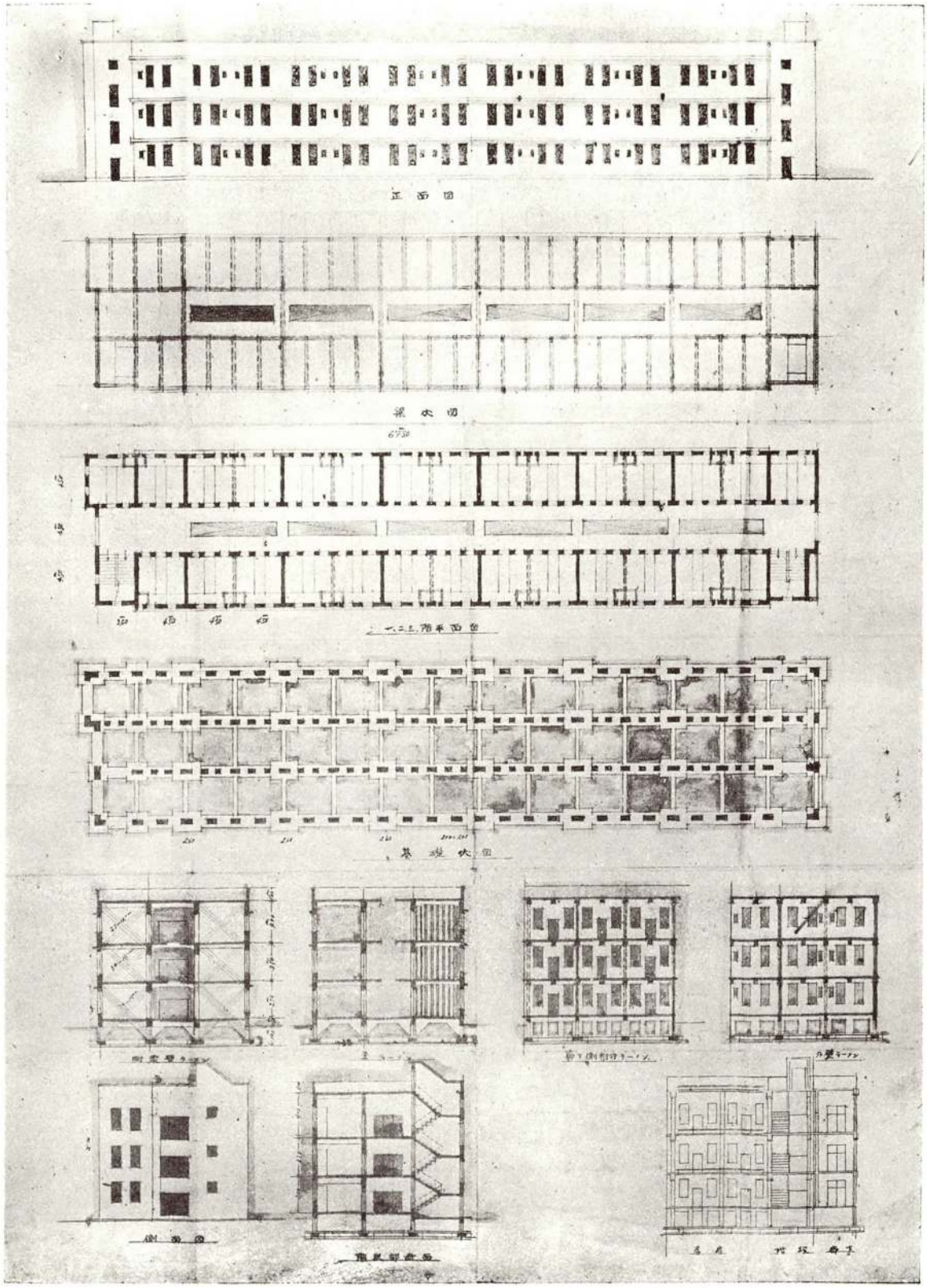
同氏の用ひられたる假定其の他については未だ全く承服し難き點あるも在來行はれてゐるが如き全く幼稚なる方法よりは少しでも進歩した考へ方、實際的の方法として、これを實在の建築に應用して見たものである。

この方法の要旨を述べれば即ち建築にかかる全地震力を剛ラーメンの數にて割り、これだけの横力が剛ラーメンに作用すると考へて、この剛壁を近似的に Ersatz Fachwerk と考へてその部材應力を求め、耐震壁の對角線方面の鐵筋數を求める。次に剛壁の外側柱及び内側柱にかかる直壓よりその柱の變形量を求め、これより Williot の變移圖を用ひて有壁剛ラーメンの各層の地震力に依る最大撓みを求める。柔ラーメン各節點はこの剛ラーメン、各層の最大撓みだけ强制的に水平に變移せしめられるものとして、その時起る部材應力を求めるのである。

計算順序及び術語は出來得る限り建築學會の計算規準により計算圖表は學會の建築工學ポケツトブツク中の坂博士のものを利用した。

目　次

第一章　一般事項
1.1 許容應力度その他
1.2 假定、荷重表
1.3 床版、梁及柱の配置
第二章　柱の軸壓縮力概算表
第三章　地震による水平横力の算定
第四章　有壁ラーメンの計算
4.1 有壁ラーメンの近似解法
4.2 耐震壁にかかる轉倒力率
4.3 耐震壁對角線方向鐵筋斷面の算定
4.4 柱斷面積の算定
4.5 耐震壁中央梁斷面二次モーメントの算定
4.6 彈性方程式及びその解
4.7 耐震壁外側柱及内側柱にかかる軸壓縮力の算定
4.8 柱斷面の檢算
4.9 中央梁斷面の檢算
第五章　地震水平横力に依る有壁ラーメン柱の變形量の算定及び有壁ラーメン各層の撓みの算定
5.1 水平横力に依る柱の變形量
5.2 有壁ラーメン各層の撓み
第六章　三層一張間柔ラーメンの計算
6.1 各部材二次モーメント及び剛度の算定
6.2 横力に對するラーメンの解法
6.3 ラーメン各部材の應力圖



6.4 垂直荷重に對するラーメンの解法
6.5 ラーメン各部材の應力圖
6.6 梁及び柱の應力表
第七章 部材斷面計算
7.1 床 版
7.2 大 梁
7.3 柱
第八章 基礎の計算
8.1 基礎及び繋梁の配置
8.2 許容地震力度の假定と基礎底面積及び斷面の算定

第一章 一般事項

1.1. 許容應力度その他

a. 鐵、引張り、壓縮 $f_t = 1200 kg/cm_2$
b. コンクリート、壓縮 $f_c = 45 kg/cm_2$
c. 剪斷 $f_s = 5 kg/cm_2$
d. 附着 $f_b = 7 kg/cm^2$
e. 許容地耐力度 基礎自重を差引き 10ton/m2
f. 地震震度 $k = 0.1$

1.2. 假定荷重表 (單位 kg/m)

荷重	屋根 積載荷重	屋根 固定荷重	屋根 全荷重	居室 積載荷重	居室 固定荷重	居室 全荷重
床版	200	480	680	250	450	700
小梁	180 1/10減	600	780	225	600	825
大梁	160 2/10減	600	760	200	600	800
柱	140 3/10減	620	760	175	650	825
地震	100 5/10減	620	720	125	650	775

コンクリートの自重 2300kg/m3
屋根版 厚 12cm 23×11=276
防水層 2cm 20×2=40
シンダー 5cm 15×5=125
タイル 2cm 20×2=40
481 kg/m3

第二章 柱の軸壓縮力概算表

		床單位荷重 t/m2	床面積 m2	荷重 t	壁體コンクリート自重	木造間仕切自重	梁自重	柱自重	全荷重	軸壓縮力
外側柱	Ⅲ	680	2.30×2.30 5.30	3.600	3.170	.900	.795	2.300	10.765	11,000
	Ⅱ	700	5.30	3.700	2.800	.800	.795	2.100	11,095	22,000
	Ⅰ	700	5.30	3.700	3.170	.900	.795	2.300	12,565	34,500
內側柱	Ⅲ	680	2.30×3.50 8.00	5.440	3.170	.900	1.550	2.300	13,360	13,500
	Ⅱ	700	8.00	5.600	2.800	.800	1.550	2.100	13,750	27,000
	Ⅰ	700	8.00	5.600	3.170	.900	1.550	2.300	15,220	42,500

コンクリート壁　　厚さ×高さ×長さ×単位重量

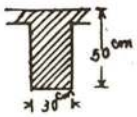
.15×4.00×2.30×2.300＝3.170kg

.15×3.50×2.30×2.300＝2.800kg

木造間仕切　　高さ×長さ×単位重量

4.00×2.30×100＝920kg

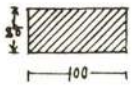
3.50×2.30×100＝805kg

梁　 

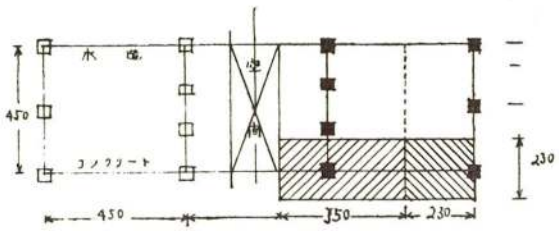
$b \times d \times l$ ×単位重量

.30×.50×2.30×2.300＝7.950kg

.30×.50×4.50×2.300＝1.550kg

柱　 

100×25×400×2300＝2300kg



第 2.1 圖



第 2.2 圖

第三章　地震による水平横力の算定

屋　根

床　版	単位重量×面積	720(13.5×67.50—54.0×1.50)＝600,000kg
外壁	(長ち×高さ×厚さ×単位重量×數)	4.50×200×.25×½×2300×30＝77,300
内　壁		4.50×200×.25×½×2300×28＝73,600
コンクリート間仕切	厚さ15cm	4.50×2.00×.15×2300×20＝61.600
木造間仕切		4.50×2.00×100×12＝10.800
パラペット		.15(13.5＋67.5)×2×1.00×2300＝62,900
		ΣW＝886,200
ΣWk≒90.000kg		

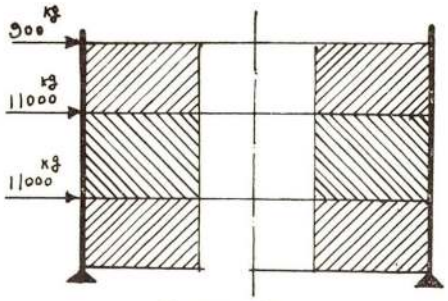
一、二、三階

床　版	775(13.5×67.50—54.0×1.50)＝650,000
外　壁	4.50×3.75×.25×½×2300×30＝145,000
内　壁	4.50×3.75×.25×½×2300×28＝137,500
コンクリート間仕切	4.50×3.75×1.5×230×20＝115,000
木造間仕切	4.50×3.75×100×12＝20,300
	ΣW＝1067,800
ΣW×k≒110.000kg	

壁體重量は内外壁は窓出入口等を考へ、その 1/2 を取り間仕切はその全部をとる。

木造間仕切單位重量は 100kg/m² とす。

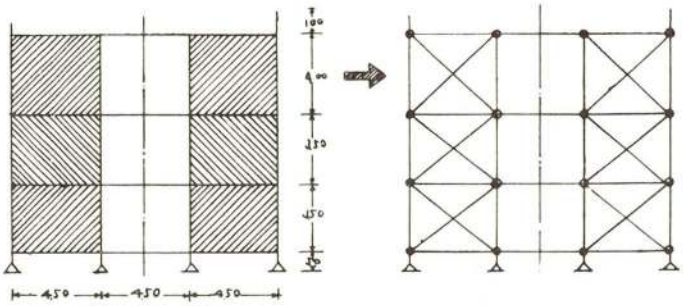
有壁剛ラーメンの数は10なる故、一つの剛ラーメンにかかる横力は $\frac{90,000}{10}=9,000\text{kg}$ $\frac{110,000}{10}=11,000\text{kg}$ となる。



第 3.1 圖

第四章　有壁ラーメンの計算

4,1. 有壁ラーメンの近似解法

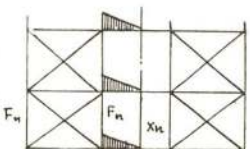


第 4.1 圖

左圖の如き有壁ラーメンを近似的に右圖の如き壁體を對角線材にて置き換へた合成トラスと考へ、その部材の應力を求める。この合成トラスはその中央軸に對して對稱であるからこの中央梁の中點で二つの靜定トラスに分けて考へる。この中央梁の中點に於て働ける內力は剪斷力のみであるからこれを餘力として、この合成トラスを解く事が出來る。

即ち、圖の如く中央梁の中點に於て向ひ合つて働く、二つの剪斷力を群團餘力として取扱ひ、次の三項彈性方程式を作る。今外力に依る基本トラスの第 n 層中央の斷面に於ける轉倒力率を m_n とすれば合成トラスの內柱及び外柱に起る應力 S_0 は近似的に次の如くなる。

$$S_0=\frac{m_n}{a}$$



第 4.2 圖

$X_n=-1$ に對して起る部材應力は

斷面積 F_n なる內柱に對し $S_n=-\frac{l}{a}$

F_n'　　外柱　　$S_n=+\frac{b}{a}$

$$\therefore\quad \Sigma S_n{}^2\rho=\left(\frac{l^2}{a^2}\frac{h_n}{F_n}+\frac{b^2}{a^2}\frac{h_n}{F_n'}\right)$$

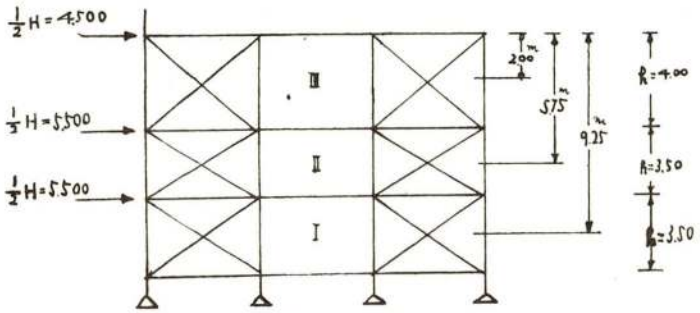
$$\Sigma S_0S_n\rho=\frac{m_n}{a}\left(\frac{l}{a}\frac{h_n}{F_n}+\frac{b}{a}\frac{h_n}{F_n'}\right)$$

$$\rho=\frac{F_n}{h_n}$$

以上は次の假定の下に成立す、

1. 對角線材が同斷面積なること
2. 部材が或る層について內柱外柱共に同斷面積なること
3. 外力がこの中央梁に對して點對稱的なること

4,2. 耐震壁にかかる轉倒力率 m_n



第 4.3 圖

	h	½H	Ⅲ	Ⅱ	Ⅰ
Ⅲ	4.00	4.500	2.00 9.000	5.75 25.900	9.25 41.600
Ⅱ	3.50	5.500		2.00 11.000	5.75 31.600
Ⅰ	3.50	5.500			2.00 11.000
	m_n		9.000	36.900	84.000

4,3. 耐震壁對角線方向鐵筋斷面の算定

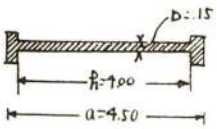
	各層横力 H	各層剪斷力 S	一つの耐震壁の受持つ剪斷力	對角線材應力	所要鐵筋斷面積	採用鐵筋
Ⅲ	9.000(kg)	9.000(kg)	4.500(kg)	3,1800(kg)	2.65cm²	3φ—12mm (3.393)
Ⅱ	11,000	20,000	10,000	7,070	5.88	3φ—16mm (6.032)
Ⅰ	11,000	31,000	15,5000	10,950	9.12	5φ—16mm (10,053)

4,4. 柱斷面積の算定

		柱中	柱成	對筋比	α	斷面積 F	添加面積 F_0	$F_n=(F+F_0)$	J_c/F_n
外側柱 F_n'	Ⅲ	1.00	0.25	90	1.167	.25×α 0.292	0.158	0.450	0.222
	Ⅱ	1.00	0.25	90	1.167	0.292	0.158	0.450	0.222
	Ⅰ	1.00	0.25	90	1.167	0.292	0.158	0.450	0.222
外側柱 F_n	Ⅲ	1.00	.25	90	1.167	0.292	0.158	0.450	0.222
	Ⅱ	1.00	.25	90	1.167	0.292	0.158	0.450	0.222
	Ⅰ	1.00	.25	90	1.167	0.292	0.158	0.450	0.222

添加斷面積は F_0 は次の如くして計算す。

$$F_0=\frac{J}{\frac{a^2}{4}}=\frac{0.8}{5.05}\quad;\quad J=\frac{bh^3}{12}=\frac{.15\times 40^3}{12}=.8\text{cm}^4$$



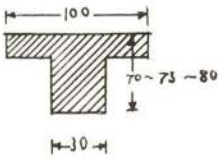
$$\frac{a^2}{4}=\frac{4.5^2}{4}=5.05\text{m}^2$$

$$h=4.50-.50=4.00\text{m}$$

4,5. 耐震壁中央梁の二次モーメントの定算

	梁巾 b	梁成 h	T梁巾 B	對筋比 m	版厚 t	t/h	b/B	Bh^3	β	$J=\beta Bh^3$	J_c/J
Ⅲ	0.30m	0.70m	1.00m	600	0.12m	0.172	0.43	0.342m^3	0.530	0.0181m^3	5.52
Ⅱ	0.30	0.75	1.00	600	0.12	0.160	0.40	0.422	0.520	0.0216	4.57
Ⅰ	0.30	0.80	1.00	600	0.12	0.153	0.375	0.513	0.460	0.0236	4.23

$J_c=0.1\text{m}^3$ にとる



4,6. 彈性方程式及びその解

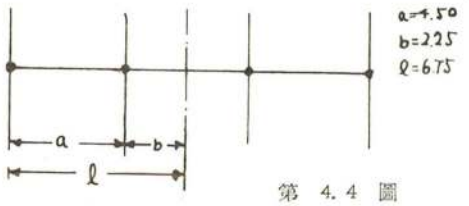
$$\delta_{n,n-1}X_{n-1}+\delta_{n,n}X_n+\delta_{n,n+1}X_{n+1}=\delta_{n0}\cdots\cdots\cdots\cdots\text{一般式}$$

$$\delta_{n,n-1}=-\frac{1}{3}b^3\frac{J_c}{J_n}$$

$$\delta_{n,n}=\frac{b^3}{3}\left(\frac{J_c}{J_n}+\frac{J_c}{J_{n+1}}\right)+h_n\left\{\frac{J_c}{F_n}\left(\frac{l}{a}\right)^2+\frac{Jb}{F_n'}\left(\frac{b}{a}\right)^2\right\}$$

$$\delta_{n,n+1}=-\frac{1}{3}b^3\frac{J_c}{J_{n+1}}$$

$$\delta_{n,0}=h_n\frac{m_n}{a}\left(\frac{J_c}{F_n}\frac{l}{a}+\frac{J_c}{F_n'}\frac{b}{a}\right)$$



第 4. 4 圖

一般式に於て $n=1$, $n=2$, $n=3$ とすれば

$$\delta_{11}X_1+\delta_{12}X_2=\delta_{10}\qquad n=1$$

$$\delta_{21}X_1+\delta_{22}X_2+\delta_{23}X_3=\delta_{20}\qquad n=2$$

$$\delta_{32}X_2+\delta_{33}X_3=\delta_{30}\qquad n=3$$

$$\delta_{11}=\frac{b^3}{3}\left(\frac{J_c}{J_1}+\frac{J_c}{J_2}\right)+h_1\left\{\frac{J_c}{F_1}\left(\frac{l}{a}\right)^2+\frac{Jb}{F_1'}\left(\frac{b}{a}\right)^2\right\}$$

$$=\frac{2.25^3}{3}\left(5.52+4.57\right)+4.00\left\{0.220(1.5)^2+0.222(0.5)^2\right\}$$

$$= \frac{9.25}{3}(10.09) + 4.00(0.22 \times 2.25 + 0.22 \times 0.25) = 30.1 + 2.02 = 32.12$$

$$\delta_{12} = \delta_{21} = -\frac{1}{3} b^3 \frac{J_c}{J_2} = -\frac{1}{3} \times 2.25^3 \times 4.75 = -\frac{9.25}{3} \times 4.75 = -13.72$$

$$\delta_{22} = \frac{b^3}{3}\left(\frac{J_c}{J_2} + \frac{J_c}{J_3}\right) + h_2\left\{\frac{J_c}{F_2}\left(\frac{l}{a}\right)^2 + \frac{J_b}{F_2'}\left(\frac{b}{a}\right)^2\right\}$$

$$= \frac{2.25^3}{3}(4.57 + 4.23) + 3.50\{0.220(1.5)^2 + 0.222(0.5)^2\} = \frac{9.25}{3}(8.8) + 3.5(0.5055) = 28.87$$

$$\delta_{23} = \delta_{32} = -\frac{1}{3} b^3 \frac{J_c}{J_3} = -\frac{1}{3} \times 2.25^3 \times 4.23 = -\frac{9.25}{3} \times 4.23 = -13.05$$

$$\delta_{33} = \frac{b^3}{3}\left(\frac{J_c}{J_3}\right) + h_3\left\{\frac{J_c}{F_3}\left(\frac{l}{a}\right)^2 + \frac{J_b}{F_3'}\left(\frac{b}{a}\right)^2\right\}$$

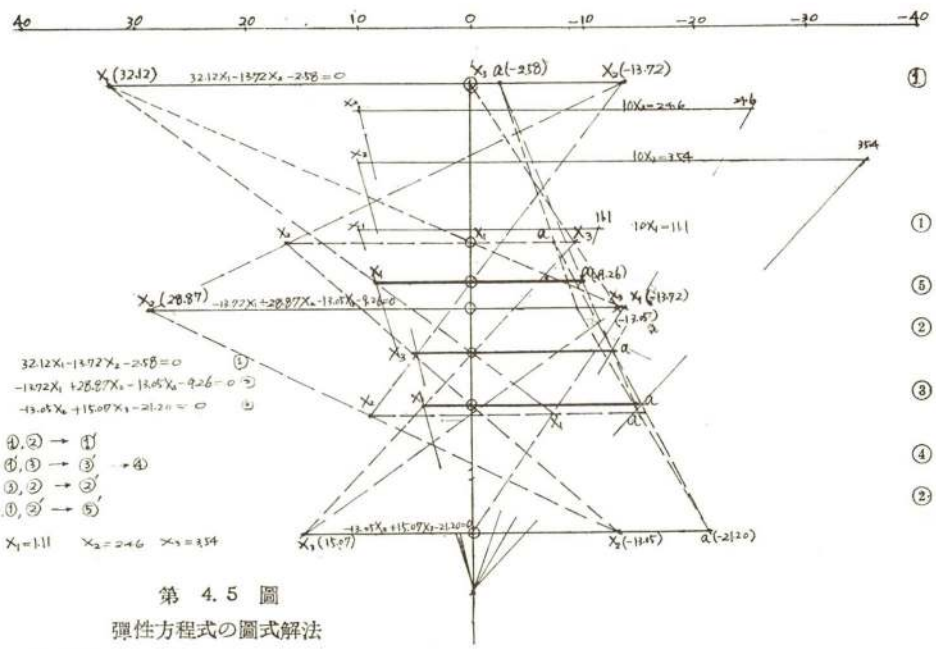
$$= \frac{2.25^3}{3}(4.23) + 4.00\{0.22(1.5)^2 + 0.22(0.5)^2\} = 13.05 + 2.02 = 15.07$$

$$\delta_{10} = \frac{h_1 m_1}{a}\left(\frac{J_c}{F_1}\frac{l}{a} + \frac{J_c}{F_1'}\frac{b}{a}\right) = 4.00 \times \frac{9.000}{4.50}(0.222 \times 1.5 + 0.22 \times 0.5)$$

$$= 8.00(0.33 + 0.1) = 3.44$$

$$\delta_{20} = \frac{h_2 m_2}{a}\left(\frac{J_c}{F_2}\frac{l}{a} + \frac{J_c}{F_2'}\frac{b}{a}\right) = 3.5 \times \frac{36.900}{4.50}(0.43) = 12.35$$

$$\delta_{30} = \frac{h_3 m_3}{a}\left(\frac{J_c}{F_3}\frac{l}{a} + \frac{J_c}{F_3'}\frac{b}{a}\right) = 3.5 \times \frac{84.200}{4.50}(0.43) = 28.20$$



第 4.5 圖

彈性方程式の圖式解法

彈性方程式は次の如くなる。

$$32.12X_1 - 13.27X_2 = 3.44 \quad (2.58) \cdots\cdots (1)$$

$$-13.72X_1 + 28.87X_2 - 13.05X_3 = 12.35 \quad (9.26) \cdots\cdots (2)$$

$$-13.05X_2 + 15.07X_3 = 28.20 \quad (21.20) \cdots\cdots (3)$$

絶對項はその3/4となる

この方程式を圖式にて解いて

$X_1 = 1.11$　　$X_2 = 2.46$　　$X_3 = 3.54$

を得る。

4,7. 耐震壁、外側柱及び內側柱にかかる軸壓縮力の算定

$S_0 = \frac{m_n}{a}$; $\frac{9.000}{45} = 2.000$; $\frac{36.900}{4.5} = 8.200$; $\frac{84.200}{4.5} = 18.700$

$S_1 = X \times \frac{b}{a} = 1.5X$（外側柱に對して）

$S_1 = X \times \frac{l}{a} = 1.5X$（內側柱に對して）

外側柱

$0.5X_1 = 0.55$　　$0.5X_2 = 1.23$　　$0.5X_3 = 1.77$

$1.5X_1 = 1.65$　　$1.5X_2 = 3.69$　　$1.5X_3 = 5.31$

$a = 4.50$m　　$b = 2.25$m　　$l = 6.75$m

$\frac{b}{a} = 0.5$　　$\frac{l}{a} = 1.5$

	Q	外側柱			內側柱		
		S_0	S_1	S	S_0	S_1	S
Ⅲ	1.11	− 2.000	0.550	− 1.450	+ 2.000	−1.650	+ 0.350
Ⅱ	1.35	− 8.200	1.230	− 6.970	+ 8.200	−3.690	+ 4.510
Ⅰ	1.08	−18.700	1.770	−16.930	+18.700	−5.310	+13.390

$X_2 - X_1 = 2.46 - 1.11 = 1.35$

$X_3 - X_2 = 3.54 - 2.46 = 1.08$

	外側柱	內側柱
Ⅲ	−1.450kg	+0.350kg
Ⅱ	−6.970kg	+4.510kg
Ⅰ	−16.930kg	+13.390kg

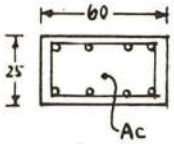
4,8. 柱斷面の檢算

		軸壓縮力			假定斷面			
		垂直荷重	水平荷重	合計	柱巾 b	柱成 h	鐵筋	安全耐力
外側柱	Ⅲ	11,000	1,450	12,450kg	60	25	8φ−16mm	1741 × 45 78,500kg
	Ⅱ	22,000	6,970	28,970kg	60	25	4φ−16mm 4φ−22mm	1849 × 45 88,200kg
	Ⅰ	34,500	16,930	51,430kg	60	25	8φ−22mm	1953 × 45 88,700kg
內側柱	Ⅲ	13,500	0,350	13,850kg	60	25	8φ−16mm	78,500kg
	Ⅱ	27,000	4,510	31,510kg	60	25	4φ−16mm 4φ−22mm	83,200kg
	Ⅰ	42,500	13,390	55,890kg	60	25	8φ−16mm	88,200kg

$f_c = 45$kg/cm とすれば所要コンクリート斷面積は次の如くなる。

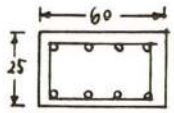
$\frac{12,450}{45}=276.5\text{cm}^2$　　$\frac{28,970}{45}=643\text{cm}^2$　　$\frac{51,430}{45}=1140\text{cm}^2$

$\frac{13,850}{45}=308\text{cm}^2$　　$\frac{31,510}{45}=700\text{cm}^2$　　$\frac{55,890}{45}=1242\text{cm}^2$



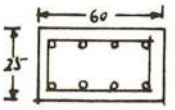
8φ~16mm (16.085cm²)

$A_c+15A_s=60\times25+15\times16,085=1,500+241=1,741\text{cm}^2$



4φ~16mm (8.043cm²)
4φ−22mm (15.205cm²)

$A_c+15A_s=60\times225+15(8.043+15.205)$
$=1,500+349=1,849\text{cm}^2$



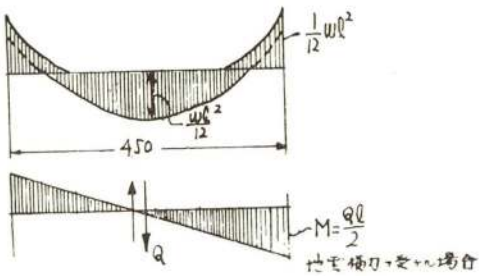
8φ~22mm (30.411cm²)

$A_c+15A_s=60\times25+15\times30,411=1.500+453=1,953\text{cm}^2$

この斷面にてすべて安全なり。

4,9. 中央梁斷面の檢算

曲げモーメントの算定



垂直荷重に對しては圖の如く假定す

$\frac{wl_2}{12}=\frac{1.00\times4.50\times800}{12}\times4.50$
$=1.350\text{kgm}=1.35\text{tm}$

$M=\frac{Ql}{2}=\frac{1.11\times4.5}{2}=2.50\text{tm}$

$\frac{1.35\times4.5}{2}=3.04\text{tm}$

$\frac{1.08\times4.5}{2}=2.44\text{tm}$

曲げモーメントの合計　2.500 + 1.350 = 3.850tm

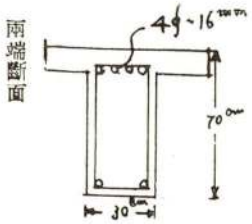
3.040 + 1.350 = 4.390tm

2.440 + 1.350 = 3.790tm

兩端斷面　$M=Cbd_2$　　$b=30\text{cm}$　　$d=60\text{cm}$ と假定す

$C=\frac{4.390}{30\times60_2}=\frac{439000}{108000}=4.06$　　$m_t=250$

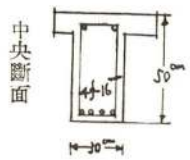
$A_s=\frac{30\times60}{250}=\frac{1800}{250}=7.2\text{cm}^2$　　4φ−16mm(8.043cm²)

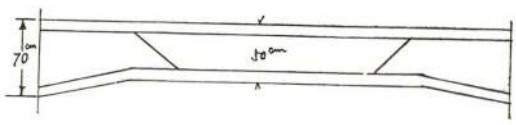


中央斷面 $b=30\text{cm}$ $d=40\text{cm}$ と假定して

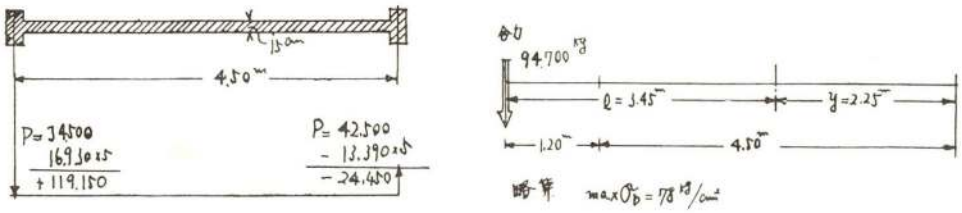
$$C=\frac{135000}{30\times 40_2}=\frac{135000}{48000}=2.81 \qquad m_t=1000$$

故に斷面は圖の如くなす





柱及び壁體を別々に考へずにその兩者を一體と考へれば一階の耐震壁及柱の受ける壓縮力は次圖の如くなる。



第 4.6 圖

第五章　地震横力に依る有壁ラーメン柱の變形量の算定及び有壁ラーメン各層の撓みの算定

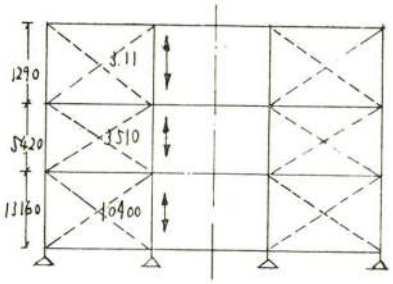
5,1. 水平横力に依る柱の變形量

		軸壓縮力 S kg	柱斷面積 F cm²	添加斷面積 F_0 cm²	$F+F_0$ cm²	變形量 $E\Delta$
外側柱	Ⅲ	1.450	0.292	0.158	0.450	12.90
	Ⅱ	6.970	0.292	0.158	0.450	54.20
	Ⅰ	16,930	0.292	0.158	0.450	131.00
內側柱	Ⅲ	.350	0.292	0.158	0.450	3.11
	Ⅱ	4.510	0.290	0.158	0.450	35.10
	Ⅰ	13,390	0.292	0.158	0.450	104.00

$$E\Delta=\frac{Sl}{F}=1.450\times\frac{400}{.450}=12.90 \qquad 0.350\times\frac{4.00}{.450}=.311 \quad \text{Ⅲ}$$

$$6.970\times\frac{3.50}{.450}=54.20 \qquad 4.510\times\frac{3.50}{.450}=35.10 \quad \text{Ⅱ}$$

$$16.930\times\frac{3.50}{.450}=131.60 \qquad 13,390\times\frac{3.50}{.450}=104.00 \quad \text{Ⅰ}$$

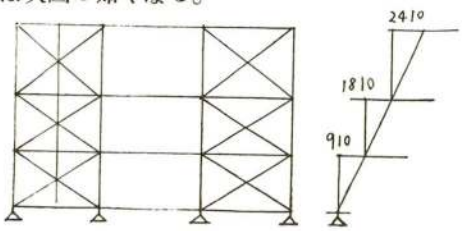


第 5.1 圖

5,2. 有壁ラーメン各層の撓みの算定

$E\Delta$ が解ればこれより Williot の變形圖により此の置き換へトラスの變形を求め、各層の撓みを求めてこれを耐震壁の地震横力に依る撓みの近似値とする。

但し對角線材の變形はこれを無視し、その代りにこの置き換へトラスは實際は不靜定であるが、靜定になる樣片側の對角線材のみに最大撓みの出る樣に撰ぶものとする、しからば各層の撓みは次圖の如くなる。



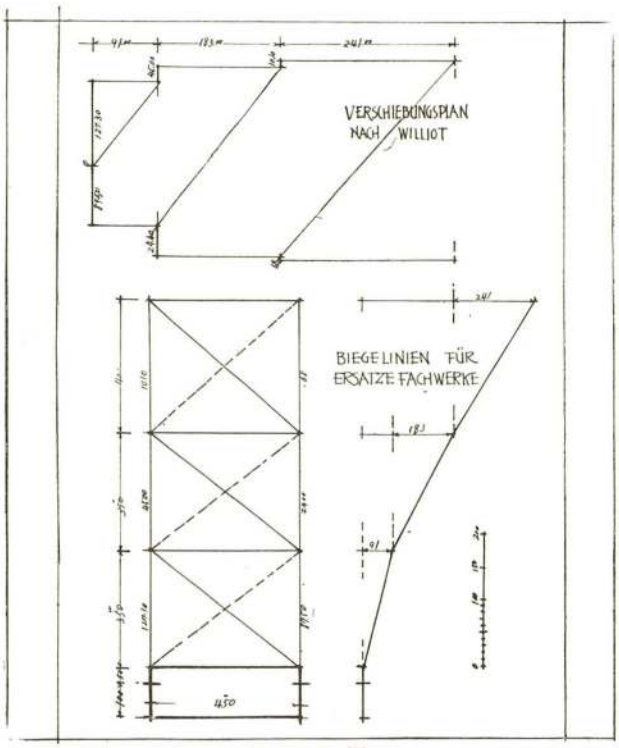
$$ER_3=\frac{24.10}{4.00}=6.00$$

$$ER_2=\frac{18.10}{3.50}=5.17$$

$$ER_1=\frac{9.10}{3.50}=2.59$$

（取消し）
第5.2圖左側
左より二番目
の線はなきも
のとす

第 5.2 圖

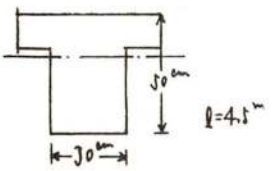


第 5.3 圖

第六章　三層一張間柔ラーメンの計算

6,1. 各部材二次モーメント及び剛度の算定

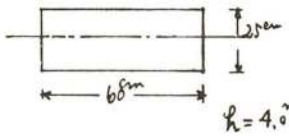
梁



$$J=\frac{bh^3}{12}=\frac{30\times50^3}{12}=\frac{1}{12}(1500\times2500)=313000\text{cm}^4$$

$$K=\frac{313000}{4.50}=696\text{cm}^3 \qquad (1)$$

柱



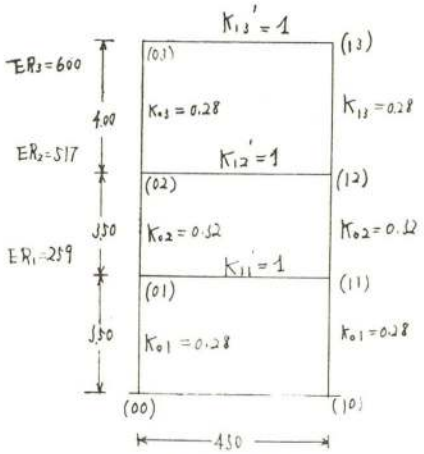
$$J=\frac{60\times25^3}{12}=\frac{1}{12}(1500\times25\times25)=78200\text{cm}^4$$

$$K=\frac{78200}{3.50}=223.5 \qquad (0.32)$$

$$K=\frac{78200}{4.00}=196.0 \qquad (0.28)$$

6,2. 横力に對するラーメンの解法

次圖のラーメンを解けばよい事となる。



第 6. 1 圖

	左邊			右邊		
	θ_{01}	θ_{02}	θ_3			
1	4.28	0.32		0.96×259	0.96×517	
2	0.32	4.2	0.28		0.96×517	0.84×600
3		0.28	3.56			0.84×600

$E\theta_{01}=158$ $ER_1=259$ $0.28\times3=0.84$

$E\theta_{02}=217$ $ER_2=517$ $0.32\times3=0.96$

$E\theta_{03}=124.5$ $ER_3=600$

$M_{\overline{00}}=-396\text{kgm}$

$M_{01}'=948\text{kgm}$ $295+651=947\text{kgm}$

$M_{\underline{01}}=-295\text{kgm}$

$M_{\overline{01}}=-651\text{kgm}$

$M_{02}'=1310\text{kgm}$ $613+696=1309\text{kgm}$

$M_{02}=-613\text{kgm}$

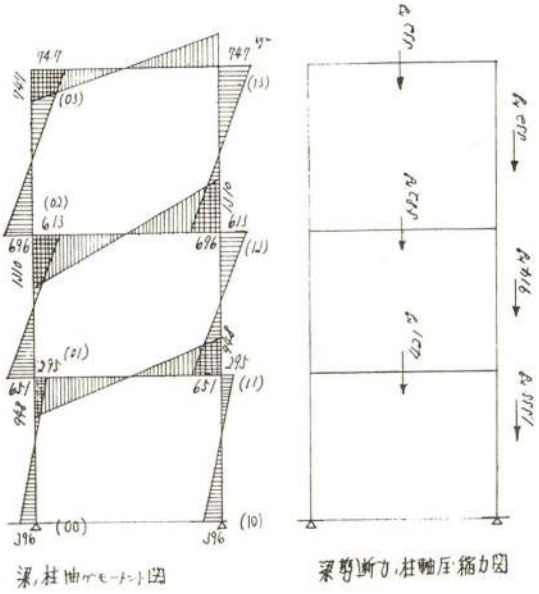
$M_{\bar{02}}=-369\text{kgm}$

$M_{03}=747\text{kgm}$

$M_{\bar{03}}=-747\text{kgm}$

6.3. ラーメン各部材の應力圖

ラーメンを解いて次圖の如き應力圖を得る。



梁，柱曲ゲモーメント圖　　梁剪斷力，柱軸壓縮力圖

第 6.2 圖

梁剪斷力

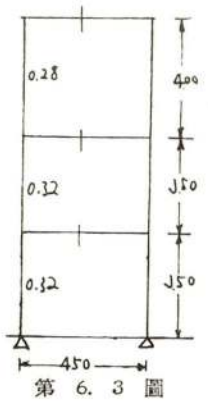
$\frac{747\times2}{4.50}=332\text{kg}$ Ⅲ

$\frac{1310\times2}{4.50}=582\text{kg}$ Ⅱ

$\frac{948\times2}{4.50}=421\text{kg}$ Ⅰ

內側柱は尙この他に Cantilever による Moment を生ず

6,4. 垂直荷重に對する計算



第 6.3 圖

屋根荷重 $W=7.200+1.800=9.000\text{kg}$

一般階荷重 $W=7.400+1800=9.200\text{kg}$

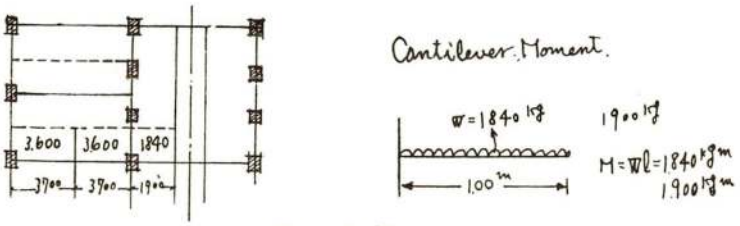
荷重項

$$C=\frac{Wl}{12}=\frac{9.000\times4.5}{12}=3.38\text{tm}$$

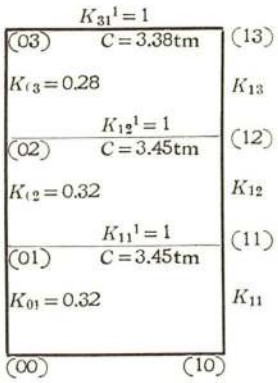
$$C=\frac{Wl}{12}=\frac{9.200\times4.5}{12}=3.45\text{tm}$$

$$\frac{Wl}{8}=C\times\frac{3}{2}=5.06\text{tm}$$

$$-\frac{Wl}{8}=C\times\frac{3}{2}=5.17\text{tm}$$



第 6. 4 圖



第 6. 5 圖

	左 邊			右 邊
	O_{01}	O_{02}	O_{03}	$Wl/12$
1	2.2	0.32		3.38/2E
2	0.32	2.2	0.28	3.45/2E
3		0.28	1.36	3.45/2E

$\theta_{01}=1.37$ $\theta_{02}=1.12$ $\theta_{03}=2.01$

$M_{01}=0.767$ $0.767+1.235=2.020$

$M_{\overline{01}}=1.235$

$M_{01}'=-2.080$

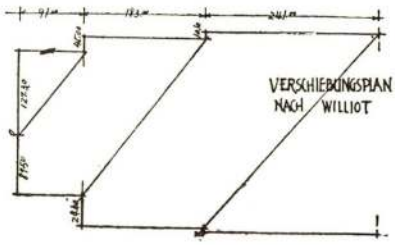
$M_{02}=1.155$

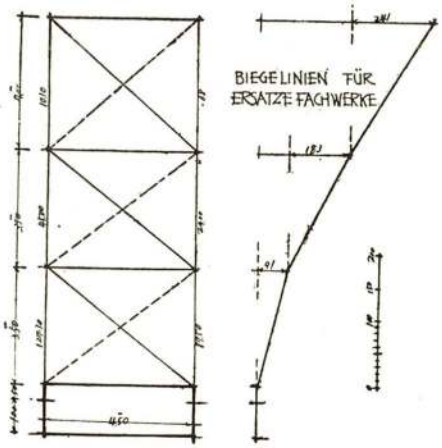
$M_{\overline{02}}=1.190$ $1.155+1.190=2.345$

$M_{02}'=-2.320$

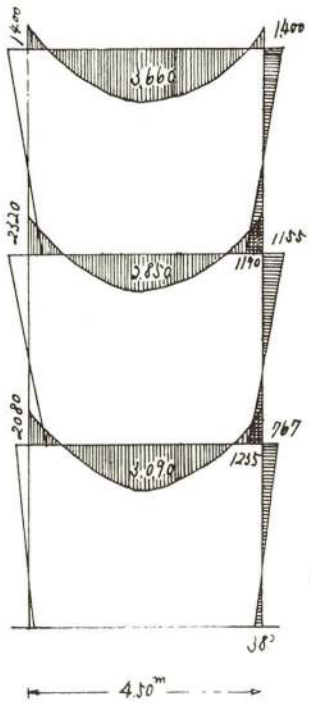
$M_{03}=1.440$

$M_{03}'=-1.370$





6,5. ラーメン各部材の應力圖



梁中央の曲げモーメン

5.060−1.400＝3.660kgm

5.170−2.320＝2.850kgm

5.170−2.080＝3.090kgm

梁剪斷力

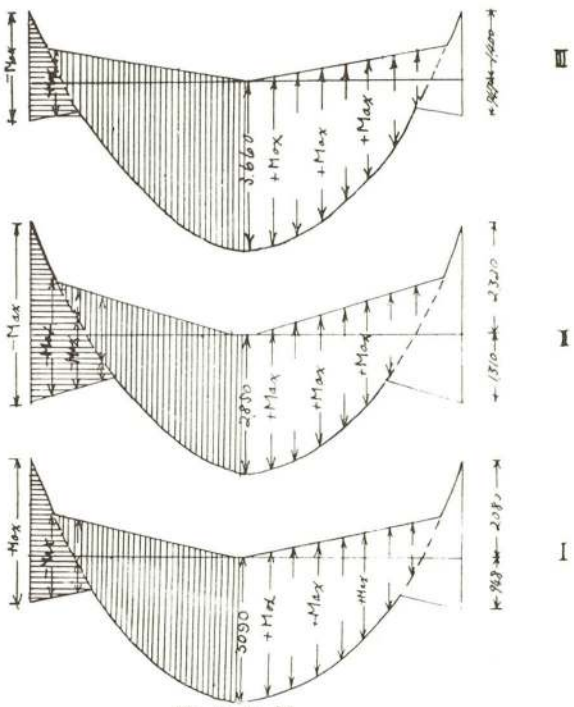
$$Q=\frac{W}{2}=\frac{9.000}{2}=4.500\text{kg}$$

$$\frac{9.200}{2}\ 4.600\text{kg}$$

第 6.6 圖

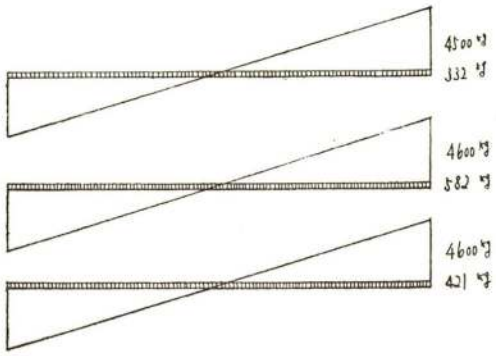
6,6. 梁及び柱の應力合成圖

梁・曲げモーメント

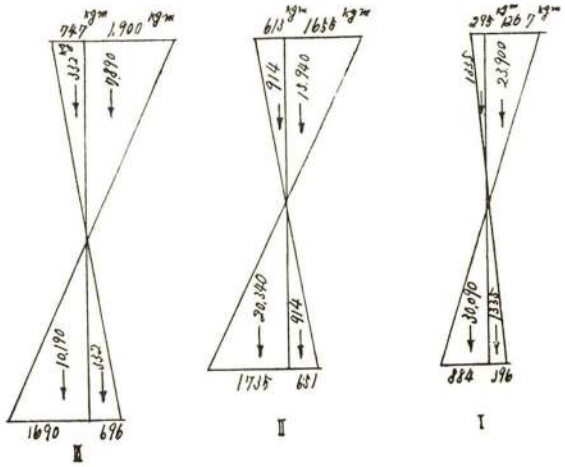


第 6.7 圖

梁　剪　斷　力



柱曲ゲモーメント
軸　壓　縮　力



第 6.9 圖

第七章　部材斷面計算

7,1. 床　　版

$4.50^{m} \times \frac{4.50^{m}}{2}$ の Panel ; 荷重700kg/m²

計算省略　　有効成 $d=6.9$cm　9mmφ-12cm間　床版厚 $D=13$cm とす

7,2. 大　　梁

梁の曲げモーメント中最大のものを採る。

$M=3{,}630$tm

$b=30$cm,　$d=40$cm と假定す

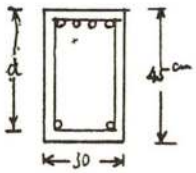
$M=Cbd^2$ なる故　$C=\frac{M}{bd^2}=\frac{363.000}{30\times 40^2}=7.63$

坂博士の圖表により　$m_t=130$

鐵筋斷面積を A_s とすれば

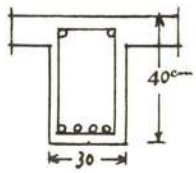
$$A_s=\frac{30\times 40}{130}=\frac{1200}{130}9.23\text{cm}^2$$

2φ-16mm　4.021
2φ-19mm　5.671　) 9.692cm²



2φ-16mm
2φ-19mm
2φ-19mm

$M=3{,}660$tm なる中央部斷面は Platten Balken とすればその成を 40cm となし得る



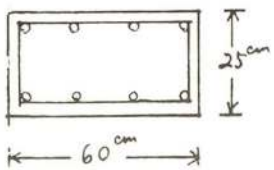
$b=30$cm　　$d=35$cm

7,3. 柱

三　階

$M=2{,}386$tm　　$P=10{,}522$tm

斷面を圖の如く假定すれば　$e_1=\dfrac{M}{PD}=\dfrac{2{,}38600}{1{,}0522\times25}=0.9$　　坂博士圖表に依り



8ϕ-19mm(22.682cm^2)

$m=\dfrac{60\times25}{22.682}\fallingdotseq63$　　$C=5.5$

$n_1=0.6$

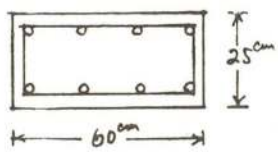
コンクリートの應力　$f_c=\dfrac{P}{BD}C=\dfrac{10{,}522\times5.5}{60\times25}\fallingdotseq38.8\text{kg/cm}^2<45\text{kg/cm}^2$

中軸　$n=n_1d=0.6\times25=15$

鐵筋の應力　$f_t=\Sigma f_c\dfrac{D-n-d_t}{n}=15\times38.8\times\dfrac{25-15-5}{15}\fallingdotseq200\text{kg/cm}^2<1200\text{kg/cm}^2$

二　階

$M=2{,}386$tm　　$P=21{,}254$kg



8ϕ-22mm($30{,}411\text{cm}^2$)

$m=\dfrac{60\times25}{30{,}411}=49$

$e_1=\dfrac{2{,}386}{21{,}254\times25}=0.45$

圖表により　$C=28$　　$n_1=0.28$　　$n=0.28\times25=7.4$cm

$f_c=\dfrac{21{,}254}{60\times25}\times2.8=40\text{kg/cm}^2<45\text{kg/cm}^2$

$f_t=15\times40\times\dfrac{25-7.4-5}{15}=604\times\dfrac{12.6}{15}=604\text{kg/cm}^2<1200\text{kg/cm}^2$

一　階　柱

$M=1{,}280$tm　　$P=31{,}425$kg

$$e_1=\frac{M}{PD}=\frac{1280.00}{41{,}425\times25}=0.162$$

二階柱ト同斷面ト假定スレバ

$m=49$　　$C=1.4$　　$n_1=0.14$

$$f_c=\frac{31{,}425}{60\times25}\times1.4=29.26\text{kg/cm}^2<45\text{kg/cm}^2$$

$$f_t=15\times30\times\frac{25-0.14\times25-5}{15}=15\times30\times\frac{16.5}{15}=49.5\text{kg/cm}^2<1200\text{kg/cm}^2$$

第八章　基礎の計算

8,1.　基礎及び繋梁の配置

圖の如く獨立基礎と單獨基礎とを混用しそれを繋梁にて連結す。

8,2.　許容地耐力度の假定及び基礎底面積と斷面の算定

地盤の許容地耐力度は基礎自重を差し引き 10ton/m² とす。

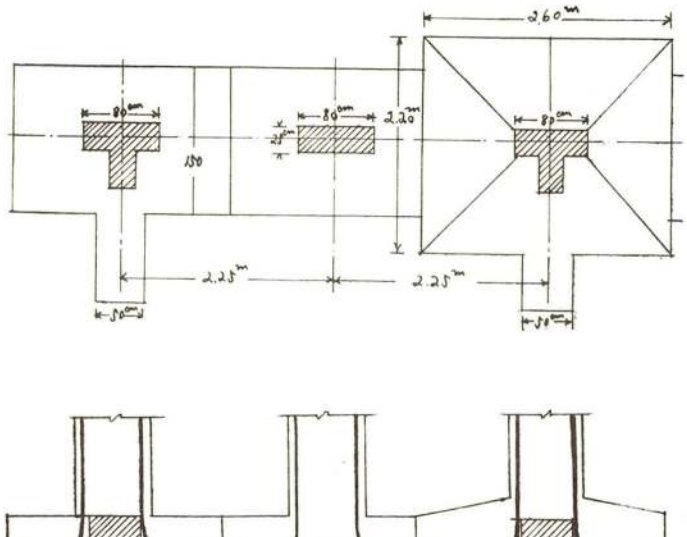
柔ラーメン柱下基礎底面積　P=31,425kg なる故

$$A=\frac{31{,}425}{10}=3.15\text{m}^2$$

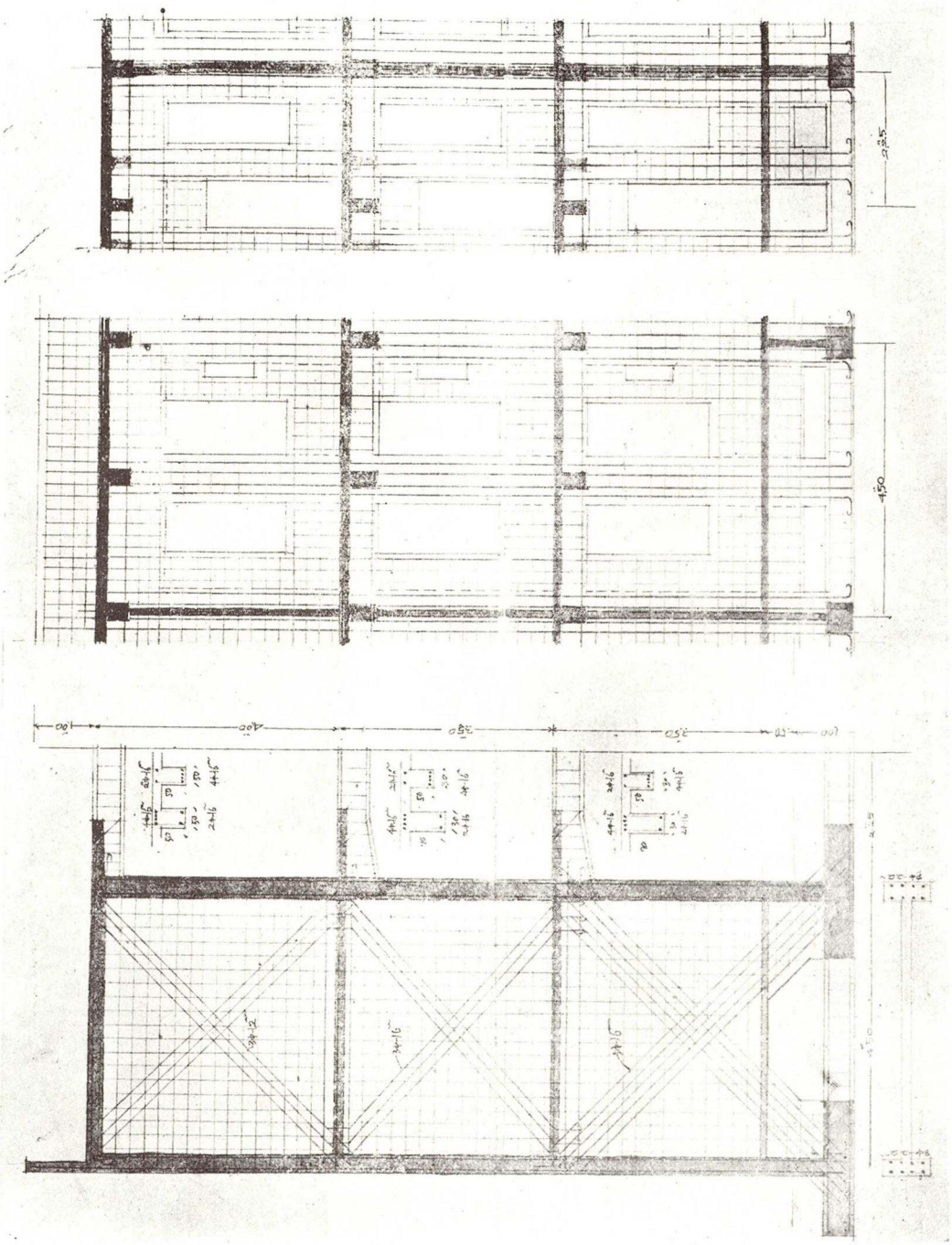
耐震壁ラーメン柱下基礎　P=56,000kg なる故

$$A=\frac{56{,}000}{10}=5.60\text{m}^2$$　　となる。

これを圖の如くなす。



第 8.1 圖



防護室に就て

芦浦義雄

目次

1. 序
2. 防護室の定義及び分類
3. 防護室の具備すべき條件
   a. 敷地の選定
   b. 位置の決定
   c. 平面計畫
   d. 構造
   e. 設備
   f. 其他の條件
4. 防護室の實例
5. 結び

1. 序

大戰後の驚異的研究的航空機の發展は文明に資するところ大であるが、この航空機こそいざ戰爭となると恐るべき魔物として天空に跳梁するであらう事は、唯しもが危懼するところである。然も將來の戰爭が都市空襲に終始するであらうことを思ふ時、我國の如き無防備都市の被る被害を豫想し、轉た戰慄を禁じ得ない。

都市防空とは空襲禍を最小限にすることであり、大は防空軍備、防空的都市計畫より、小は個人防護の如き手段が在るが、煎ぢ詰めれば都市構築物の保全と、人命の擁護とであらう。前者は都市構築物を破壞されざるものに改造するが、然らざれば破壞されても被害を輕減し、復舊に容易なるものとすればよいのであるが、我國現狀の如き木造都市に於て、被害の局限を目的とするならば消防の一途あるのみである。後者の爲には我國々情より考ふるに、手近に適當なる空襲避難所を設くるより他に道はあるまい。

空襲下に於て避難所が必要であることは衆知の事實であるが、其の一、二の事例を擧ぐれば、歐洲大戰に於ける空襲による爆彈の被害程度を見るに、無防備の初期と、避難所其他の防空施設の稍備はつた末期とでは著しい差異を示し、1915年に於ける獨逸に對する飛行機一機に就ての死傷者數千人、英國に對する航空船一隻に就ての死傷者數20人が、1918年には夫々0.4人に及び2.0人、即ち1/10に減少してゐることを見てもわかる。最近に於けるエチオピア事變、スペイン革命に關する報道を以てしても、空襲に際してより完備せる避難所の必要を痛感する次第である。

然らば空襲避難所として如何なる箇所が最適であるか、それは裏山でもなければ、郊外でもない、完備せる防護室あるのみである。そしてこの防護室構築こそ我々建築技術家によらねばならぬ事柄であり、我々が力を致さねばならぬ防空義務の一端であらう。

飜つて外國諸都市の狀態を見るに、ベルリンには1935年3月迄に完成した防護室は8,000

個を數へ、パリには同年10月迄に 27,000 個の多數防護室を完成してゐる。

然るに我國には未だ完備せる防護室の出現を見ない。昭和4年名古屋防空演習に際し、千種器機製作所に地下避難所が設けられ、昭和9年大阪防空演習當時市内某所に地上單獨防護室が設けられたことを耳にした外は、日本廣しと雖も皆無である。

防空演習に際し、避難所或は防護室なる貼紙をなして滿足してゐる有樣であるが、これでは折角行つてゐる避難演習も、いざ空襲となると何の役にも立たず、徒勞に歸するであらう。

我國都市が防護室を必要とする現下の狀勢に於て、市民に對する徹底せるこれが普及を必要とするのであるが、之に先立ちて先輩建築家諸賢に防護室に就て、再認識して頂く必要があるのではないかと思はれる。

以下防護室計畫並びに實例に就て概說し、御參考に供したいと思ふ。

2. 防護室の定義及び分類

空襲避難所とは、空襲より逃れる所謂避難場所を指して、廣義の意味に用ひる言葉であり、單獨に設けたもの、建築物地下部分、地下鐵、地下道、坑道或は壓壕等を用ひる**地下避難所**を始めとし、建築物地上部分を用ひるもの、或は組立式、移動式のものの他郊外とか野外等をも含む**地上避難所**、船内に設けるもの、船舶自身或は水上飛行機等の隱れる**水上避難所**等の構築物又は非構築物のあらゆるものを綜合して名付けた名稱である。

此處に防護室と云ふのは、其の内の一部で、その定義を云ふならば、**空襲を受けた際、人畜を收容し、小爆彈、可及的大爆彈の諸作用、燒夷彈、毒瓦斯等より、その生命を防護するための構築物**である。

用途上その種類を分類すれば、

(1) 專用防護室

　　自家用防護室　　一家族又は一會社の專用とし、特定人を收容する目的のもの。

　　共同防護室　　數家族又は數會社の專用とし、特定人を收容する目的のもの。

(2) 公共用防護室　　步行者、附近居住者、或は顧客等、一般人を收容する目的のもの。

(3) 特殊防護室

　　軍用、防護團用防護室、救護を主とする防護室、

等となるが、之等の内(1)と(2)、或は(2)と(3)の如く二種以上を兼ねるものあるは當然である。

3. 防護室の具備すべき條件

防護室の具備すべき條件とは、前述の定義に於て述べた、防護室の目的の夫々を滿足せ

しむればよいのであるが、以下防護室計畫の概說を行ひ、其の中で特に重要なる條件はゴチツク體を以て表はしておく。

a. 敷 地 の 選 擇

防護室建設敷地選擇上必要なる條件を擧ぐれば、

(1) 對爆彈上　爆彈による被害の可及的小なる所、

(2) 對瓦斯上　毒瓦斯が成可く小時間に逸散し易き場所、

(3) 對火災上　附近よりの火災延燒無しと認められる所、

(4) 用 途 上　**場所がわかり易く、單時間に達し得る場所、**

(5) 配 置 上　多人數を迅速に收容し、萬一の場合の被害を局限する爲成可く分散配置せしむ、

等の事柄がある。

b. 位 置 の 決 定

防護室を地上に取るか、地下に設けるかは夫々利害得失が存するが、耐彈、耐火、耐瓦斯の三問題の内最も難物とされてゐる。耐彈上の問題の解決に比較的有利なのはやはり地下である。そしてそれは**地下深部であればある程よい**。之が爲には建築物地下室を利用するのが得策ある。

地下に防護を設くることは、地下に隱れると云ふ觀念が避難する人々に非常な安心を與へるし、又地上の爆音、騷音から遠ざかることが出來る故、避難者に不安焦躁の感を與へないと利點がある。

毒瓦斯は空氣より比重が重いものであるから、下へ下へと流れる傾向がある故、地下に防護室を設けることは一見不利であるかの樣に思へるが、これは比較的簡單に防禦し得る。又地下室が衞生上不利であると云ふことも、適當なる設備により解消し得る問題である。そして前記の利點は之等缺點を補つて餘りあるものであるが故、防護室は地下に設けるのが至當であらう。

c. 平 面 計 畫

防護室內に必要とする諸室は、その種類、用途、模等により異つてくるが、その總てを擧ぐれば次の如き四種類の室がある。

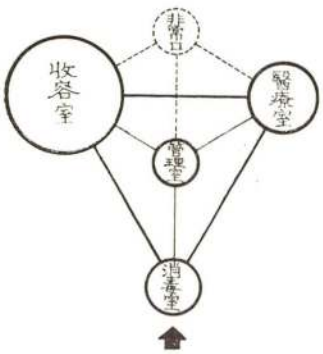
(1) 消毒室關係　前室、消毒室、シヤワー室、脫衣室、著衣室、倉庫等。

(2) 收容室關係　一般收容室、輕患者收容室、重患者收容室、便所、畜類收容室、倉庫等。

(3) 醫療室關係　氣體瓦斯患者醫療室、液體瓦斯患者醫療室、醫局、藥湯室、患者待合室、倉庫等。

(4) 管理室關係　管理人室、通信室、瓦斯鑑別室、機械室、貴重品預場、倉庫等。

然し之等の總てが設けられるとは限らず一室にて、二三の目的を兼ねる場合が多い。



第1圖・防護室各室連絡關係圖

そして之等諸室の間には第1圖の如き連絡關係が保たれねばならぬ。

之等諸室の相互的配置の巧拙は、懸つてその機能循行の遲速に影響すること大なる故。一室たりとも其の配置を誤つてはならぬ。出入口の位置、室面積、室型體等も重要なる條件を帶びて居るのは當然である。

最も基本的な平面を示せば第2圖の如くで、避難者を收容する收容室と、毒瓦斯の侵入を防ぐ前室とから成立ち、飮料水、器具類の置場、便所並びに非常口が附隨してゐる。

即ち平面計畫に於ける必要條件を要約すれば、

(1) 出入口　**出入口は必ず2箇所に設け、然も其相互の位置は成可く隔たつた所に設ける。**これは爆彈により被害を被つた場合、同時に兩方の口を塞がれることを避くる爲である。又出入口を設くる際、その方向は可及的爆彈の遠距離作用を避け得る方向とする。

(2) 前室　如何なる場合でも**收容室の入口には前室を設け、毒瓦斯の直接侵入するを防ぐ。**

(3) 收容室　**收容室の型は長方形とし、大規模に亘らざること、**即ち小室を多數設くる方がよい。これはパニックを生ぜしめぬ爲でもあり、萬一の場合の被害を局限せんが爲である。又室型を長方型とすれば、兩端に出入口、非常口が設けられ、使用に際して順序よく混雜せず出入し得る利點が生じる。尙1室の收容人員は50人以下を一單位としたいのであるが、これは非常時に際して果して嚴守し得るものかどうか疑問である。

第3圖は上述の要件を滿足せしめるやうに計畫した、專用、公共用を兼ねたる建築物地下大防護室の一試案である。建物內居住者、通勤者は防毒階段により、街路通行者、附近住民はスロープによつて夫々地下室に下り、前室を通り、消毒室に至るのであるが、ここで管理人又は醫師の檢視の下に次の三通りに分たれる。

健康者は直ちに收容室に收容される。

氣體瓦斯患者は患者待合室を通り瓦斯患者醫療室にて治療を受け患者收容室に收容される。

液體瓦斯患者は脫衣室にて汚毒衣類を脫ぎ、シャワーにて身體を洗滌し、着衣室にて新しき衣類の交付を受け、瓦斯患者醫療室にて治療を受け患者收容室に收容される。

避難中萬一建物が爆破され、危險に



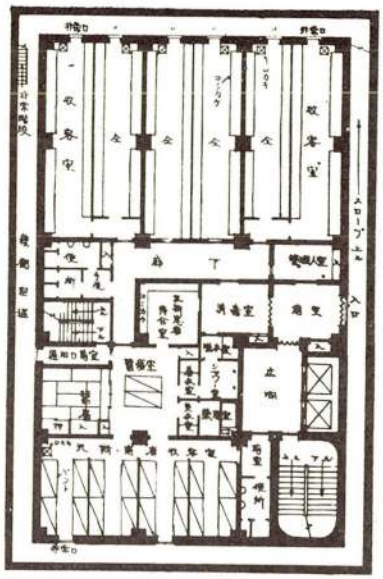
第2圖・防護室の基準型

立至つた場合は各室に付いて居る非常口から脫出することが出來る。尙各室の用法、諸施設に關しては設備の項を參照されたし。

d. 構　　造

防護室の構造は破壞爆彈、燒夷彈、毒瓦斯等に對して考慮されねばならぬ。

(1) 破壞爆彈に對し **構造主體は可及的耐爆構造とせねばならぬ**。耐彈材料にして大量的に使用し得るものとして、現在最も有望視されておるものはやはり鐵筋コンクリートであらう。併し乍らさしもの鐵筋コンクリートでも、1 噸の爆彈に對しては約 4m もの厚みでなければ耐え得られぬと云はれて居る位であるから、一般防護室の構造體として全く完全な耐彈構造は到底望むことは出來ぬ現狀にあるわけである。



第 3 圖 · 大建築物地下防護室

そこで我々は或程度迄の爆彈防禦で我慢し、それ以上のものが命中した場合は總てを斷念すると云ふ方針で行かねばならぬ。扨て然らばその限度はどの程度にすべきかと云ふ問題が生じるが、敵が携帶するであらう爆彈の重量、降下高度、降下方法等の如きものは全く知る由もなく、尙且つ爆彈は落着時の狀態及び抵抗物の狀態により、其威力は非常に異るもので、どの位の厚みがあるから、どの位の爆彈に耐え得ると斷定することは不可能な事柄である。

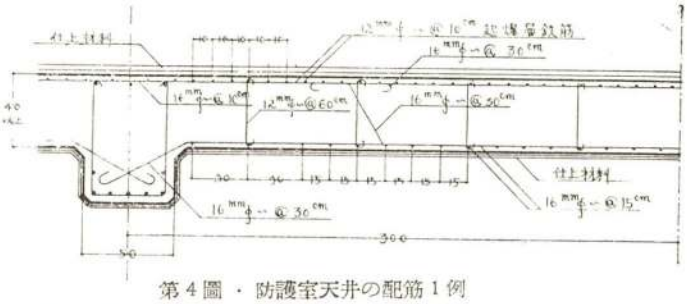
然し乍ら文獻其他のものから推察して大體次の樣な事が云へる、即ち、1 噸とか 2 噸と云ふ大爆彈は、多くは軍艦或は要塞襲擊に用ひられ、都市建築群に對しては多數の中小爆彈を以て空襲するであらうと云ふことが、一機の爆彈携行量、投下範圍の擴大等から考へられる。そこで我々は 100—300 瓲の爆彈を目標として耐彈構造を計畫すればよいであらうと云ふことになる。

屋根又は天井の防禦、防護室の屋根又は天井の防禦は、次の方針により計畫されねばならぬ。

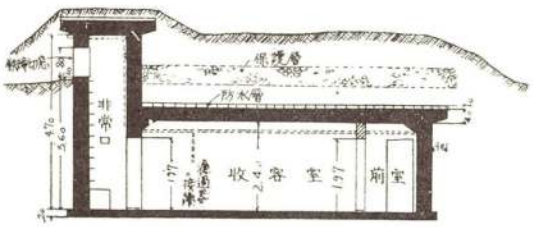
屋根又は天井に爆彈が命中した場合、その侵徹を制禦し得るに足る構造であること。

天井崩壞物が轉落し堆積しても、その重量及び衝擊に耐え得る構造であること。

この二項目であるが、爆彈制禦の役目をなす床版は合計厚が同じ場合は單層より數層の方が有効であるから、かかる床版を既に有してゐる高層建築物の地下室は最も防護室に適する。この時防護室天井は約 40cm あればよいであらう。防彈屋根、耐彈天井等種々考案されておるが、多くは鐵筋コンクリートを主體とするものであり。これを用ひるのも一法で



第４圖 ・ 防護室天井の配筋１例



第５圖 ・ 單獨防護室の天井保護層

ある。

單獨に設けられる防護室なれば 3m 以上の土被が望ましいが、上部に砂利、コンクリート、鐵材等による保護層を設くる場合はもつと淺くても支障はなからう。第４圖は防護室天井の配筋の例で、前掲大建築物地下防護室の天井の配筋法試案である。

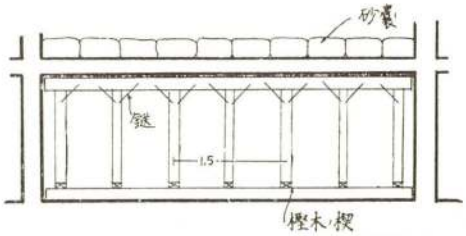
第５圖は單獨に設ける防護室上部の保護層の配置を示す。

崩壞物に就ては煉瓦造、石造が危險なので、鐵筋コンクリート造なればさほど心配することはない。建物の崩壞物は互に迫持狀をなすので、其の全重量が防護室天井にかかるのではなく、約25%重量のみが影響するものと考へてよい。又崩壞物が危險なのは其重量のみでなく、物體の隅或は棒狀の物が徹徹することであるが、何れにしても前記の天井厚を有すれば之等に抗し得と見てよいであらう。

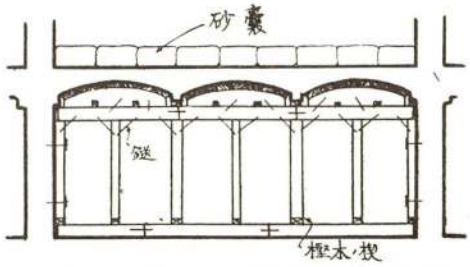
既存建築物地下室を利用する場合、之れが爲時としてその天井補助の必要を生じるが、第6、7圖の如き方法があり、木材のかはりに鐵材を用ひる場合もある。

壁體の防禦防護室壁體は原則として、地上部に表はれぬをよしとする。建築物地下防護室にして往々地上に露出する場合があるが、爆彈の爆壓、砂片、衝動波に耐え得る様にせねばならぬ。地下室側壁は從來既に相當の厚みに建築せられるものであるが 40cm 位あればよいであらう。

尙注意を要するのは、**出入口、窓其他の側壁開口部は可及的小數、且最小面積に止め、嚴重なる補強を行はねばならぬ。**補強方法としては鐵扉、木材、土壤等を併用するのであるが、第8、9、10圖は、其一例を示す。



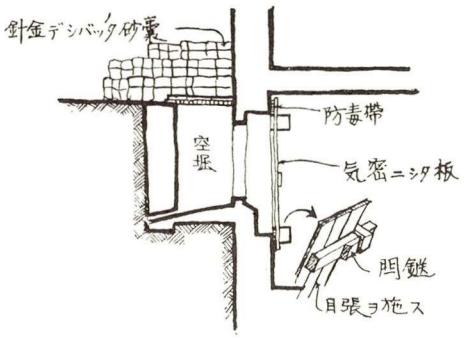
第６圖 ・ 天井がフラットの場合の木材による補強方法



第７圖 ・ 天井がアーチ型の場合の木材による補強方法

單獨防護室の構造は普通建築物地下室と同様な工法によるの外、特殊型鋼及び鐵筋コンクリートを以てなす方法が歐洲に於ては盛に用ひられてゐる。第4篇第2項、參照。

(2) 燒夷彈に對し**構造體は耐火構造とせねばならぬ**。耐彈構造であるならば當然又耐火構造であるから、燒夷彈の燒夷作用に對しても安全である。



第8圖・土壤による窓の補強

燒夷彈は一般に輕量のものが使用されると考へられており、現在の鐵筋コンクリート床板は完全にこの侵撤に耐え得ると云はれておるから、耐火構造建築物なれば問題ないことゝなる。

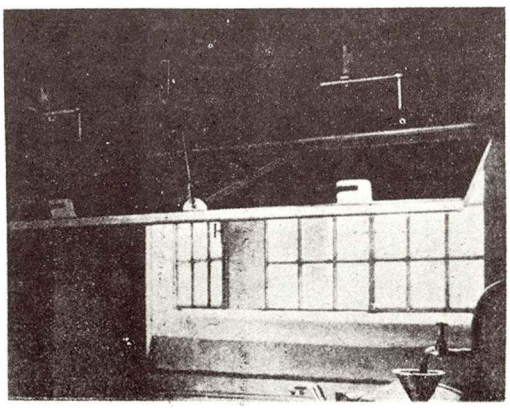

第9圖・木材による窓の補強

(3) 毒瓦斯に對し　**構造體は耐毒構造とせねばならぬ**。毒瓦斯に對する防禦は、外部構造材が毒瓦斯に損傷されず、而も吸收及び透過しないもの、消毒に便なものである事が第一要件である。コンクリート、煉瓦、石等の壁體は、イペリットの如き持久性毒瓦斯に對しても損傷されぬから、現在の耐火構造建築物であればよいわけである。たゞ注意せねばならぬのは、仕上材料として多孔質のもの、繼目の多いものは消毒に困難を生じるから留意すべきであらう。

(4) 其の他我國の如き地震國に於ては耐震構造でなければならぬ。又防護室の多くは地下構築物であるが爲、防水に對する考慮をも忘れてはならぬ。

e. 設　　備

防護室の種類、規模等により其の設備も自ら異る。防護室內避難者の數時間の生活は總て自給自足を原則とする故、之が爲に必要とする諸施設、諸設備品は萬遺漏なきを期さねばならぬ。


第10圖・鐵扉による窓の補強

然し之等は非常時を目當てに設備するものなれば、費用の點を考慮する時、生命の安全を期する最小限度に於て滿足せねばならぬであらう。若し之種機械設備に賴らずしてすむものであれば、これに越したことはないのであるが、何れにしても一時に多人數を收容し、相當の効果

を望むにはやはりそれ相應の設備を必要とする。

即ち、**防護室の設備としては防毒設備、消毒設備、換氣設備、其の他の設備並びに備品を必要とする。**

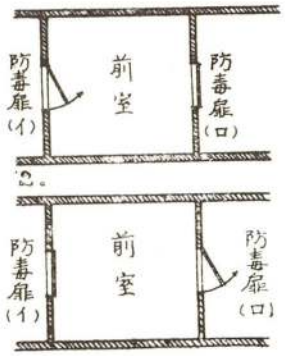
之等設備は、その運轉中止の已むなきに至るが如きことあれば避難者に不安の念を抱かしめ、或は生命の危期を生ぜしめぬとも限らぬ故、成可く頑丈な、しかも操作簡單なものを選ぶことを忘れてはならぬ。又動力によるものは萬一の場合を慮り、手働にても運轉し得るやう裝置せねばならぬ。

(1) 防毒設備

防毒設備は何をおいても先づ絕體に其の完璧を期さねばならぬものである。外部よりの瓦斯侵入を未前に防ぐ設備と、一旦侵入した瓦斯を處理する設備と二通りある。前者の爲には、總ゆる開口部の防毒設備が必要で、後者は室內空氣の消毒又は濾過の設備に依るもので後に述べる。

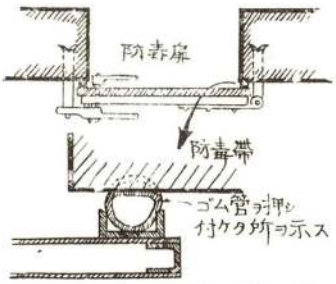
出入口の防毒　出入口は他の開口部と異り頻繁に開閉を要する箇所である故に、瓦斯の侵入を絕對に防ぐことは困難である。平面計畫に於て主要出入口の前に前室を設けるのは、侵入瓦斯量を出來るだけ最小にせんが爲に外ならぬ。そして前室の出入口に防毒扉或は防毒幕を取設くることにより、その目的を達しやうとする。

扉の開閉は第11圖の如く(イ)の扉を開く時は收容室側の(ロ)は必ず閉鎖しおき、次に(ロ)の扉を開く場合は(イ)の扉を閉ぢ、前室內の消毒を完了してから開くやうにする。扉は、室內氣壓を外氣より高むる場合は瓦斯侵入の恐れはなくなるであらうが、然らざる折は適當な氣密方法を講ずる必要あり。第12圖はその一例で、扉框にゴムチューブを繞らし、これを枠に押し付けることにより氣密を計らうとするものであるが、この外羅紗、羽根、ヘット等を用ふることも出來る。



第11圖 ・ 前室扉の開閉方法

上記の如き防毒扉の代りとして用ひられるのが防毒幕で、防水布又は應急の場合に油、水等をしませた毛布の如きものを以て圖の如く取付けるが、爆彈の爆壓の加はるが如き箇所には適しない。第13圖が開閉式、第14圖が掩上式の防毒幕である。

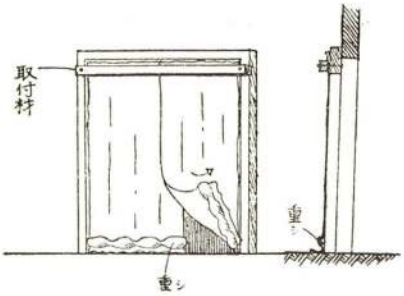


第12圖 ・ 扉の氣密方法の1例

窓の防毒　窓には構造に於て述べた如く爆彈の遠距離作用を防ぐ爲の適當な補强がなされるが、それは多くの場合外部と、內部よりと二重に行はれる。この內部よりの補强部分に防毒的考慮を拂へばよいので、間隙を塞ぐ

材料はゴム、油を滲ませた布或は紙、タール、パテ等が用ひられ、其用法は出入口氣密方法に準ずる。

其他の開口部の防毒　開口部には出入口、窓の他に通風窓、給排水、煖房等の配管孔、電氣配線の孔等があるが、前記の如き材料及び伸縮に適するコルク等を以て、充塡密閉することを忘れてはならぬ。

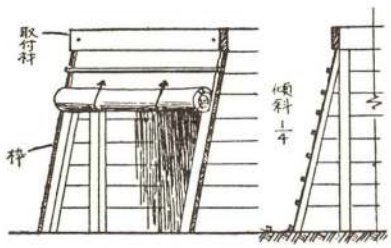


第13圖・開閉式防毒幕

防毒具類　防毒の爲の備品としては、防護員の爲の防毒マスク、防毒衣、防毒靴等の外に救急患者用マスクの如きものが入用である。

(2) 消毒設備

瓦斯檢知設備　毒瓦斯に對する防護、救助、消毒等の適確なる技術的方針は、瓦斯檢知設備の指示により發動せられたるものであるから、先づ適當な瓦斯檢知器が必要である。

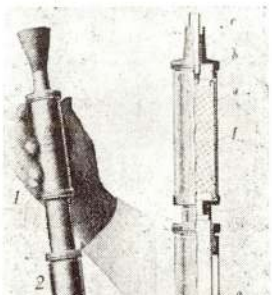


第14圖・捲上式防毒幕

從來瓦斯檢知手段として、小動物を使用することが企てられたが、——動物互に感毒性が異る爲遂に不適當であると斷定さるゝに至つた、人間の嗅覺による方法は正確であるが人道上許し難く、視覺による瓦斯雲又は瓦斯煙の認定は熟練を要する。そこで結局化學的檢知器に賴らねばならぬ事に歸する。

化學的檢知器とは種々の反應劑の色彩又は形狀の變化に依り瓦斯の存否、種類を判別するもので、その必要條件は操作の簡單なること、反應が多元的にして感度鋭敏なることである。

瓦斯鑑別室或は管理人室の一部に之等に必要なる檢毒藥、檢毒器の設備を行ふのであるが、他に携帶用檢知器の設備は當然必要である。第15圖は瓦斯探知用の携帶器具で外國品である。


第15圖・瓦斯探知用携帶器具

消毒設備　檢毒班の活動により判別せる毒瓦斯の種類に應じて消毒方針が決する。消毒室に侵入せる氣體瓦斯に對しては稀薄なアルカリ液、又水を噴霧散布したる後、自然換氣又は人工換氣により消毒するのであるが、之が爲に消毒藥、噴霧器、或は濾過器を必要とする。液體瓦斯に對しては之等の外に、液狀をなし長時間に亘り毒瓦斯を發生する時に散布する晒粉及び晒粉用シャベルの設備が入用である。

避難者にして液狀瓦斯を浴びたるものはシャワーにて洗滌せ

る後、新しき膚着を着す必要あるを以て、前室に隣接して脱衣、シャワー、着衣の諸室を設けるとよい。

醫療設備　防護室は瓦斯患者の救護作業をなさねばならぬのは當然で、醫療關係諸室即ち、診療を行ふ醫療室、藥浴をなさしむる爲の藥湯室、醫員の爲の醫局を始めとして患者待合室、病床を備へた患者收容室の必要は言を俟たぬ。設備品としては醫療藥品、器具、擔架、豫備衣類等がある。

(3) 換氣設備

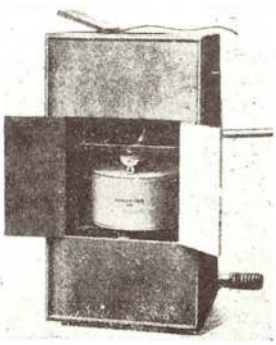
防護室の空氣量、並びに空氣狀態は避難者の生活作用と密接なる關係を有するが、始め防護室內に必要にして且充分なる空氣量を現存せしむれば問題はない。現今考へられて居る充分なる空氣量とは一人一時間一立方米であるから、三時間避難すると假定すれば一人當り三立方米の空氣量があればよいことになる。

所が防護室收容人員の定員の嚴守は、いざ空襲と云ふ際には到底不可能である。人情其他の理由により忽にして鮨詰となることを豫想せねばならぬ。之が爲の空氣量の不足は炭酸瓦斯の增加、溫度の上昇、濕度の增加、有害物質の放散、イオンの變化等を早めて呼吸困難に陷らしめることであらう。

然るが故に防護室にはやはり適當な空氣更新の設備がいる。その方法としては外部より淨化空氣を供給する法と、室內空氣を再び有効ならしむる法とがある。後者は化學藥品を使用して室內空氣を淸淨にし、失はれた酸素は酸素罐から補給せんとするのであるが費用の點で實用的でない。之に反し前者は容易に實行し得る推奬すべき方法である。

これが手段として、高所より新鮮なる空氣を取入るゝ方法は、高所の空氣が必ずしも無毒であるとは限らぬし、氣道が破壞される恐れあるを以て、淨化裝置を用ひずに行ふことは冒險である、外氣の淨化裝置さへ有しておれば、どの部分から空氣を吸入してもよい。

外氣淨化の方法としては、洗滌法と濾過法とがある。大建築に於ては旣設の空氣洗滌裝置を利用し得るが、然らざる折は總て濾過法に依らねばならぬ。この**濾過器による空氣淨化方法こそ最も推奬に價する方法である。**



第16圖・空氣濾過器(外國品)

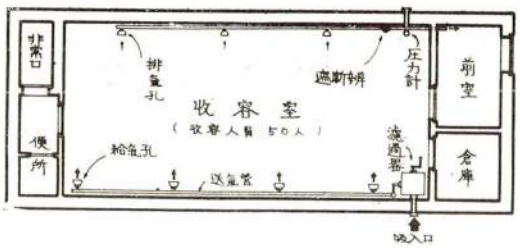


第17圖・空氣濾過器(國產品)

濾過器は瓦斯マスクと殆んど同じ機能を有するもので手動、電動を兼ねたものが多い。第16圖は外國品の一例で第17圖が國產品である。

防護室は上記濾過裝置を備ふると同時に、適當なる空氣配給管を設備するのが理想である。第18圖は換氣裝置の配置を示せ

るもので、外氣は空氣吸入口より吸入され濾過機により濾過され、送氣管を通つて給氣孔より平等に室内に供給される。一方壓力計により室外氣壓と室内氣壓の一定の差を保つ程度に於て排氣孔より不必要空氣を排泄す。その調節は遮斷辨にて行ふ、排泄せられた空氣は前室にて室内氣壓を高め、室外より毒瓦斯の侵入するを防ぐに用ひられる。



第18圖 防護室換氣設備の配置

(4) 其他の設備

電氣設備　動力用、照明用、醫療用等の電氣は送電中止の場合を慮り、大量使用を必要とする所では自家發電或は蓄電池によらねばならぬ。照明用としての懐中電燈、通信機關としての電話、ラヂオは缺く可からざるものであらう。

給水設備　飲料用、消毒用、消火用としての水は、公共水道の破壞又は汚染せられた場合を慮り、掘井戸、鑿氣等を設くるか、水槽の準備が入用である。

收容室内の設備品　休憩用椅子の外に長時間避難の場合は便所を必要とするが、其の設備のない所では置便器の用意がいる。又防護室が萬一破壞された場合の脫出用、或は修理用の非常用工具類、即ちシャベル、鶴嘴、斧、鋸等と修理材料の常設、消火用具の準備は當然必要である。その他氣壓計、濕度計等の計器、時として食料品の必要を生じる場合もある。

其他の設備品　防護室外に掲ぐる表示燈、警報器、方向指示器等。

f. 其 他 の 條 件

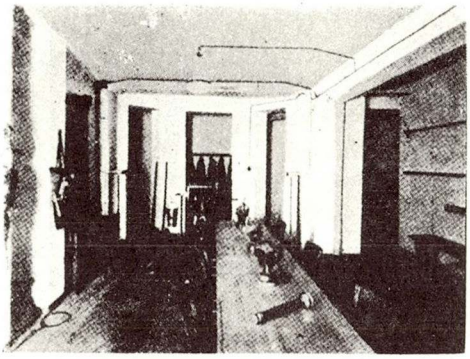
(1) 建設費用　**防護室の構築費は新設にしろ、既存建築の改造にしろ成可く低廉でなければならぬ。**この意味から云つても高層建築物地下室の利用は得策である。

(2) 常時の用途　防護室は戰時を目當てに築造するものであるが、之が**常時の用法は建築當始から充分考慮が拂はれねばならぬ。**即ち、用途の共通點を見出し適當なる配置を行へばよいので、設備等に就ても同じことが云へる。

(3) 管理方法　**防護室が常時に於て他の用途に供されつゝあるも、絶えず本來の防護室としての機能を充分持續せねばならぬ。**之が爲には一定の責任者を定め、一切の管理を行はしめるとよいと思ふ。次で諸設備の定期點檢、使用に關する常時よりの訓練をも行ふ必要がある。

4. 防 護 室 の 實 例

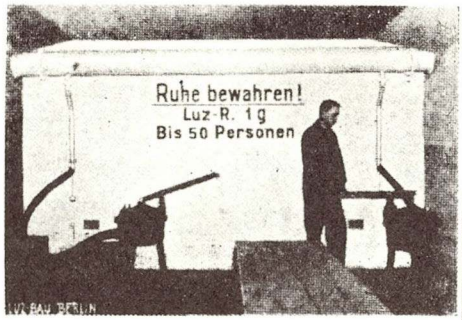
最近に於ける獨逸の防護室實例數種を御照會する。之等を大別すると建築物地下室を利用せるものと、單獨に設けられたるものゝ二種となる。



第19圖 ・ 建築物地下防護室（其1）



第20圖 ・ 建築物地下防護室（其2）



第21圖 ・ 建築物地下防護室（其3）

立して設けられ、約 110名の收容能力を有するものである。

第23圖が其の平面及斷面であるが、これによつて見るが如く、巧な各種の配置をなしてゐる。收容室は二つの部分に分たれ夫々休憩用椅子の外に二段になつた病床と、便所2箇所とを有しており、管

（1）建築物地下室を利用せるもの

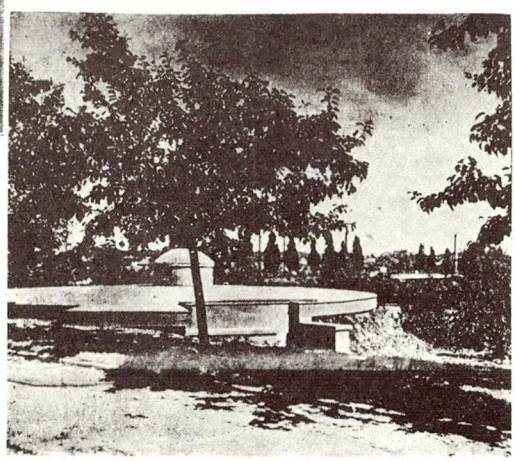
第19圖は主として防護團員の詰所に當てられた大防護室で、非常用工具、ガスマスク、懐中電燈等の器材が用意されて居るのが見える。

第20圖は Hamburg 市内の一街區の改造に際して、新築せられた勞働者の爲のアパートの地下防護室である。自衞防空大管區建築指導員の指導に從つたもので、出入口及窓は總て防毒裝置の施された鐵扉を附してあり、いざ空襲となればすぐ防護室に使用出來るやうになつてゐる。

第21圖はビルデング地下防護室で50人を收容し得るものである。休憩用の椅子が用意されており、室の隅にあるのが空氣濾過機である。又この寫眞には表はれてゐないが、壁續きには救急材料、非常用工具類が吊されてゐる。

（2）單獨に設けられたもの

第22圖は Pommern 自衞防空大管區の中心なる Stettin 市に設けられた防護室である。傾斜地を利用しており、附近の家屋から成可く短時間に達し得る様な位置に獨



第22圖 ・ 單 獨 防 護（其1）

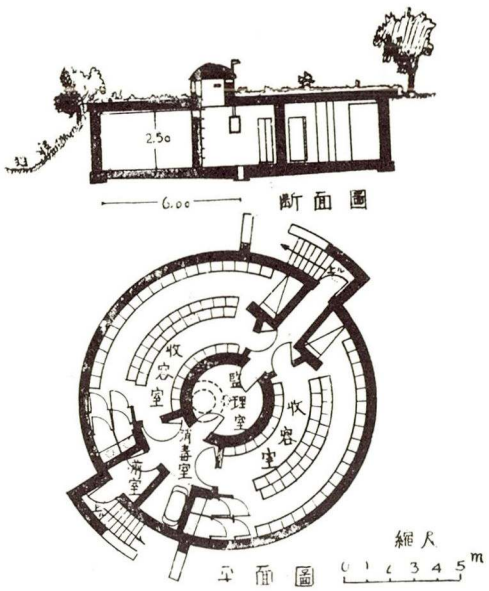
理人室に換氣設備が据え付けられてゐる。

第24、25圖は特殊型鋼を用ひて構築した單獨の防護室であるが、この程のものは廣大な敷地を有する工場等で專用防護室として採用される。

第26圖も同樣工場防護室で古鐵管を補強し巧に用ひたもので、第27圖が其反對側を寫したものである。

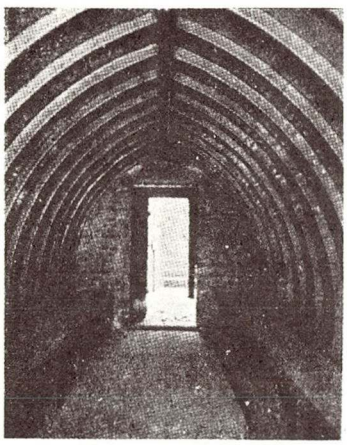
防毒具、非常用工具等が見える。

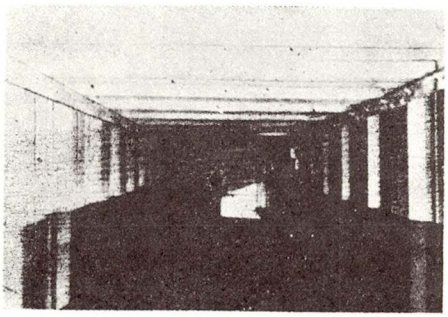
以上掲載の寫眞は東京工業大學建築學科防空研究室の藏書に依つたものである。



第23圖・同平面、斷面圖

5. 結　　言

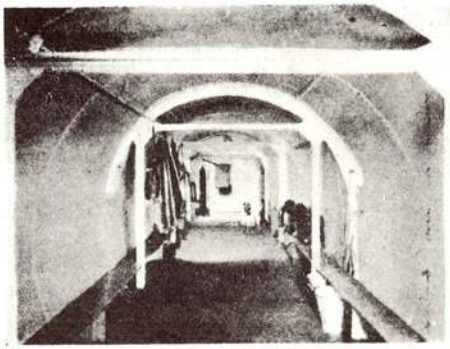

第24圖・單獨防護室（其2）


第25圖・單獨防護室（其3）

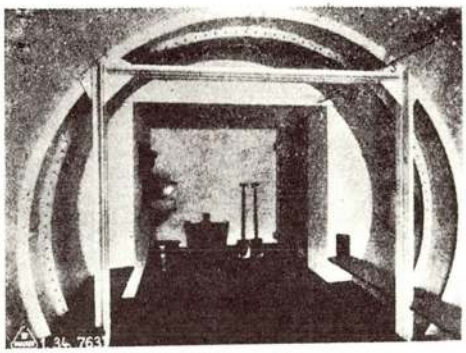
都市防空の結論は、市民がより良き空襲避難場所を持つことである、と云つても過言ではあるまい。而して空襲避難所として總ゆる方面から考察し、最も有效なるものが地下防護室であると云ひ得る。

住宅地には家庭防護室を、工場敷地內には工場防護室を、然して商業街には建築物地下防護室を必要とする。之等防護室はその分布、配置を平等ならしめ、避難圈をより縮少せしめねばならぬ故、他に頼らずして各自が自らの防護室建設に勤まねばならぬ。

建築物新築に際しては、設計當始より防護室としての考慮を拂ふ事が肝要であり、既存建築物地下室は須らく速に改造して、以て萬一の場合に備ふ可きである。即ち、住宅建築に於ける附屬小地下室の利用、工場構內に於ける建築物下地室或は連絡地下道の利用、商業中心地に於ける高層建築地下室の利用等は、單獨防護室構築に比し、經濟上、利用上遙かに有利であり、實行容易である。防護室の建設が目下の急務であるが、之が促進法として、防空法の通過せる



第26圖・單獨防護室（其4）



第27圖・同

今日速に細則の制定を行ひ、防護室建設に關する規定を定むる必要あり、現行建築物法も亦防空的改正が行はれて然る可きである。又補助手段も缺く可からざるもので、補助金の交付、低利資金の融通、稅金の減免等が考へられる。

然し法の力に抑制せられずとも、又實現するとも僅少に止まるであらう補助法の如きものに依賴せずして、防護室建設が己が近親の擁護であるばかりでなく、國家に對する義務として、進んで之が造營に當らねばならぬ。

そして之が設計施工當事者たる、建築技術家諸賢の正しき御理解と、懇切なる御指導を願つて已まぬ次第である。（1937、4、3）

最近の獨逸に於ける防空僞裝

熊　井　安　義（翻譯）

目　　次

Ⅰ　序
Ⅱ　機上から明白に見得る建築施設の特徴
Ⅲ　僞裝概說
1.　位置の撰定
2.　地形の利用
3.　周圍の建築施設との適合
4.　色　　彩
5.　植　　樹
6.　補助手段の應用
a.　僞　裝　網
b.　煙　　幕
c.　僞　工　事
Ⅳ　僞裝研究の一例

I. 序

僞裝とは一種の消極的防禦法であつて、その目的とする所は、環境を利用し學理及び經驗に基いて、重要構築物及び特別顯著なものを上空より識別し難くして、敵機から注意されない様にすることで、我國數度の防空演習に於て屢々僞裝は實施され、殊に昭和9年の近畿防空演習に於ては大々的に行はれ、その結果は都市武裝促進委員會記錄に掲載せられ、大に一般を啓蒙する所があつた。

偖て茲に紹介せんとする最近の獨逸に於ける防空僞裝は、主として[1] Herbert Knothe: Tarnung und Verdunklung als Schutz gegen Luftangriffe（1936年の發行）の中、僞裝に關する項の概要と、獨逸防空協會機關誌[2] Die Sirene の昨年10月及び12月號所載の僞裝に關する研究の一部であるが、その說く所は殊更に新しい所も無く、我國に既に發表濟のものと大同小異であるが、戰車に塗る様な迷彩を建築物に施すことは反つて其の存在を明示するものだと述べて、建築物の僞裝は環境本位に考へねばならぬと說いてゐる。此の點は中華民國でも蔣介石編「防空常識」に於て煙幕遮蔽と僞工事を除いた他の全ての僞裝を適合地形と呼んでゐるが、眞にその通りで、一般に構築物の僞裝とは、即ち適合地形のことであると云ふ觀念を以て實行されることが望ましい。

II. 機上から明白に見得る建築施設の特徵

無數の偵察及び試驗に依つて、建築施設の識別は次のものに依つて影響されることが確められた。即ち

1)、2)　何れも東京工業大學防空建築室所藏のもの

地理的位置、　形態、　大さ、　色彩、　陰影、　光、火、煙による照映、等である。

以上の各要素が全て上空から認知されなくとも、その中の一つか二つの特徴が著しく顯はれゝば、敵機は其の存在を充分に認め得る故、有効な僞裝を達成するには、技術的に可能な範圍内に於て建築施設の持つ全ての特徴を取除くことが肝要である。

III. 僞　裝　概　說

1. 位　置　の　撰　定

僞裝の豫備條件として先づ位置の撰定が重要である。即ち特に空襲の危險を蒙る虞れある所、例へば河川水面の合流或は分岐する所、特色ある山地、交通機關施設の近くで上空から其の位置や形に依つて特に認められ易い所などである。

計畫する際に地形を充分認識することが前提であり、又空襲の危險ありと思はれるやうな施設の近くに設けることは、最初から僞裝は困難であり、又不可能であらう。

2. 地　形　の　利　用

先づ森林に續いた所を選んで、計畫する際に現在ある樹木を考慮して、建築施設が附近のものと一體となるやうにする。

地形の褶襞箇所に建築物を嵌めて、その地形らしく見せかけることも有力な補助手段であらう。

3. 周圍の建築施設との適合

位置の巧みな撰擇及び地形の實際に適合した上、更に僞裝を成就せしめるには、目立たぬ建築樣式や建築配置を採る必要がある。特にその施設の目的から、或は固有の記念的な意味から注意を惹かせる樣な、從來執つて來た表現方法は、空襲の危險から今後は禁止すべきである。

或施設內に建物を配置するときには、規則的に揃つた町並の樣にしてはならない。それは多くの建物の相互關係や、又それに依つて目標が定められるから、個々の建物は不規則に配置するがよい。

建物が集まれば集まる程、上空から見易くなり、僞裝は困難である、故に爆擊された時の被害局限の爲にも個々の建物は群小分立の傾向を採つた方がよい。

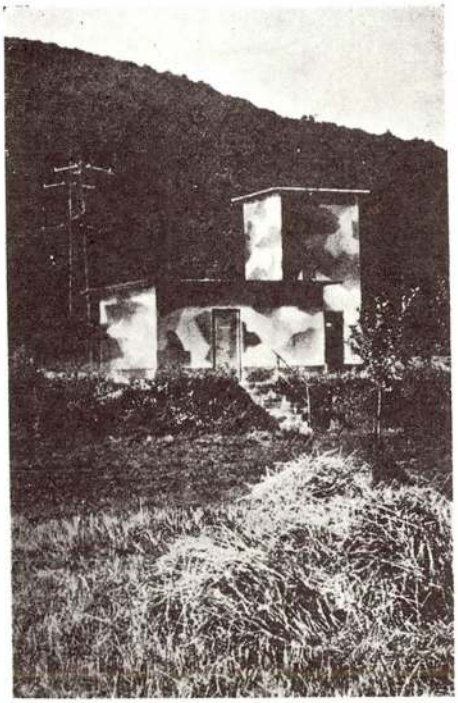
現在ある建物の近くに新しく建築する時は、周圍の建物に調和して、形もそれと餘り違はぬものとし、異分子的な要素を加へない樣にしなければならない。

大建築は突飛なものとせず、平凡な手法を用ひ、天窓は硝子板の鏡面反射に依つて建物の識別度が高まるから成る可く避けて、普通の側窓とするがよい。尤も工費の制限を受ける時は天窓の樣なものは實施し難いものである。

獨に於ける小ポンプ室
僞　裝　の　一　例



第１圖・原　　型



第２圖・僞裝の惡い例



第３圖・僞裝の良い例

4. 色　　彩

上空から識別する時、その目的物の形に次いでは色の問題である。周圍の建物の外裝に適合した色彩を用ふれば、識別されることが少くなる。僞裝の目的から、完全に自然と(或は周圍と)融合した色彩を施すことは、防空と云ふ分野に於て、建築家にとつて重要な使命の一である。

僞裝と云へば斑模様の迷彩だと云ふ觀念が相當深く一般に浸み込んでゐるが、此種の手法を採ることは、全く不適當であり、反つて目立たせる因となる。

上空から見て暗い色合のものは、同じ様な色調の中に融合するが、特に明るい對比の色合は、より以上目に着き易くなる。又光澤ある外裝は是非とも避けねばならない。屋根面は常に暗色系統のものがよく、森の中では深緑か黒緑が、僞裝には都合がよい。

何れにしても最初から周圍に適合した色合の外裝を施して置けば、殊更にその建物に特別な僞裝塗料を施さなくてもよい。

5. 植　　樹

樹木も建築物の僞裝材料として廣く用ひられ、又有効なものである。

建物の陰影からその建物の高さや規模が判斷されるので、建物の近くの影となる所に樹木を植えて陰影を消し、又建築物の幾何學的輪廓を破ることが出來る。

重要施設内及びその附近の道路も亦、僞裝する必要がある。道路鋪裝が暗色系の材料か、或は人工的に目立たぬ着色を施したものであれば、不規則に高低取交ぜて樹木を植えて、道路の判然さを減ずることが出來る。

次に樹種に就ては、針葉樹林では四季を通じて僞裝が可能であるが、濶葉樹林では夏はよいが、冬は僞裝困難である。尙針葉樹林では乾燥時の火災に對する注意が必要である。同時に建築物の周圍の燃え易い枯枝や其の他のものも防火上片附けて置く可きである。

6. 補助手段の應用

a. 僞　裝　網

小建築施設として特に目立つものには、屢々軍用僞裝網を以て有効な僞裝が出來る。網で僞裝すれば、その建物或は設備の一部を變更する必要が無い所に利點がある。その僞裝方法は柱脚を立てたり金屬線索を張つたりして、その上に僞裝網を擴げ渡して建築物の上部側部を被ふのである。更に周圍に適合した色彩を施したり、樹枝葉を用ひることに依つて一層効果ある掩護が與へられることは云ふ迄もない。

b. 煙　　幕

地理的位置が明確に判る様な重要施設には以上述べた各種の僞裝方法を施しても徒勞である。そこで化學的方法を以て人工煙霧を作つて、宛も自然に霧が有る様に見せかけて、

施設が發見されることの無い様にする考へが起つて來る。併し目的物の煙幕遮蔽も簡單に出來るものではなく、煙幕の下には何か重要な目的物が有るに違ひないと飛行機からは注意されるから、防護すべき施設の周圍を相當廣範圍に遮蔽しなければ効果は擧がらない。一般に知られた人工霧を發生せしめるには下の様な方法が用ひられる。即ち

i. クロールサルフオン酸を無水硫酸と混じる。

ii. 無水硫酸は濃縮硫酸(油)と消石灰を結合生成する。

iii. 四鹽化珪素、四鹽化錫、四鹽化チタン等の鹽化物はアンモニア族が加はれば、發煙作用は非常に增加する。

之らは空氣中に蒸發或は撒布して、比較的安定した水蒸氣を形成せしめるのであるが、その他に一定の材料或は混合物を燃燒して煙を生成する方法もある。それは亞鉛煙霧に屬するもので、四鹽化炭素或は六鹽化エタンが空氣中の濕氣の作用に依つて亞鉛末と結合して鹽化亞鉛を生じ、發煙が起るのである。

併し斯様な煙幕材料は、その主成分が硫黄、亞鉛、燐であり、何れも戰時多量に使用し得ないものである故、平時より相當の準備をして置かねばならない所に缺點がある。又假令發煙するも、煙霧はその位置に長く滯留せず、氣流や風の爲に吹流されるので、長時間完全に有効な煙幕を構成せしめるには莫大な費用を要する。

以上述べた様な特殊裝置を用ひずとも、工場その他の家屋の燃料によつて自然に發煙せしめることも出來る。之に依れば煙源を遮蔽範圍全部に均一に配置することも可能であるが、適正にして危險のない煙幕を生ずる燃燒材が未だ發見されて居らないので之は今後の研究に俟つ問題である。

c. 僞　工　事

僞工事によつて敵機を誤導し、重要な攻擊目的物を空襲の危險から免れしめることは可能であらうが、斯様な目的で僞建築を作ることは相當多額の費用を要する。

特に夜間、工場或は其の他の重要建築施設を防禦する際、僞工事を併用してその効果が高められる。即ち、高爐、炭鑛、鐵工所等の火氣使用箇所の光、火及び煙の照耀を模倣して敵機を誤導し得る。

有効な僞工事は模倣すべき事物を正しく認識し、又上空より數々の偵察をしてからやらねばならない。

IV. 僞裝研究の一例

玆に述べやうとすることは、建築物の僞裝には戰車式斑模様の迷彩をするよりも、周圍に適合した外觀を採らしめる方がよいと云ふことである。

第1圖は郊外の小ポンプ室で、森を背景にした白堊の明快な建物で、2,000m も離れた

所から明かに認め得ると。

此の様に多數の人々に水を供給する使命を持つたポンプ室には、是非とも防空的考慮が必要であるとて、第2圖に示した様な迷彩を提案してゐる。

併し、戰車の様に可動的なもので、異つた地形に夫々適應して識別を困難ならしめるには斑模様の迷彩もよいが、建築物は一定の土地に定着して居り、別個の觀點から僞裝を考究すべきであらう。即ちこのポンプ室に於ては、機械主義的様式の固い意匠のものでは、迷彩よりもむしろその形態を變へて陸屋根を傾斜した屋根に爲し、外壁には蔓草を搦ませ、周圍には喬木灌木を取交ぜて植え、極めて自然的なものと爲し、附近部落の建築物と少しも違はない平凡な建築様式を採つた方が僞裝の目的は滿足されるとて、第3圖の如き手段を講ずるがよいと提言してゐる。

本號執筆者紹介

（五十音順）

芦浦義雄	警視廳保安部調査課
飯島猛夫	司法省技師
市浦健	日本大學工學部・東京女高師・講師
上野伊三郎	群馬縣工藝所長
熊井安義	警視廳保安部調査課
新名種夫	大阪市經理部營繕課設計係長・本協會常務
竹村新太郎	創宇社同人
高橋壽男	名古屋市役所區劃整理協會
中尾保	中尾建築事務所主
西山卯三	京都帝國大學大學院
モトノ・セイゴ	京都高等工藝學校教授
山田守	遞信技師營繕課工事係

6月號

空港に關する二つのトピックス

§1. 都市空港と聯邦の責任[1]

米國の都市では過去5年間に、公共用又は自家用飛行機の利便に資すべく空港の設備に對する投資は實に莫大なものであつた。が、然しそれは都市行政と同樣に州又は聯邦への自家廣告(self-advertising)又は好意(good-will)と云ふことでなしにむしろ公益の爲めに容易に出資されたものである。今や、都市は將來に備へる爲に、何處にそれ等が散在して居るかを知る必要上、民間航空路及空港の國家的統制の爲め決定的にして且つ完全なる聯邦的活動を必要とする時が、當來したのである。

今、此處に報告するのは、米國都市協會(American Municipal Association)が、1937年1月13日に公にした報告の大要である。此の報告には、最近ワシントンに於て、本協會行政委員會の採用した決議案の內容が含まれて居る。で、此の決議案は一般民間航空路の國家的統制への完全なる計畫に關する問題及勸告に對する注意を喚起したものであるが、そのなかには空港によつて利益するであらうところのあらゆる種類の航空會社の財政的責任の設定と云ふことが、含まれて居つた。

尙、此の報告によれば、設定された一航空路網の部分としサーヴスするであらうところの一空港に就て三の機能があることを發見する、即ちその第一は地方的用途と云ふことで、その第二は半徑50乃至400哩の範圍人口に對する州際間の商業的サーヴスと云ふことで最後の第三は國防的の目的と云ふことであつた。現今では此の航空輸送の迅速なる發達は、殆ど全部の都市空港の終端驛的便宜(Municipal terminal facilities)をたちまちその狀件を舊式のものと化して仕舞つたのである。であるから、かゝる航空輸送の發達に歩調を揃るべく、直に、而も更に都市空港の終端驛としての便宜の爲めに必要なる計畫と開發がなされねばならぬ事を指摘して居る。

此の委員會の意見としては、聯邦當局(Federal agencies)は國道及河川及港の國家統制に於ける責任に關すると同樣に、その根據に關しては如何なる民間航空路プログラムの計畫に對しても聯邦の責任を熟慮考察すべきことを主張して居る。

然し乍ら、斯る觀察は、民間航空路の終端驛(the civil airway's terminals)として設計並構造の形式及維持並その運用を支配すると云ふ聯邦の要求に從ふ州航空官(state aeronautical officials)がそれ等を適當に調節した後に……國土航空路、又は國防の爲め停留場として……空港に對して實行するであらう。

此の記述の立證となるものは、近々過去1ケ年ですら、空港に關する要求が、非常に增應して來たと云ふことである。即ち市の報告には事實旅客用トラフイツクが、約23%の增加であるのに、急行用トラフイツクは100%の增加であると報告されて居る。

§2. 米國に於ける空港と着陸場[2]

1) Municipal Airports and Federal Responsibility: American City, March, 1937; p. 15.
2) Airports and Landing Fields in the United States: American City, March, 1937; p. 15.

州による空港及着陸場の現状　1937年1月1日現在

州名＼用途別	都市用	商業用	中間着陸場	補助着陸場	海軍	陸軍	雑用	總計	夜間配光裝置のあるもの
アラバマ	7	2	7	15	0	3	1	35	12
アラスカ	1	2	0	80	0	0	0	83	2
アリゾナ	10	4	9	21	0	1	0	45	16
アカンサス	15	2	5	8	0	0	0	30	7
カリフオルニア	45	44	20	50	4	4	14	181	63
コロラドー	13	3	3	15	0	1	0	35	7
コンネクチカツト	6	9	1	3	0	0	3	22	7
デラウオア (Delaware)	1	2	0	2	0	1	0	6	1
デストリクトオヴコロムビア	0	1	0	0	1	1	0	3	3
フロリダ	43	14	4	44	5	1	5	116	26
ヂヨヂア	20	2	12	17	0	1	0	52	19
アイダホ (Idaho)	19	0	10	11	0	0	10	50	15
イリノイ	13	31	6	0	1	2	3	56	29
インヂアナ	10	15	8	7	0	2	4	46	19
アイオワ	16	6	3	7	0	0	2	34	12
カンサス	22	6	5	8	0	2	0	43	14
ケンタツキー	7	0	3	7	0	1	0	18	4
ルイヂアナ	11	3	3	10	0	1	2	30	11
メイン	5	6	0	15	0	0	1	27	3
メリーランド	2	8	1	1	1	3	3	19	7
マサチユセツツ	6	26	1	5	1	0	1	40	7
ミチガン	55	13	0	16	1	3	35	123	22
ミネソタ	10	4	3	15	0	1	0	33	7
ミシシツピー	13	0	6	12	1	0	0	32	12
ミゾリー	11	6	13	4	0	0	4	38	18
モンタナ	24	0	15	28	0	0	10	77	18
ネブラスカ	16	3	5	5	0	2	1	32	15
ネバダ	3	3	9	6	1	0	0	22	12
ニユハムシヤー	6	4	0	8	0	0	0	18	0
ニユヂヤシー	4	16	0	2	2	2	2	28	8
ニユメキシコ	6	5	10	12	0	0	2	35	13
ニユヨーク	28	38	5	15	0	4	6	96	28
北カロライナ	13	4	3	5	0	1	0	26	8
北ダコタ	19	3	5	16	0	0	1	44	8
オハヨ	34	32	9	16	0	4	11	106	22
オクラハマ	20	6	7	8	0	1	0	42	21
オレゴン	15	3	10	11	0	0	2	41	19
ペンシルヴエニア	14	63	11	10	1	1	11	111	39
ロードアイランド (Rhode Island)	0	4	0	1	1	0	1	7	1
南カロライナ	10	2	4	6	3	0	2	27	7
南ダコタ	15	4	0	6	0	0	0	25	1
テネツシー	10	2	8	6	0	0	0	26	12
テキサス	56	10	25	29	0	13	1	134	50
ウタハ (Utah)	5	1	16	2	0	0	0	24	18
バーモント	6	3	0	1	0	1	0	11	1
バーヂニア	9	8	8	15	2	1	2	45	15
ワシントン	21	7	9	6	1	3	4	51	13
西バーヂニア	8	4	0	12	0	0	1	25	2
ウイスコンシン	21	17	4	8	0	0	3	53	18
ワイオミング	14	0	10	15	0	0	0	39	13
合計	738	451	296	622	26	61	148	2,342	705

備考　州名で讀方の不明なのは原語を附しておきました。(譯者註)

商務省、商務航空局（the Bureau of Air Commerce, Departmen of Commerce.）による報告に從へば1937年1月7日現在で、米國合衆國に於ける空港並着陸場は 2,342 であつた。で、是等の內夜間飛行の爲め部分的に又は全般的に配光裝置のしてあるのは 705 と報告されて居る。

今、總數 2,342 の內用途による分類を示せば下の如くである。

都市空港（ミュニシパルエアポート）	738
商業空港	451
商務省中間着陸場	296
補助的着陸場	622
海軍航空ステーション	26
陸軍飛行場	61
雜用空港又は着陸場[2]	148
合計	2,342

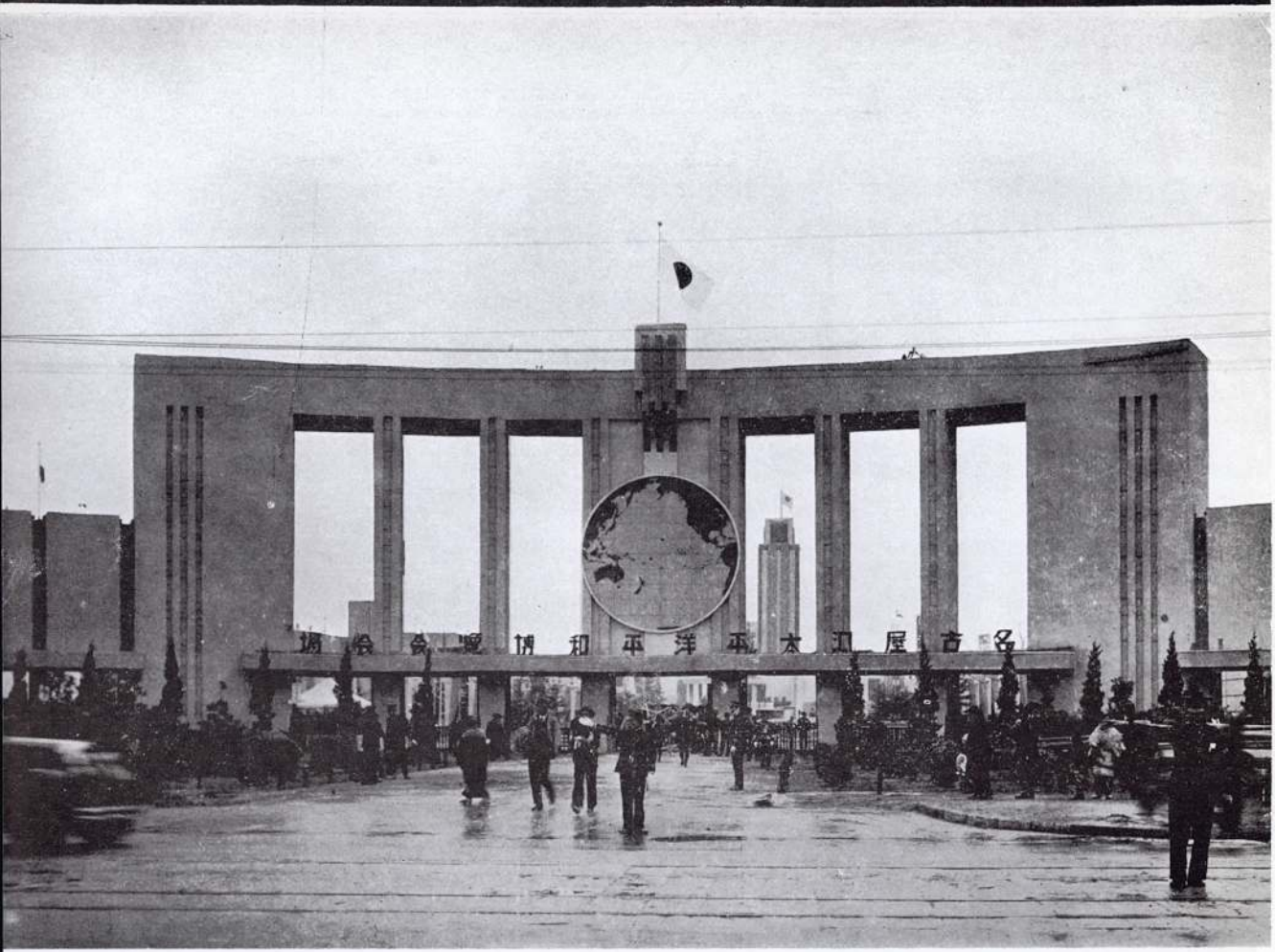
（備考、1936年1月1日現では總數2,369とある。）

尙、1937年1月1日現在で、100以上の空港並着陸場を持つ州は次の6州である。

カリフォルニア	181
テキサス	134
ミチガン	132
フロリダ	116
ペンシルヴェニア	111
オハヨウ	106

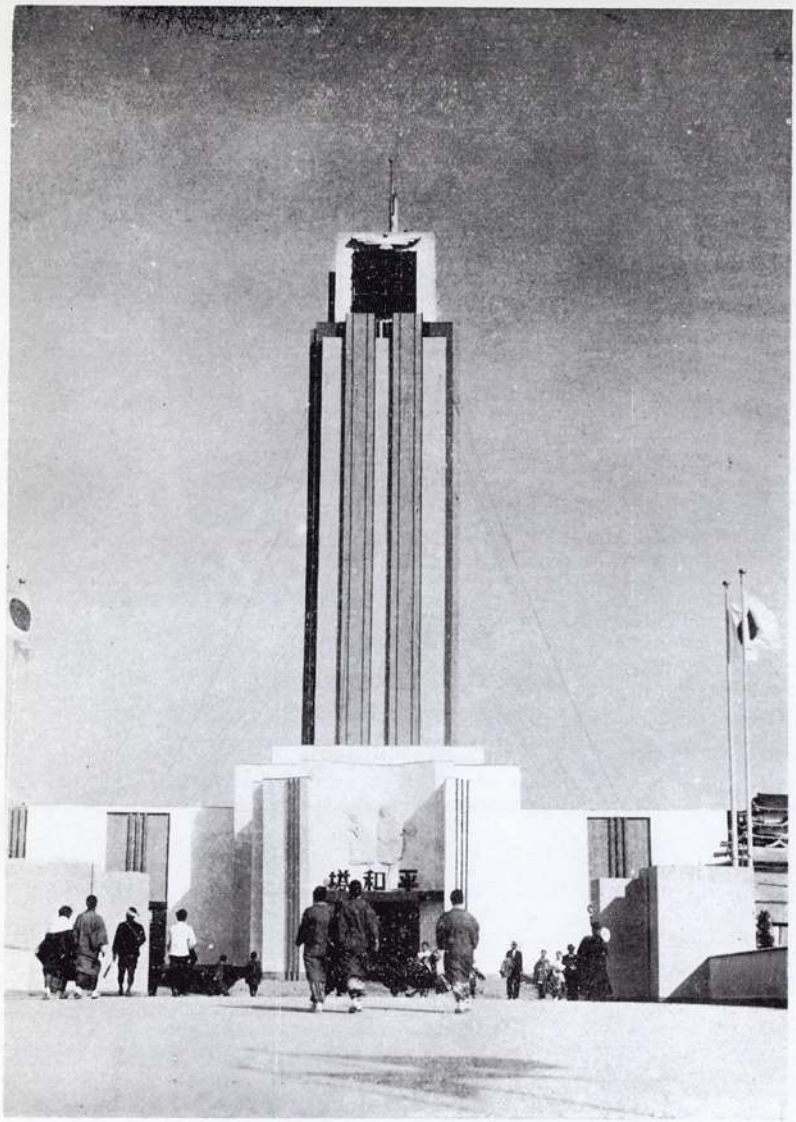
州による分類の詳細は前表の如くである。

3）雜用と云ふのは政府、州又は個人等によつて使用されて居るものを云ふ。（龜井）



中央東門

"名古屋汎太平洋平和博覽會の諸建築" 主催・名古屋市



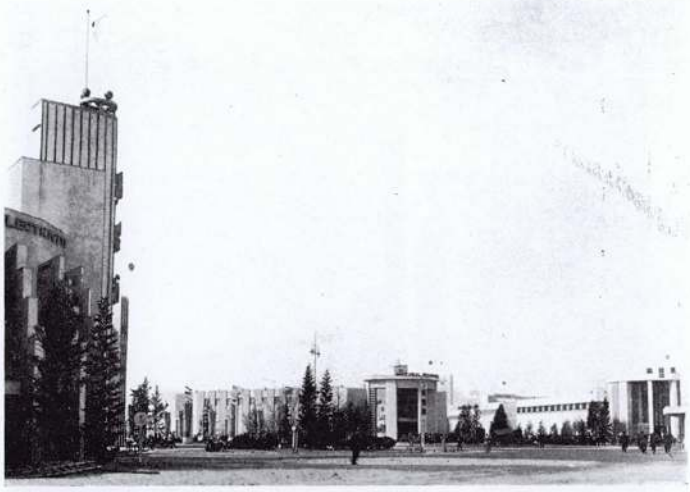
平　和　塔



産業本館遠望



中　央　噴　水



資源館・蠶糸館遠望

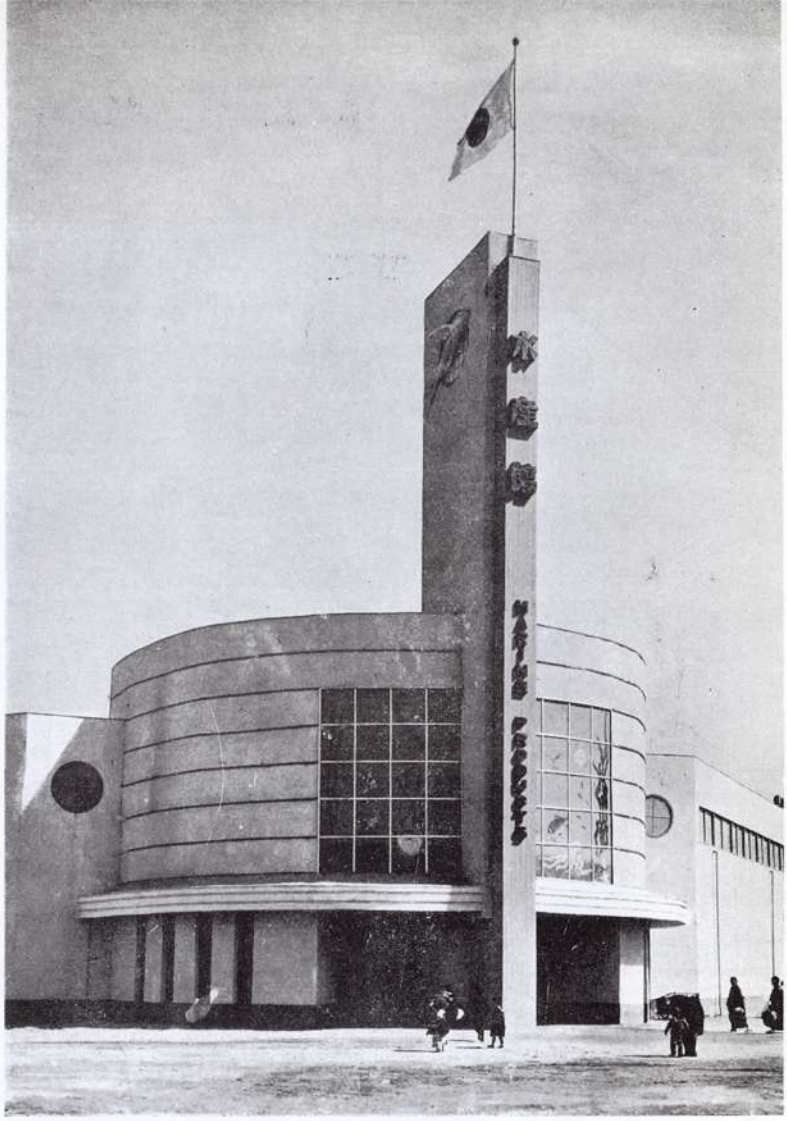


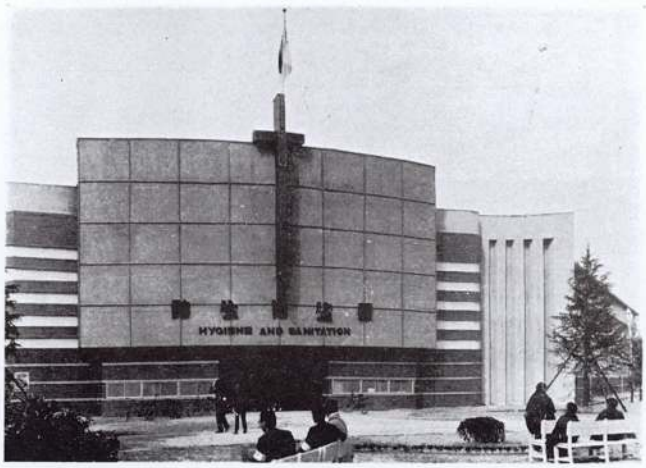
南領印度館



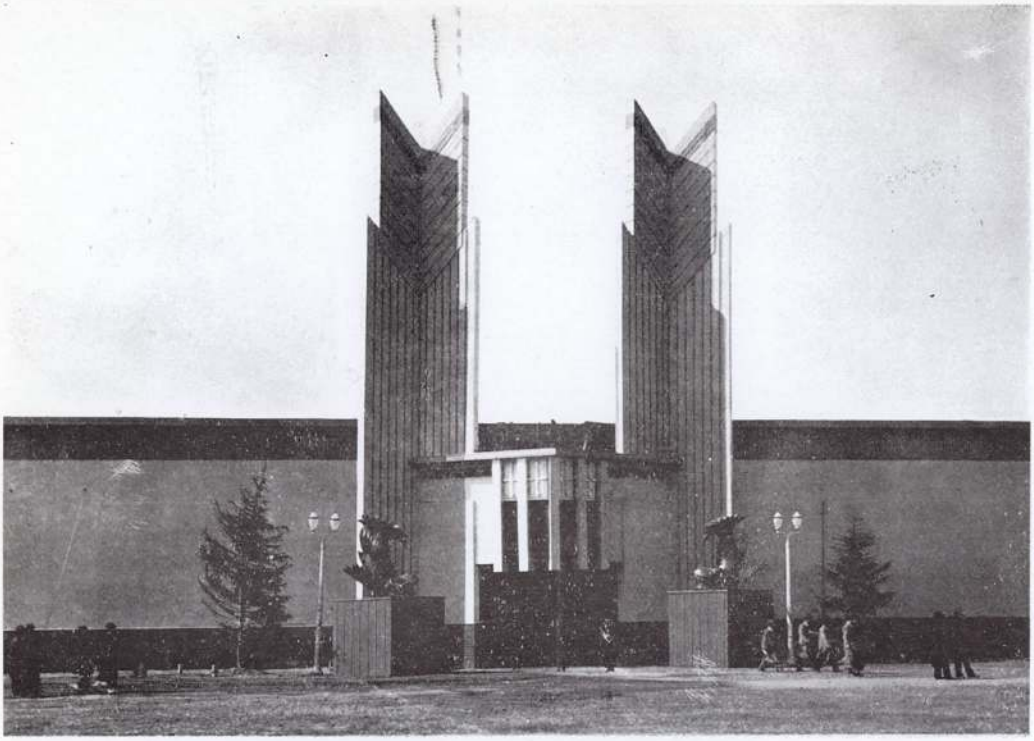
愛知名古屋館

水　産　館



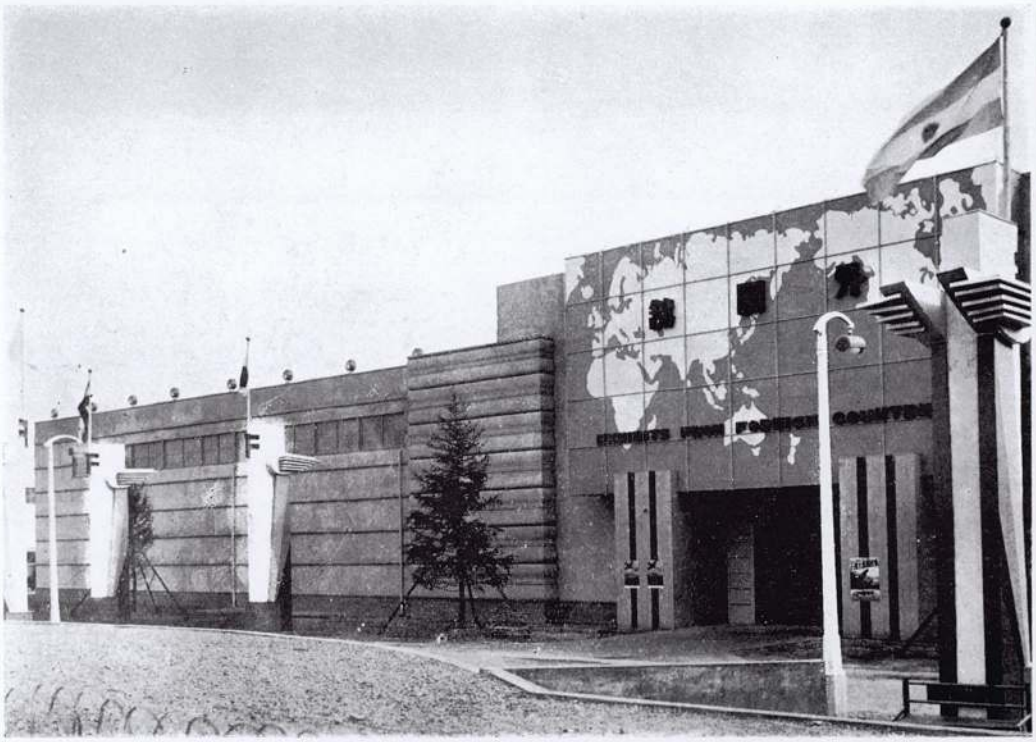


保　健　衛　生　館



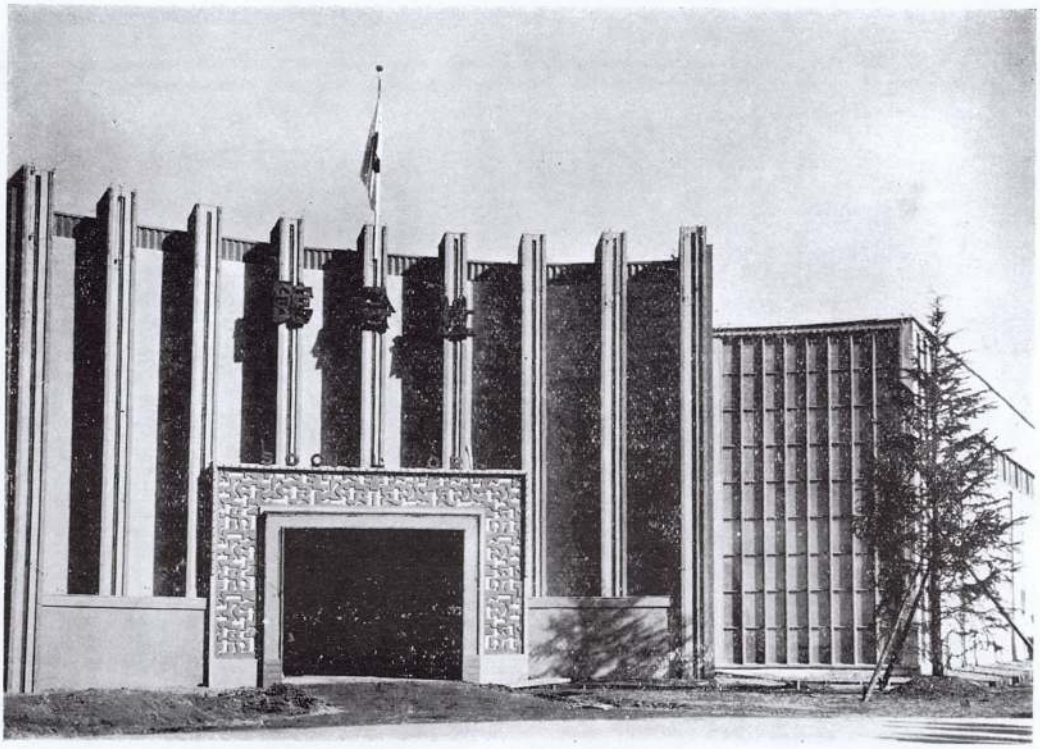
歷　史　館

外　國　館

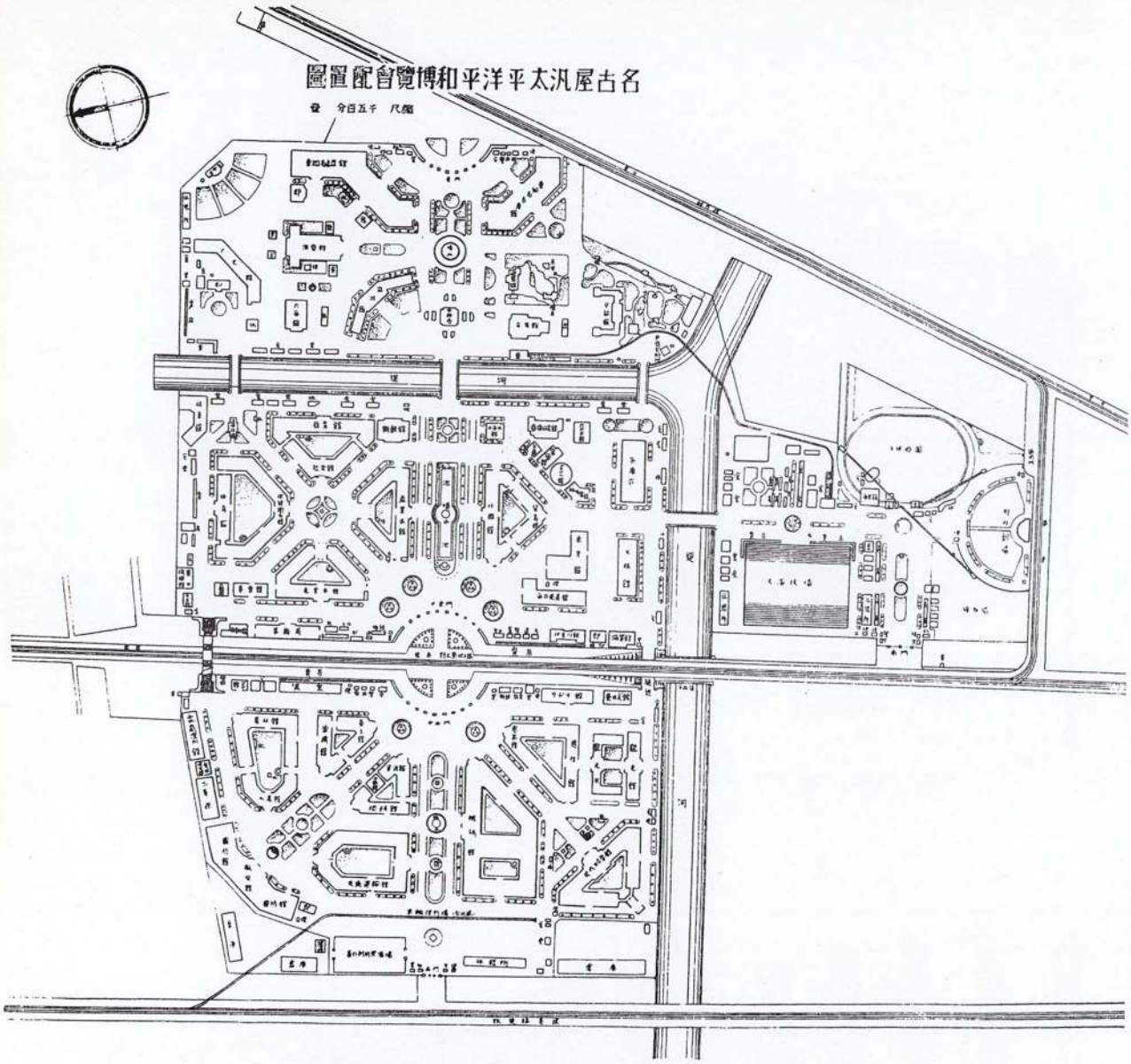




電　氣　館



社　會　館



陳列館 産業本館　貿易館　外國館　海外發展館　近代科學館
機械館　電氣館　遞信館　ラヂオ館　染織館　蠶糸館
資源館　燃料館　交通運輸館　航空館　農林館　水産館
教育館　歷史館　社會館　保健衛生館　體育館　國防館
愛知名古屋館　觀光館　專賣館

特設館 **外國特設館** 滿洲館　關領印度館　中南米館　伯剌西爾館　暹羅館
冀察館　冀東館
內國特設館 朝鮮館　臺灣館　東京館　大阪館　京都館
神奈川館　兵庫館　岐阜館　滋賀館　三菱館　日陶館
豐田織機館　豐田式館　透明人體館　日鐵館　新愛知館　大朝館
大每館　愛知海苔館　ベニヤ館　盆栽陳列館　運河館

附屬館 演藝館　野外劇場及奏樂堂　迎賓館　大平和塔　海女館

特設物及附帶施設 興行物　文化住宅街　觀光街　商店街　廣告塔　無料休憩所
兒童遊園　綠地帶　花壇　噴水　畜力利用實演場　各種案內所及營業所

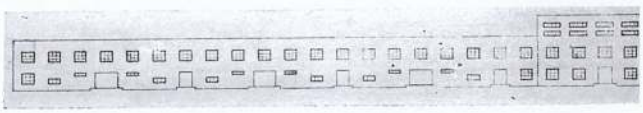
大餘興 全世界ノナンバーワン超冒險空中大演技

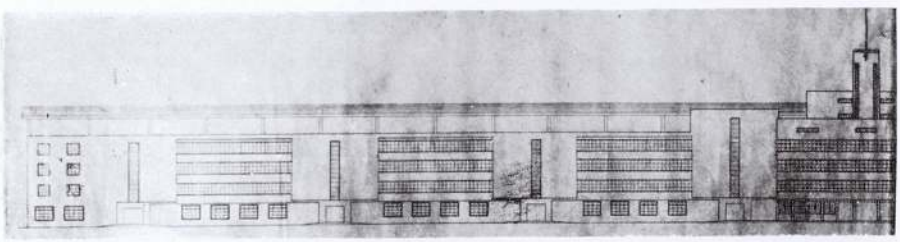
場外陳列館 美術館（愛知縣商工館）　神祇館（鶴舞公園美術館）　佛教博（覺王山）



正　面　外　觀

全　　景 i（機上より）

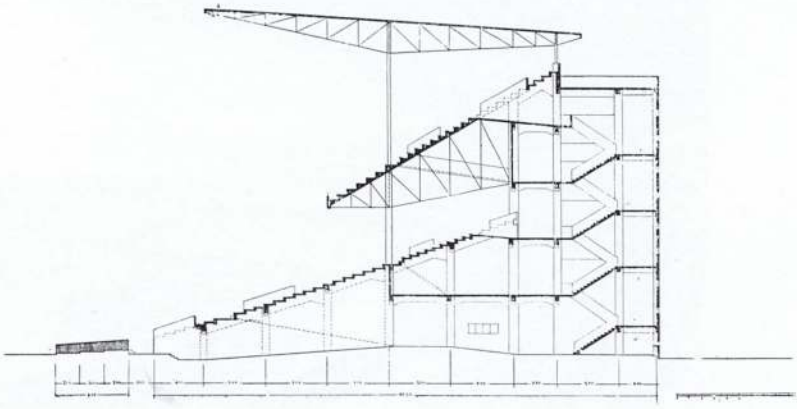




VI 10 “阪　急　西　宮　球　場” 設計・中尾建築事務所・施工・竹中工務店



全　　景 2（機上より）



斷　面　圖

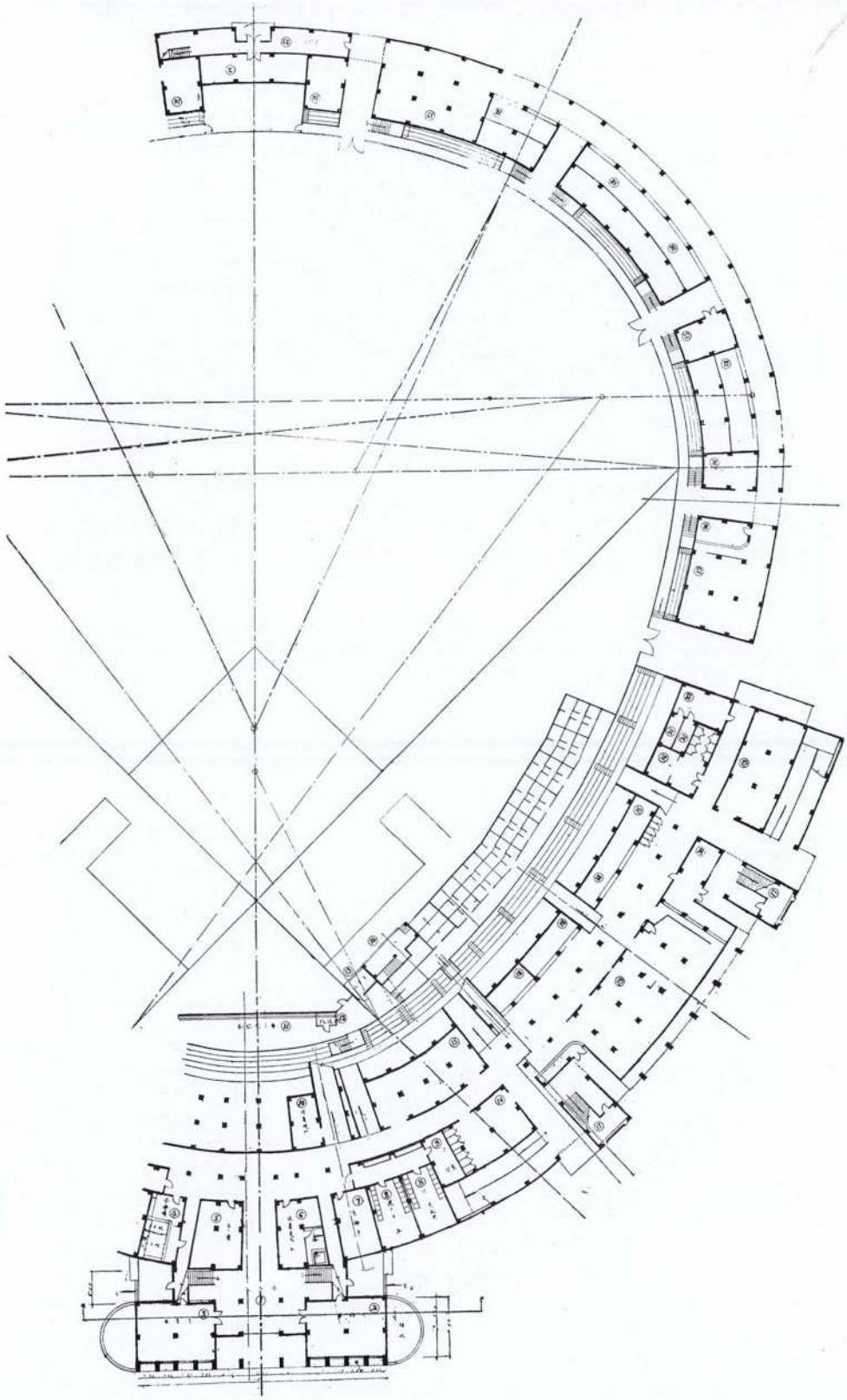


メイン・スタンド（1階より）

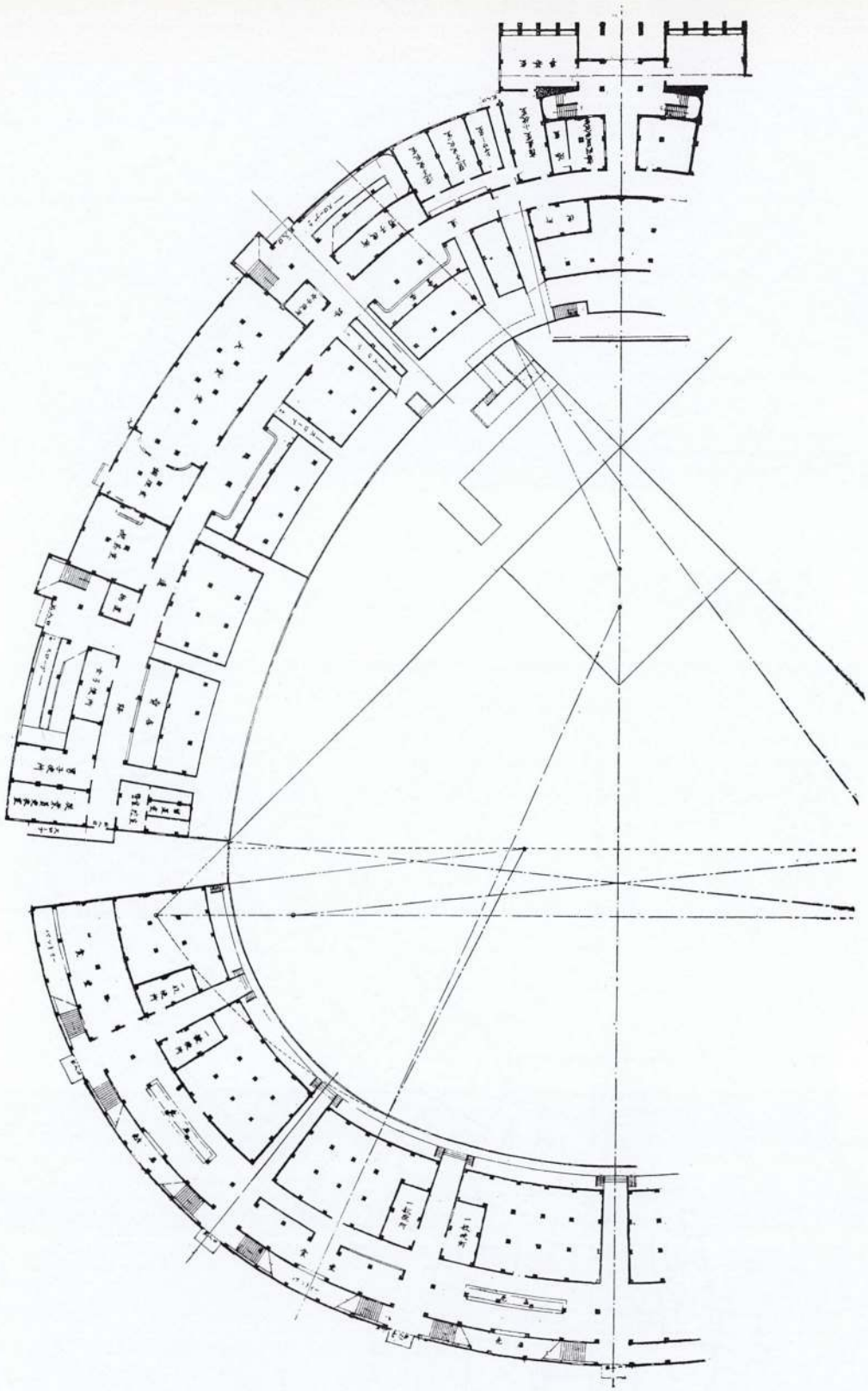


メイン・スタンド（2階より）

1階平面圖

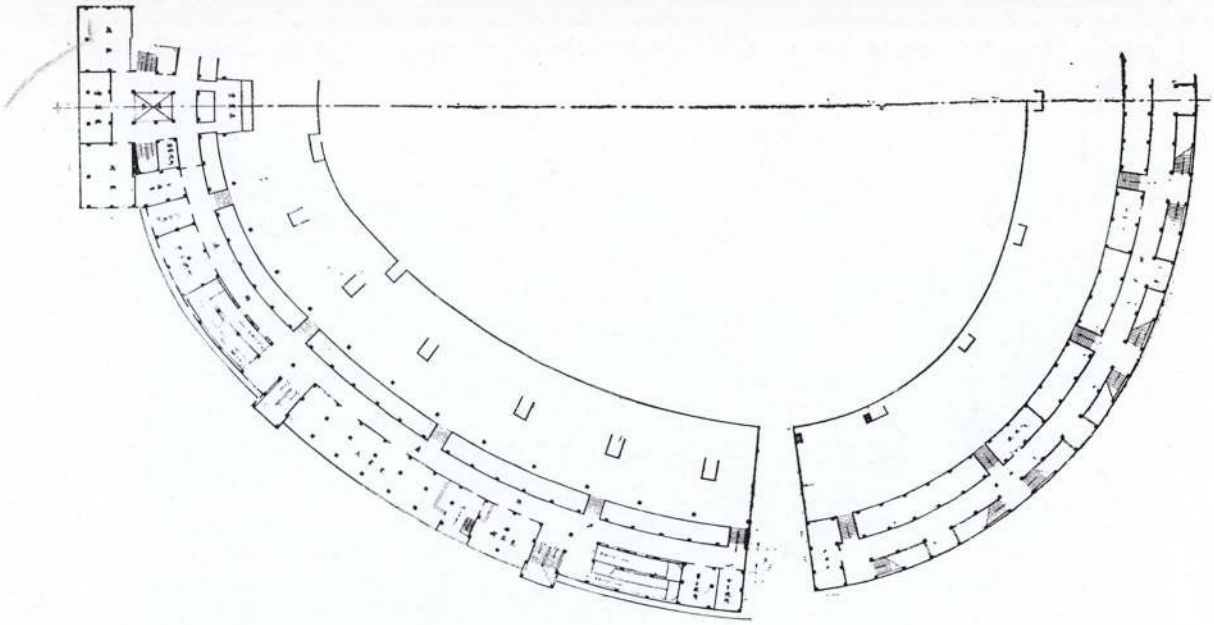


“阪急西宮球場” 設計・中尾建築事務所・施工・竹中工務店 13 VI

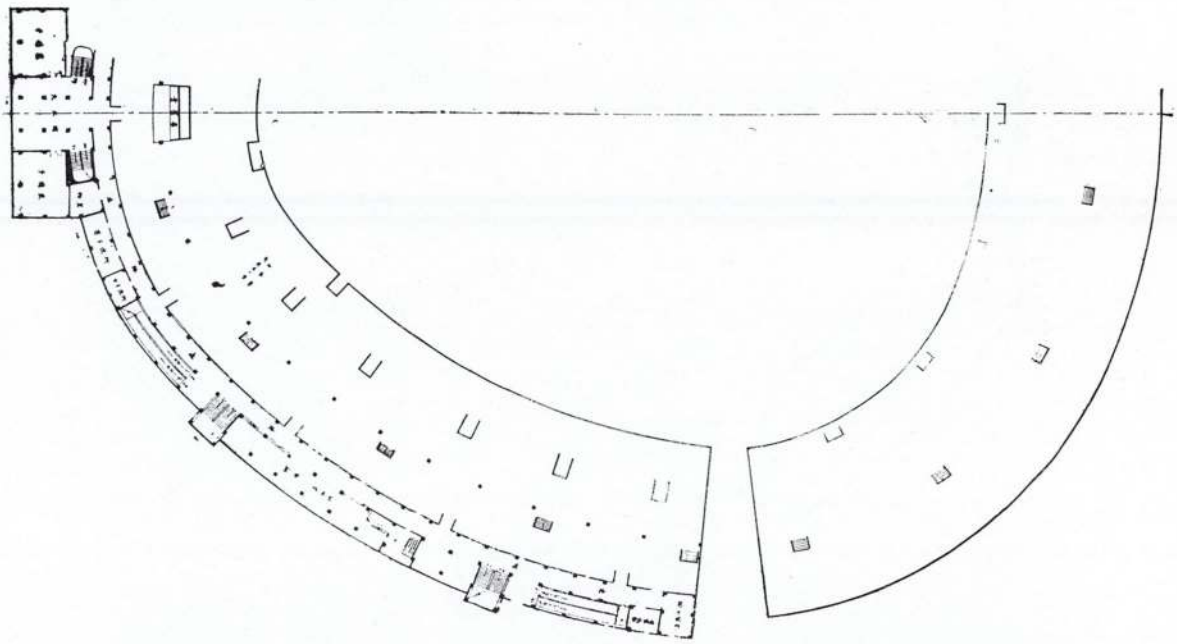


内野スタンド1階平面圖
外野スタンド1階平面圖

14 “阪急西宮球場” 設計・中尾建築事務所・施工・竹中工務店



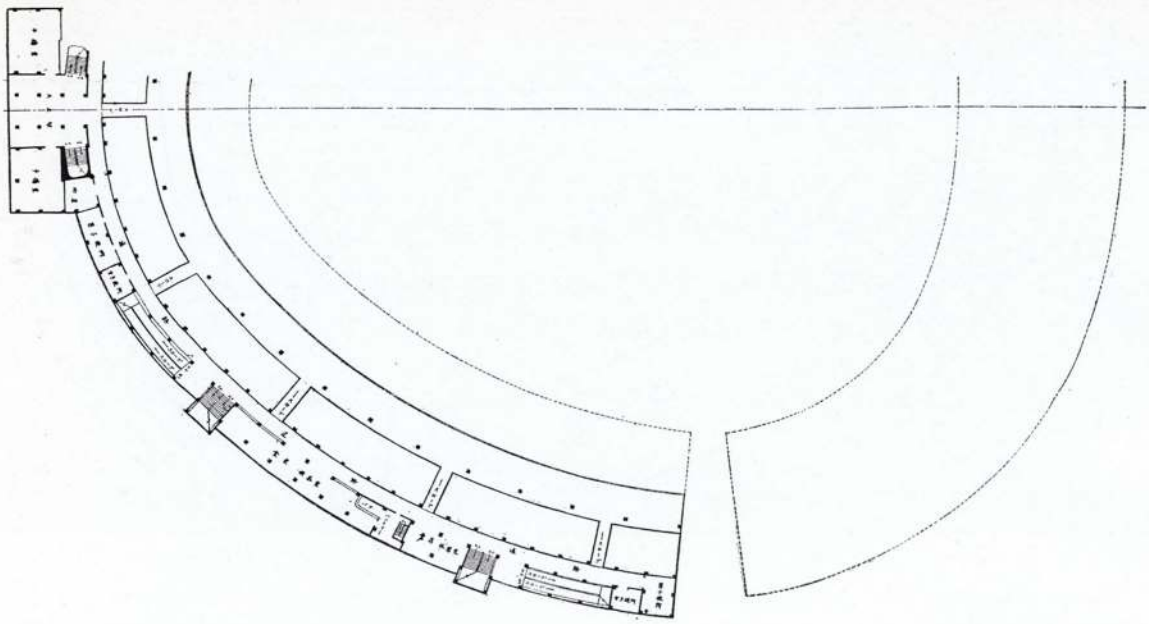
内野スタンド2階平面圖
外野スタンド2階平面圖



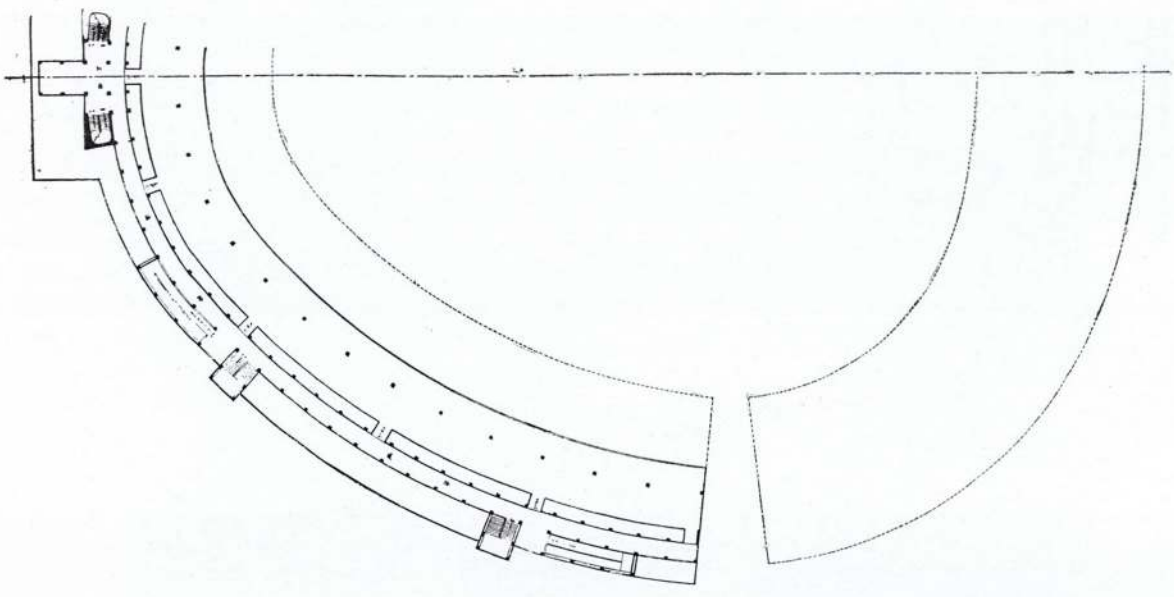
内野スタンド3階平面圖
外野スタンド3階平面圖

阪急西宮球場工事概要

1. 位　　置　西宮市津門宇高松、阪急西宮北口驛前
1. 敷地面積　約2萬5千坪
1. 球場面積　7千8百60坪
   - 内譯　フィールド　4.100坪
   - 内野スタンド　2.800坪
   - 外野スタンド　870坪
   - 空　地　90坪
1. 觀覽席收容人員　内野　約37.000人　外野　約18.000人　合計　約55.000人
1. 構造ノ大要　内野「スタンド」ハ鐵骨鐵筋混凝土造二重層鐵傘付5階建、軒高95尺、正面塔屋ハ9階建軒高 120尺トス
   外野「スタンド」ハ鐵筋混凝土造單層無蓋トス、尙内野「スタンド」ノ兩翼ハ將來二重層「スタンド」ニ擴張シ得ル構造トセリ、正面塔屋及ビ外兩翼外部、及ビ外野スタンドモ將來設計圖ノ如ク擴張ス
1. 球場ノ規模　「フィールド」ハ並ニ設備　内外野「ダイヤモンド」共芝生トシ本壘ヨリ「バツク、ストツプ」迄60呎、左右兩翼外壁迄300呎、「センター」外壁迄、390呎トス
   觀覽席ハ「メイン、スタンド」1階ノ大部分、2階前



内野スタンド4階平面圖



内野スタンド5階平面圖

通リヲベンチ席其他ハ木製「スタンド」トス

「メイン、スタンド」内部1階ハ中央部ニ電氣、機械室、事務室、新聞記者室、役員室、小使宿直室ヲ設ケ其ノ左右ニ對蹠的ニ選手控室、同更衣室、同便所、浴室、洗面シヤワー室、救護室等ノ競技關係ノ諸室並ニ食堂、喫茶、賣店、郵便局、一般雨便所(男女ヲ區別ス)、出札室等ヲ配ス

「スコアー、ボード」ハ外野「スタンド」センター裏ニ設置、操作ハ「ドアー、エンヂン」式トシ擴聲裝置ヲ併用ス

1. 工事期開

起工　昭和11年12月1日

竣工　昭和12年4月末日

1. 工事關係者

建築家

工學士　中尾　保氏

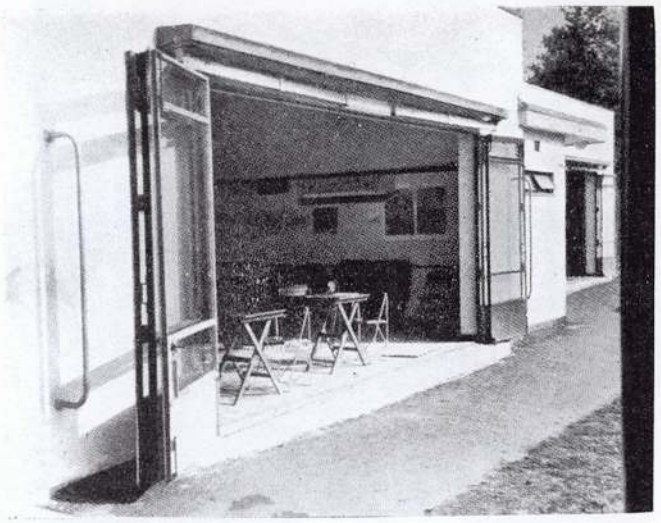
構造計算

工學博士　阿部美樹志氏

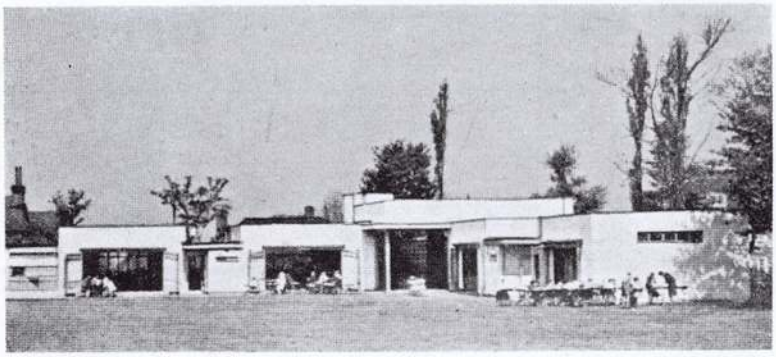
監督　阪急工務課

施工　竹中工務店

本圖ハ全計畫ニテ5月1日竣工シタルモノハ期日ノ關係上未完成(Unfinished)ノマヽ仕上ゲタルモノニシテ第2期工事ニ於テ完成スルコトニナツテヰル



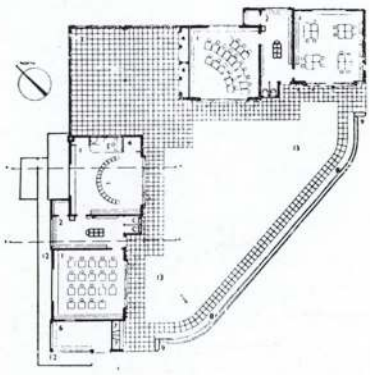
開放されたる教室



全　　景

天氣のよい日には教室が容易に外氣に開放され得ることを特徴とするのどかな平家建小學校

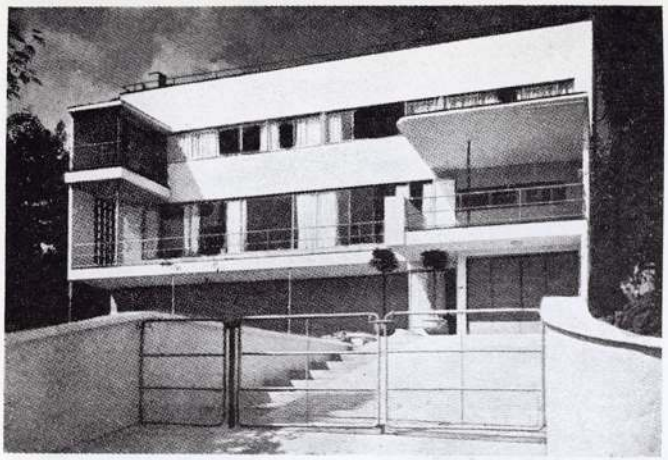
（Architectnral Record, March, 1937 より）



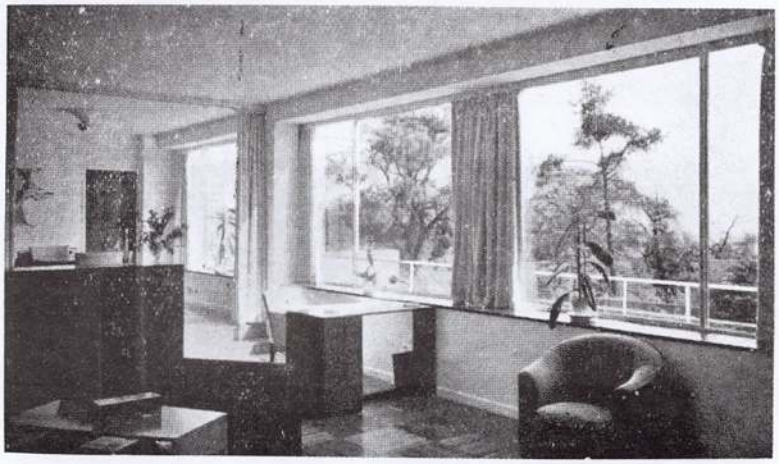
48

平　面　圖

（イギリス）　前庭に開放せられる小學校教室　　建築家　E. C. Kaufmann　17 VI



外　　觀

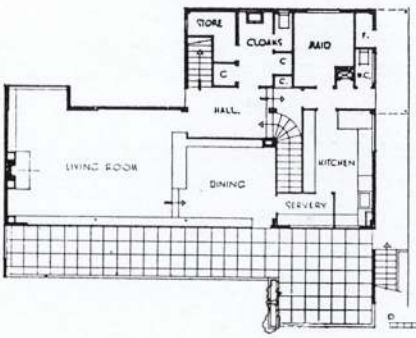


居 間 內 部

この鐵筋三階建住宅の主要階が二階にあつて、一階はただガレーヂと玄關のみにあてたことと、居間が連續した引違窓をもつて室內の明快さを强調したところがE.M氏のねらつた處らしい。

（Architectural Record, March, 1937 より）

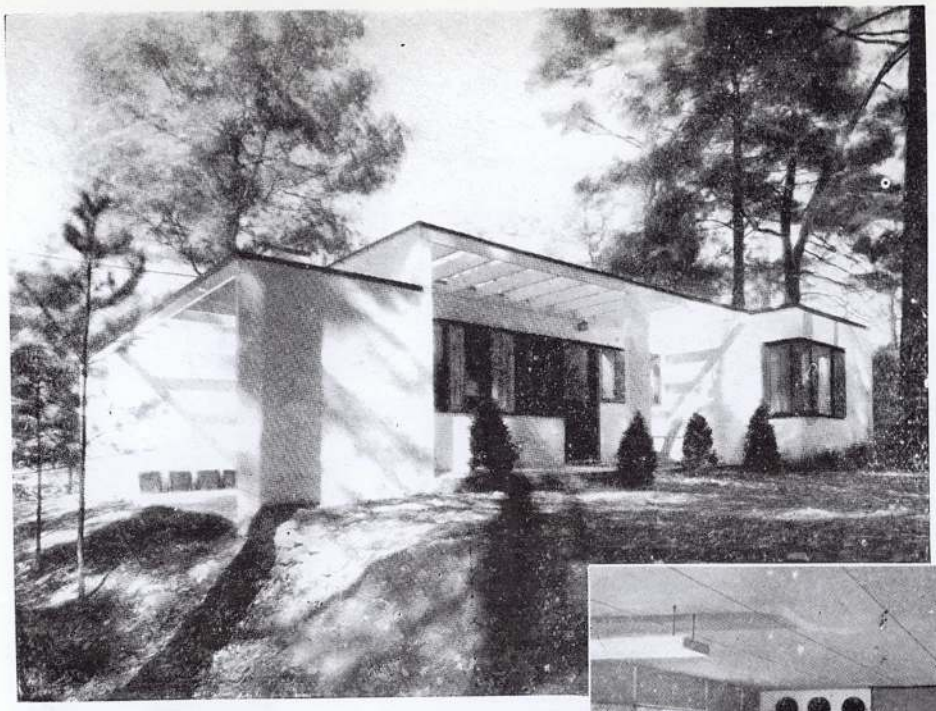
1 階 平 面 圖



2 階 平 面 圖

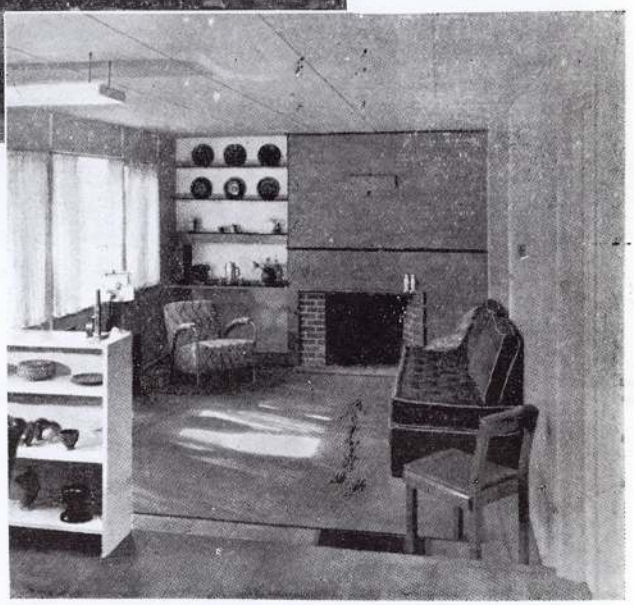


VI 18 （イギリス） 3 階 建 住 宅　　建築家 E. Maxwell



外　　觀

居間內部



平　面　圖



この住宅の平面は設計者自身の説明の通、煖房の方法、各種配管の取纏め、敷地の方位、通路の便利等より必然的に出來上つたものであることがうなづかれる。

2つの寢室、食堂及臺所は何れもカーテン等に依つて居間から遮斷される樣になつてゐる。

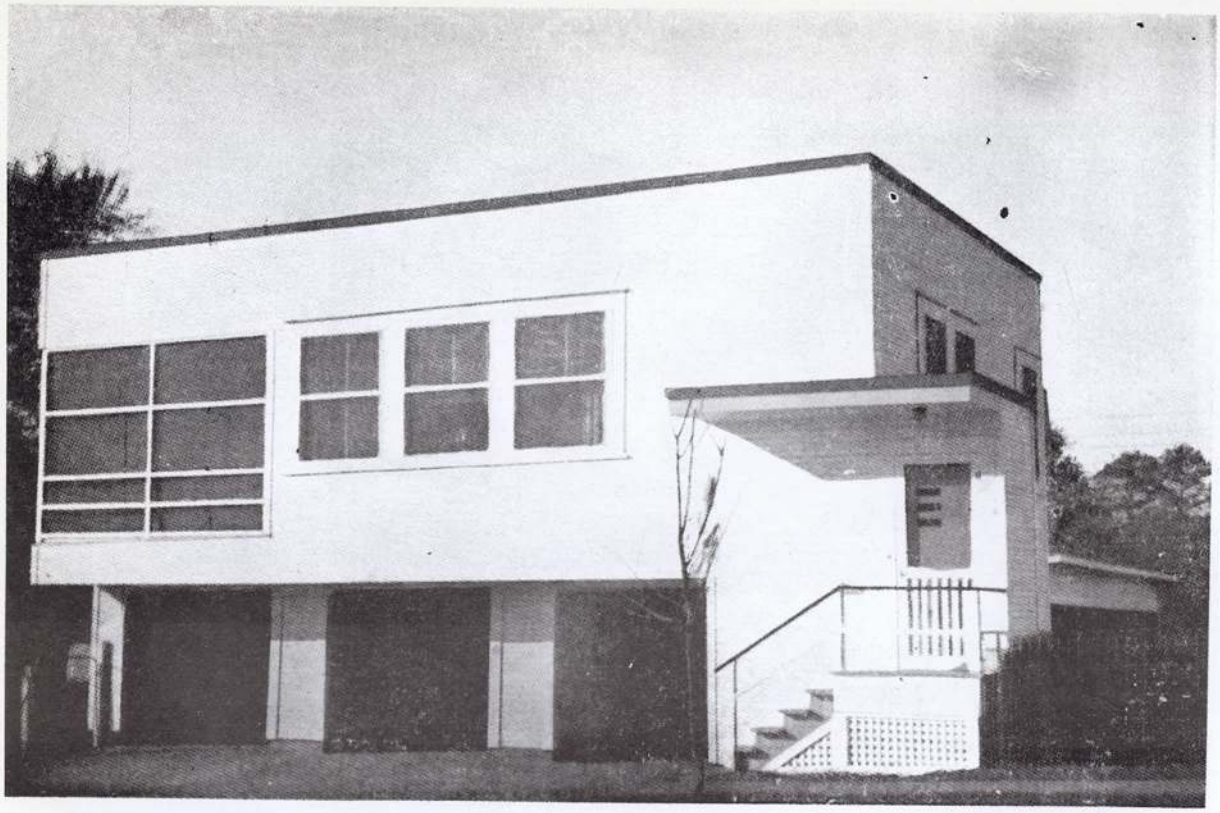
陸に近い輕い傾斜の屋根を附け、試驗的に排水を行はなかつたが、不充分だと分つたので後方に1本だけ排水管を設けた。

10,240立方呎に對して3,481弗、1立方呎當り34セントである。

(Architectural Forum, April, 1937 より)

(アメリカ) Needham の小住宅

建築家 Royal Barry Wills



外　　觀

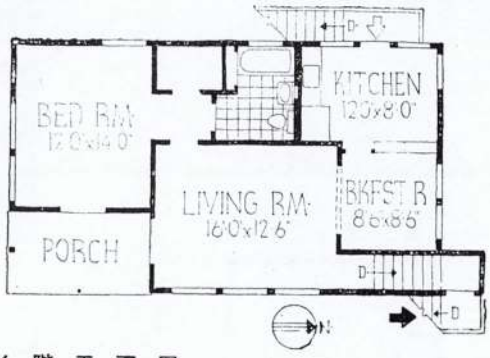
2 戸建のアパートメントの後方に建てられ、二階はそのアパートメント所有者の住宅になつてゐる。

ガレーヂはアパートメント居住者に貸される目的である。

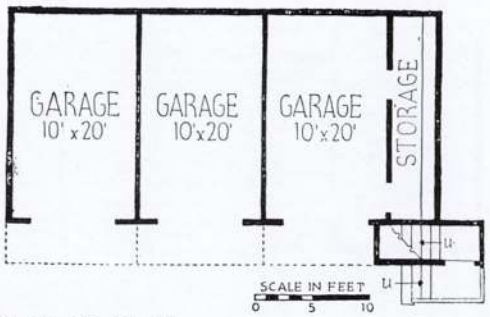
木造、外壁は下見板張、内部はカンバスの上に壁紙貼、床は、オーク板張である。

工費　2,376弗

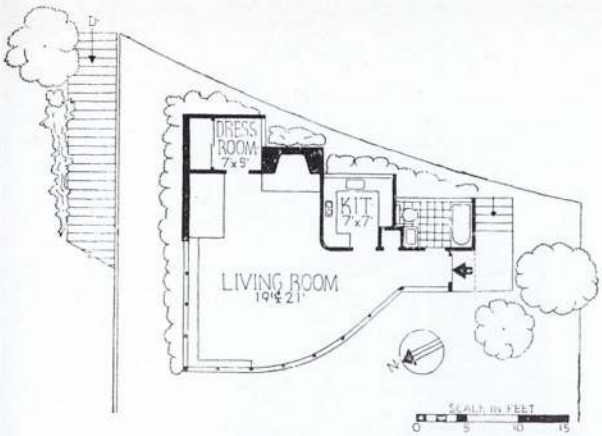
(Architectural Forum, April, 1937 より)



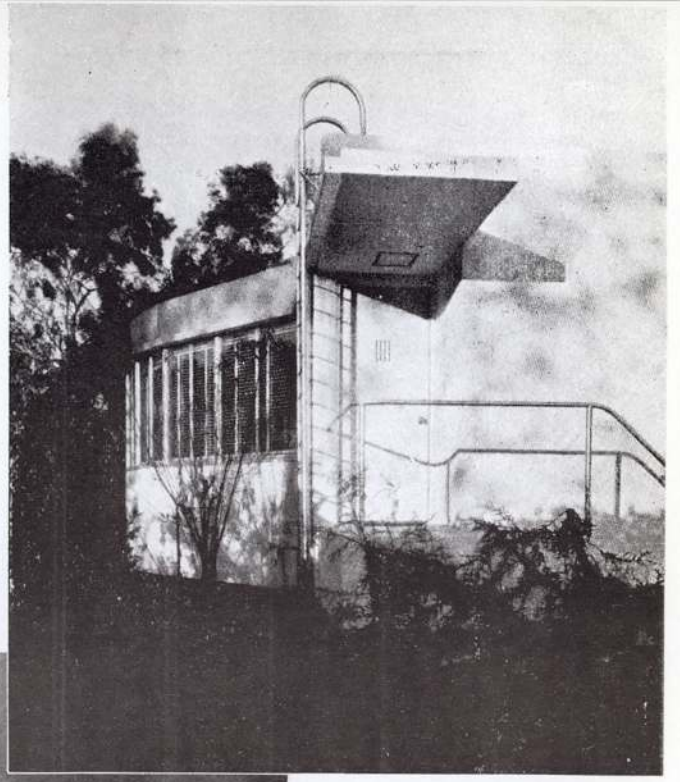
1 階 平 面 圖



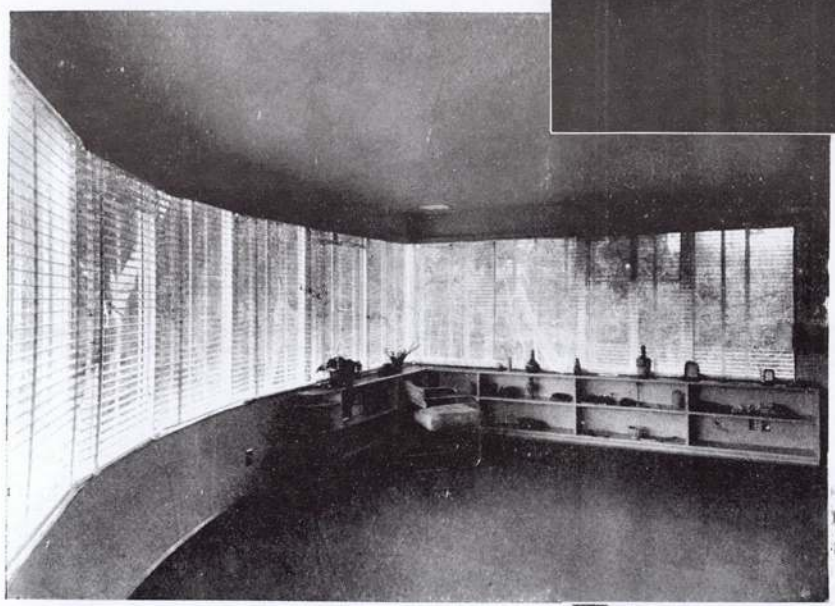
2 階 平 面 圖



平　面　圖

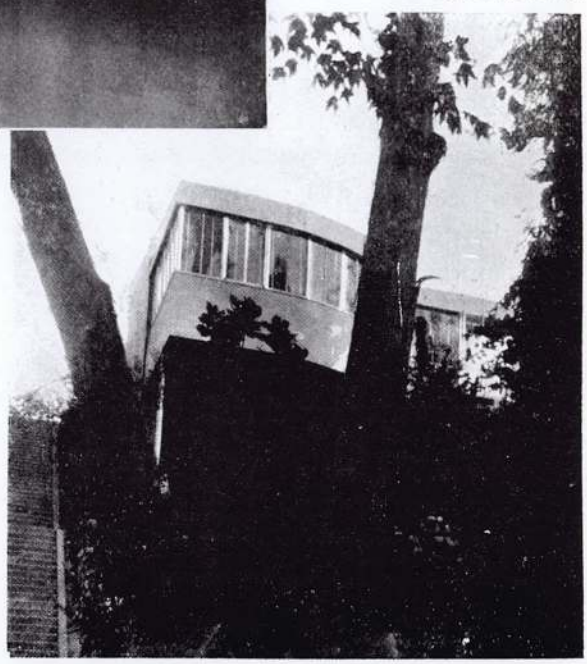


入口側外觀



居間內部

斜面側外觀



急斜面に建てられた1室の來客用住宅。

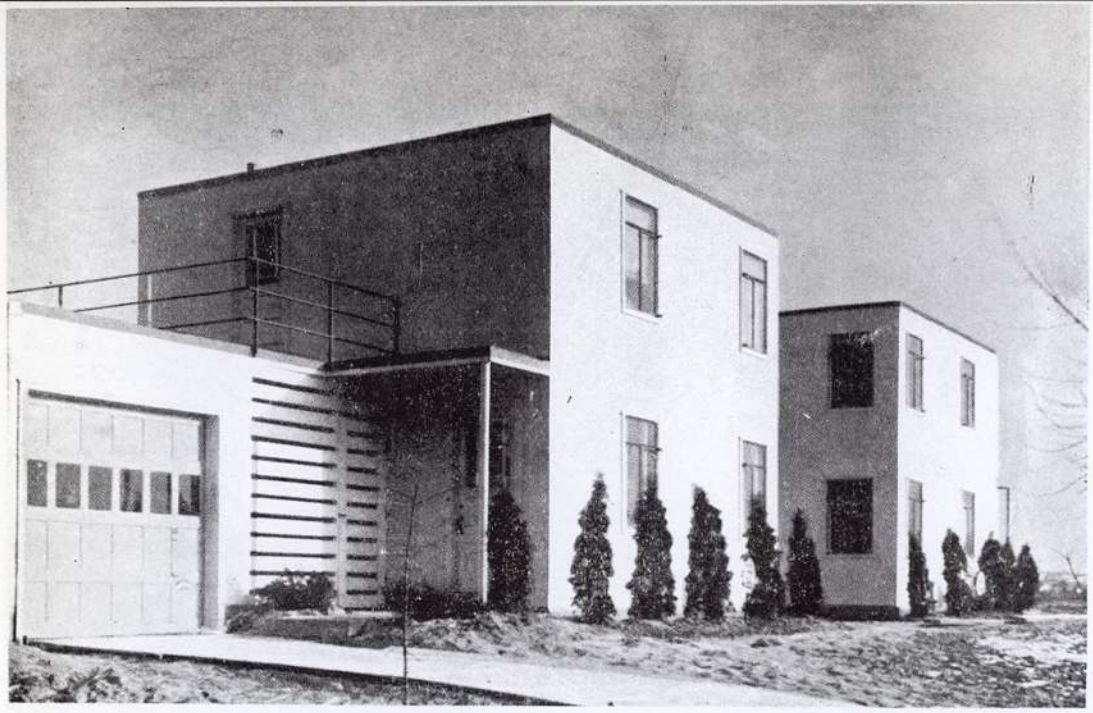
西から西南へかけての眺望をきかす爲に部屋は平面圖に見られる樣にカーブが附けられてゐる。屋上にも梯子で登り得て、眺めを樂しむことが出來る。

構造は鐵と木造と混用の骨組の上にラス張モルタル仕上。內部間仕切は木造ハード・プラスター仕上。

工費　3,500弗

(Architectural Forum, April, 1937 より)

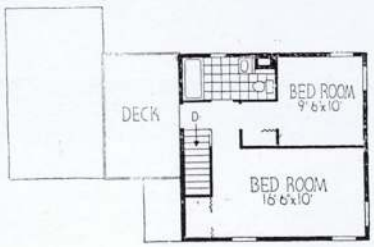
(アメリカ) Santa Monia の來客用住宅



外　　觀

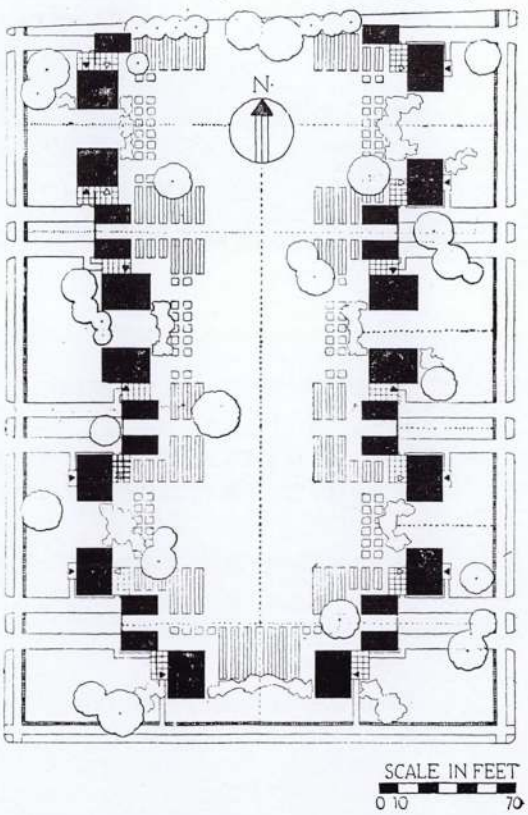


1 階 平 面 圖



2 階 平 面 圖

配　置　圖



骨組なしに鐵板を組立てて行く鐵製組立て住宅で、下記の建築家達が Mills G. Clark と共同研究に依つて工夫したものである。

壁の内部外部共に折り曲げた部分とか止ネヂなどを表はさないで寄せ集め組立てて行く方法。現場に於ける實際の作業方法等が研究の主要なる題目であつた。

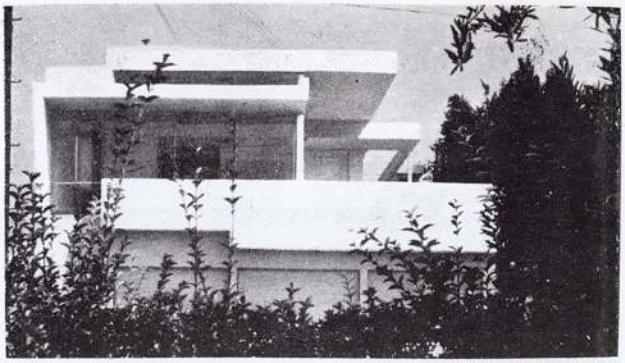
寫眞は一群の中の最初に出來上つた2戸である。

基本的平面を充分研究しておくことに依つて、豫め製作された組立材料を使つて、一戸建でも亦群落でも方位等も充分自由に、外觀上にも變化を持たせて建てて行くことが出來る。

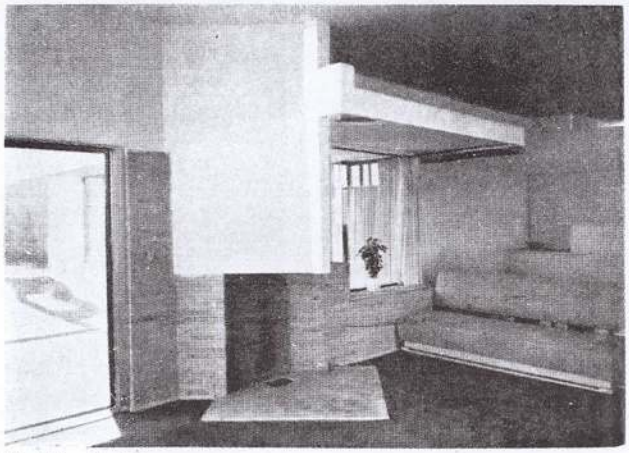
1 戸當工費大略　5,000弗

(Architectural Forum, April, 1937 より)

VI 22 (アメリカ) クリーブランドの住宅群　　建築家 Hays, Simpson 及 Hunsicker



改造家屋外観



居間内部



新築家屋外観

斜面の下方に古い住宅があり、その後方に建てられた2つの寝室を持つ住宅である。古い方の住宅もこの新築と同時に廣い居間が附加へられた。

この住宅の特徴は Schindler の設計の特色である長く突出した庇で、これが強い日光の遮斷と外觀の變化とに役立つてゐる。

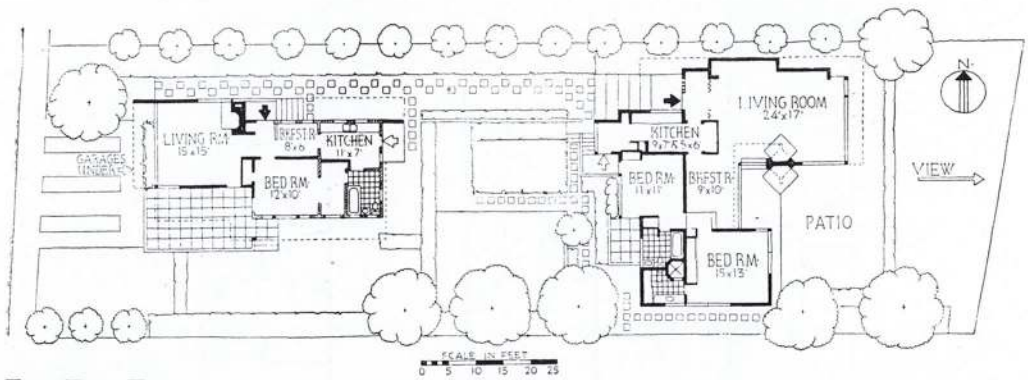
奥行の深い臺所は足に車の附いた食卓を容れておいて食事の際任意の室に運搬する樣考へられたものである。

東方斜面の側には廣い硝子窓が設けられ眺望を恣にすることが出來る。

木造外部防水紙の上にラス張スタツコ仕上内部木摺の上プラスター塗。

工費 7,200弗、24,000立方呎、1立方呎當30セントである。

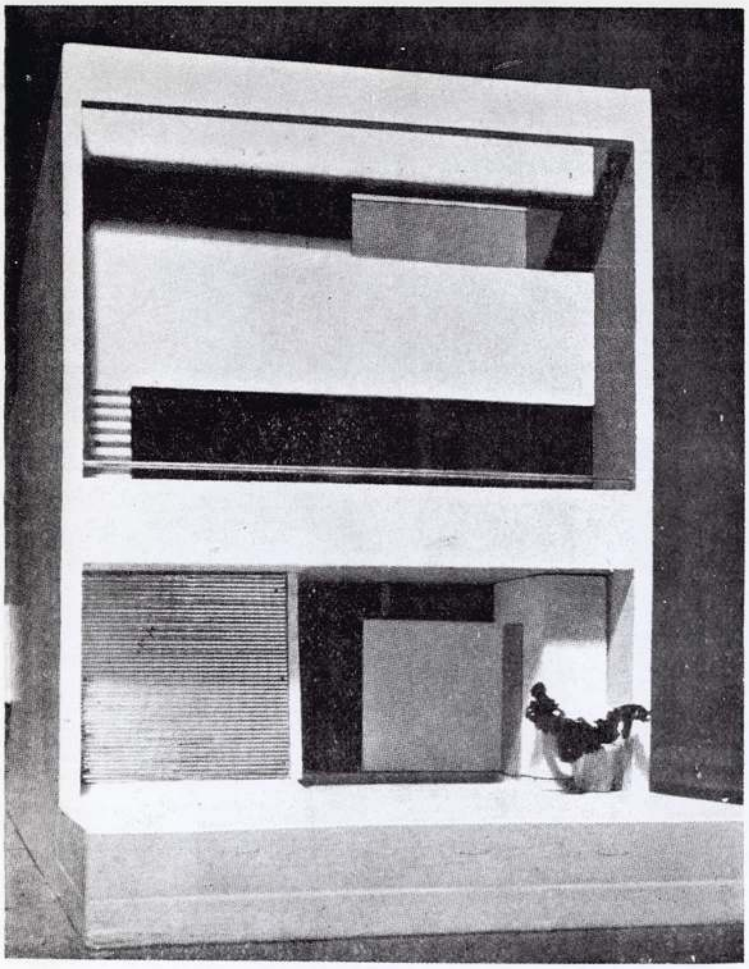
(Architectural Forum, April, 1937 より)



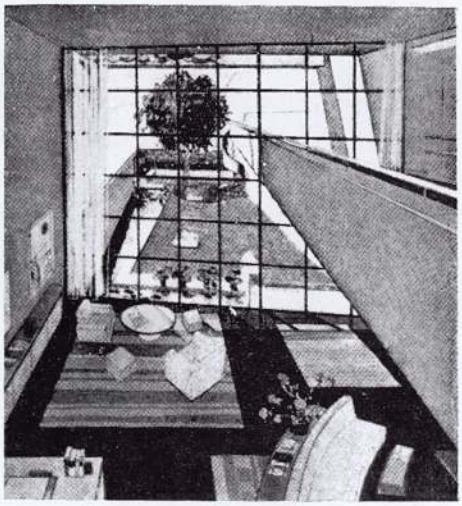
平面圖

(アメリカ) ロスアンゼルスの住宅

建築家 R. M. Schindler

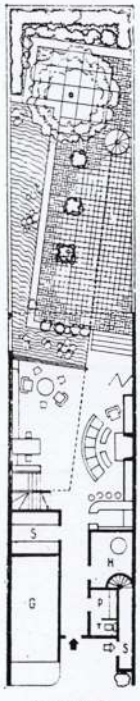


外　　観

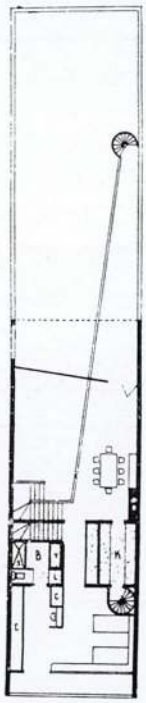


居　間　内　部

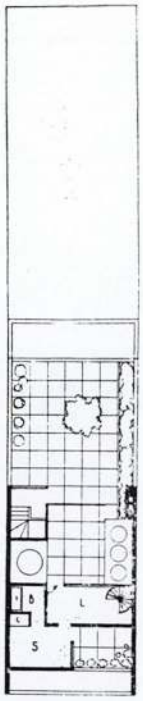
(Architectural Forum, April, 1937 より)



1 階 平 面 圖



2 階 平 面 圖



3 階 平 面 圖

VI 24 都市の住宅と庭園

建築家　Ernst Born, C. Bertil Lund
庭園家　D. Church

臺灣都市計畫令施行規則

（3）

第147條　壁體ノ隅角、蛇腹、窓、出入口脇其ノ他之ニ類スル部分ニ使用スル石、人造石ノ類ハ適當ナル方法ヲ以テ之ヲ其ノ接スル壁體ノ部分ニ緊結スベシ

第148條　石造又ハ煉瓦造ノ桔出窓、桔出緣等ニ在リテハ鐵骨又ハ鐵筋コンクリートヲ以テ適當ナル補强ヲ爲スベシ

第149條　亭仔脚ノ柱ノ構造ハ左ノ各號ニ依ルベシ

1　平家建ニ在リテハ石造、煉瓦造又ハコンクリート造ナルトキハ小徑30センチメートル以上ト爲スコト

2　2階建以上ニ在リテハ適當ナル鐵筋コンクリート構造ト爲シ內壁ノ之ト相對スル箇所ニ鐵筋コンクリート柱ヲ設ケ各柱ハ鐵筋コンクリート構造ノ楣又ハ臥梁ヲ以テ連結スルコト

第 4　鐵構造及鐵骨構造

第150條　建物ノ構造ニ使用スル鋼又ハ錬鐵ノ主要ナル構材ノ接合ニハ知事又ハ廳長ニ於テ已ムヲ得ズト認ムル場合又ハ支障ナシト認ムル場合ノ外リベツトヲ使用スベシ接合用リベツト又ハボルトノ中心距離ハ其ノ直徑ノ2倍半未滿、其ノ中心ト材端トノ距離ハ其ノ直徑ノ1倍半未滿ト爲スベカラズ

第151條　建物ノ構造ニ使用スル鐵柱ハ其ノ最小ナル斷面二次半徑ヲ其ノ主要ナル支點間距離ニ對シ鋼又ハ錬鐵ニ在リテハ150分ノ1以上、鑄鐵ニ在リテハ75分ノ1以上ト爲スベシ
柱以外ノ壓縮鋼材又ハ壓縮錬鐵材ニ在リテハ前項ノ150分ノ1ヲ200分ノ1トス

第152條　鋼柱又ハ錬鐵柱ノ接合ニハ其ノ小ナル柱ト同等以上ノ强サヲ有スル添鈑ヲ用ヒ柱ノ全應力ヲ傳フルニ足ルベキ數ノリベツトヲ使用スベシ

第153條　鐵骨造建物ニ於ケル主要ナル柱ハ之ヲ基礎ニ緊結スベシ

第154條　鐵骨造建物ニ在リテハ梁其ノ他ノ橫架材ト柱トノ接合ニハ適當ナル方杖、腰板ノ類ヲ使用シ之ヲ緊結スベシ但シ筋違又ハ鐵筋コンクリートノ壁體ヲ設ケタル部分ニ在リテハ此ノ限ニ在ラズ

第155條　鐵骨造建物ニハ適當ニ筋違又ハ鐵筋コンクリートノ壁體ヲ設クベシ

第156條　鐵骨造建物ノ帳壁ハ左ノ各號ニ依ルベシ

1　鐵骨ニ緊結スルコト

2　ホロタイルノ類ヲ使用セザルコト但シ間仕切壁ニシテ適當ナル補强ヲ施シタル場合又ハ堅牢ナル壁體ノ表積若ハ重積トシテ適當ニ之ニ連結シタル場合ハ此ノ限ニ在ラズ

第 5　鐵筋コンクリート構造

第157條　鐵筋コンクリート構造ニ使用スルコンクリートハ左ノ各號ニ依ルベシ但シ其ノ用途ニ依リ已ムヲ得ズ且構造上支障ナキモノニ在リテハ知事又ハ廳長ノ許可ヲ受ケ第3號ノ規定ニ依ラザルコトヲ得

1　砂、砂利又ハ碎石ハ泥土、鹽分、有機物等ヲ含マザルモノナルコト

2　砂利又ハ碎石ハ硬質ニシテ2センチメートル2分ノ1目篩ヲ通過シ且鐵筋相互間及鐵筋ト假構トノ間ヲ自由ニ通過スルモノナルコト

3　煉瓦屑、石炭燼ノ類ハ之ヲ使用セザルコト

4　軟度ハ均質ナルコンクリートヲ得ルニ適當ナルモノナルコト

第158條　鐵筋コンクリート構造ニ於テハ鐵筋ノ兩端ヲ他ノ構造部ニ緊結スルカ又ハ之ヲ曲ゲテ適當ニコンクリート中ニ碇著スベシ

第159條　鐵筋コンクリート構造ニ於ケル主筋ノ繼手ノ長サハ之ヲ主筋直徑ノ25倍以上ト爲スベシ

第160條　鐵筋コンクリートノ主要ナル梁ニハ全張間ニ渉リ複筋及肋筋ヲ配置スベシ

第161條　鐵筋コンクリート柱ノ構造ハ左ノ各號ニ依ルベシ

1　主筋ハ4本以上タルコト

2　帯筋ノ中心距離ハ30センチメートル以下トシ且主筋直徑ノ15倍ヲ超エザルコト

3　柱ノ小徑ハ其ノ主要支點間距離ノ15分ノ1以上ナルコト

4　主筋ノ斷面積ノ和ハコンクリートノ有效斷面積ニ對シ80分ノ1以上ナルコト但シ知事又ハ廳長ニ於テ構造強度上支障ナシト認ムル場合ハ此ノ限ニ在ラズ

第162條　第155條及第156條ノ規定ハ鐵筋コンクリート造建物ニ之ヲ準用ス

第163條　鐵筋コンクリート構造ニ於テ主筋ニ對スルコンクリート ノ被覆(カブリ)厚ハ版ニ在リテハ2センチメートル未滿、梁及柱ニ在リテハ3センチメートル未滿、梁、柱及外壁ノ外側ニ在リテハ4センチメートル未滿、基礎其ノ他土ニ接スル主要ナル部分ニ在リテハ5センチメートル未滿ト爲スベカラズ

第164條　鐵筋コンクリートノ床ノ、屋根其ノ他ノ横架材ノ上ニ假構ヲ設クルトキハ其ノ假構ヲ除去スルニ先チ其ノ下階ノ主要假構ヲ除去スベカラズ但シコンクリート施行後30日ヲ經過セルモノ又ハ特ニ當該官吏又ハ吏員ノ承認ヲ受ケタルモノニ在リテハ此ノ限ニ在ラズ

第165條　高サ3·5メートル未滿ノ壇壁其ノ他建築上輕微ナルモノニ在リテハ當該官吏又ハ吏員ノ承認ヲ受ケ第157條乃至第163條ノ規定ニ依ラザルコトヲ得

第6　强度計算

第166條　强度計算ニ適用スル各種材料ノ重量ノ最少限左ノ如シ

材料	重量（キログラム）	
煉瓦積	一立方メートルニ付	一九〇〇·〇〇
花崗岩、安山岩	一立方メートルニ付	二五〇〇·〇〇
砂利又ハ碎石ヲ凝元體トセルコンクリート、鐵筋コンクリート	一立方メートルニ付	二三〇〇·〇〇
亞杉、扁柏、香杉	一立方メートルニ付	五〇〇·〇〇
紅檜、樅、內地杉樅	一立方メートルニ付	四五〇·〇〇
福州杉	一立方メートルニ付	四〇〇·〇〇
鋼	百立方センチメートルニ付	〇·七八五
瓦葺（葺土ヲ除ク）	一平方メートルニ付	六〇·〇〇
セメント瓦葺	一立方メートルニ付	四五·〇〇
石綿スレート	一平方メートルニ付	一五·〇〇
臺灣瓦葺	一平方メートルニ付	一二〇·〇〇
葺土、壁土、漆喰	一立方メートルニ付	一六〇〇·〇〇

第167條　强度計算ニ於ケル地震ノ水平震度ハ之ヲ0·1以上ト爲スベシ但シ知事又ハ廳長建築物ノ種類又ハ土地ノ狀況ニ依リ其ノ增加ヲ命ジ又ハ其ノ低下ヲ許可スルコトヲ得

第168條　强度計算ニ於テ建築物ノ各部分ニ生ズベキ應力度ハ各種材料ニ付左ノ限度ヲ超ユベカラズ

材料	壓縮應力度（一平方センチメートルニ付キログラム）	引張應力度（一平方センチメートルニ付キログラム）	剪斷應力度（一平方センチメートルニ付キログラム）	曲ゲ應力度（一平方センチメートルニ付キログラム）
欅、栗	九〇·〇	九〇·〇	九·〇	九〇·〇
タイワンガシ	七五·〇	七五·〇	七·五	七五·〇
扁柏、樅	六五·〇	六五·〇	六·五	六五·〇
杉、紅檜、亞杉、香杉、福州杉	五〇·〇	五〇·〇	五·〇	五〇·〇
花崗岩	一一〇·〇			一五·〇
硬質安山岩	八〇·〇			九·〇
煉瓦積	二二·〇			
コンクリート（セメント一、砂三、砂利又ハ碎石六）	三〇·〇	三·〇	三·〇	三·〇
軟鋼	一二〇〇·〇（リベツトノ側壓ニ對シテハ一五〇〇·〇）	一二〇〇·〇	八〇〇·〇	一二〇〇·〇
鍊鐵	八五〇·〇	八五〇·〇	五五〇·〇	八五〇·〇
鑄鐵	八五〇·〇	二〇〇·〇	二〇〇·〇	二〇〇·〇

前表ニ於ケルコンクリートノ調合割合ハ容積ヲ以テシセメントハ1500キログラムヲ以テ1立方メートルトス

品質特ニ劣等ナリト認ムルモノニ對シテハ知事又ハ廳長ハ第1項ノ限度ヲ低下セシムルコトヲ得

第169條　強度計算ニ於テ鐵筋コンクリート構造ノ各部分ニ生ズベキコンクリートノ應力度ハ左ノ限度ヲ超ユベカラズ

壓縮應力度（一平方センチメートルニ付キログラム）	引張應力度（一平方センチメートルニ付キログラム）	剪斷應力度（一平方センチメートルニ付キログラム）
壓縮強度ノ三分ノ一　且　七〇・〇	壓縮強度ノ三十分ノ一　且　七・〇	壓縮強度ノ三十分ノ一　且　七・〇

第1項ノ壓縮強度ハ左式ニ依リ算定セルモノヲ超ユベカラズ但シ適當ナル試驗方法ニ依リコンクリートノ強度ヲ試驗シタルモノニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

$$F=\frac{2K}{20x}$$

F コンクリートノ壓縮強度

K 商工省告示日本標準規格第28號又ハ第29號ノ試驗方法ニ依リ試驗セル砂入セメントノ四週間後ノ壓縮強度

x 水トセメントトノ重量比

知事又ハ廳長ハ前項ノ適用ニ關シコンクリートノ調合ニ付必要ナル規定ヲ設ケ又ハ措置ヲ命ズルコトヲ得

第170條　鐵筋コンクリート構造ノ強度計算ニ於テハ鐵トコンクリートノヤング係數比ヲ15ト爲スベシ

第171條　鐵筋コンクリート構造ノ強度計算ニ於ケル附著應力度ハ一平方センチメートルニ付7キログラムヲ超ユベカラズ但シ異形鐵筋ヲ使用スル場合ニ在リテハ其ノ形狀ニ依リ知事又ハ廳長ノ許可ヲ受ケ之ヲ10キログラム迄ト爲スコトヲ得

第172條　強度計算ニ適用スル各種床動荷重ノ最小限左ノ如シ

床ノ種類	動荷重（一平方メートルニ付キログラム）
住家	二五〇
事務室、病院ノ類	三七〇
學校	四二〇
集會所、劇場、寄席ノ類	五〇〇
商品陳列室、陳列館ノ類	五五〇

倉庫、書庫、作業場等ニ付テハ其ノ實況ニ應ズル適當ナル動荷重ニ依ルベシ

本條ノ動荷重ハ其ノ實況ニ應ジ小梁ニ對シテハ其ノ10分ノ1以內ヲ、大梁ニ對シテハ其ノ10分ノ2以內ヲ、柱ニ對シテハ其ノ10分ノ3以內ヲ、震力計算ニ對シテハ其ノ10分ノ5以內ヲ減ズルコトヲ得但シ倉庫、書庫、集會室、劇場棧敷、陳列室等ニ對シテハ本項動荷重ノ輕減ヲ爲スコトヲ得ズ

第173條　杭打基礎ニ於ケル杭ニ對スル荷重ハ墜錘ヲ使用スル場合ニ在リテハ左式ニ依リ算定セルモノヲ超ユベカラズ

$$P=\frac{WH}{5D+10}$$

P 荷重

W 錘ノ重量

H 錘ノ落高（センチメートル）

D 杭ノ最終沈下（センチメートル）

コンクリート杭ニシテ其ノ完全ニ凝結セザルモノニ對シテハ前項ノ算式ヲ適用セズ

前項ノ場合及汽錘ヲ使用シタル場合ニ在リテハ知事又ハ廳長ハ、荷重試驗ノ施行ヲ命ズルコトヲ得

第174條　壓縮鐵材ニ對スル荷重ハ左式ニ依リ算定セルモノヲ超ユベカラズ

$$P=Af_c\left(1-C\frac{l}{r}\right)$$

P 荷重

A 斷面積

f_c 第168條ノ鐵材ニ對スル壓縮應力度

l 主要ナル支點間ノ距離

r 最小斷面二次半徑但シ鐵柱ニシテ其ノ周圍ノ構造ニ依リ撓ミノ方向ニ制限アルモノハ其ノ斷面ノ適當ナル軸ニ對スル二次半徑ト爲スコトヲ得

c 定數

鋼及錬鐵ニ在リテハ〇・〇〇三トシ其ノ兩支端回轉自由ナルトキハ〇・〇〇四、鑄鐵ニ在リテハ〇・〇〇五トス

第175條　壓縮木材ニ對スル荷重ハ左式ニ依リ算定スルモノヲ超ユベカラズ

$$P = A f_c\left(1-0.02\frac{l}{d}\right)$$

P 荷重
A 斷面積
f_c 第168條ノ木材ニ對スル壓縮應力度
l 主要ナル支點間ノ距離
d 斷面ノ最小徑

第176條　壓縮鐵筋コンクリート材ニ對スル荷重ハ左式ニ依リ算定セルモノヲ超ユベカラズ

$$P = f_c(A_c + 15A_s)$$

P 荷重
f_c 第169條ノコンクリートニ對スル壓縮應力度
A_c コンクリート ノ有效斷面積
A_s 主筋ノ斷面積

前項有效斷面積ハ其ノ主筋ノ外側線內ノ面積トス

適當ナル卷筋ヲ有スル壓縮コンクリート材ニ在リテハ第1項ノコンクリートニ對スル壓縮應力度ヲ10分ノ2以內增加スルコトヲ得但シ此ノ場合ニ於ケル卷筋ノ中心距離ハ8センチメートルヲ超ユベカラズ

壓縮鐵筋コンクリート材ニシテ其ノ主要ナル支點間ノ距離其ノ最小徑ノ15倍ヲ超ユルモノニ在リテハ別ニ適當ナル算式ニ依リ之ヲ算定スベシ

第177條　曲ゲ材ニ對スル曲ゲモーメントハ左式ニ依リ算定セルモノヲ超ユベカラズ

$$M = f_b S$$

M 曲ゲモーメント
f_b 第168條ノ曲ゲ應力度
S 斷面係數

第178條　鐵筋コンクリートノ單筋矩形梁又ハ版內ニ中軸ヲ有スル單筋丁梁ニ對スル曲ゲモーメントハ左ノ各式ニ依リ算定セルモノヲ超ユベカラズ

$$M = \frac{n_1(3-n_1)}{6} f_c b d^2$$

M 曲ゲモーメント
n^1 中立軸比(梁ノ壓縮端ヨリ中立軸迄ノ距離ト梁ノ有效丈トノ比)
f_c 第169條ノコンクリートニ對スル壓縮應力度

$$M = \frac{3-n_1}{3m} f_t b d^2$$

f_t 第168條ノ鐵筋ニ對スル引張應力度
m 對筋比
b 梁ノ幅
d 梁ノ有效丈

前項ノ中立軸比ハ左式ニ依ル

$$n_1 = \frac{15}{m}\left(\sqrt{1+\frac{2m}{15}}-1\right)$$

第179條　壓縮應力ト曲ゲモーメントトヲ併有スル構材ノ合成壓縮應力度ハ左式ニ依リ算定セルモノヲ下ルベカラズ

$$f_c = \frac{M}{S} + \frac{P}{A} \times \frac{1}{1-C\frac{l}{r}}$$

f_c 合成壓縮應力度
M 曲ゲモーメント
S 應壓側ニ對スル斷面係數
P 壓縮應力
A 斷面積
l 主要ナル支點間ノ距離
r 曲ゲモーメントニ依ル斷面ノ中立軸ニ對スル二次半徑但シ木材ニ在リテハ曲ゲモーメントニ依ル斷面ノ中立軸ニ直角ナル徑
C 第174條ノ定數但シ木材ニ在リテハ之ヲ 〇·〇二トス

前項ノ合成壓縮應力度ハ第168條ノ壓縮應力度ヲ超ユベカラズ

第180條　鐵筋コンクリートノ梁、版等ノ主筋ヲ橫斷スル面ニ於テ左式ニ依リ算定セル剪斷應力度ハコンクリートノ壓縮强度ノ12分ノ1以下ニシテ且1平方センチメートルニ付18キログラムヲ超エザルモノナルコトヲ要ス

$$f_s = \frac{S}{bj}$$

f_s コンクリートノ剪斷應力度
S 剪斷力
b 梁又ハ版ノ幅但シ丁梁ニ在リテハ深腹ノ幅
J 壓縮應力ノ合力ノ中心ヨリ引張應力ノ合力ノ中心迄ノ距離

第181條　鐵筋コンクリートノ梁、版等ニ生ズル剪斷應力度第169條ノ規定ノ剪斷應力度ヲ超ユルトキハ其ノ部分ニ左ノ各號ニ依リ肋筋ヲ配置スベシ

1　肋筋ハ剪斷應力ノ分布ニ從ヒ適當ニ之ヲ配置シ其ノ間隔ハ梁、版等ノ厚サノ3分ノ2ヲ超エザルコト

2　肋筋ハ引張筋外側ヨリ壓縮端ニ近ク達セシ

メ且適當ニ之ヲ碇著スルコト

主筋ヲ適當ニ曲ゲタルモノハ其ノ部分ヲ肋筋ト看做ス

第182條　鐵筋コンクリート構造ニ於ケル梁又ハ版ノ張間ハ其ノ支承物間ノ中心距離ヲ以テ之ヲ度ルモノトス但シ支承物間ノ內法距離ニ梁ノ丈又ハ版ノ厚サヲ加ヘタルモノヲ以テ之ニ代フルコトヲ得

梁又ハ版ノ支端ニ持送アル場合ニ於ケル張間ハ持送ノ厚サガ梁又ハ版ノ下端ヨリ度リ梁ノ丈又ハ版ノ厚サノ 0.5 倍ニ達スル部分ヨリ之ヲ起算ス但シ知事又ハ廳長ハ其ノ持送ノ形狀、傾斜ノ狀態等ニ依リ張間起算位置ヲ變更スルコトヲ得

第183條　鐵筋コンクリート構造ニ於テ梁ト版トヲ適當ニ連結シタル場合ニ在リテハ之ヲ丁梁ト看做スコトヲ得但シ此ノ場合ニ於ケル丁梁ハ其ノ張間ノ 4 分ノ 1 以內、版ノ厚サノ12倍以內ノ幅ヲ有スルモノトシテ之ヲ算定スベシ

第184條　鐵筋コンクリート構造ニ於テ縱橫ニ鐵筋ヲ有スル長方形版四邊ヲ通ジテ支承物ヲ有スル場合ニ於テハ左式ニ依リ算定シタルモノヲ下ラザル範圍內ニ於テ其ノ荷重ヲ兩張間ニ分賦スルコトヲ得

$$W_b = \frac{l^4}{l^4 + b^4} W$$

$$W_l = \frac{b^4}{l^4 + b^4} W$$

W 等分布荷重

l 一方ノ張間

b l ニ直角ナル張間

W_l l ヲ張間トスルモノニ分賦スル等分布荷重

W_b b ヲ張間トスルモノニ分賦スル等分布荷重

第 5 節　工 事 執 行

第185條　建築物ノ建築、移轉、大修繕又ハ大變更ヲ爲サントスルトキハ建築物ノ敷地ヲ管轄スル知事又ハ廳長ノ許可ヲ受クベシ

第186條　前條ノ許可ヲ受ケントスル者ハ左ノ各號ノ事項ヲ記載シタル申請書及建築物ノ設計書（美觀地區內ニ於ケル建築物ニ付テハ意匠ニ關スル設計書ヲ含ム）ヲ知事又ハ廳長ニ提出スベシ

1　建築主ノ住所及氏名（法人ナルトキハ主タル事務所及名稱竝ニ代表者ノ住所及氏名以下之ニ同ジ）

2　許可ヲ受ケントスル事項

3　建築物ノ用途

4　建築物ノ敷地ノ屬スル地域、地區又ハ區域

5　建築物ノ敷地ノ位置及面積

6　建築面積但シ敷地內ニ建築物現存スルトキハ其ノ建築面積ヲモ記載スルコト

7　工事ノ著手及竣功ノ豫定年月日

8　建築物ノ敷地ガ建築主ノ所有ニ屬セザルトキハ其ノ所有者ノ住所及氏名

9　建築工事請負人又ハ建築工事管理者ヲ定メタルトキハ其ノ住所及氏名

10　計畫令第29條但書ノ事由アル場合ニ於テハ其ノ事由

第187條　前條ノ申請書ニハ左ノ各號ニ揭グル圖面ヲ添附スベシ

1　配置圖（敷地境界線、建築線、敷地ニ接スル道路ノ幅員及境界線、建築物ノ大サ及配置、方位、縮尺等ヲ明示スルコト）

2　各階平面圖（各部ノ用途、寸法、室ノ面積、採光面、換氣設備、方位、縮尺等ヲ明示スルコト

3　斷面圖（建築物ノ高サ、軒高、階高、床高、天井高、階段、基礎、道路ノ幅員、縮尺等ヲ明示スルコト）

4　立面圖（正面、背面、側面ノ姿圖及縮尺ヲ記載スルコト）

5　主要部分ノ詳細圖（縮尺ヲ記載スルコト）

前項ノ圖面ノ縮尺ハ配置圖ニ在リテハ50分ノ1、100分ノ1、200分ノ1、300分ノ1又ハ600分ノ1、主要部分ノ詳細圖ニ在リテハ10分ノ1又ハ20分ノ1、其ノ他ノモノニ在リテハ 50 分ノ1、100分ノ1又ハ200分ノ1トス

第188條　他ノ法令ニ依リ許可ヲ受クルコトヲ要スル建築物ニ付第185條ノ許可ヲ受ケントスル場合ニ於テハ第 186 條ノ申請書ニ他ノ法令ニ依ル許可書又ハ申請書ノ寫ヲ添附スベシ

第186條第8號ノ場合ニ於テハ同條ノ申請書ニ建築主ノ建築物ノ敷地ニ對スル使用權限ヲ證スベキ書類ヲ添附スベシ

第189條　前3條ニ規定スルモノノ外知事又ハ廳長ハ建築主ニ對シ強度計算書、仕樣書其ノ他必要ナル書類若ハ圖面又ハ建築材料ノ提出ヲ命ズルコトヲ得

第190條　知事又ハ廳長第185條ノ許可ヲ爲シタルトキハ建築主ニ對シ建築許可證ヲ交付スベシ

第191條　建築許可證交付前第186條ノ申請書ノ記載事項又ハ建築物ノ設計ニ變更アリタルトキハ建築主ハ其ノ事由ヲ具シ必要ナル書類及圖面ヲ添ヘ遲滯ナク知事又ハ廳長ニ届出ヅベシ

第192條　第185條ノ許可ヲ受ケタル後工事竣功前第186條第3號若ハ第5號乃至第7號ノ事項又ハ建築物ノ設計ヲ變更セントスルトキハ建築主ハ其ノ事由ヲ具シ必要ナル書類及圖面ヲ添ヘ知事又ハ廳長ノ許可ヲ受クベシ

第193條　第185條ノ許可ヲ受ケタル後工事竣功前左ノ各號ノ1ニ該當スルトキハ建築主ハ遲滯ナク知事又ハ廳長ニ届出ヅベシ

1　第186條第1號又ハ第8號ノ事項ニ變更アリタルトキ

2　工事ニ著手シタルトキ

3　工事ヲ中止又ハ廢止シタルトキ

4　第186條第9號ニ揭グル者ヲ定メタルトキ又ハ其ノ住所若ハ氏名ニ變更アリタルトキ

前項第3號ニ該當スル場合ニ於テハ其ノ事由ヲ記載スベシ

第194條　建築物ノ建築、移轉、大修繕、大變更又ハ除却ヲ爲サントスルトキハ其ノ周圍ニ適當ナル假圍ヲ設クベシ但シ知事又ハ廳長ニ於テ支障ナシト認メ許可シタルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第195條　知事又ハ廳長ハ當該官吏又ハ吏員ヲシテ建築物及建築工事ヲ檢査セシムルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ當該官吏又ハ吏員ハ其ノ身分ヲ證明スベキ證票ヲ携帶スベシ

第196條　前條第1項ノ場合ニ於テ建築主、建築工事請負人、建築工事管理者又ハ建築物ノ所有者若ハ占有者檢査ニ必要ナル準備ヲ命ゼラレタルトキハ之ヲ拒ムコトヲ得ズ

前項準備ノ費用ハ建築主又ハ建築物所有者ノ負擔トス

第197條　工事中ノ建築物左ノ各號ノ1ニ該當スルトキハ知事又ハ廳長ハ工事ノ中止ヲ命ジ、許可ヲ取消シ其ノ他必要ナル措置ヲ命ズルコトヲ得

1　保安上危險ト認ムルトキ

2　衛生上有害ト認ムルトキ

3　計畫令、本章ノ規定若ハ本章ノ規定ニ基キテ發スル命令又ハ之ニ依リテ爲ス處分ニ違反シタルトキ

4　其ノ他工事ノ取締上必要アリト認ムルトキ

第198條　建築物ノ工事竣功シタルトキハ建築主ハ速ニ之ヲ知事又ハ廳長ニ届出デ其ノ使用ノ許可ヲ受クベシ建築物ノ1部ニ付工事竣功シタル場合ニ於テ之ヲ使用セントスルトキ亦同ジ

第199條　知事又ハ廳長前條ノ許可ヲ爲シタルトキハ建築物使用許可證ヲ交付スベシ

第200條　知事又ハ廳長ハ工事執行ニ關スル輕微ナル事項ニ付テハ本節ノ規定ニ拘ラズ別段ノ定ヲ爲スコトヲ得

第201條　建築物ノ用途ヲ變更シテ計畫令第35條ノ建築物又ハ知事又ハ廳長ノ指定スル建築物ニ充テントスルトキハ知事又ハ廳長ノ許可ヲ受クベシ

第186條乃至前條ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第6節　損害補償

第202條　計畫令第38條第2項ノ規定ニ依リ損害ヲ補償スベキ場合左ノ各號ノ1ニ該當スル場合ニ限ル

1　地域又ハ風紀地區ノ設定又ハ變更ニ基キ建築物ノ使用禁止又ハ建築物ノ主要構造部ノ除却ヲ命ジタル場合

2　風致地區又ハ美觀地區ノ設定又ハ變更ニ基キ建築物ノ主要構造部ノ除却ヲ命ジタル場合

3　建築線ノ指定ニ基キ建築物ノ主要構造部ノ除却ヲ命ジタル場合

4　建築線ニ面スル建築物ノ壁面ノ位置ノ指定ニ基キ建築物ノ主要構造部ノ變更又ハ除却ヲ命ジタル場合

5　建築物ノ高サ又ハ建築物ノ敷地内ニ存セシムベキ空地ニ關スル規定ニ基キ建築物ノ主要構造部ノ除却ヲ命ジタル場合

第203條　計畫令第38條第2項ノ公共團體トハ建築物所在地ノ市街庄(區ニ在リテハ廳地方費)トス

第204條　第19條乃至第27條ノ規定ハ前條ノ規定ニ依ル損害ノ補償ニ之ヲ準用ス但シ第20條第1項中同條第1項又ハ第2項ノ行爲ヲ爲シタル日及同條第2項中其ノ行爲アリタル日トアルハ計畫令第38條第1項ノ規定ニ依リ命ジタル行爲ヲ完了シタル日トス

會報



會員 故正七位 大内秀一郎氏

會員大内秀一郎氏昭和12年4月92日病を以て逝去せらるゝに哀悼に堪へず茲に照宵ご略歴を掲げ謹みて弔意を表す。

1. 氏は明治25年9月24東京府に生る
1. 大正10年4月東京帝國大學工學部建築學科を卒業
1. 同月東京高等工業學校建築科講師を囑託せらる
1. 同11年7月同校教授に任ぜらる
1. 同12年6月建築研究の爲滿2ヶ年歐洲に留學を命ぜらる
1. 同13年11月正七位に叙せらる
1. 同14年6月歐洲より歸朝
1. 同15年1月東京高等工業學校建築科長を命ぜらる
1. 同年3月依願免本官
1. 同15年4月戸田組に入社設計部勤務
1. 昭和3年4月都合により退社
1. 同4年11月阿部美樹志建築事務所に入所大阪阪急ビル第2期擴張工事の現場監督並に東京寶塚劇場新築工事の現場監督主任を命ぜらる
1. 同8年12月同事務所を退所
1. 同9年5月任大阪市技師電氣局技術部工務課營繕係長を命ぜらる
1. 同年6月電氣局臨時高速度鐵道建設部建設課兼務を命ぜらる
1. 同年8月20日本協會に會員として入會
1. 同10年5月電氣局主計部計理課營繕係長を命ぜらる
1. 同年10月大阪市電氣局技術委員會委員を命ぜらる
1. 同12年4月29日午前5時自宅に於て氣管支炎療養中のところ心臟痲痺にて逝去せらる享年46歳

材料委員會（第8回）

時　4月22日午後6時40分—8時
所　朝日倶樂部談話室
出席者　幹事　松久保
委員　秋田　小川　道田

1. 鐵材に關する講演會に關し常務會より斡旋方申出ありたるに付協議の結果講師の選定並に交渉方を松久保幹事に一任のことに決定

住宅委員會（第6回）

時　4月30日午後6時30分—8時30分
所　協會倶樂部室
出席者　委員　荒木　小林　玉置　中野

1. 住居讀本原稿各委員より提出ありたるに付討議す

常務會（第10回）

時　5月3日午後6時10分—7時30分
所　建築材料陳列場別室
出席者　理事　竹腰副會長
常務　井上主記　小川主記　中澤主記　加田主計　清水主計　中村主計　新名編輯　吉田編輯

議事

1. 倶樂部室什器修繕に關する件
2. 第2旭ヶ丘土地區劃整理組合より住宅博覽會開催に付主催者は後援方依頼の件

3. 大阪市民日報社より「視力强化運動」に關し金參拾圓也援助方申越しの件
4. 財團法人實業教育振興中央會長より援助方依賴の件
5. 滿洲國昭和製鋼所より懸賞建築設計圖案募集周知方依賴の件
6. 大分高商校より研究資料寄贈方依賴の件
7. 會員詮衡

報　告

1. 5月例會其他準備報告

都市武裝促進委員會（第4回）

時　5月4日午後7時30分—9時
所　建築材料陳列場別室
出席者　委員長　竹腰
幹事　島井　中澤
委員　清水　吉田

1. 防空法案に付研究の上建議案作成の件

播州巡りと潮干狩

時　5月9日午前8時—午後7時30分
出席者（52名次第不同敬稱略）

中西　六郎	三浦　茂	水野長三郎
宮嶋　克二	左谷　陽充	右田　常秀
柿原廣太郎	島田　眞馨	久保田種吉
田口　熊市	中西　一郎	石垣　忠男
伴野　貞三	鈴木　強	今林彦太郎
篠原　太郎	大瀧　竹治	森本　藤吉
高田利一郎	奥村丈太郎	鈴木　孫市
和田　友吉	寺岡　眞	熊谷泰次郎
佐藤正次郎	松村　文甫	黒澤　研
大下順三郎	須賀藤五郎	河村　茂
平尾　善保	入江　千壽	久野鐵太郎
島岡義太郎	木下　謹三	白石　英男
松井　邦彦	上田豐太郎	藤村　愛資
窪島　宗治	西谷　茴	大和　榮衛
小板　常男	長澤發太郎	戸川　弘
山北　保郎	植田志津子	近藤壽賀子
平本　花子	井上　喜美	松村二三子
井上　常		

1. 當日天氣晴朗絕好の旅行日和なり
定刻午前8時には集合所に當てたる協會倶樂部室は既に滿員なるも遲參者の爲に出發を8時半と定め倶樂部室幹事會須賀幹事長中西、三浦、今林諸幹事の斡旋により愈々同室を出發新大阪ホテル東側に待機の大型バス3臺に各員分乘して一路神戸に向ひ出發
1. 第一に見學の豫定なる鵯林寺迄の途中神戸市の入口及須磨の海岸2ヶ所にて各10分間下車休憩をなし午前11時鵯林寺到着同寺の境内に入り太子堂其他の保護建造物に付て入念見學
1. 次で同寺を發し尾上神社の境内にある相生の松其他の名松を賞しつつ、高砂の海岸に出てかな安茶店に入り休憩時に正午
1. 是に於て須賀幹事長より本日の催しに付挨拶あり終つて一行は晝食後3時迄潮干狩に打興じたり
1. 午後3時バス3臺に分乘にして出發
高砂相生の松
石の寶殿
曾根の松

等を順次見學し曾根天滿宮門前にて記念撮影なし尙此所にて須賀幹事長より見學終了の挨拶ありて一行歸途に着く

途中明石にて10分休憩夫れより一路朝日ビルに歸り散會時に午後7時40分

本日の催しは倶樂部室幹事會幹事各位の御斡旋によるものにして茲に篤く多謝するものなり

建築材料新製品發表會

時　5月10日午後6時30分—9時
所　朝日倶樂部集會室
出席者（40名次第不同敬稱略）

中西　六郎	矢野　藤一	左谷　陽充
平原　國雄	柿原廣太郎	中西　一郎
大森一太郎	小川　陽吉	佐溝　武雄
鈴木　強	福井　福	今林彦太郎
押川　新一	尾龜清四郎	小西　一眞
鈴木　孫市	堀田　達枝	中村　政一
安田　則世	大村　春方	木島　健一
矢野　七郎	杉浦　巴	酒井勇三郎
野澤幸三郎	細江　和足	高阪信次郎
高木　登	近藤鄕次郎	八尾　實
伴仲　信次	鵯本正太郎	平川　眞實
松本　正春	阪井　則夫	淺田　有
近藤商店員	竹中工務店員	松村組店員

1. 午後6時30分聽講者30名位なるも開會
先づ今林陳列場幹事長より本協會陳列場は從

來建築材料を陳列し之を公開して其宣傳其他に努力致しましたが今後は本夕の如き新製品の發表會なるものを度々開き度本夕第1回を開いたのでありますと云々と開會の挨拶を述べ次で日昭ライト工業株式會社專務取締役川勝隆一氏を紹介す同氏登壇「日昭ライト板に就いて」の題下に日昭ライトの名稱の起因より說き起し1時間に亘る長講演あり次で7時間30分同會社技師農學士藤岡一雄氏登壇「日昭化粧板試驗方法に就いて」の題下にて8時講演終了

夫れより今林幹事長座長となり下記事項に付聽講者の批判をなす

(1) 日昭化粧板の建築材料としての見透

(2) 製品に就いての批判

イ、色　彩

ロ、模　様

ハ、寸　法

ニ、價　格

ホ、施行方法

(3) 用途に就いての意見

1. 右終つて今林幹事長より講演者に對し本夕の謝辭を述べ一同は拍手を以て謝意を表し解散したり。時に午後9時
1. 本夕の催しは陳列場幹事諸氏の御斡旋によるものにして茲に多謝するものなり。

大阪市下水に關する講演會

時　5月11日午後7時—9時

所　朝日倶樂部集會室

出席者　(43名次第不同敬稱略)

中西　六郎	三浦　茂	川合　安平
星　巖文	荻田眞之助	左谷　陽充
橋本　政一	酒井勇三郎	大森一太郎
小川　陽吉	村田　忠興	佐瀧　武雄
中川　了文	昆　眞造	森島　輝夫
小笠原祥光	荻野　賀一	尾龜清四郎
梶垣　寬	川村　茂一	伊藤幸太郎
鈴木　孫市	中村　政一	夏秋留次郎
西村　信一	福田　政治	松久保敬三
增井　敏克	米倉　威夫	和田　友吉
久田　眞吉	瀧　邦一	中田　猛
大阪陶業株式會社	大丸家具裝飾部	乾　利之
河津喜之助	澁谷　經久	高阪信次郎
立田　秀夫	高橋　直喜	大島　森藏
平川　眞實		

1. 午後7時小笠原設備委員長より開會の辭あり次で講演者鈴木義一氏を紹介す。

鈴木氏演壇に立ち左の演題の下に2時間餘に亘る有益なる講演あり。(詳細は7月號會誌に揭載の豫定)

大阪市の下水處理施設に就いて

(建築物と下水管との連絡、在來の淨化槽の廢止等)

大阪市水道部下水課長

工學士　鈴木　義一氏

1. 次で聽講者より二、三の質問ありて後小笠原委員長より講演者に對し篤く謝辭を述べ一同拍手を以て之に和し謝意を表し解散す、時に午後九時過なり。
1. 本夕の催は主として設備委員會委員各位の御斡旋によるものにして茲に多謝するものなり。

鐵材に關する講演會

時　5月12日午後7時—9時

所　朝日倶樂部集會室

出席者　(49名次第不同敬稱略)

中西　六郎	糸井直太郎	川合　安平
矢野　藤一	竹腰　健造	右田　常秀
道田泰治郎	中川　了文	塚本　猛次
池村元之助	尾龜清四郎	加田　安彦
新名　種夫	杉本　忠勝	鈴木　孫市
塲田　達枝	松久保敬三	增井　敏克
山田　英男	山口儀三郎	米倉　威夫
和田　友吉	佐藤　正二	森本　治一
瀨川　庄三	岡本　忠行	住野　一義
伊東宗太郎	森島　輝夫	瀧　邦一
岩井　正明	黒澤　研	大村　春方
和田次郎市	楠瀨　澈	竹中藤右衞門
山添　繁藏	大丸家具裝飾部	前田伸右衞門
原田　千歲	澁谷　經久	吉村　寬造
高阪信次郎	武井　德松	上西　威
龜岡　二郎	伴仲　信次	平川　眞實
笭子　秀男		

1. 午後7時竹腰副會長より開會の辭を述べ次で講演者栗本勇之助氏の鐵工業界に於ける權威に付紹介する所あり。

次で栗本氏演壇に立ち左の演題の下に２時間に亘る有益なる長講演あり。（詳細は7月號會誌に掲載の豫定）

「鐵材に就いて」

株式會社栗本鐵工所　社長　栗本勇之助氏

1, 會員より質問ありて後中西主記一同を代表して講演者に叮重なる謝辭を述べ一同拍手を以て之に和し謝意を表し解散したり、時に午後9時。

1. 本夕の催は材料委員會委員諸氏の多大なる御斡旋によるものにして茲に多謝するものなり。

敎化委員會（第４回）

時　　5月13日午後6時30分—8時

所　　協會倶樂部室

出席者　委員長　永澤

幹事　篠原

委員　伊東　黒澤　坂本　鈴本

1. 鄉土古建築の研究調査の件
1. 講習會開催の件
1. 建築徒弟調査の件

災害强度委員會（第５回）

時　　5月14日午後7時—10時

所　　協會倶樂部室

出席者　委員長　渡部

幹事　黒田

委員　谷　中島　堀口　山田　關場　竹花　田川　西島　平野　藤田

協議事項

1. 地質調査に關し旭水道工業所酒井隆郎氏を招き懇談すること。
1. 定例日を毎月第２火曜日に變更すること。
1. 鐵骨、鐵筋コンクリート工事標準示方書檢討の爲め下記研究會を設け研究すること。

標準示方書研究會

委員　主査　山田

淺野　黒田　竹花　堀口　渡部

1. 日本ポルトランドセメント同業會主催防火座談會援助の件
1. 資料蒐集に關する件
1. 熔接工技術試驗に關する件
1. 連續鋸屋根に對する風壓の分布狀況調査費に關する件

都市計畫委員會（第７回）

時　　5月20日午後6時30分—10時

所　　協會倶樂部室

出席者　委員長　鳥井

幹事　福知　村井

委員　龜井　吉田　匂坂

1. 龜井委員より第１回全國都市美協議會に出席したる概況に付報告の件
1. 住宅經營と都市計畫との關係に付協議
1. 住宅經營を公益企業としてなす場合の資料蒐集に關し協議

常務會（第11回）

時　　5月24日午後5時40分—8時40分

所　　建築材料陳列場別室

出者席　理事　松本副會長

監事　渡部監事

常務　井上主記　小川主記　中澤主記　中西主記　樋口主記　加田主計　清水主計　伊藤編輯　新名編輯　堀口編輯　吉田編輯

敎化委員會　篠原幹事

議事

1. 6月例會其他ニ關スル件
2. 敎化委員會ヨリ建築徒弟調査ニ關シ經費支出方要求ノ件
3. 敎化委員會ヨリ鄉土古建築ノ調査研究ニ關シ經費支出方要求ノ件
4. 敎化委員會ヨリ建築講座開設及經費支出方要求ノ件
5. 災害强度委員會ヨリ連續鋸屋根ニ對スル風壓ノ分布狀況調査費支出方要求ノ件
6. 災害强度委員會ヨリ熔接工技術試驗ニ關シ研究費支出方要求ノ件
7. 災害强度委員會ヨリ豫テ提出ノ地質調査ニ關スル經費支出方催促ノ件
8. 都市計畫委員會ヨリ全國都市問題會議事務局ヘ回答案報告ノ件

9. 助手栗本利代辭職願出ノ件
10. 會員詮衡

報　告

1. 4月分會計報告
2. 建築學會長ヨリ建築法規改正ニ關スル建議ノ件通知
3. 5月催物終了報告
4. 第1回全國都市美協議會出席ニ付概況報告

會員動靜

入會者

會員

石橋　逢吉君　兵庫縣武庫郡住吉村濱新田939（株式會社鹿島組）

角林勘三郎君　府下大津町下條808ノ11 助松住宅地（竹中工務店）

木野山照雄君　旭區北清水町1118（大阪市立都島工業學校）

添田　正一君　兵庫縣武庫郡鳴尾村內良島甲陽莊（大林組設計部）

村島　彰君　北區北扇町文化寮第18室（大阪市役所營繕課）

杜瀨　三郎君　奈良市法連町753ノ7（大阪市役所）

和田　信夫君　西宮市津門字仁邊10（東畑建築事務所）

金井　馨君　北區堂島濱通4丁目須賀商會內（株式會社須賀商會）

小杉　憲一君　神戸市灘區畑原通3ノ27

鹽出　正君　神戸市灘區上野通8ノ833新築莊內（大阪府建築課）

田森　信夫君　住吉區丸山通2ノ53（株式會社松村組）

武部　秀治君　東成區林寺町188（大阪府營繕課）

福田愼一郎君　府下守口町土居283（大阪府營繕課）

福富　清君　府下泉南郡田尻村嘉祥寺866（株式會社松村組）

細川　笹市君　特別贊助員ヨリ轉格

宮崎　春市君　住吉區天王寺町2693苗代アパート（今宮職工學校）

村瀨　鑛一君　大正區難波島町1ノ62（津田建築事務所）

八卷　信雄君　神戸市北長狹通2丁目須賀商會內（株式會社須賀商會）

山之內正一君　神戸市灘區灘北通7ノ68（鐵道省神戸改良事務所）

吉田　清二君　北區堂島濱通4丁目須賀商會內（株式會社須賀商會）

地方會員

加藤得三郎君　東京市板橋區練馬向山町1612（東京工業大學建築學教室）

澤野　謙君　和歌山市片岡町1ノ1（松生院國寶本堂修理事務所）

遠山　時雄君　高松市中野町378（自營）

特別贊助員

熊木　正明君　北區天神橋筋1ノ77（麻苧商）

白井　正朔君　北區神山町1朝日スレート株式會社

高橋　清一君　神戸市葺合區熊內町3丁目68ノ2（建築材料商）

田中　榮一君　兵庫縣武庫郡住吉村八甲田693（理研鋼材株式會社大阪出張所）

普通贊助員

加藤　健吉君　旭區鴫野町300ノ410（大阪市役所用地課）

小林賢三郎君　西淀川區大和田町613（鶴谷建築事務所）

田川善兵衛君　奈良縣高田町（大阪市役所營繕課）

田村　幸一君　住吉區相生通1ノ76 木下瀧藏方（吉井建築事務所）

高田善三郎君　神戸市湊東區古湊通3ノ6（建築材料商）

東方　祇道君　神戸市林田區腕塚町3ノ145

林田　信次君　神戸市須磨區水笠通2ノ140（建築請負業）

堀　春市君　神戸市林田區一番町2ノ7（建具製造業）

小森　稠君　岐阜縣稻葉郡各務原川崎飛行機工場大林組出張所（株式會社大林組）

三浦　正義君　神戸市林田區重池町1ノ148（畑工務店）

村田　篤君　神戸市林田區大道通1丁目 畑工務店內
森本　茂君　神戸市須磨區須磨寺町2ノ79(大阪鐵道局工務課)

退　會　者

會　員

木馬　寅治君　竹中撰太郎君

地方會員

森山　伊望君　三浦　末吉君

普通贊助員

和泉　了一君　河津　乙松君　上田富之助君
西口巳一郎君　吉川　修一君

轉　居　轉　勤

會　員

宇都宮邦士君　福岡市新開町79
樫尾　幹雄君　東淀川區十三南之町2ノ90ノ2小川留吉方
八尾　眞藏君　住吉區田邊西之町7ノ43
青島　務君　堺市北瓦町2丁目 向陽アパート
龜淵　弘君　和歌山縣伊都郡河根村河村133
近藤鰐次郎君　布施市高井田町 1162 (電小阪911)
匂坂　弘美君　住吉區小阪西之町3丁目 郊南寮
高橋健三郎君　尼崎市長洲字南畑62
坪內　英雄君　神奈川縣藤澤町辻堂1167
鳥越　眞一君　東淀川區元今里北通2ノ24 齋藤方
山本宗一郎君　西成區櫻通5ノ5中島福三郎方
杉山　七藏君　京都市上京區猪熊丸太町下ル待賢小學校鹿島組作業場內
佐溝　武雄君　住吉區天王寺町3377
坂本美太郎君　北區東野田町3ノ19
杉本　正一君　堺市北三國ヶ丘町551阪中方
瀨川　久維君　尼崎市神田中通6ノ228
田川忠之助君　京阪沿線枚方東口旭ヶ丘
津田　敏雄君　(事務所)東區淡路町3ノ6船場ビル
東本　修君　兵庫縣川邊郡多田村新田
福島　增三君　南區問屋町27
吉村　孝義君　住吉區播摩町西1ノ22
石井　長夫君　臺北市東門町191
小松　勇君　兵庫縣武庫郡精道村打出字階田26
高橋　誠義君　兵庫縣武庫郡鳴尾村內荻島25

地方會員

笠井駒之助君　天王寺區茶臼山町76
山本藤次郎君　長崎市諏訪町43
大谷　勳君　戸畑市小芝町3丁目
松井　宗一君　東京市淀橋區西大久保3ノ9
菊池　辰彌君　廣島市三篠本町1丁目859ノ1
村野　威夫君　兵庫縣武庫郡精道村蘆屋毛賀金880

特別贊助員

吉田　清春君　西淀川區佃町199

普通贊助員

丸花　才治君　府下北河內郡四條畷村濁1157
中野　利男君　中華民國青島市博興路第4號
吉川　秀夫君　西成區玉出本通1丁目 若松ハウス
吉澤　千吉君　東京市芝區田村町2ノ15 傘阪ビル新築場竹中工務店出張所
奥田　孝作君　長野市鐘紡長野工場建築場竹中工務店出張所
田中　進君　大連市鳴鶴臺2ノ1
宮本健次郎君　那覇市松山町2ノ53(沖縄縣廳土木課)

死　亡

會　員

大內秀一郎君　昭和12年4月29日逝去

普通贊助員

須惠　德朗君　昭和12年5月2日逝去

(謹んで哀悼之意を表す)

編輯後記

☆ 建築運動は一つの樣式運動であり文化運動である。かのセセツション建築思想は大旱の雨滴の如く全世界をうるほし建築文化の正しい將來が約束されたようだつた。目覺しい躍進が先輩諸氏の努力によつてなされて、藝術としての建築科學としての建築が一元的に環えされ、建築は本來の正しい軌道に歸り、國際建築の氣運が日增しに生長したのであつた。

☆ だが時は移り世相は變つた。思想は暗黑を低回し、建築運動はその姿を沒し去つた。

全世界が準戰時體制をとつて無氣味な暗躍がつのつて行く。各國がこのかみの自由主義的色彩を捨てゝ何時さはなく國民主義傾向を負び建築をも思想的に政治的に、その國の動向の支配下に於くに到つたかの如くである。

☆ だがこの時に當つて正しい建築發展のための理論と實踐を存する國家、國民こそ幸福である。

こゝに集められた貴重なる論文はすべて尊敬する我等の先輩の血肉の闘爭記錄である。我々は先輩戰士の戰ひの跡をたどり深く現代を批判し以て今後の建築運動のよき指導書となしたいと思ふ。

多忙なる職務の余暇をさき特に本誌のために寄稿下さいました山田守氏、本野精吾氏、中尾保氏、上野伊三郎氏、新名種夫氏、竹村新太郎氏、高橋壽男氏、西山卯三氏、市浦健氏、芦浦義雄氏、熊井安義氏、飯島猛夫氏に、深く感謝致します。

☆ 六月初夏は太陽は美しく、若葉の綠は我々の希望を語る。

特輯號〝建築文化運動〟を送り出し諸氏と共に眞險に建築をそしてその運動を考へる機會を得たことを喜ぶものである。(和田)

建築と社會

第20輯第6號

毎月1回1日發行　定價　1册 50錢(郵稅3錢)　12冊 6 圓(同 36 錢)

昭和12年5月25日印刷　昭和12年6月1日發行

發行・編輯　印刷人　小板常男

大阪市北區朝日ビル日本建築協會內

印刷所　大石堂印刷所

大阪市北區玉江町1丁目11番地

發行所　社團法人　日本建築協會

大阪市北區中之島3ノ3朝日ビル

電話 北濱(23)4501番(9)

振替口座大阪39975番

特約販賣店　柳々堂書店

大阪市西區京町堀羽子板橋西

電話 土佐堀2440番

振替口座大阪2084番

禁轉載

本號に揭載せるものは、一切これを無斷にて轉載し又は單行本に上梓その他の複製行爲をなすことを禁ず。

廣告揭載料金

普通	1頁	1回	15.00
普通	½頁	1回	8.00
普通(前附第1頁)	1頁	1回	45.00
普通(前附第2頁)	1頁	1回	40.00
普通(後附第1及最終頁)	1頁	1回	25.00
アート(中插)	½頁	1回	20.00
表紙2	1頁	1回	60.00
表紙3	1頁	1回	45.00
表紙4	1頁	1回	80.00
建築事務所錄	1欄	1回	1.50
(建築關係業者案內)	1欄	1回	5.00

廣告揭載御申込は本會へ直接願ひます。
本誌購讀御注文はすべて前金で本會直接又は特約店へ、振替貯金又は爲替で御拂込を願ひます。郵券代用は一割增、代金引換はお斷り致します。

建築と社會第20輯第6號　廣告索引

ア　旭硝子株式會社……9
　　淺野スレート株式會社……10
　　有田製陶所……29
　　淺海商會……19
イ　岩元工業株式會社……19
エ　榮進社……22
　　英進商會……25
　　荏原製作所……7
オ　大阪窯業セメント株式會社……中挿
　　大阪伊丹商店……18
　　大阪組立コンクリート製作所……30
　　大野製作所……前附 1
　　岡田建材店……29
　　奥村重兵衛商店……11
カ　關城化學工業株式會社……表紙 4
キ　桐田商會……13
　　協和製作所……32
ク　黒川化學工業所……20
　　窪島プレス工業所……39
　　久保商店……32
コ　後藤商店……33
サ　佐渡島西店……27
　　佐久間パブコ工業株式會社……35
　　坂田ベンチレーター製作所……34
　　坂本商會大阪支店……25
シ　下木商店……42
ス　須賀商會……44
セ　政正合資會社……31
　　濟光社……34
タ　田島應用化學工業所大阪支店……前附 2
　　大和工業株式會社……8
　　大洋組建材部……18
　　ダンロップ護謨株式會社……中挿
チ　チヨーホー商會……37
ト　東洋リノリユーム株式會社……45
　　東京電氣株式會社……23
ナ　內外土木建築材料合資會社……41
　　中野石材店……28
　　南滿鑛業株式會社……21
ニ　日本建築紙工株式會社……31
　　日本放熱器商會大阪支店……15
　　日本陶織社……34
　　日本窒素肥料株式會社……表紙 3
　　日東物産株式會社……38
　　日本パイプ製造株式會社……40
　　日本ドアーチエツク製作所……43
　　西原衛生工業所……14
　　西孫南店建築金物部……20
ノ　野澤幸三郎商店……36
　　汎建製作所……12
　　福原床板製造株式會社大阪營業所……37
ホ　邦光化學工業所……16
マ　松井商店……30
ミ　三井物産株式會社……33
　　美裝工業所……前附 3
ヤ　矢橋大理石商店……12
　　大和護謨製作所……26
ヨ　横河橋梁製作所……24
　　米本榮商店……28
ラ　ライトラバー工業合資會社……17
リ　理研鋼材株式會社……前附 1
レ　玲光社(木內眞太郎)……21